

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集

きよ す じょう か まち い せき
清洲城下町遺跡 X
あさ ひ い せき
朝日遺跡 X

2021

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

清洲城下町遺跡と朝日遺跡は、愛知県清須市から名古屋市西区にかけて広がる愛知県を代表する遺跡です。両遺跡は、愛知県北西部に広がる尾張平野のほぼ中央に位置し、木曾川の支流である五条川の流れとともに、古くから多くの人々が生活を営んできました。特に弥生時代の朝日遺跡は、農耕の受容とともに大きく発展し、日本列島における東西文化の結節点となりました。一方戦国時代の清須城は、京都応仁の乱以後に尾張地域の守護所がおかれ、後の織田信長の居城となり、その後の天下統一に向けての礎となりました。本能寺の変以後には、織田信雄をはじめとする城主による改修が行われ、東海地方を代表する城郭・城下町として栄えました。

清洲城下町遺跡と朝日遺跡は、古くから遺物の採集調査、文献史料による研究などが行われ、特に昭和末期からは周辺の開発事業に伴う発掘調査が数多く実施されて、遺跡の様子が徐々に明らかになってきました。昨年11月には、あいち朝日遺跡ミュージアムが開館し、これまでの発掘調査成果を広く県民に知っていただく施設となりました。

本書は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターにおいて、平成12年から平成14年にかけてと平成29年から平成30年にかけて総合治水対策特定河川事業に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査と、新川西部流域下水道事業に伴う事前調査として朝日遺跡の発掘調査を行った成果をまとめたものであります。その結果、清洲城下町遺跡では、戦国時代から江戸時代初期にかけての清須城に伴う船着場や城下町の武家屋敷や町屋に関連する遺構や遺物などが発見され、近世城郭の始まりと城下町建設の具体的な姿を考える貴重な資料として注目されています。また、朝日遺跡では弥生時代の居住域があいち朝日遺跡ミュージアムのある貝殻山から西にさらに広がることがわかってきました。今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対してご理解、ご協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

令和 3 年 3 月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 森田 利洋

清洲城下町遺跡 X

例 言

1. 本書は、清須市清洲他に所在する清洲城下町遺跡（県遺跡番号 210002：『愛知県遺跡分布地図Ⅰ（尾張地区）』1994 による）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、総合治水対策特定河川事業に伴う事前調査として、愛知県建設局（発掘調査受託時は愛知県建設部）河川課尾張建設事務所より愛知県民文化局（発掘調査受託時は愛知県教育委員会）を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。

3. 調査期間と調査面積は平成 12 年度が平成 12 年 12 月 11 日～平成 13 年 3 月 30 日で調査面積が 1,800 m²、平成 13 年度が平成 14 年 1 月 7 日～平成 14 年 2 月 27 日で 1,000 m²、平成 29 年度が平成 29 年 7 月 18 日～平成 29 年 9 月 1 日で調査面積は 320 m²、平成 30 年度が平成 30 年 6 月 12 日～平成 30 年 10 月 12 日で調査面積は 1,280 m²である。

4. 調査担当者は、平成 12 年度が赤塚次郎・洲崎和宏・蔭山誠一、平成 13 年度が石黒立人・松田 訓・堀田剛史、平成 29 年度が酒井俊彦・蔭山誠一、平成 30 年度が酒井俊彦・蔭山誠一である。現地における発掘調査は、平成 12 年度が朝日航洋株式会社、平成 13 年度が株式会社人間文化都市研究所、平成 29 年度が株式会社波多野組（現場代理人：初澤和博、調査補助員：雨宮瑞生、測量技師：尾崎裕司）、平成 30 年度が株式会社アコード（現場代理人：大倉 崇、調査補助員：坂口尚人、測量技師：田村和久）の業務支援を受けて行なっている。

5. 整理および報告書作成作業は、平成 30 年 4 月～平成 31 年 4 月と令和元年 5 月～令和 2 年 3 月で、蔭山が担当した。

6. 遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。

阿部裕恵・鈴木好美・瀧 智美・時田典子・堀田祐美・前田弘子・山田有美子・山本孝枝（整理補助員）

7. 遺構図の合成・調整については株式会社アコードに、遺物実測・デジタルトレースについては、株式会社文化財サービスと株式会社アルカに、遺構図版編集作成・地形等高線図デジタルトレースを国際文化財株式会社に委託し、蔭山・鬼頭が校正した。

8. 金属関連資料の分析は日鉄テクノロジー株式会社（分析者：鈴木瑞穂・渡邊緩子・半田章太郎・隅 英彦・平尾良光）に、木製品等の樹種同定は株式会社パレオ・ラボ（分析者：小林克也・佐々木由香）に、動物遺体等の同定は株式会社パレオ・ラボ（分析者：三谷智広）、AMS 年代測定は株式会社パレオ・ラボに、出土遺物の保存処理は株式会社東都文化財保存研究所に委託した。

9. 本報告書掲載の出土遺物の写真撮影については金子知久氏（有限会社写真工房遊）の手を煩わせた。

10. 発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。

愛知県建設局河川課（尾張建設事務所）・愛知県民文化局文化部文化芸術課・愛知県埋蔵文化財調査センター・大分市歴史資料館・清須市教育委員会・津市教育委員会・三重県立総合博物館（五十音順、敬称略）

11. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々から御教示・御協力を頂いた。

石田泰弘・葛西有香・甲斐由香里・河野史郎・杵名貴彦・熊崎 司・塩地潤一・柴垣哲彦・藤澤良祐・間淵 創・米山浩之（五十音順、敬称略）

12. 本書の執筆は、第 1 章～第 3 章を蔭山誠一、第 4 章第 1 節を杵名貴彦（独立行政法人国立科学博物館理工学研究部）・堀木真美子、第 4 章第 2 節を鬼頭 剛、第 5 章第 1 節を蔭山誠一、第 5 章第 2 節を武部真木が担当した。

13. 本書の編集は蔭山誠一が行った。

14. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。ただし、新基準で表記してある。

15. 調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24 TEL：0567-67-4163

16. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24 TEL：0567-67-4164

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 地理・歴史的環境	4
第4節 清洲城下町遺跡の時期区分	7
第2章 遺構	9
第1節 層序	9
第2節 00A区・01区・17A区・17B区・18A区～18F区（南部地区）	12
第3節 00B区（御園地区）	29
第3章 出土遺物	37
第1節 出土遺物の整理方法	37
第2節 土器・陶磁器	37
第3節 石製品	85
第4節 金属製品	88
第5節 木製品	91
第4章 自然科学的分析	107
第1節 清洲城下町遺跡の金属製品の蛍光 X 線分析	107
第2節 清洲城下町遺跡における層序と古環境	117
第5章 総括	129
第1節 清洲城下町遺跡の遺構変遷－南部地区と御園地区－	129
第2節 清洲城下町遺跡における茶陶の分布－黄瀬戸と楽系陶器－	147
写真図版	157

添付 CD

遺構一覧表・出土遺物一覧表・遺構図版補遺・自然科学分析補遺

目 次

図 1	清洲城下町遺跡の位置	1	図 34	18C 区 047SE 断面図 (1 : 100)	27
図 2	清洲城下町遺跡調査区位置図 (1 : 10,000)	2	図 35	18D 区 052SX 出土状況図 (1 : 50)	27
図 3	清洲城下町遺跡の立地 (1 : 100,000)	3	図 36	18F 区 073SK 断面図 (1 : 100)	27
図 4	周辺の遺跡 (1 : 25,000)	5	図 37	18F 区 075SK 断面図 (1 : 100)	27
図 5	清洲城下町遺跡に関わる旧河道 (約 1 : 40,000)	6	図 38	18F 区 083SE 断面図・遺物出土状況図 (1 : 100)	28
図 6	清洲城下町遺跡の時期区分	8	図 39	18F 区 084SE 断面図 (1 : 100)	28
図 7	00A 区遺構平面図 (1 : 300)	10	図 40	00B 区 2 面遺構平面図 (1 : 300)	30
図 8	00A 区西壁土層図 (1 : 100)	11	図 41	00B 区西壁トレンチ土層図 (1 : 100)	31
図 9	00A 区南壁土層図 (1 : 100)	11	図 42	00B 区南壁トレンチ土層図 (1 : 100)	31
図 10	01 区遺構平面図 (1 : 400)	13	図 43	00B 区 SK30 土層図 (1 : 100)	31
図 11	01 区東壁トレンチ土層図 (1 : 100)	14	図 44	00B 区 1 面遺構平面図 (1 : 300)	32
図 12	17A 区・17B 区遺構平面図 (1 : 200)	15	図 45	00B 区 SK51・SX04・SX06・SW01 平面図、 SW01 立面図 (1 : 80)	33
図 13	17A 区西側北壁土層図 (1 : 100)	16	図 46	00B 区北 4 トレンチ土層図 (1 : 100)	35
図 14	17A 区東側北壁土層図 (1 : 100)	17	図 47	00B 区北 2 トレンチ土層図 (1 : 100)	35
図 15	17A 区東側西壁土層図 (1 : 100)	17	図 48	00B 区北 1 トレンチ土層図 (1 : 100)	35
図 16	17A 区 033SD 断面図 (1 : 100)	18	図 49	00A 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	38
図 17	17B 区北壁西側土層図 (1 : 100)	18	図 50	00A 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	40
図 18	17B 区北壁東側土層図 (1 : 200)	19	図 51	00A 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	41
図 19	17B 区東壁土層図 (1 : 100)	19	図 52	00A 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	43
図 20	17B 区南壁土層図 (1 : 100)	20	図 53	00A 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	44
図 21	18 区遺構平面図 (1 : 400)	21	図 54	00A 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	46
図 22	18 区東壁土層図 (1 : 100)	22	図 55	00A 区出土土器・陶磁器・瓦 (1 : 4、瓦は 1 : 8)	47
図 23	18 区の遺構の変遷	23	図 56	00A 区・62D 区出土土器・陶磁器・瓦 (1 : 4、瓦は 1 : 8)	48
図 24	18A 区 040SD・041SD 平面図 (1 : 200)	24	図 57	62D 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	50
図 25	18A 区 043NR 平面図 (1 : 200)	24	図 58	62D 区出土土器・陶磁器・瓦 (1 : 4、瓦は 1 : 8)	51
図 26	18A 区 002SD・034SD・047SE 平面図 (1 : 200)	24	図 59	62D 区・63D 区・00B 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	52
図 27	18C 区 034SD・040SD・041SD・ 043NR・044SD 断面図 (1:100)	24	図 60	00B 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	54
図 28	18E 区北壁土層図 (1 : 100)	25	図 61	00B 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)	56
図 29	18E 区 060SD 遺物出土状況図 (1 : 50)	25	図 62	00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1 : 4)	58
図 30	18A 区 031SE 断面図 (1 : 100)	26	図 63	00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1 : 4、瓦は 1 : 8)	59
図 31	18A 区 030SK 断面図 (1 : 100)	26	図 64	00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1 : 4、瓦は 1 : 8)	61
図 32	18A 区 035SE 断面図 (1 : 100)	26	図 65	00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1 : 4、瓦は 1 : 8)	62
図 33	18A 区 038SE 断面図 (1 : 100)	27			

図 66	00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8) ……64	図 99	報告済のルツボ・銅滴・銅塊の 透過 X 線画像 ……114
図 67	00B 区・01 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8) ……65	図 100	金属製品 3119 (キセル 吸口) の 分析結果 ……115
図 68	01 区・17 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8) ……67	図 101	ルツボ 3198 の分析結果 ……116
図 69	17 区・18 区出土土器・陶磁器 (1:4) ……68	図 102	17A 区における分析試料採取地点 ……118
図 70	18 区出土土器・陶磁器・ガラス製品 (1:4) ……70	図 103	17A 区における分析試料の採取状況 ……118
図 71	18 区出土土器・陶磁器 (1:4) ……72	図 104	18B 区、18E 区の地層観察および分析試 料採取地点 ……119
図 72	18 区出土土器・陶磁器 (1:4) ……73	図 105	18B 区南端における東西方向の地層断 面 ……119
図 73	18 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8) ……75	図 106	18B 区南端の東西方向地層断面の様子 ……120
図 74	18 区出土土器・陶磁器 (1:4) ……76	図 107	18E 区北端の遺構 060SD と下位層の東 西地層断面 ……120
図 75	18 区出土土器・陶磁器 (1:4) ……77	図 108	清洲城下町遺跡と周辺地域の等高線図 ……………123
図 76	18 区出土土器・陶磁器 (1:4) ……79	図 109	清須市 2011 年 (平成 23 年) 調査地点 ……………126
図 77	18 区出土土器 (1:4) ……80	図 110	00A 区・62D 区・63D 区・91C 区・ 95A 区の遺構変遷 (1:500) ……130
図 78	18 区出土土器・陶磁器 (1:4) ……82	図 111	62B 区・90Fa 区・91C 区・95B 区 の 遺構変遷 (1:500) ……132
図 79	18 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8) ……83	図 112	90Fa 区～90Fc 区・95B 区・清須市 2015 区の遺構変遷 (1:500) ……133
図 80	18 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8) ……84	図 113	01 区・17A 区・17B 区・18A 区～18F 区の城下町Ⅱ-1 期～Ⅲ-1 期の遺構変遷 (1:500) ……135
図 81	石製品 1 (1:4、S-001～S-003 は 1:2) ……………86	図 114	01 区・17A 区・17B 区・18A 区～18F 区の城下町Ⅲ-1 期の遺構変遷 (1:500) ……136
図 82	石製品 2 (1:8) ……87	図 115	01 区・17A 区・17B 区・18A 区～18F 区の城下町Ⅲ-2 期の遺構変遷 (1:500) ……137
図 83	金属製品 1 (1:4、M-004～M-010 は 1:2) ……………89	図 116	63S 区・89D 区・91B 区・18 区の遺構 変遷 (1:500) ……140
図 84	金属製品 2 (1:4) ……90	図 117	00B 区 2 面 中世～城下町期の遺構変 遷 (1:500) ……143
図 85	木製品 1 (1:4) ……92	図 118	00B 区の城下町Ⅱ期～Ⅲ-2 期の遺構変 遷 (1:500) ……143
図 86	木製品 2 (1:4) ……93	図 119	名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村 古城絵図』(中央部分) における 00B 区 の位置……………144
図 87	木製品 3 (1:4) ……95		
図 88	木製品 4 (1:4、W095 は 1:8) ……96		
図 89	木製品 5 (1:4) ……98		
図 90	木製品 6 (1:4) ……99		
図 91	木製品 7 (1:4) ……101		
図 92	木製品 8 (1:4、W-193 は 1:16、 W-201～W203 は 1:8) ……102		
図 93	木製品 9 (1:4、W-210 は 1:8) ……103		
図 94	木製品 10 (1:4) ……104		
図 95	本報告の金属製品の透過 X 線画像 ……110		
図 96	報告済の金属製品実測図 ……111		
図 97	報告済の金属製品の透過 X 線画像 ……112		
図 98	報告済のルツボ・銅滴・銅塊実測図 ……113		

図 120	00B 区の調査中の風景（南より、丸の位置が SX04 の位置）	144
図 121	00B 区の船着場の想定（1：5,000）	145
図 122	清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸類（1） 縮尺 1/6	150
図 123	清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸類（2） 縮尺 1/6	151
図 124	清洲城下町遺跡の黄瀬戸・楽系陶器の分布 縮尺 1/10,000	152

表 目 次

表 1	木製品・木材の樹種同定結果	91	表 8	清須市 2011 年調査地点試料の放射性炭素年代測定結果調査区 1tr. 地点 1	125
表 2	本報告の金属製品の分析結果	110	表 9	18 区の遺構変遷	139
表 3	報告済の金属製品の分析結果	111	表 10	清洲城下町遺跡出土の茶陶類（1）	153
表 4	報告済のルツボ・銅滴・銅塊の分析結果	113	表 11	清洲城下町遺跡出土の茶陶類（2）	154
表 5	17A 区分析試料の放射性炭素年代測定結果	122	表 12	清洲城下町遺跡出土の茶陶類（3）	155
表 6	18B 区南端、東西方向地層断面の放射性炭素年代測定結果	122	表 13	清洲城下町遺跡出土の茶陶類（4）	156
表 7	18E 区遺構 060SD から採取した分析試料の放射性炭素年代測定結果	122			

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

清洲城下町遺跡は愛知県清須市に所在する遺跡で、旧西春日井郡清洲町を中心として、春日町・新川町に広がる遺跡である（図1、県遺跡番号21002）。各事業者より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査は、名古屋第二環状自動車道（一般国道302号）建設、五条川河川改修事業、県道新川清洲線建設、県道西市場助七線建設にともない、昭和57年度より平成23年度にかけて継続的に実施されてきており、その総面積は約91,000㎡に及ぶ。また、これらの調査に並行して清洲町教育委員会、その後の清須市教育委員会などによる発掘調査も実施されている（図2）。

本書において報告するのは、総合治水対策特定河川事業に伴う事前調査として、愛知県建設局河川課尾張建設事務所より愛知県県民文化局を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した部分のものである。調査期間と調査面積は平成12年度が平成12年12月～平成13年3月で調査面積が1,800㎡、平成13年度が平成14年1月～平成14年2月で1,000㎡、平成29年度が平成29年7月～平成29年9月で調査面積は320㎡、平成30年度が平成30年6月～平成30年10月で調査面積は1,280㎡である。

第2節 調査の方法

調査は、愛知県建設局河川課と愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センターの立会いのもと調査区の現地確認を行い、その後調査区を設定して表土掘削、調査区の地層確認後遺物包含層の掘削を行い、遺構検出を行った。遺構検出後は検出状況の写真撮影、遺構の簡易測量、遺構掘削と作業を進め、必要に応じて遺構断面の地層確認・観察、その写真撮影、遺物の出土状況の観察、写真撮影、これらに伴う測量を行い、遺構掘削が大略完了後清掃を行い、ラジコンヘリコプター及びドローンによる全景写真撮影を行った。その前後には個別の遺構の写真撮影も行っている。調査区全景の写真撮影後は調査区壁面などの補足調査を行い、随時埋め戻しを行い、調査を完了した。

調査区は、平成29年度の17A区・17B区を除く平成12年度の00A区と00B区、平成13年度の01区、平成18年度の18A区～18F区は五条川の河川敷の地点にあたる（図2）。平成12年度の調査では、五条川の水位が低い冬季にも関わらず、表土掘削を行い遺構検出面から遺構掘削を進める中で、五条川の干満による水位の影響を受けた。その為、00A区・00B区の壁面の地層確認では、壁面の下部が湧水により崩れて、確認ができなかった部分もあり、00A区のSX8001の調査では、名古屋港の満潮・干潮の時間を確認して遺構掘削を行わなければならな

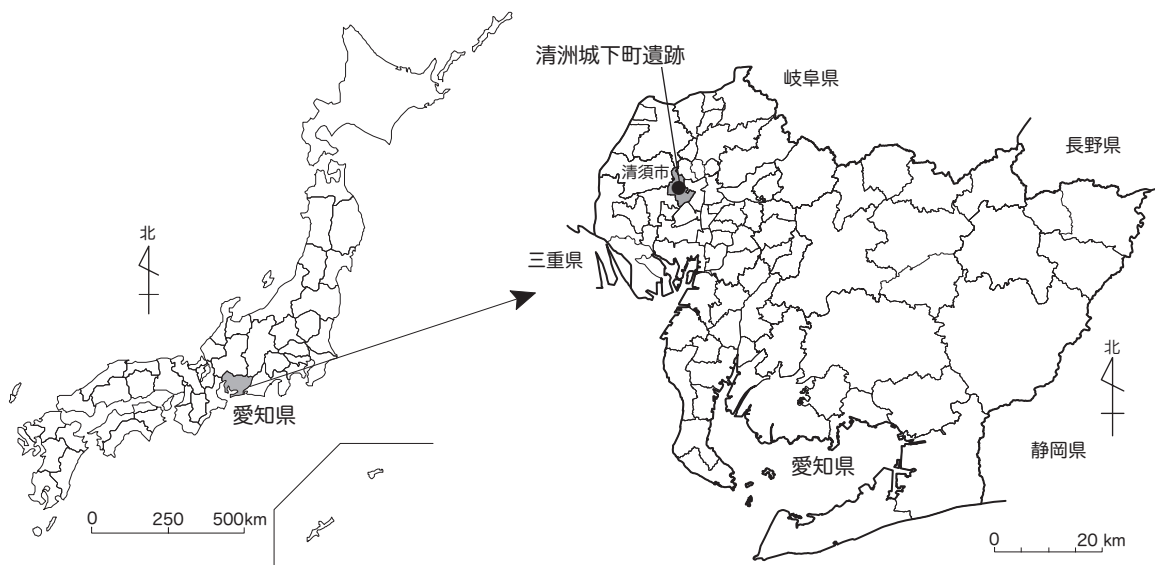


図1 清洲城下町遺跡の位置

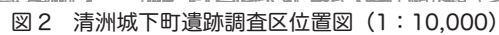




図3 清洲城下町遺跡の立地 (1:100,000)

かった。また、17B区の060SEでは、河川敷から離れていたが、夏季の調査であったこともあり、湧水のため井戸の下端を確認することができなかった。一方で、夏季の調査となった18A区～18F区では、井戸や溝の遺構掘削において基盤の黄灰色細粒砂～中粒砂の深さまで掘っても湧水はなかった。この地点の調査では、猛暑であったために遺構埋土であるシルト層の水分が抜けてスコップの先が入らない程固結して、調査には困難を極めた。また降雨による雨量が増加した時や先に述べた満潮時の五条川の水位が高い時には、調査区全体が冠水状態となり、上流側からの土砂により遺構面が埋没することがあった。このような調査環境であったため、降雨や調査区全体の冠水後の遺構面が柔らかい時点で遺構検出を実施したり、五条川の水位の低い時間に深い遺構の掘削を行うなどの作業工程の工夫もした。

尚、発掘調査は平成12年度が朝日航洋株式会社、平成13年度が株式会社人間文化都市研究所、平成29年度が株式会社波多野組、平成30年度が株式会社アコードの支援を受けて行なった。

調査に伴う整理作業は、遺構図は発掘調査時において測量を行った後に順次製図・校正作業を行い、DXF形式で遺構平面図・遺構断面図・基本土層図などを作成した。出土遺物については、遺物の洗浄と乾燥までの一次整理を各発掘調査現場の事務所にて行い、遺物の分類、接合と復元作業とその後の実測作業、写真撮影、遺物の登録作業は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて、平成30年度から令和元年度に実施した。

遺構図のデジタルトレースと座標変換作業は株式会社アコード（平成30年度・令和元年度）に、遺構図版編集作成・地形等高線図デジタルトレースを国際文化財株式会社（令和元年度）に、地籍図のデジタルトレースは株式会社知立造園（平成30年度）に委託し、蔭山・鬼頭が校正した。出土遺物の実測・デジタルトレースは株式会社文化財サービス（平成30年度）と株式会社アルカ（令和元年度）に、遺物の保存処理は株式会社東都文化財研究所（平成30年度・令和元年度）に、金属関連資料の分析は日鉄住金テクノロジー株式会社（平成30年度・令和元年度）に、樹種同定と動物遺体同定分析は株式会社パレオ・ラボ（平成30年度）に委託して実施した。

第3節 地理・歴史的環境

清洲城下町遺跡（図4-1）は、濃尾平野の氾濫原地帯に立地し、平野を流れる五条川の両岸に形成された自然堤防とその後背湿地上に展開している（図3）。

本遺跡周辺では北東に隣接して朝日遺跡（図4-2）、東に隣接して西田中遺跡（図4-6）があり、西に隣接して廻間遺跡（図4-3）、土田遺跡（図4-5）、松ノ木遺跡（図4-4）が分布する。現在までの調査成果などからは、縄文時代後期における朝日遺跡の竪穴状遺構と貯蔵穴と思われる土坑などが最古のもので、朝日遺跡を流れる自然流路付近に最古の営みが認められる。その後、弥生時代前期には現在のあいち朝日遺跡ミュージアムのある貝殻山地点に環濠集落が築かれ、水田稲作を伴う弥生文化が始まったことが知られる。続く弥生時代中期には尾張地域の拠点集落として自然河道の南北に幾重にもめぐる大規模な環濠が掘削され、北集落の環濠には逆茂木や乱杭による防禦施設を伴うことは日本の歴史上でも大きな発掘調査成果である。また同時期には、首長墓として想定される大型の方形周溝墓をはじめとする墓域の形成、環濠内に帯重なるように検出された大小の竪穴建物はまさに日本の都市の成立を考える上で貴重な調査成果となっている。清洲城下町遺跡の田中町地区においても弥生土器が出土する地点が知られ、弥生時代中期後葉に集落の存在が想定される。同時期の周囲の遺跡では西南西約1.3kmに阿弥陀寺遺跡（図4-12）、南西2.0kmにある大淵遺跡（図4-13）があり、阿弥陀寺遺跡では三重に巡る環濠とその集落が調査されている。朝日遺跡近郊に営まれたこれらの遺跡の調査成果は、弥生時代の社会を考える上で貴重な成果となっている。

弥生時代後期には埋納銅鐸をはじめとする青銅器が発見されている朝日遺跡では引き続き環濠集落が営まれるが、その他の遺跡では遺構・遺物が見つかっていない。

弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて清洲城下町遺跡周辺の廻間遺跡や土田遺跡では集落が営まれ、廻間遺跡では前方後方形の墳墓が確認されている。

古墳時代後期から平安時代には、清洲城下町遺跡の田中町地区を中心として竪穴建物や溝、土坑などからなる集落が営まれ、平安時代後期以後には本遺跡の北東にあたる朝日西地区（朝

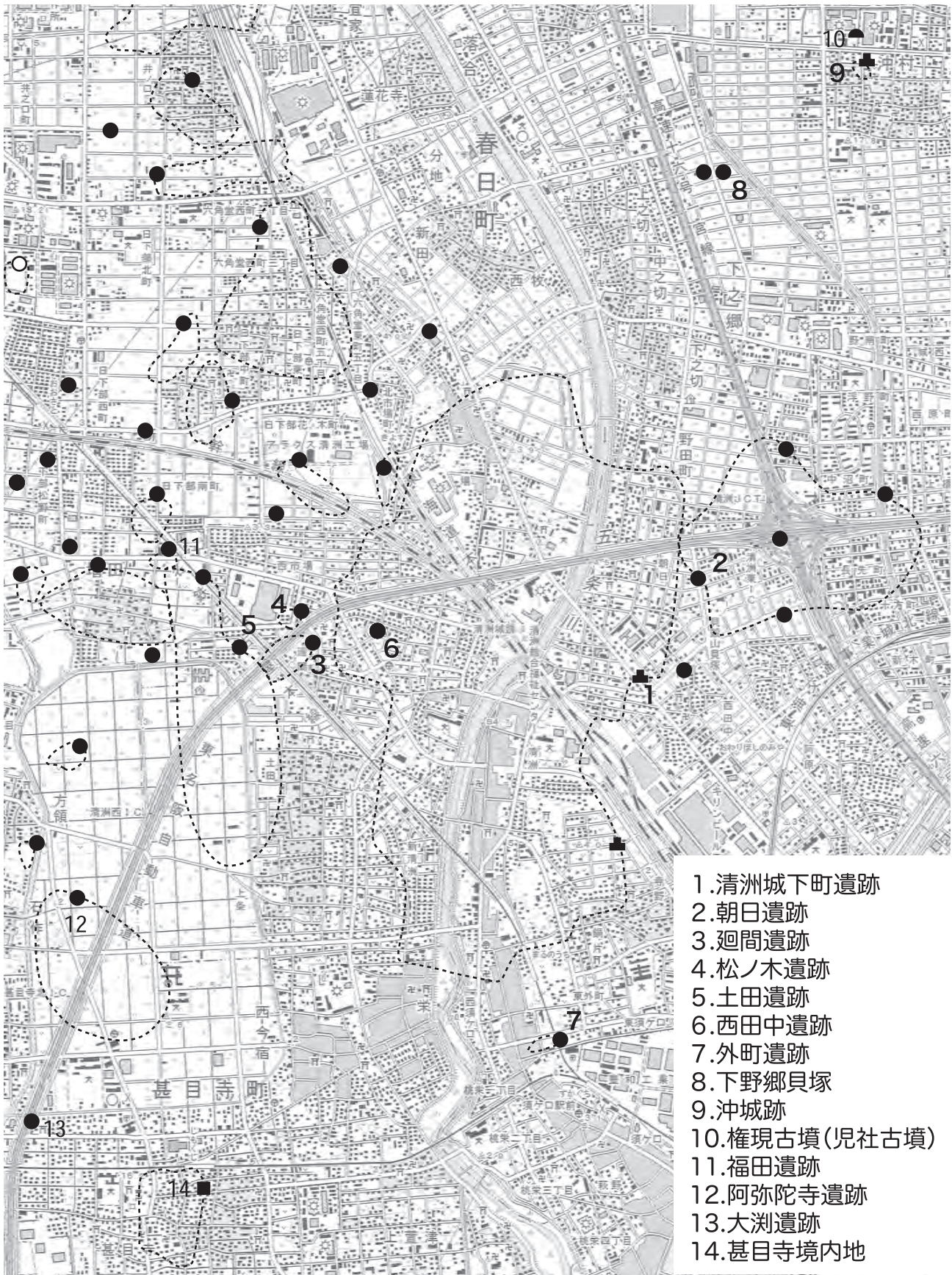


図4 周辺の遺跡 (1 : 25,000)

日西遺跡)において、溝や土坑などからなる集落が確認されている。そして平安時代末には先に述べた土田遺跡や本遺跡の田中町地区などにおいて、中世に続く集落の形成が開始され、鎌倉時代から室町時代を通じて継続する。関連する資料としては本遺跡の南東に所在する日吉神社が古代に遡る伝承を伝え、貞治3(1364)年の『神鳳抄』にみる「清須御厨」は本遺跡との関連が想起されるところである。

また、近年江戸時代前期に描かれた名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城図絵』と発掘調査成果や遺跡分布、明治17年作成の愛知

県公文書館所蔵『地籍字分全図』の解析、現在の都市計画図を用いた表層地形の解析により、弥生時代から江戸時代にかけての清須市周辺の自然河川の変遷についての検討が進められた(鬼頭2013、蔭山・鈴木2013など)。旧五条川の河道の大きな変化としては、弥生時代に清洲城下町遺跡の北東にある朝日遺跡の中を流れていた河道が、古墳時代～古代には清洲城下町遺跡と朝日遺跡の間を北東から南西に流れるようになり、古代以後に名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城図絵』に描かれた清須川の流路に移っていくことが指摘されている(図5)。

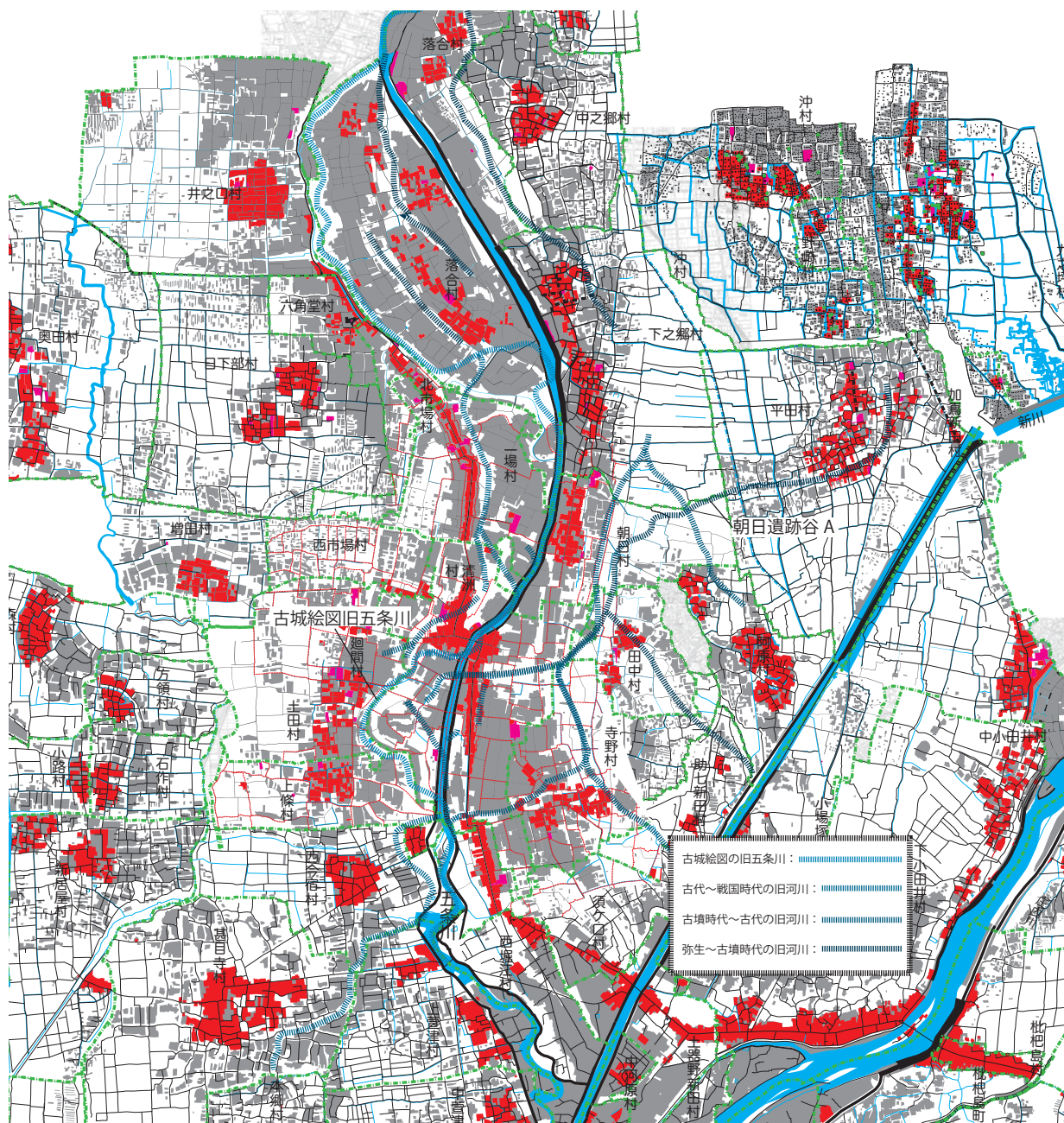


図5 清洲城下町遺跡に関わる旧河道(約1:40,000)

清洲城下町遺跡とその周辺を流れる河道の変遷は、遺跡の歴史や景観などと密接に関わる重要なテーマである。

清須城の沿革は、応永 12(1405) 年頃に室町幕府管領で尾張守護職であった斯波義重が下津城の別郭として築城したと伝えられるが、本格的な城郭と城下町の形成は文明 8(1476) 年に守護代織田敏定が清須に守護所を構えてからのことと思われる。弘治元(1555) 年、那古野城にあった織田信長は清須城を攻略、織田信友を切腹させ清須城に入城した。信長は、永禄 2(1559) 年に岩倉織田家も打倒、永禄 3(1560) 年には桶狭間の戦いで今川勢に勝利、永禄 4(1561) 年に尾張守護斯波義銀を追放し、尾張一国を統一した。永禄 6(1563) 年に小牧越しが行われるが、その後も清須城は織田信忠、織田信雄、豊臣秀次、福島正則、松平忠吉、徳川義直が城主となった。天正 12(1584) 年には清須会議が行われる重要な位置にあり、天正 14(1586) 年の大改修を経て尾張随一の戦略上の重要な都市として機能し続けた。大改修によって清須城は、天守閣、小天守、書院が築造され、内堀・中堀・外堀の三重の堀を構え、城下町の範囲は南北約 2.7km、東西約 1.5km に及ぶ。

慶長 15(1610) 年に名古屋築城が開始されると、清須城と城下町の移転が進行した(清須越し)。元和 2(1616) 年には、美濃街道の宿場として清須宿が設置され、清須は尾張三宿として繁栄した。

第4節 清洲城下町遺跡の時期区分

清洲城下町遺跡の愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査報告も 11 報告となり、近年の発掘調査では、鈴木正貴による『清洲城下町遺跡Ⅴ』に報告された戦国時代の出土遺物について設定された 3 期 6 段階区分(鈴木 1995)が指標とされている(図 6)。その内容は、清洲城下町遺跡における多様な出土遺物の中で、主要となる土師器皿、土師器鍋・釜、瀬戸美濃窯産陶器碗・皿・播鉢の型式分類と『清洲城下町遺跡Ⅳ』において報告された主要な遺構などの出土遺物の組成などをもとに時期設定がなされたものであった。この編年は、清洲城下町遺跡の遺構変遷とも深く関連しており、その中にある遺跡固有の年代として、「①遺跡の本格的開始を守護所移転の 1478 年に当てること(城下町期Ⅰ期の開始を 1478 年とする)、②遺跡の終末を清須越し完了の 1613 年に当てること(城

下町期Ⅲ期の終末を 1613 年とする)、③遺跡全体を包括する総構え構築を織田信雄の清須入城に当てること(城下町期Ⅱ期とⅢ期の境界を 1586 年とする)」が述べられている。

この清洲城下町遺跡の時期区分は、瀬戸・美濃産陶器の戦国時代の大窯編年と江戸時代の登窯編年とも一定の対応があり(藤澤 1993)、遺跡の画期を遺跡の開始と終末、天正 14 年の織田信雄の清須入城の総構え構築、瓦葺き建物の近世城郭・城下町につながる画期として捉えた点で、遺跡理解の発展に大きく寄与しており、今日に至る。しかし、遺物からみた画期の設定について述べられたように、この編年が遺構の時期を決定する際に全遺跡的な統一基準をあらかじめ設けるために瀬戸美濃窯陶器を主体に設定されたものであること、6 小期を 3 期に大別した理由としてある清洲城下町遺跡の遺構で、比較的容易に認められる段階が城下町期Ⅰ期と城下町Ⅲ期であり、城下町Ⅱ期の様相が明確でないために、暫定的な大別を行ったとされている⁽¹⁾。城下町Ⅱ期の状況は、織田信長による小牧城・城下町の建築と移転による影響があるものとも考えられる。

以上の出土遺物の編年と遺構の時期区分を基に、本報告を行う。

早野浩二編 2005『清洲城下町遺跡Ⅸ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 131 集、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴編 2013『清洲城下町遺跡Ⅺ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

鬼頭 剛 2013「清洲城下町遺跡周辺の地形解析と五条川の流路について」『清洲城下町遺跡Ⅺ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 131 集、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

蔭山誠一・鈴木正貴 2013「清須における河川跡の研究」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第 14 号、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴 1995「第Ⅸ章 考察 第 1 節 清須城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡Ⅴ』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

藤澤良祐 1993『瀬戸市史陶磁史篇Ⅳ』

註(1) 近年では、鈴木正貴によるより城下町Ⅱ期の出土遺物についての再検討がある。鈴木正貴編 2013「第 5 章 考察・総括 第 1 節 城下町期における土師器の編年・第 2 節

城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器」『清洲城下町遺跡Ⅺ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 愛知県埋蔵文化財センター

	尾張型山茶碗の型式	東濃型山茶碗の型式	常滑産陶器の型式	瀬戸美濃産陶器の型式	清洲城下町遺跡の時期区分		関連事項など
1150	第4型式	谷迫間	2 1175		(先城下町期)	(「清須御厨」時代)	
1200	第5型式	浅間窯下 丸石3	3 1190	草創期			
		窯洞	4	前Ⅰa期			
	第6型式	白土原	1220	前Ⅰb期			
1250			5	前Ⅱa期 前Ⅱb期			
	第7型式	明和	1250 1275	前Ⅱc期 前Ⅲ期			
1300			6b	前Ⅳ期			
	第8型式	大畑大洞古	1300	中Ⅰ期			
			7	中Ⅱ期			
1350				中Ⅲ期			
	第9型式	大畑大洞新	1350	中Ⅳ期			1364 (貞治3) 『神鳳抄』に「清須御厨」の記載
			1360	後Ⅰ期			
1400			1380	後Ⅱ期	(城下町期0期)	(守護所時代)	1405 (応永12) この頃、斯波義重清須城築城か？
	第10型式	大洞東	1400	後Ⅲ期			
			1420	後Ⅳ期(古)			
1450	第11型式	脇之島	1440	後Ⅳ期(新)			1452 (享徳1) 斯波義敏、尾張守護になる 1467 (応仁1) 東軍斯波義敏軍、尾張に下向する 1475 (文明7) 守護斯波義廉、尾張に下向 1478 (文明10) 尾張守護所、下津から清須に移る 1479 (文明11) 両織田氏和睦、尾張の分割支配開始
		生田	1460				
1500			1485		城下町期Ⅰ期	Ⅰ-1	
			1500	大窯第1段階		Ⅰ-2	
1550			1530	大窯第2段階	城下町期Ⅱ期	Ⅱ-1	1532 (天文1) 信秀、清須・小田井の織田氏と争う 1534 (天文3) 信長生まれる 1551 (天文20) 信秀死去
			1560	大窯第3段階		Ⅱ-2	1555 (弘治1) 織田守護代家滅亡、信長清須城入城 1563 (永禄6) 信長、居城を小牧山へ移す(小牧越し) 1582 (天正10) 本能寺の変、清須会議
1600			1590	大窯第4段階	城下町期Ⅲ期	Ⅲ-1	1586 (天正13) 天正大地震 1586 (天正14) 木曾川大洪水 1603 (慶長8) 江戸幕府成立
			1610	登窯第1小期		Ⅲ-2	1610 (慶長15) 清須越し開始 1613 (慶長18) 清須越しほぼ完了 1616 (元和2) 美濃街道沿いに清須宿できる

図6 清洲城下町遺跡の時期区分(早野浩二編 2005『清洲城下町遺跡Ⅸ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターより転載)

第2章 遺構

第1節 層序

本報告に関わる調査地点が清洲城下町遺跡の北側に位置する御園地区（00B区）と遺跡の南側に位置する南部地区（00A区・01区・17A区・17B区・18A区～18F区）に分かれる。

御園地区にある00B区は、現五条川西岸堤防から河川敷に降りた部分にある。調査区の西端が標高4.0m前後、東端が標高3.5m前後と西側の堤防から東側の五条川にかけて地表面が下る地形で、現在に近い整地と考えられる攪乱層と五条川の現在の護岸の整地層と考えられる攪乱層を除くと、調査区西端部では南北に伸びる堤状のSX01が確認でき、また遺構こそ確認できなかったが、標高3.50m前後の面で江戸時代に描かれた名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城絵図』に描かれている姿の遺構面にあたるものと考えられた。遺跡埋土は色調が褐灰色・褐色・黄褐色・にぶい黄褐色・オリーブ褐色・暗灰黄色・黄灰色・灰黄色・灰色・灰白色など多岐にわたり、シルトから砂質シルトを主体とするもの、細粒砂・中粒砂・粗粒砂を主体とするものがあり、これらが斑土状になるものと葉理状に薄い互層になるものがある。人為的な遺構の埋土では単一の土に見えても斑土状になっており、自然堆積がある遺構の埋土では葉理状の薄い互層がみられる。全体には遺跡の上層では褐色や黄褐色、にぶい黄褐色などの酸化色で赤味のある色調、下層では灰色や暗灰黄色、黄灰色などの還元された青みのある色調が多くなる傾向にあるが、この調査区の地山となる下層の自然流路においても比較的酸化色の褐色シルト・砂質シルトもみられることから、一様ではない。

南部地区にある00A区・01区・18A区～18F区は、現五条川東岸堤防から河川敷に降りた部分にある。地表面の高さは00A区が標高2.8m～2.9m前後、01区が標高2.0m～3.0m、18A区～18F区は調査前の船枋橋の工事により、遺構検出面の上位に当たる標高2.0mであった。17A区・17B区は現五条川東岸堤防から東

にある民家に囲まれた宅地にあたり、調査区の西端が標高4.0m前後、東端が標高3.5m前後と西側の堤防から東側の五条川にかけて地表面が下る地形である。

地表面と遺構検出面の間には、17A区・17B区では近代以後の水田耕作土（灰色・暗灰黄色・灰オリーブ色・明褐色の砂質シルト・シルトなどの斑土）や道路建設に伴う盛り土が、00A区には江戸時代中期～後期にかけての五条川東岸堤防の盛り土と思われる地層がみられる。これらの盛り土は、灰白色の細粒砂～粗粒砂、黄褐色や灰黄褐色、オリーブ黒色、にぶい黄褐色などの色調のシルトや粘土の斑土からなる。

遺構検出面は、00A区が標高1.50m～1.95m、01区が標高1.50m～1.85m、17A区・17B区が標高1.80m～1.85m、18A区～18F区は標高1.60m～2.00mの高さで、各調査区において戦国時代末～江戸時代前期の遺構が確認できた。

基盤砂層と考えられる明褐色や灰白色、灰色、灰黄色、明黄褐色、黄褐色、褐色、灰オリーブ色などの色調をもつ細粒砂～粗粒砂層の上面の高さは00A区で標高1.60m、01区で標高0.90m～1.20m、17A区・17B区で標高1.80m、18A区～18F区で標高1.50m前後となり、17A区の西側では基盤砂層の上に灰オリーブ色砂混じりシルトが堆積しており、18A区～18F区では、遺構検出面と基盤砂層の間に上方へ細粒化する褐色～にぶい黄褐色シルト混じり細粒砂からにぶい黄褐色シルト、遺構検出面となるにぶい黄褐色粘土質シルトや黄褐色粘土の地層がみられる。

遺構埋土は00B区と同様で、色調が褐灰色・褐色・黄褐色・にぶい黄褐色・オリーブ褐色・暗灰黄色・黄灰色・灰黄色・灰色・灰白色など多岐にわたり、砂質シルトからシルトを主体とするものがほとんどである。基盤砂層の一部を掘り込む遺構では、その砂が全体に混じるもの、ブロック状に入るもの、シルト層と互層に入るものがみられた。



図7 00A区遺構平面図 (1 : 300)



図 8 00A 区西壁土層図 (1:100)

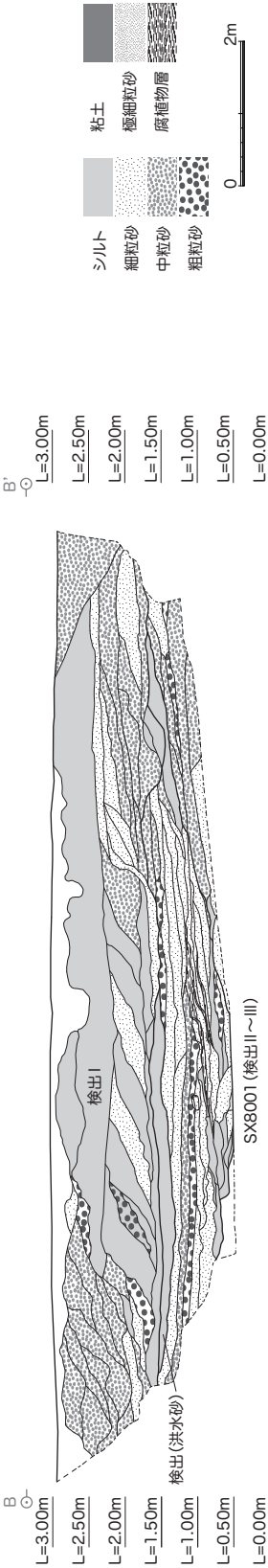


図 9 00A 区南壁土層図 (1:100)

第2節 00A区・01区・17A区・17B区・18A区～18F区（南部地区）

（1）00A区（図7～図9）

大型の土坑 SX8001、柱穴状の土坑 2 基、溝 1 条を確認した。SX8001 は東に隣接する 62D 区・63D 区において確認されている城下町期Ⅲ-2 期の SX8001 の西側部分にあたる。清洲城下町遺跡Ⅳ報告において土坑Ⅲ類（比較的大規模で、平面プランが方形または長方形を基準とした形態となるもの。）とされたもので、東西 22.5m、南北 45m 以上、深さ 1.3m～1.45m を測る。全体の堆積状況では、上層の 0.30m～0.40m 程がシルト層、中層の 0.50m～0.70m 程が細粒砂～粗粒砂層、下層に 0.10m 程のシルト層、最下層に 0.10m 程の細粒砂層と続く。遺構検出に伴う上層の上側の掘削を検出 1、上層の下側と中層を検出 2、下層と最下層を主に検出 3 にて掘削した。詳細は出土遺物の項で述べるが、層序による出土遺物の時期差や種類の差は見られなかった。出土遺物は陶器・磁器、土師器皿・鍋、木製品・木材、石製品・礫、金属製品、骨・貝殻、加工円盤、その他にわけて個別で取り上げができたものを図 7 に表した。遺物の出土状況は 62D 区の西側から 00A 区の南西側にかけてが集中しており、00A 区の北側 62D 区の北側にかけて少なくなり、63D 区にかかる遺構の北東側は少ない状況があり、遺物は遺構の南西側を中心に廃棄されたものと考えられる。遺構の軸線は N-8°-W となり、62D 区・63D 区で確認されている溝の軸線 N-10°-E とは異なり、遺構の前後関係も不明である。00A 区の 8001SX の外になる部分に軸線を同じくする幅 0.70m 前後の溝 SD01 があり、その東に隣接して径 0.50m 前後の土坑 SK01 と SX8001 の中にある長軸 2.21m、短軸 1.22m、深さ 0.2m の土坑 SK02 があり、その北に西肩から中位に残る南北の石列 SX01 が見られた。SX01 は長径 0.1m～0.4m 程の 20 個前後の亜角礫～亜円礫が長さ 1.5m にわたり並ぶもので、SX8001 には石積みが存在した可能性がある。

（2）01区（図10・図11）

00A 区の北 85m にある調査区で、北側は

18A 区・18C 区と接する。溝 4 条、土坑 10 基、不明落ち込み 1 基がある。調査区中央からやや南に東西方向の溝 3 条 SD01～SD03 があり、北側の SD01 から SD02、南側の SD03 への前後関係がみられるが、出土遺物より SD01～SD03 の時期は城下町Ⅲ-1 期と考えられる。SD01 は幅 2.60m、深さ 0.52m、SD02 は幅 2.60m 以上、深さ 0.38m、SD03 は幅 6.40m、深さ 0.32m を測り、溝の軸線は SD01 と SD02 が N-85°-E、SD03 が N-17°-W で検出状況にもよるが、最も新しい SD03 が南東に振れる軸線をもつ。埋土は SD01 が極細粒砂～シルト、SD02 がやや細粒砂を混じるシルト、SD03 がシルトを主体に極細粒砂層が互層になる状況が観察された。SD03 は大窯第 3 段階～大窯第 4 新段階の瀬戸・美濃産陶器の他に常滑産陶器甕・鉢、土師器ロクロ皿と柿経の木簡・卒塔婆が出土し、柿経や卒塔婆の出土から付近にあった寺院・墓地に関係する区画の可能性はある。SD04 は北に隣接する 18 区 043NR と関連する遺構と思われる。

SD03 の南東に隣接する SK01 は長軸 2.20m 以上、短軸 1.68m、深さ 0.31m を測る平面楕円形の土坑で、城下町Ⅲ-2 期のものである。

（3）17A区・17B区（図12～図20）

18E 区の東 15m に位置する調査区で、溝 3 条、井戸 1 基、土坑 42 基、柱穴 6 基自然流路 1 条を確認した。溝と自然流路、井戸、土坑は重複しているものがあり、遺構検出面の上面にて 033SD と 039SD と溝から外れる位置にて土坑や柱穴を確認した。溝と自然流路はおおよそ重複しており、17B 区の北東側から西に折れて流れる軸線をもち、033SD と 063NR の間層として灰オリーブ色～明褐色の細粒砂～中粒砂があるが、033SD と 039SD・042SD は溝の軌道と埋土の色調の違いから主に区別した。主な遺構の前後関係は古い方から 063NR → 042SD → 039SD、063NR → 060SE → 039SD → 033SD を確認した。出土遺物では、063NR が瀬戸・美濃産陶器大窯第 1 段階～大窯第 2 段階のものと土師器非ロクロ成形小皿 2 類と 3 類のものが出土し、060SE が瀬戸・美濃産陶器大窯第 3 段階～大窯

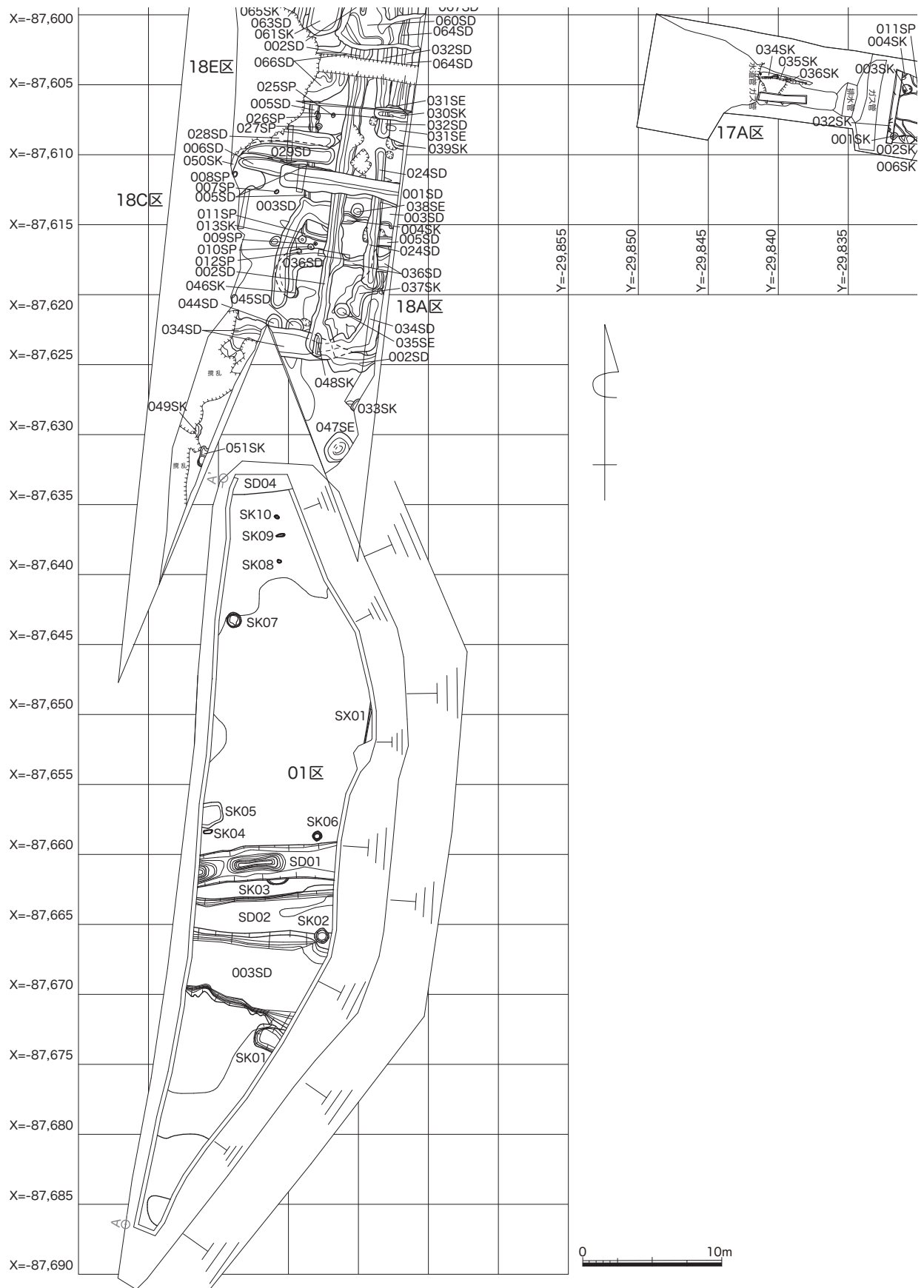


図 10 01 区遺構平面図 (1:400)

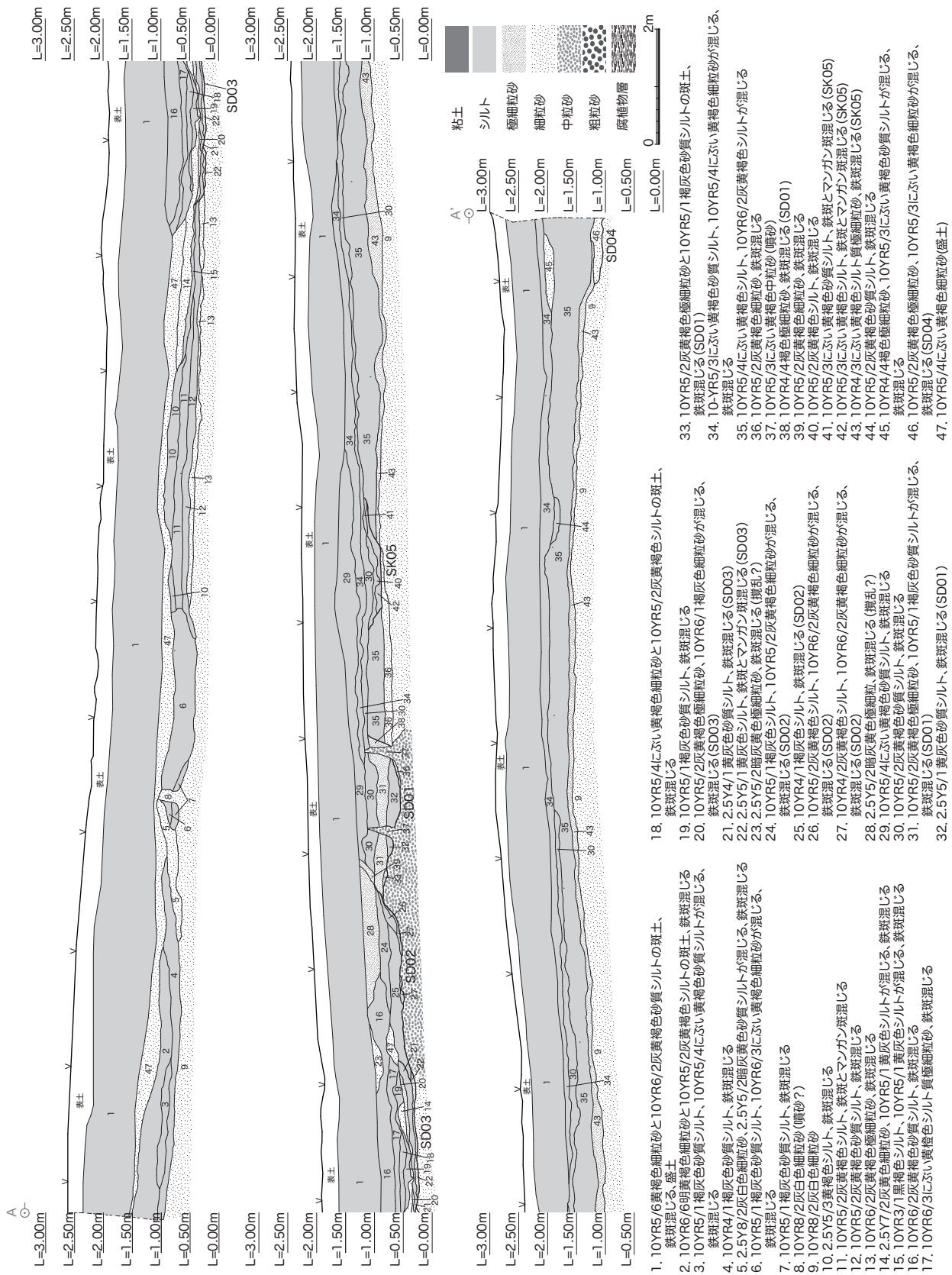


図 11 01 区東壁トレンチ土層図 (1:100)

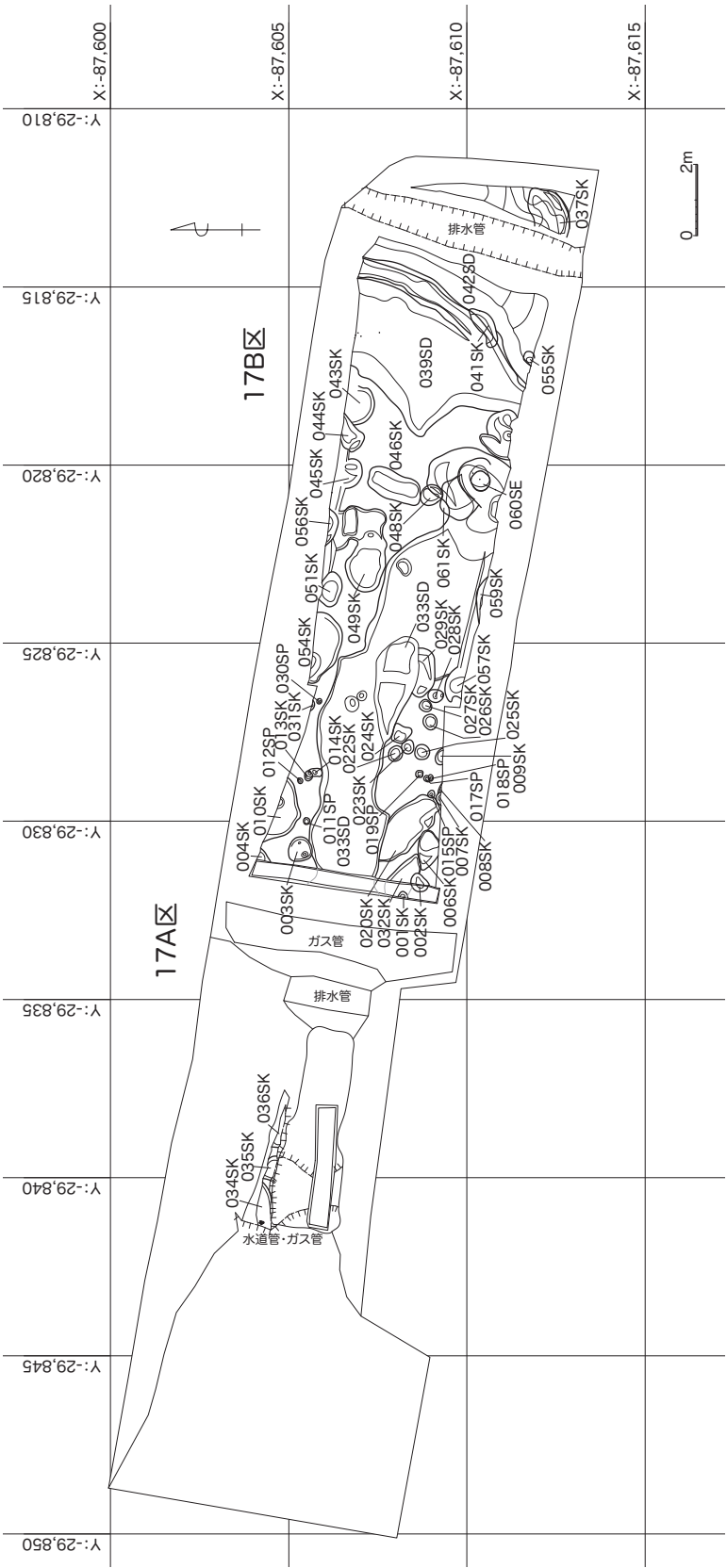


図 12 17A 区・17B 区遺構平面図 (1:200)

020SK は平面楕円形で丸底の土坑で、長軸 2.38m、短軸 0.92m、深さ 0.18m を測る、青磁皿と土師器非ロクロ成形小皿 2 類が出土しており、033SD より古い遺構である。034SK は 17A 区の北壁際に検出された長軸 1.19m 以上、



圖 13 17A 区西側北壁土層圖 (1:100)

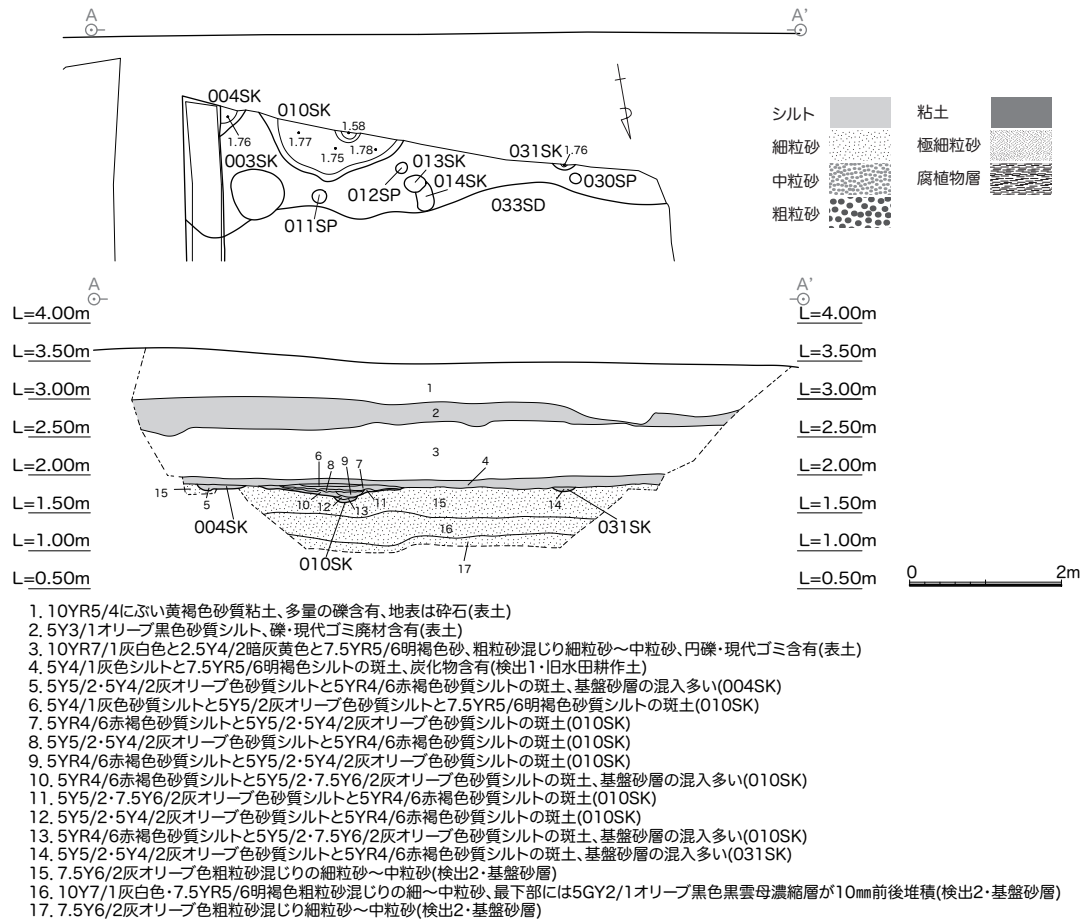


図 14 17A 区東側北壁土層図 (1:100)

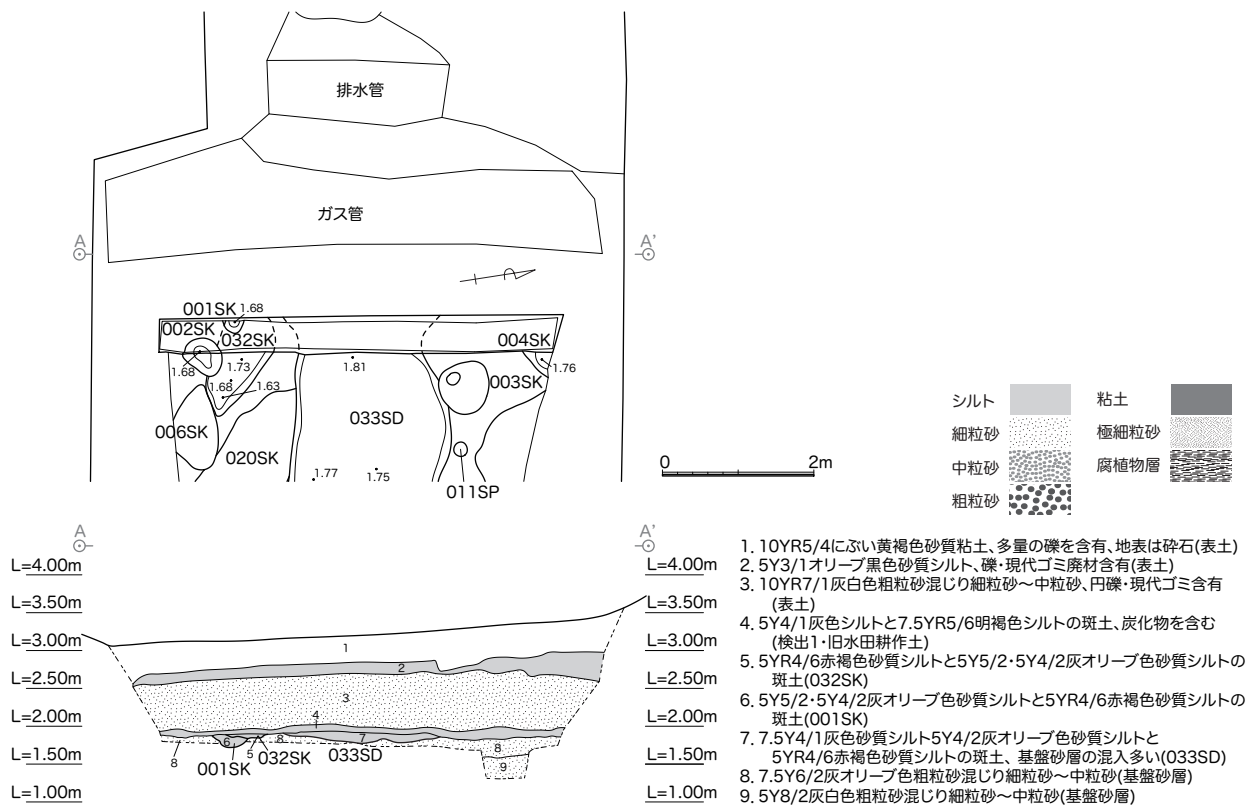


図 15 17A 区東側西壁土層図 (1:100)

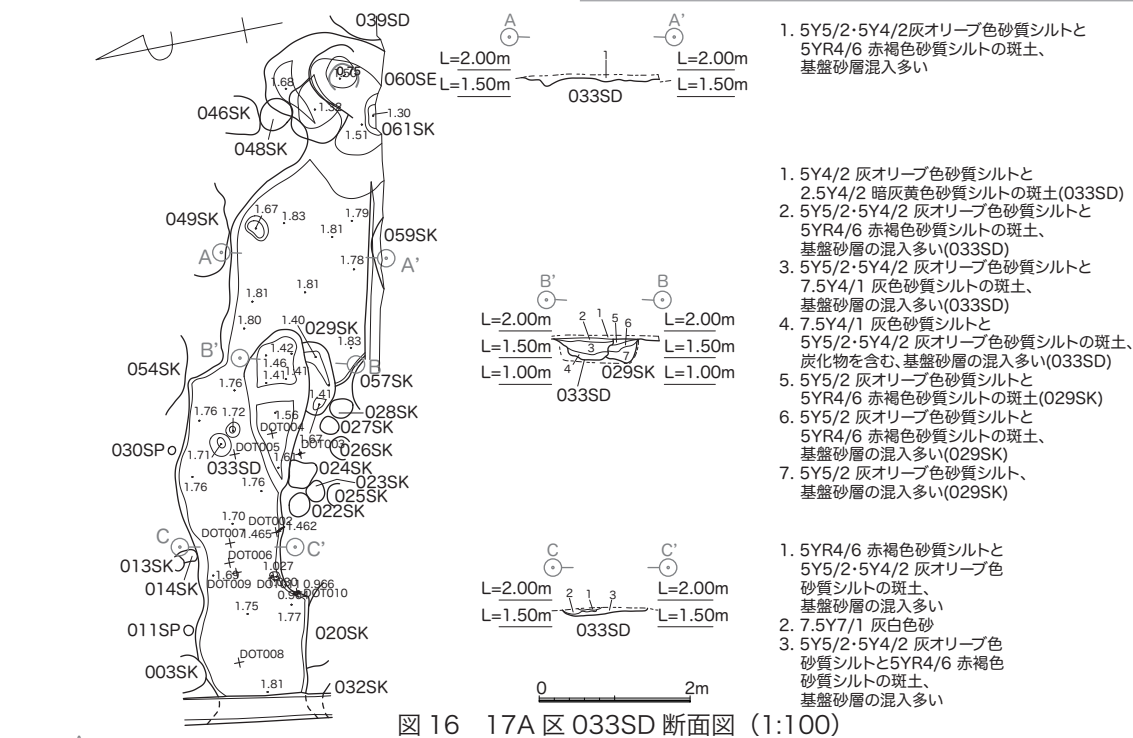


图 16 17A 区 033SD 断面图 (1:100)

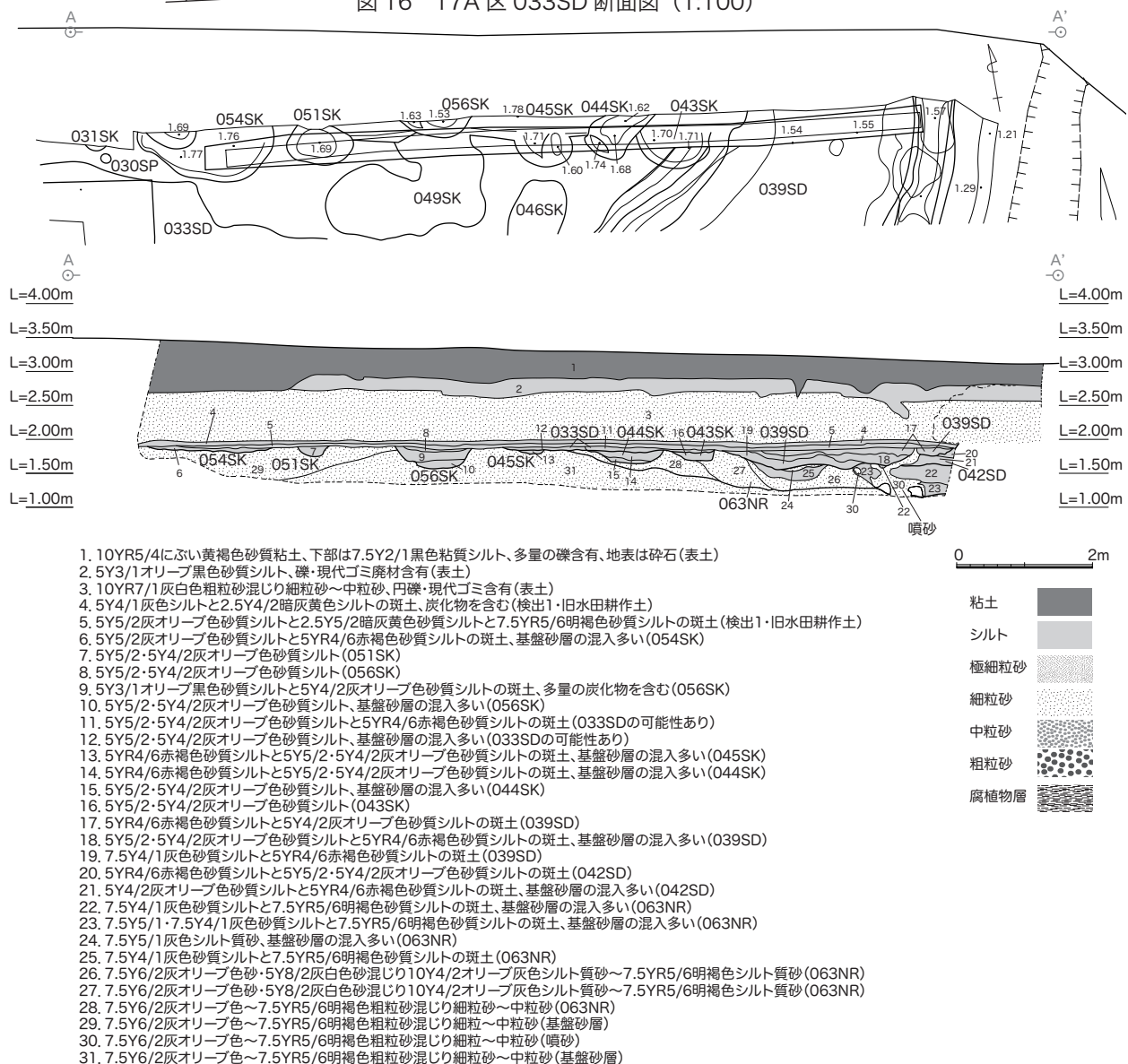
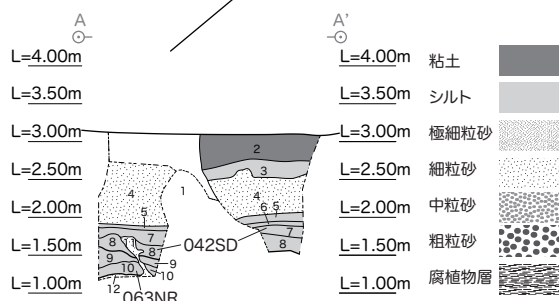
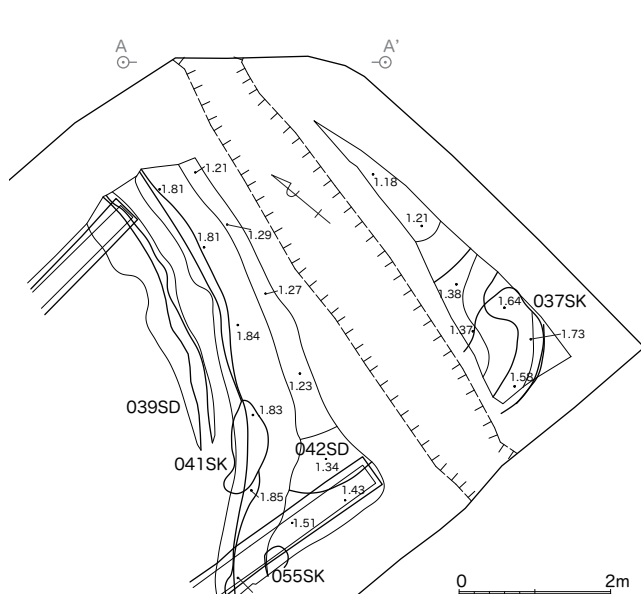


図 17 17B 区北壁西側土層図 (1:100)



1. 雨水管
2. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土、下部は7.5Y2/1黒色粘質シルト、多量の礫含有、地表は碎石(表土)
3. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、礫・現代ゴミ廃材含有(表土)
4. 10YR7/1灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有(表土)
5. 5Y4/1灰色シルトと2.5Y4/2暗灰黄色シルトの斑土、炭化物を含む(検出1・旧水田耕作土)
6. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土(検出1・旧水田耕作土)
7. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土(042SD)
8. 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(042SD)
9. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(063NR)
10. 7.5Y5/1・7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(063NR)
11. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂(噴砂)
12. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂(基盤砂層)

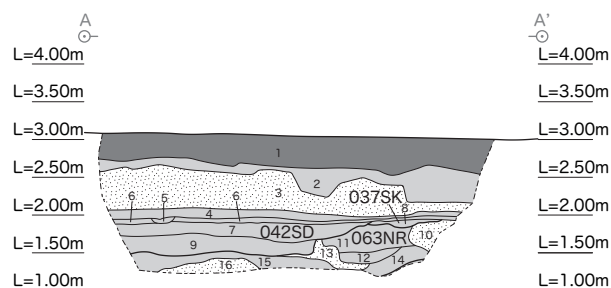
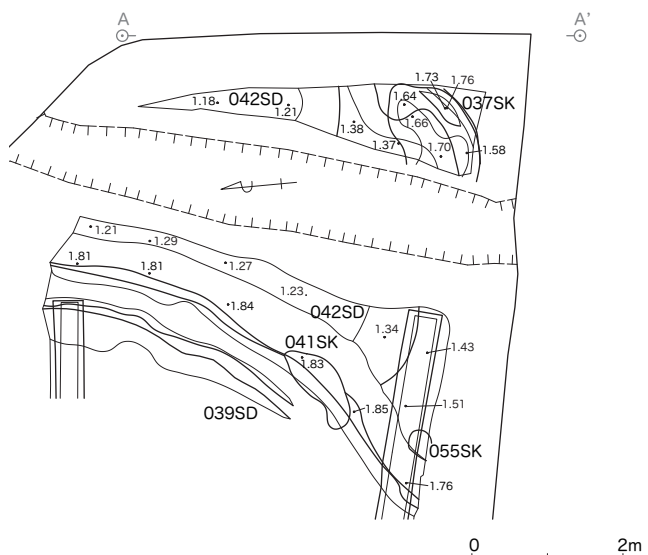
図 18 17B 区北壁東側土層図 (1:100)

短軸 0.38m 以上、深さ 0.21m の平面円形状の土坑で、底部から大窯第 2 段階～第 3 段階の擂鉢底部片が出土している。

(4) 18A 区～18F 区 (図 21～図 39)

先に述べた 01 区の北に隣接し、17A 区の西 15m にあり、91B 区と 89D 区の南に隣接する。溝 35 条、井戸 7 基、土坑 40 基、自然流路 1 条を確認することができた。検出された遺構は、複数で重複しており、一時期に存在する遺構数は少ない。

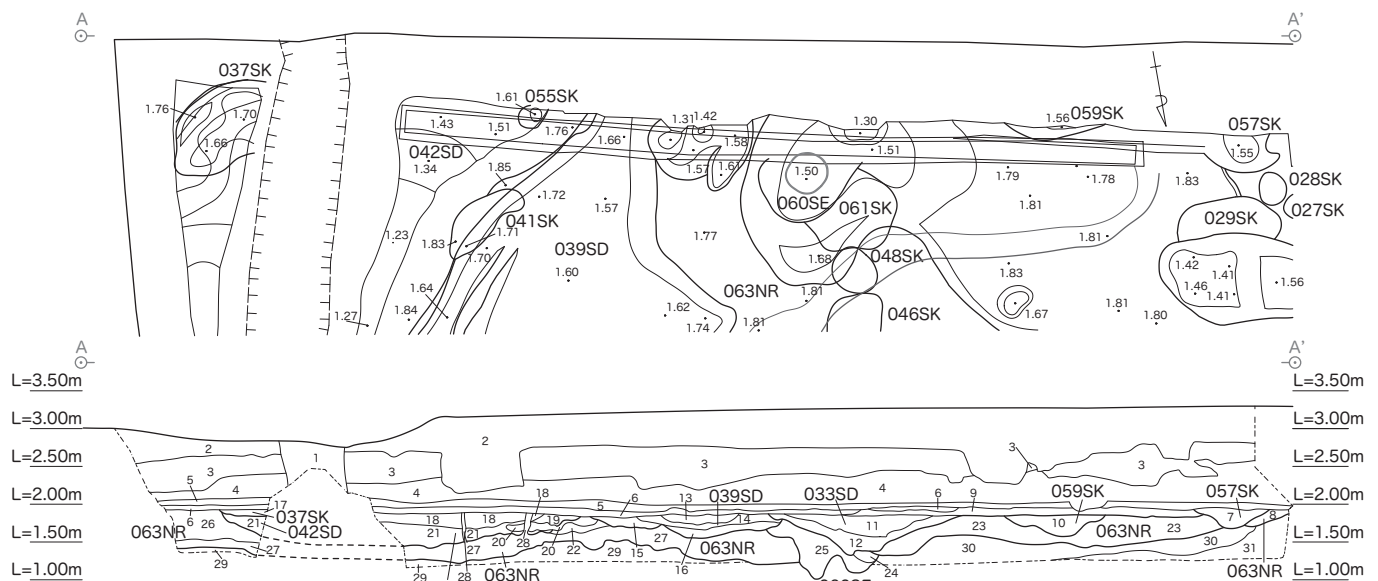
溝 (SD) は、040SD と 041SD が東西方向



1. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土、下部は7.5Y2/1黒色粘質シルト、多量の礫含有、地表は碎石(表土)
2. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、礫・現代ゴミ廃材含有(表土)
3. 10YR7/1灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有(表土)
4. 5Y4/1灰色シルトと2.5Y4/2暗灰黄色シルトの斑土、炭化物を含む(検出1・旧水田耕作土)
5. 5Y4/1灰色シルトと5Y5/2灰オリーブ色シルトと2.5Y5/2暗灰黄色シルトの斑土
6. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土(検出1・旧水田耕作土)
7. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土(042SD)
8. 5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトと7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルトの斑土、炭化物を含む、基盤砂層の混入多い(037SK)
9. 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(042SD)
10. 7.5Y6/2・7.5Y5/2灰オリーブ色シルト質砂と5Y8/2灰白色シルト質砂の斑土、基盤砂層との混入(063NR)
11. 7.5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト(063NR)
12. 7.5Y4/1灰色～7.5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト(063NR)
13. 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト質砂、基盤砂層との混入(063NR)
14. 7.5Y4/1灰色砂質シルト、基盤砂層の混入多い(063NR)
15. 7.5Y4/1灰色～7.5YR5/6明褐色砂質シルト、基盤砂層の混入多い(063NR)
16. 7.5Y6/2灰オリーブ色～7.5YR5/6明褐色シルト質砂、基盤砂層との混入(063NR)

図 19 17B 区東壁土層図 (1:100)

で N-11°-W 前後で、他の溝は南北方向のものが N-10°-E 前後、東西方向のものが N-80°-W 前後の軸線をもって掘削されており、複数が重複している。したがって 2 条の溝がほぼ並行して検出されても、屈曲した位置では重複する場合が多く、道路遺構に伴う側溝としては確認できなかった。溝の幅は、0.30m 程の 18F 区 071SD から 7m 程の 18D 区 017SD までの規模の違いがあり、溝の断面もやや逆三角形の薬研掘り状のものや逆台形状のものもあるが、およそ半円形の丸底のものが多い。溝の規模に



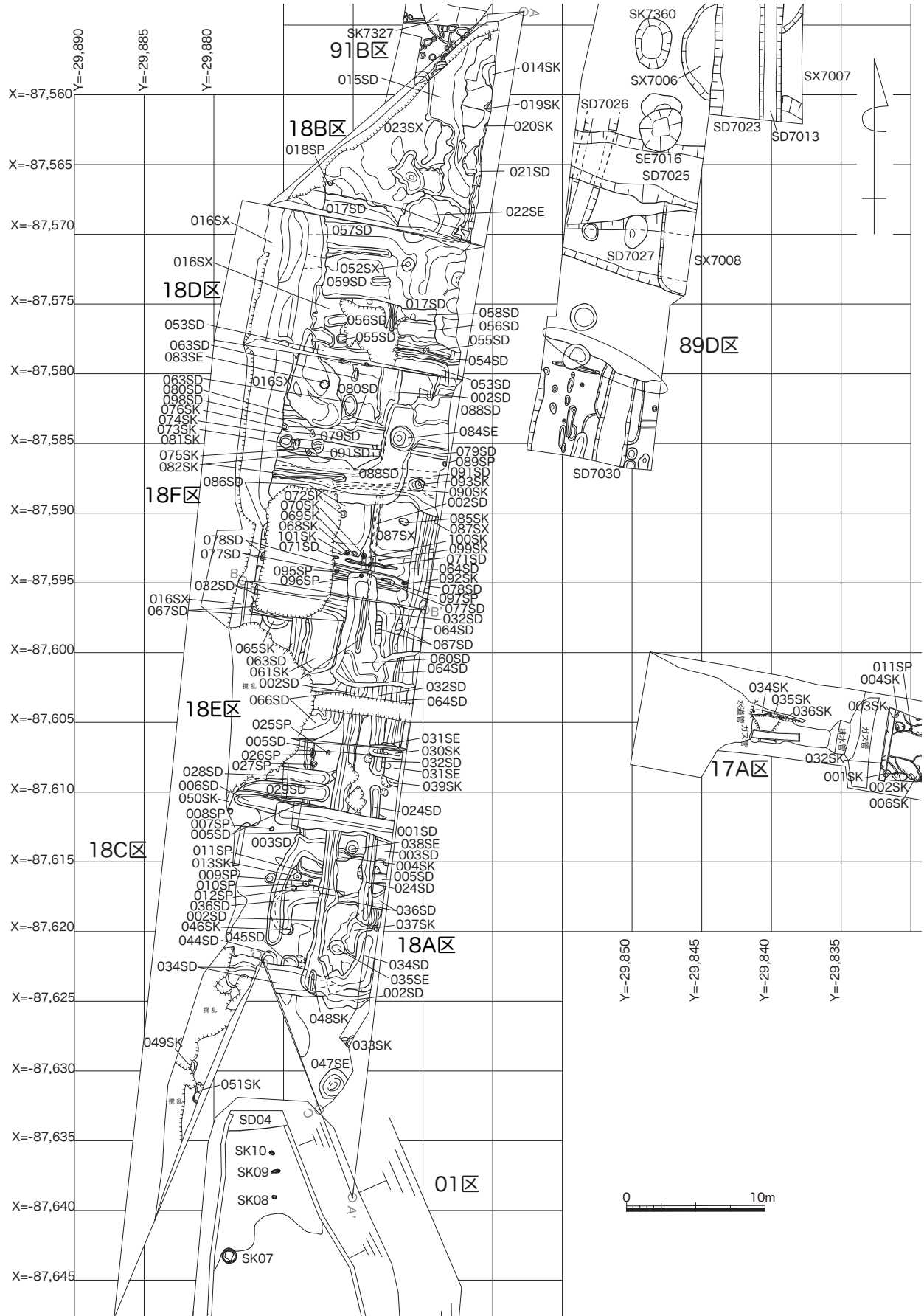


図 21 18区遺構平面図 (1:400)

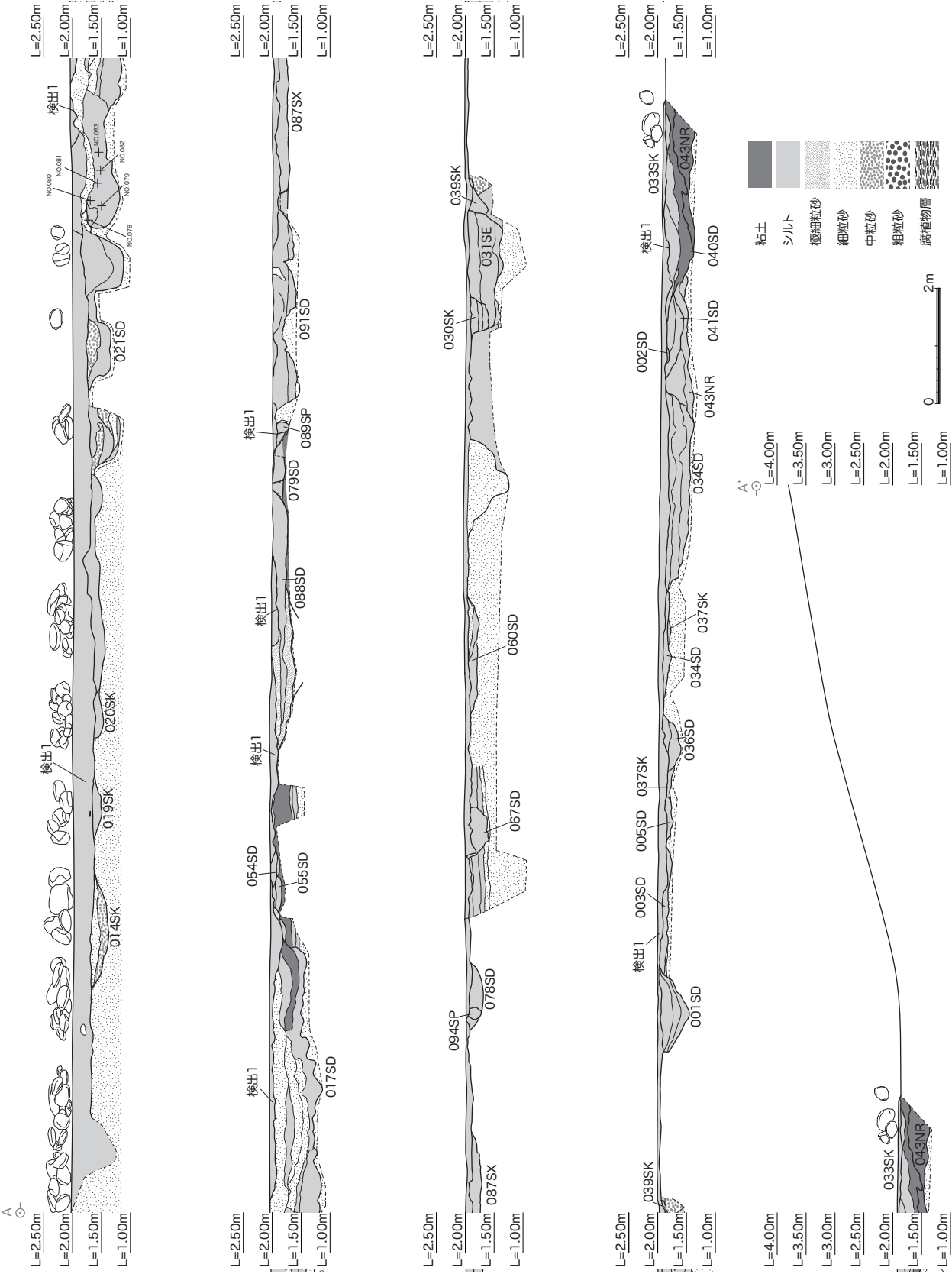


図 22 18 区東壁土層図 (1:100)

じく 036SD と 045SD がみられる。他の調査区とつながる溝は、015SD が 91B 区 SK7317 と 89D 区 SD7027 と、017SD が 89D 区 SD01 とつながるものと考えられる。調査区内でつながる可能性のあるのは、18B 区 021SD と 18D 区 054SD と、064SD が 18E 区 039 とつながるものと考えられる。

よって 024SD・032SD・034SD は南北に 24m～25m 程を囲む区画溝と考えられ、幅 1m～1.5m、深さ 0.50m 前後の溝のタイプとなる。また溝Ⅳ類に分類した 002SD は南北に 50m 程続くようであり、幅 1.5m を超えてくる溝ではより大きい区画を囲む溝の可能性が有る。

溝の時期について北側の 18B 区から南側の 18A 区・18C 区にかけて調査区毎に主な溝、井戸・土坑の変遷をまとめたものが図 23 である。

どの調査区においても 4 段階～6 段階の遺構の前後関係が確認され、頻繁な遺構の埋没と掘削が行われたことがわかる。この中で特徴的なのは、井戸と考えられる遺構が溝より新しく、井戸の前に存在した溝は先に述べた溝Ⅱ類～溝Ⅳ類のものが多くことから、井戸が掘削される前は比較的大規模な溝で囲まれた区画が存在したことが想定される。次に出土遺物から検討すると、021SD では瀬戸・美濃産陶器大窯第 3 段階後半～第 4 段階後半・江戸時代前期の陶器と土師器非ロクロ成形小皿 1 類～3 類のものが出土していることから城下町Ⅲ-1 期～Ⅲ-2 期に、040SD からは瀬戸・美濃産陶器大窯第 2 段階～第 4 段階の陶器、041SD から瀬戸・美濃産陶器大窯第 4 段階の陶器と土師器非ロクロ成形小皿 3 類のものが出土しており城下町Ⅲ-1 期に、060SD からは瀬戸・美濃産陶器大窯第 3 段階

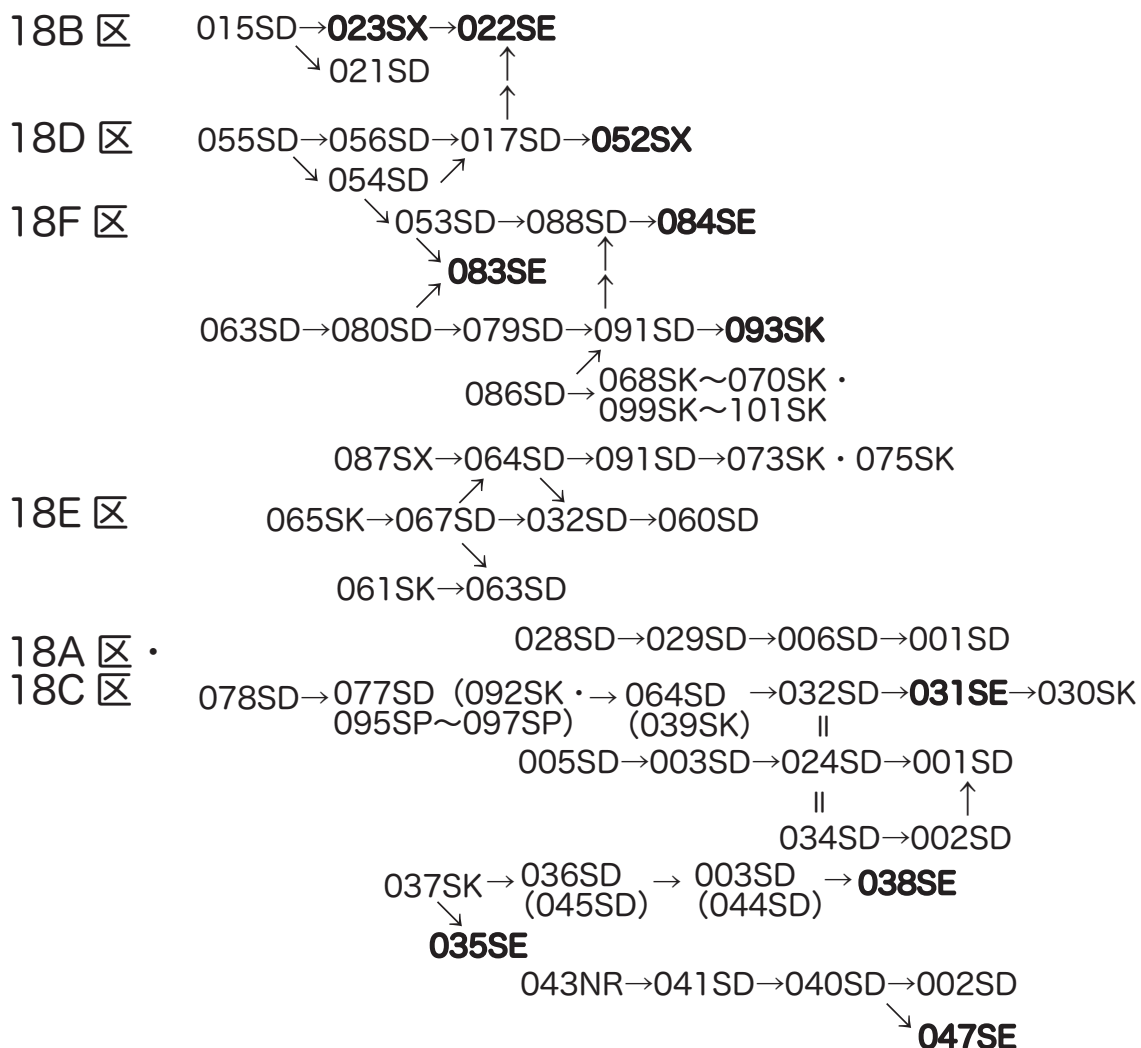


図 23 18 区の遺構の変遷

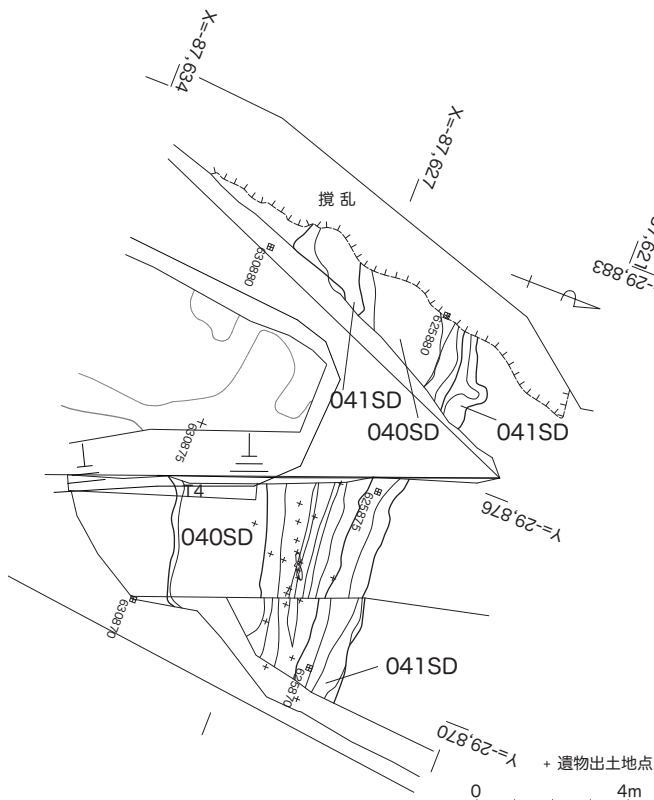


図24 18A区 040SD・041SD 平面図 (1:200)

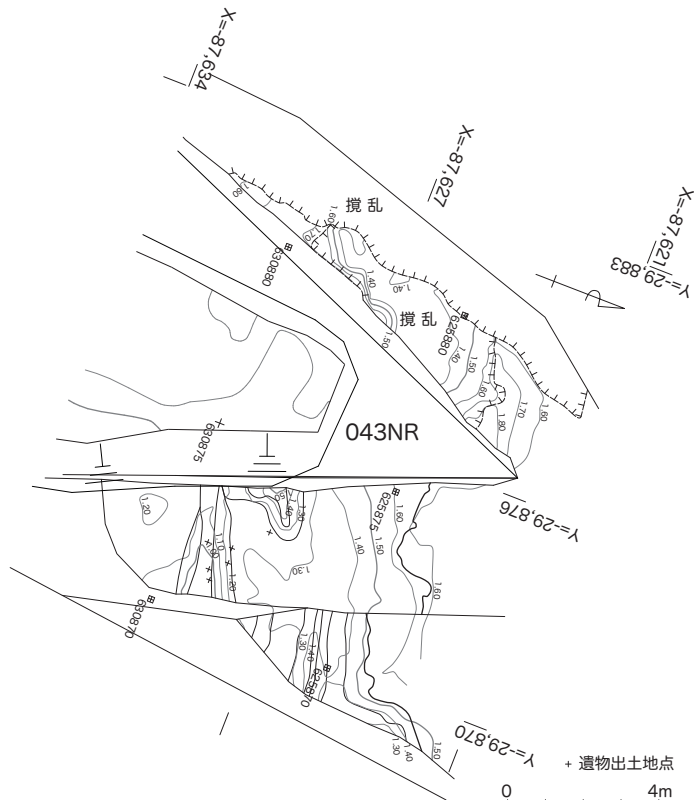


図25 18A区 043NR 平面図 (1:200)

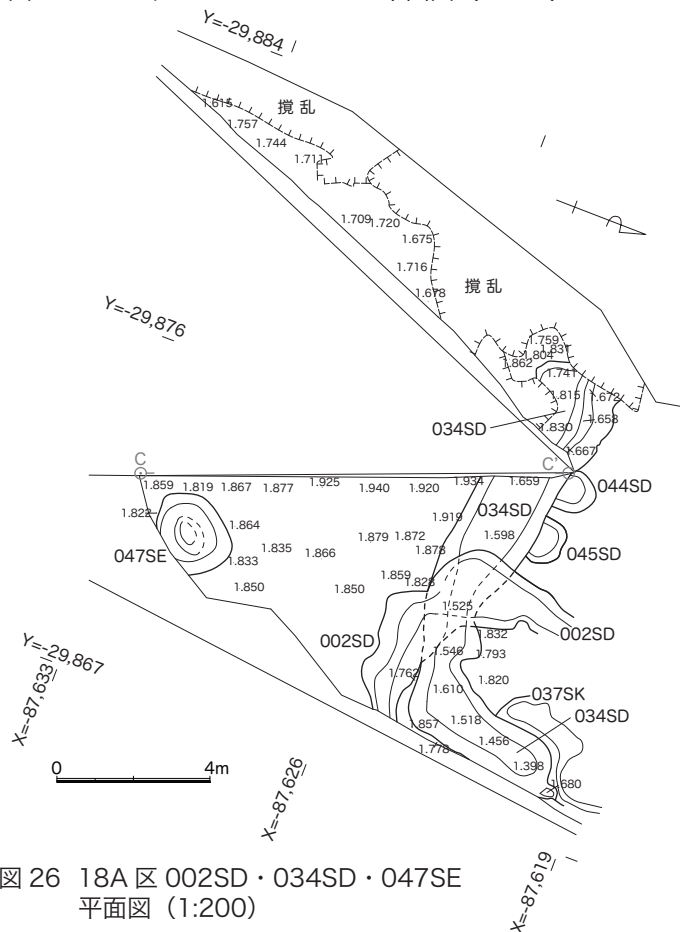


図26 18A区 002SD・034SD・047SE 平面図 (1:200)

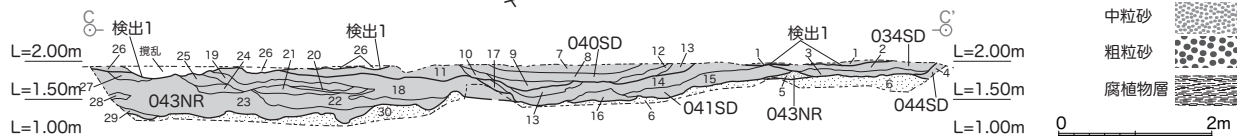
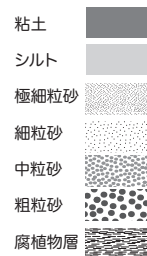
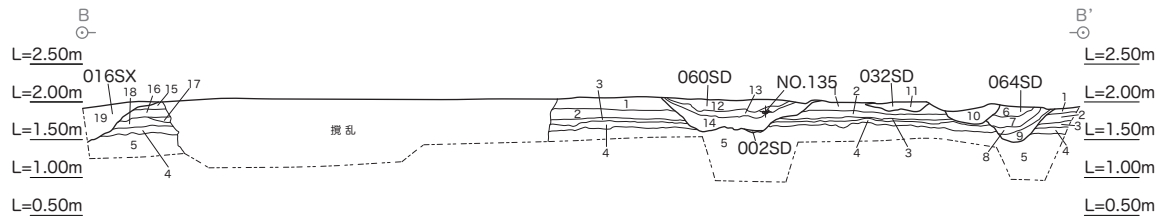


図27 18C区 034SD・040SD・041SD・043NR・044SD 断面図 (1:100)

1. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(検出1)
2. 10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト(034SD)
3. 10YR5/2灰黄褐色シルトと2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂が混じる斑土(034SD)
4. 10YR5/2灰黄褐色シルト(044SD)
5. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりの極細粒砂(043NR)
6. 2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂から中粒砂(遺跡の基盤砂層)
7. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルト(040SD)
8. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト(040SD)
9. 10YR4/1褐灰色シルトと10YR4/2灰黄褐色細粒砂の互層(040SD)
10. 10YR5/1褐灰色シルト(040SD)
11. 10YR5/2灰黄褐色シルト(040SD)
12. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト(040SD)
13. 10YR5/1褐灰色シルト(040SD)
14. 10YR5/2灰黄褐色シルト、南側深い方は10YR2/1黒色粘土へ漸異的に変化(041SD)
15. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト(041SD)
16. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルト、層の上部に噴砂の跡(041SD)
17. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルト(041SD)
18. 10YR5/2灰黄褐色シルト(043NR)
19. 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂と10YR5/2灰黄褐色シルトの互層(043NR)
20. 10YR4/1褐灰色シルト(043NR)
21. 10YR5/1褐灰色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂層を含む(043NR)
22. 2.5Y6/2灰黄褐色細粒砂と10YR5/1褐灰色シルトの互層(043NR)
23. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト、上部は10YR5/3にぶい黄褐色の酸化色になる(043NR)
24. 10YR4/1褐灰色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂の互層(043NR)
25. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト(043NR)
26. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト(検出1)
27. 10YR4/1褐灰色細粒砂を多く含むシルト(043NR)
28. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂を多く含むシルト(043NR)
29. 10YR6/1褐灰色細粒砂多く含むシルト(043NR)
30. 2.5Y6/2灰黄褐色細粒砂から中粒砂(遺跡の基盤砂層)





1. 2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト
2. 2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト
3. 10YR4/3にふい黄褐色極細粒砂混じりシルト
4. 10YR4/4褐色シルト混じり細粒砂
5. 2.5Y6/3にふい黄色細粒砂から中粒砂
6. 10YR5/2灰黄褐色シルト (064SD)
7. 10YR5/3にふい黄褐色極細粒砂混じりシルト (064SD)
8. 10YR5/2灰黄褐色シルト (064SD)
9. 2.5Y5/3黄褐色シルト (064SD)
10. 2.5Y6/3にふい黄色粘土質シルト
11. 10YR6/4にふい黄褐色粘土質シルト (032SD)
12. 10YR5/3にふい黄褐色極細粒砂 (060SD)
13. 10YR4/1褐灰色極細粒砂炭化物を多く含む (060SD)
14. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト (060SD, 下部に002SD)
15. 10YR6/4にふい黄褐色粘土質シルト
16. 10YR6/3にふい黄褐色粘土質シルト
17. 10YR6/3にふい黄褐色シルト
18. 10YR5/3にふい黄褐色極細粒砂から細粒砂
19. 10YR4/3にふい黄褐色シルト (016SX)

図 28 18E 区北壁土層図 (1:100)

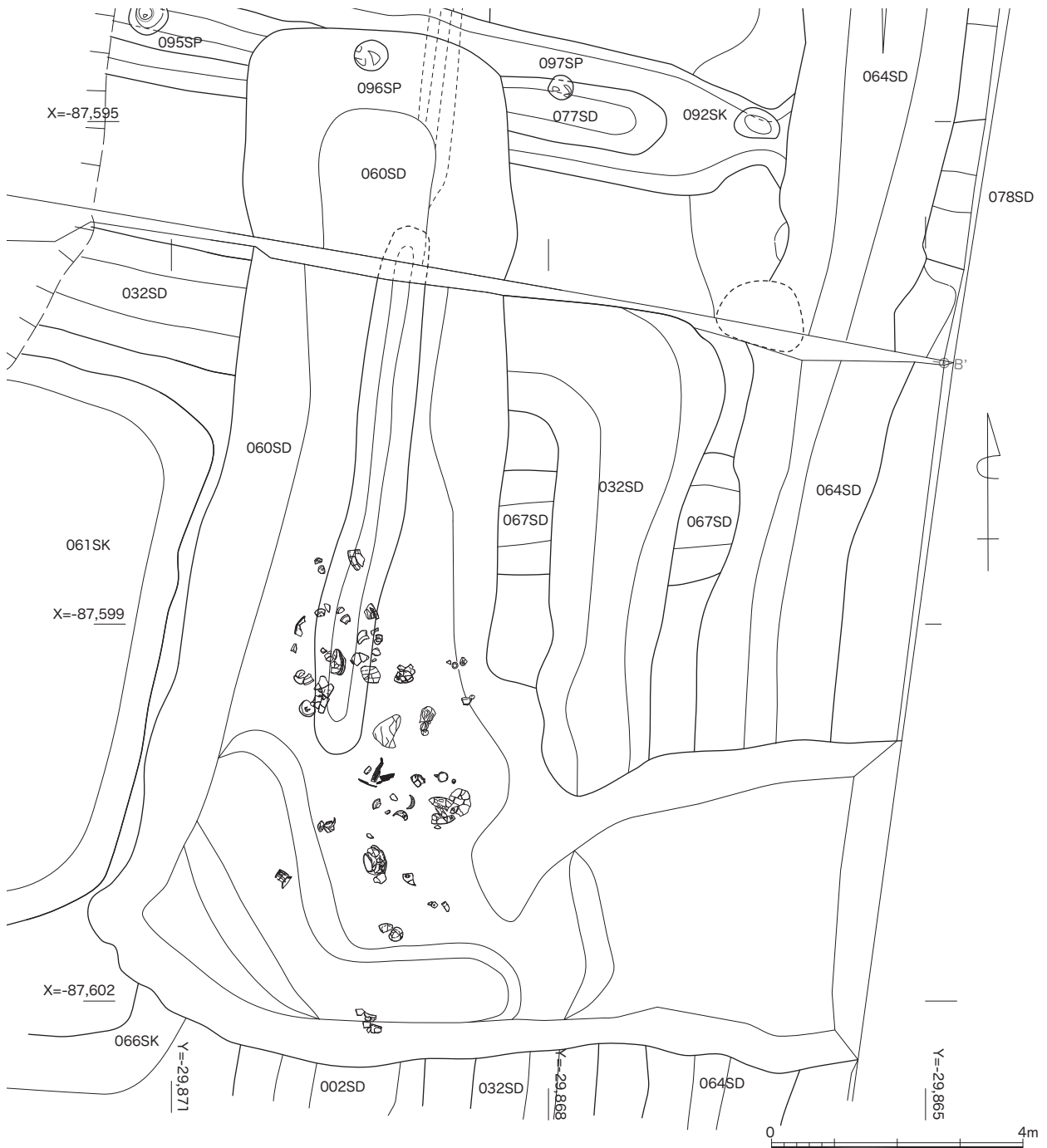
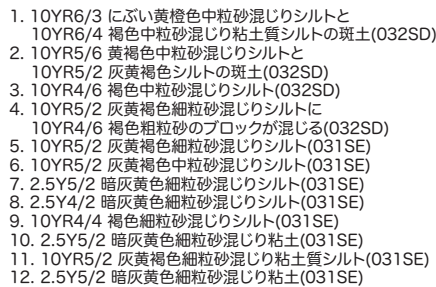


図 29 18E 区 060SD 遺物出土状況図 (1:50)



後半～第4段階前半を中心に大窯第1段階～登窯第1小期の陶器と土師器非ロクロ成形小皿1類・3類のものが出土していることから城下町Ⅲ-1期～Ⅲ-2期の時期と考えられる。また出土遺物には江戸時代後期以後の遺物も混じるが、上面で検出された井戸と考えられる052SXから瀬戸・美濃産陶器大窯第4段階の陶器が出土していることから18区になる溝はおおよそ城下町Ⅲ-1期～Ⅲ-2期に営まれたものと考えることができる。また出土遺物では、18E区060SDからは一括で廃棄された陶器や土師器の鍋などが、18D区017SDと18A区041SDからは、陶磁器や土師器とともに、獣骨片や漆碗、曲物などが出土した。

1. 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂混じりシルト(031SE)
2. 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂混じりシルト(031SE)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂混じりシルト(031SE)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂混じり粘土(031SE)

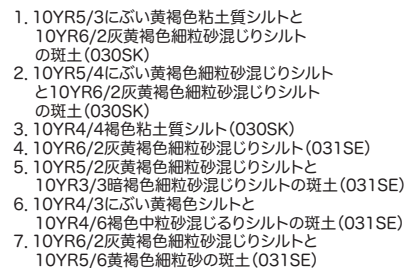


Figure 1: A detailed map of the study area showing the locations of observation points A and A' relative to the O35SE and O37SK faults. The map includes a coordinate system with $Y=29.872$ and $X=-87.620$, a scale bar from 0 to 2.00m, and a north arrow. The faults are labeled O35SE and O37SK. The observation points are labeled A and A'. The map also shows the locations of the faults relative to the O35SE and O37SK faults, with distances of 1.686, 1.646, 1.636, and 1.755 meters indicated. The map is titled "Figure 1" and includes a legend for the symbols used.

- 图 32 18A 区 035SE 断面图 (1:100)

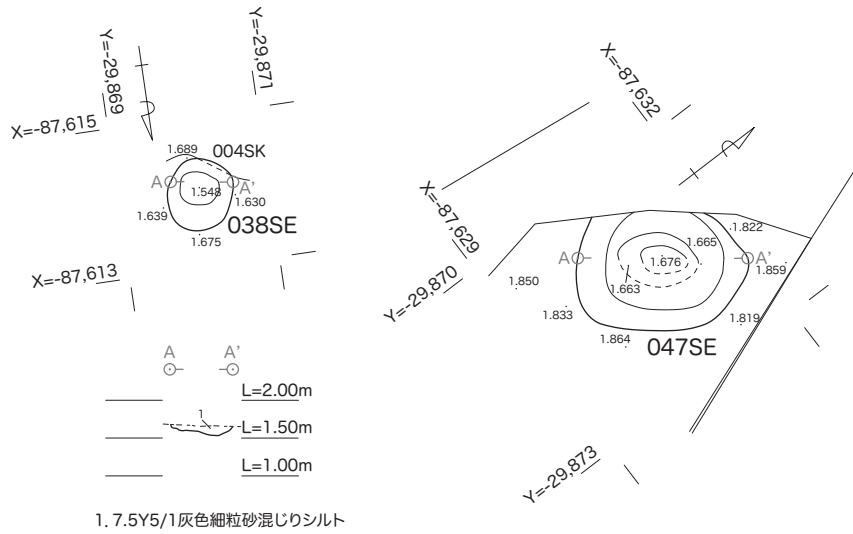


図 33 18A 区 038SE 断面図 (1:100)

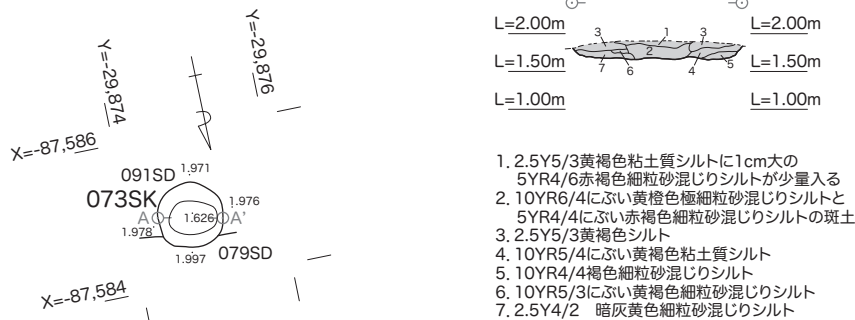
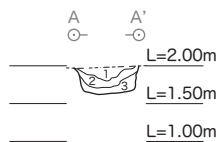
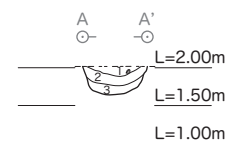


図 34 18C 区 047SE 断面図 (1:100)



- 10YR6/1 褐灰色細粒砂混じり粘土質シルト
- 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト
- 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂

図 36 18F 区 073SK 断面図 (1:100)



- 10YR6/1 褐灰色細粒砂混じり粘土質シルト
- 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト
- 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂

図 37 18F 区 075SK 断面図 (1:100)

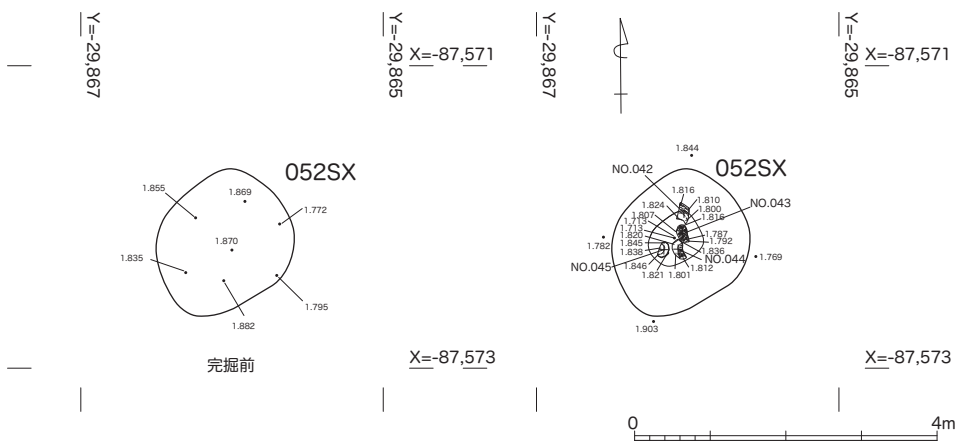
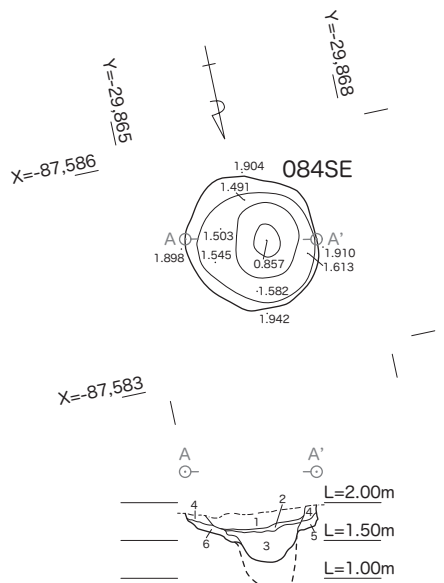
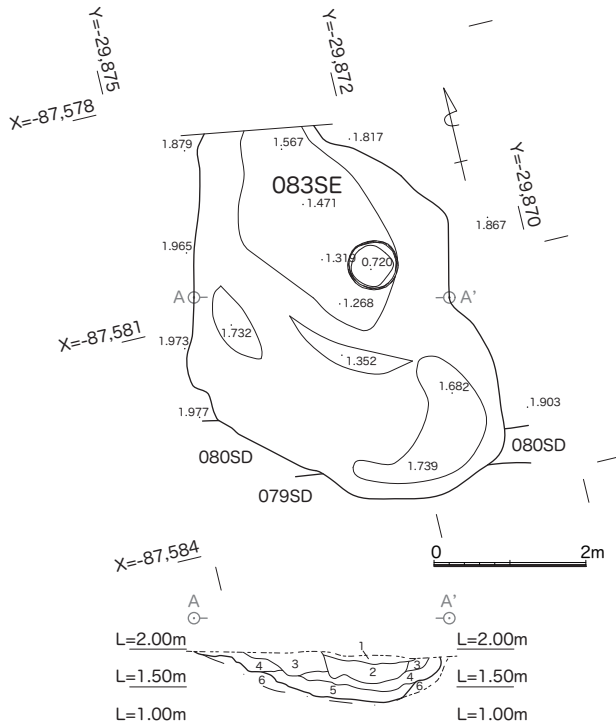


図 35 18D 区 052SX 出土状況図 (1:50)



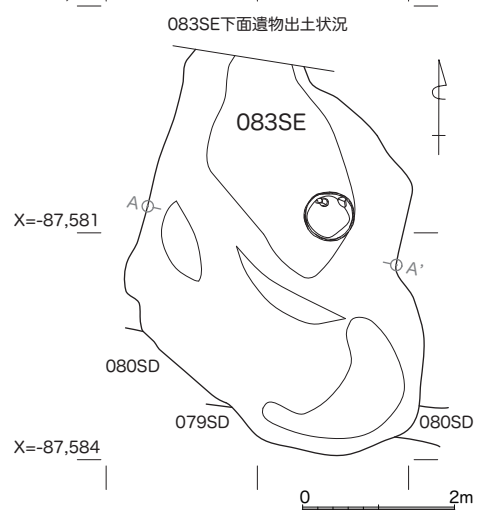
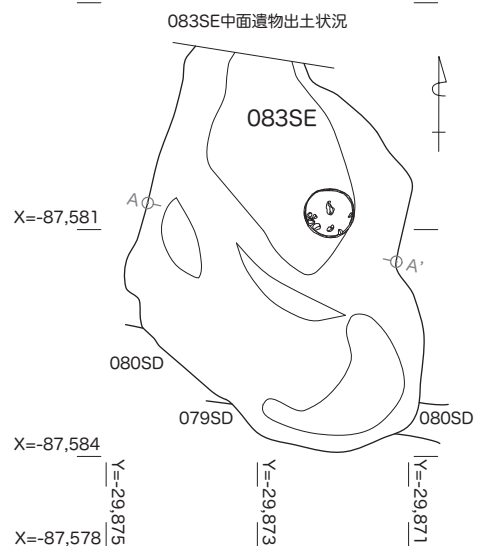
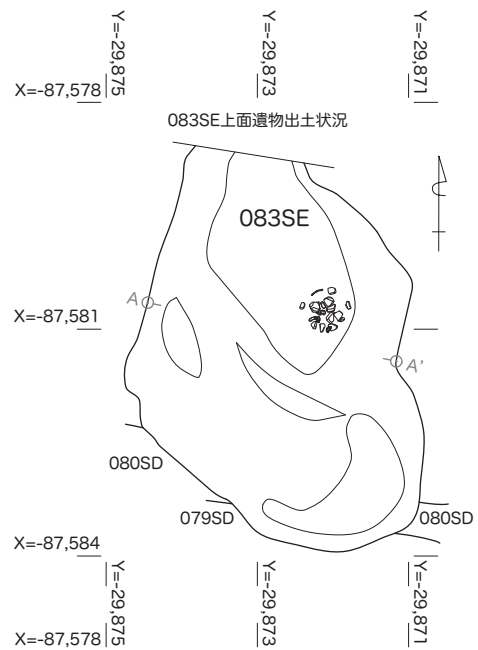
1. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR4/6褐色粘土ブロックが多く混じる
2. 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂混じりシルト
3. 10YR5/2灰黄褐色シルトと10YR4/6褐色細粒砂の斑土
4. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR4/4褐色シルトブロックが少量混じる
5. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR4/4褐色シルトブロックが少量混じる
6. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり粘土

図 39 18F 区 084SE 断面図 (1:100)



1. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂と10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの斑土
2. 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトと10YR6/2灰黄褐色細粒砂の斑土
3. 10YR4/4褐色細粒砂と10YR5/2灰黄褐色シルトの斑土
4. 10YR4/6褐色細粒砂と2.5Y5/3黄褐色シルトの斑土
5. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂と10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの斑土
6. 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂

図 38 18F 区 083SE 断面図・出土状況図 (1:100)



031SE・038SE・035SE・047SE)の井戸が、7mから14mの間隔で確認された。井戸の規模は18F区083SEの長軸6.93m以上、短軸3.44m、深さ1.15mの大型のものから、18A区038SEの長軸0.94m、短軸0.81m、深さ0.1mの小型のものまで規模の違いがみられた。井戸の構造物は結桶が確認されるものがあり、18A区035SEと18F区083SEでは、結桶の木材が残っていた。また18F区083SEでは、結桶の上部から川原石の円礫や亜円礫、亜角礫が廃棄された状態で出土し、18D区052SXでは貝殻と炭化物が多くみられた。

土坑(SK・SX)では、18F区091SDに重複する土坑073SKと075SKは073SKが径0.86m、深さ0.37mの断面丸底のもの、075SKが長軸1.0m、短軸0.87m、深さ0.43mの断面丸底のもので、出土した陶器から城下町Ⅲ-2期のものである。18F区087SXは残存状態が良くなかったが、長軸4.62m以上、短軸3.98m以上、深さ0.39mを測る、埋土は黄褐色シルトを主体とするものであった。18E区061SKは長軸4.65m、短軸2.21m、深さ0.16mのにぶい黄褐色極細粒砂を主体とするもので、先に述べた087SXと同様の状態で、近くにある086SDも同様な埋土をしており、関連する遺構の可能性はある。18A区037SKはにぶい黄褐色粘土質シルトと褐色シルトの斑土を埋土とする長軸3.68m以上の不定形な大型土坑で、89D区で確認されているSX7006・SX7007・SX7008のような自然流路状のものと考えられた。

自然流路としては、18A区・18C区の040SD・041SDの下層で043NRを確認した。043NRは調査区南端部において底面となる細粒砂～中粒砂層が高まる部分があり、流路が一定していないことがうかがわれた。17B区で確認された063NRの下流に当たる可能性があり、流路の北肩部は18区の遺構の下にあるシルト層になるものと思われた。

柵か建物の柱列と考えられるものとして、18F区の南側に2列の柱穴列を確認できた。086SDより新しいものとして、068SK～070SK・099SK～101SKの6基の柱穴があり、068SK～070SKは径0.30m～0.38m、

深さ0.06m～0.09mの平面円形の浅いもので、099SK～101SKは径0.15m～0.20m前後、深さ0.15m～0.25mであった。092SK・094SP・095SP～097SPの5基の柱穴は、径0.20m～0.45m、深さ0.12m～0.22mの柱穴が078SDの上から掘り込まれた状態で2m程の間隔で検出できた、092SKの底部からは、根太と思われる円柱状の木材が出土した。

他に江戸時代末～近代の遺構として、旧五条川の流路を埋めたものと考えられる016SXを確認した。016SXは現在の五条川東護岸の東に埋没していた旧東護岸石積みのさらに東にあり、18B区南西隅部から18D区西端部、18F区西端部にかけての範囲に検出できた。出土遺物は、江戸時代末から近代にかけての陶磁器、瓦、ガラス瓶などが多く出土した。

第3節 00B区(御園地区、図40～図48)

戦国時代末の城下町Ⅲ期と考えられる石垣SW01や土塁01SXに伴う時期の溝5条、堀の埋没遺構の可能性もある土坑8基と土塁01SX造成前の溝5条、土坑4基、中世の自然流路1条が確認できた。

(1) 中世の自然流路NR01(図40～図42)

中世の自然流路は、調査区南側のみにて確認・掘削できただけであるが、上層にシルト層を主体に堆積しており、中層から下層にかけて粗粒砂層や粘土層を介在するシルト層との互層となっていた。東濃産山茶碗が出土しており、14世紀～15世紀の河道部にあたる。NR01の西側にNR01より古いSD05を検出した、幅0.28m、深さ0.42mを測る。

(2) 土塁01SX造成以前の溝と土坑(図40)

土塁01SX造成以前の遺構は、調査区北側に確認できた。確認できた遺構の前後関係はSD12→SD07→SD11→SX07、SD07→SD08→SD06で、SD11より土師器羽付鍋・内耳鍋、古瀬戸後4古型式～大窯第3古段階の瀬戸・美濃産陶器、明和型式・生田型式東濃産山茶碗が出土し城下町Ⅱ-2期に、SD07より古瀬戸後1型式～古瀬戸後2型式の瀬戸・美濃産陶器、SD08より土師器羽付鍋、SD06より古瀬戸後4古型式～大窯型式の瀬

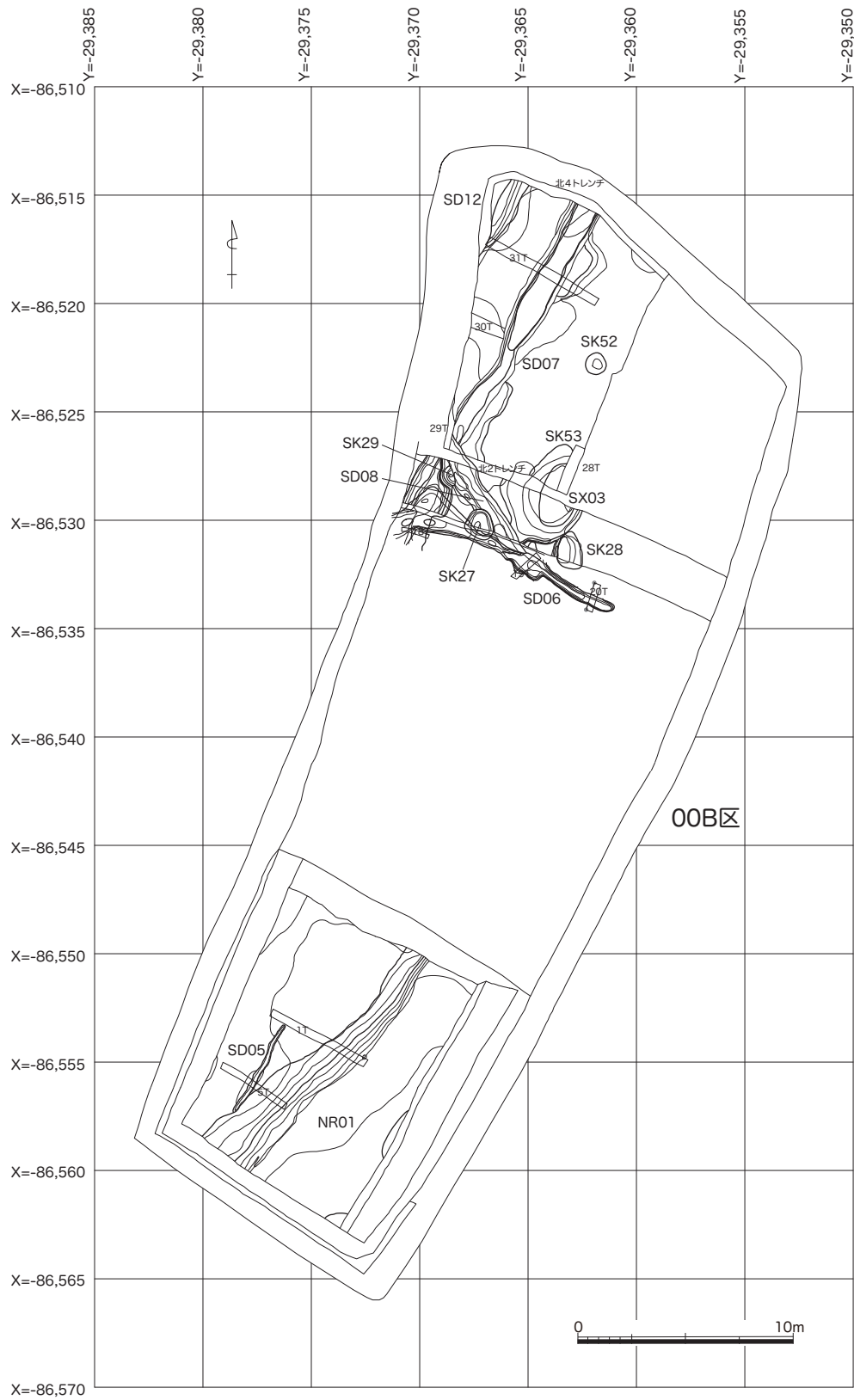


図 40 00B 区 2 面遺構平面図 (1:300)

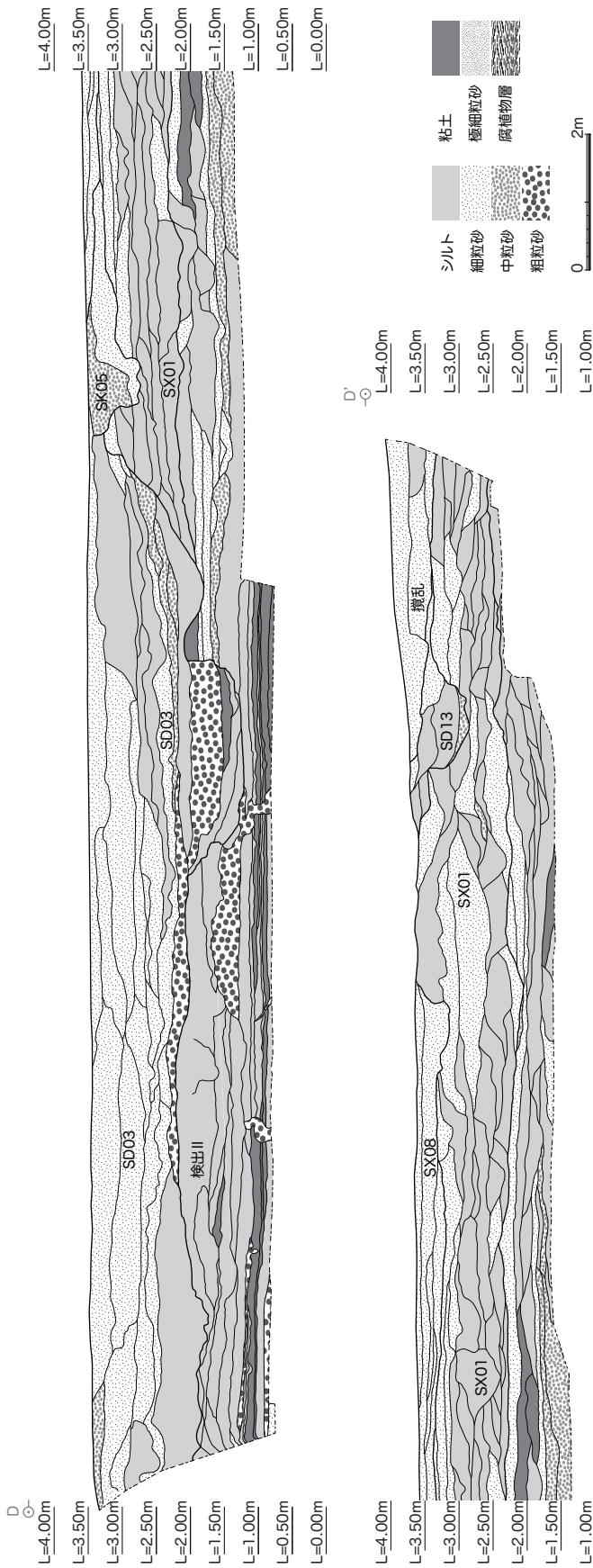


図 41 00B 区西壁トレンチ土層図 (1:100)

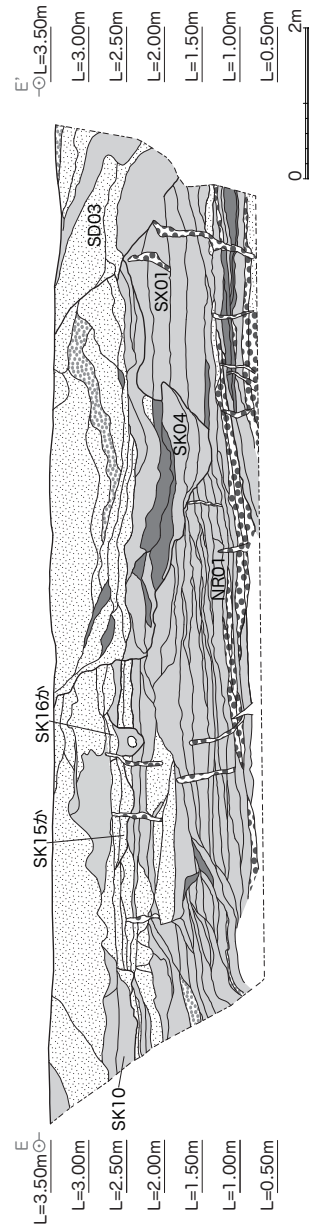


図 42 00B 区南壁トレンチ土層図 (1:100)

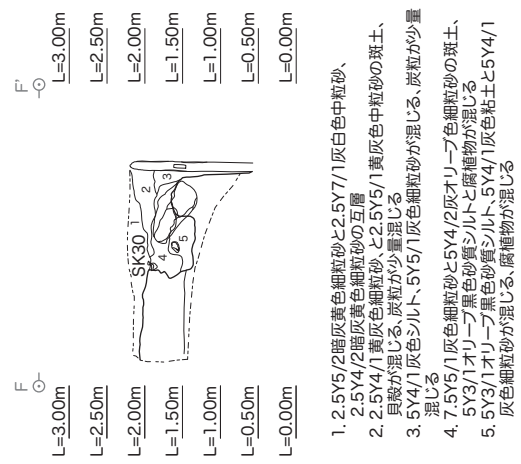


図 43 00B 区 SK30 土層図 (1:100)

1. 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂と2.5Y7/1灰白色中粒砂、2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂の互層
2. 2.5Y4/1黄灰色細粒砂と2.5Y5/1黄灰色中粒砂の斑土、見殺が混じる、炭粒が少量混じる
3. 5Y4/1灰色シルト、5Y5/1灰色細粒砂が混じる、炭粒が少量混じる
4. 7.5Y5/1灰色細粒砂と5Y4/2灰オレンジ色細粒砂の斑土、5Y3/1オレンジ色砂質シルトと腐植物が混じる
5. 5Y3/1オレンジ色砂質シルト、5Y4/1灰色粘土と5Y4/1灰色細粒砂が混じる、腐植物が混じる

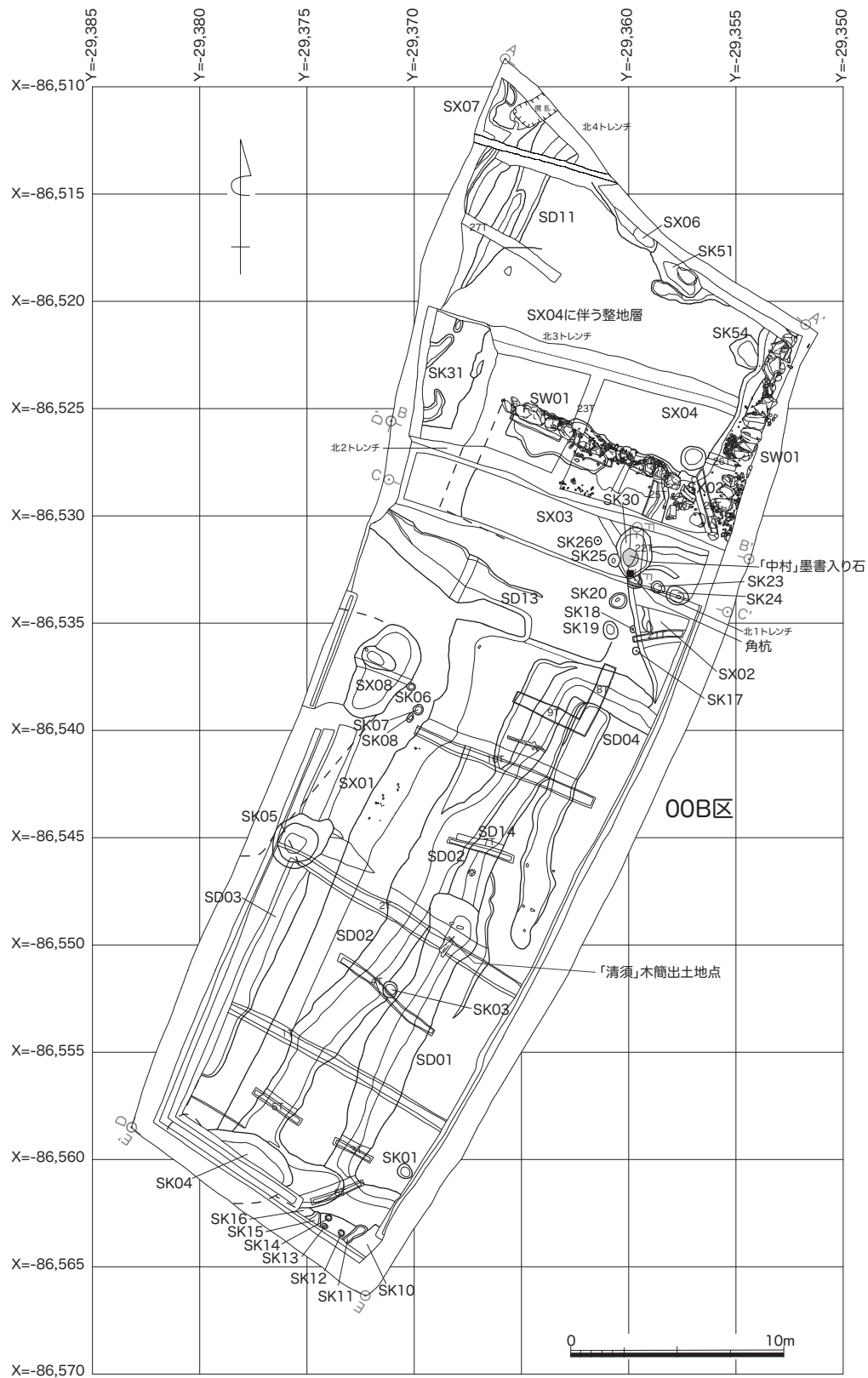


図 44 00B 区 1 面遺構平面図 (1:300)



図45 00B区 SK51・SX04・SX06・SW01 平面図、SW01 立面図 (1:80)

戸・美濃産陶器が出土し、SD12とSD07が城下町Ⅰ期以前の可能性がある。SD07・SD11・SD12はN-25°-E～N-30°-Eの軸線をもち、SD06もこれらに直行するN-67°-Wであるが、SD08はN-32°-Wの軸線をもち斜行する。遺構検出面の高さによるが、断面形は全て丸底のもので、SD06は幅1.05m、深さ0.61m、SD07は幅1.55m、深さ0.28m、SD08は幅1.19m、深さ0.26m、SD11は幅2.08m、深さ0.39m、SD12は幅3.0m以上、深さ0.48mを測る。これらの溝の付近にSD11より新しいSK27・SK28があり、土塁SX01造成以前の遺構である、SK27が長軸1.34m、短軸1.25m、深さ0.42mを測る平面不整形円形のもの、SK28が長軸1.65m、短軸1.20m、深さ0.18mの平面楕円形のものである。

(3) 土塁SX01 (図41・図42・図44～図48)

SX01は調査区の西壁に沿って確認できた土塁で、旧五条川の西岸堤防も兼ねているものと考えられる。上端の幅は上面で3.0m以上、下端で5.0m以上を測り、その軸線は、N-30°-Eで御園地区の城下町期の遺構の軸線と対応する。出土遺物には内耳鍋、大窯第Ⅰ段階の瀬戸・美濃産陶器、土師器内示鍋が出土しており、SD06～SD08が埋没した城下町Ⅰ期以後でSD11が営まれた城下町Ⅱ-2期以前に成立した可能性が高い。

(4) 石垣SW01と造成基壇SX04 (図41・図42・図44～図48)

SX04はSX01から東側に盛り土整地を行い、上面の平場を現五条川側に拡張した東西13.4m、南北9.0m以上、高さ2.80m以上の方形基壇であり、SW01はSX04の南法面と東法面を護岸する石垣である。このSW01とSX04の上面には櫓状建物が存在した可能性もあり、SK51に確認された長径0.85m、短径0.52mを測る扁平な砂岩は建物の礎石であった可能性があり、多数検出された濃飛流紋岩、チャート、砂岩、ホルンフェルス、泥岩の亜角礫～亜円礫は礎石の根石になる可能性がある。06SXはSK51より新しく、長軸8.50m以上を測る平面不整形な大型土坑で、廃城時の瓦を廃棄した土坑や廃城後の堤防造成に伴う遺構にな

る可能性が高い。

SW01は高さ1.21m残存する部分があり、長径0.50m～1.65m程で短径0.70m～0.80m前後の巨礫が1石から3石積み上げられたものが残存していた。現五条川に面した残存状態が良い部分で80°の傾斜角度で積まれていた。巨礫の間隙や裏込めには径1cm前後～20cm前後の亜角礫～亜円礫が土とともに充填されていた。巨礫は濃飛流紋岩4個、チャート1個、砂岩29個、ホルンフェルス8個、アプライト1個の亜角礫～亜円礫であり、充填されたいた礫も濃飛流紋岩、チャート、砂岩、ホルンフェルス、泥岩、アプライトのものがみられた。

(5) 土塁SX01と方形基壇SX04に囲まれた区画 (図42～図44・図47・図48)

SD13はSX04の南でSX01がやや掘り下げられた形で検出されたN-62°-Wの軸線をもつ溝で、幅2.15m、深さ0.95mを測る。SD13の北東に廃城時の遺構と考えられるSX03があり、SD13の北側は現五条川から西の城内に入る緩やかなスロープとなっていた可能性がある。またSD13の南肩はSX01が幅1m前後で東に3m程突出して下がる坂道状になっていた。

SX04の南側は現五条川に面したSX02からその上層とも言えるSX03が東から西に緩やかな皿状に堆積していた。SX02は東西13.4m以上、南北9.0m以上のSD02の北に面して平面三角形の東に扇状に開く形となっており、東側の底面は標高1.7m前後まで下がっていて、現五条川の水位と等しい高さである。SX03はSX02の上部に堆積して、SX04の南でSX01の東をSX02に向かって0.30m程の層厚をもっていた。

SK30は平面三角形のSX02の西側頂点部に位置する長軸2.38m、短軸1.60m、深さ0.62mの平面楕円形、断面丸底の土坑で、墨書のある砂岩で長径0.75m、短径0.45mの亜角礫の巨礫が埋没しており、さらに土坑の南隅に断面方形の角柱(W-193)が打ち込まれていた。また漆椀片(W-191)、有頭棒(W-194)、箸(W-192)が出土し、埋土は暗灰黄色細粒砂と灰白色中粒砂、暗灰黄色細粒砂の互層となっていた。調査時から廃城時における物資を搬出するのに用い

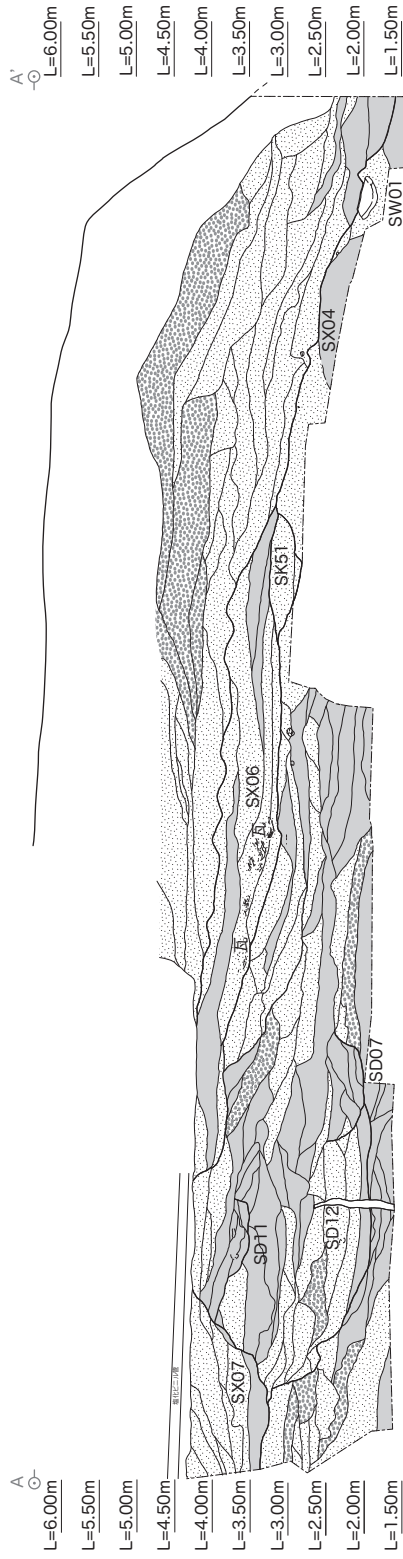


図 46 00B 区北 4 トレンチ土層図 (1:100)

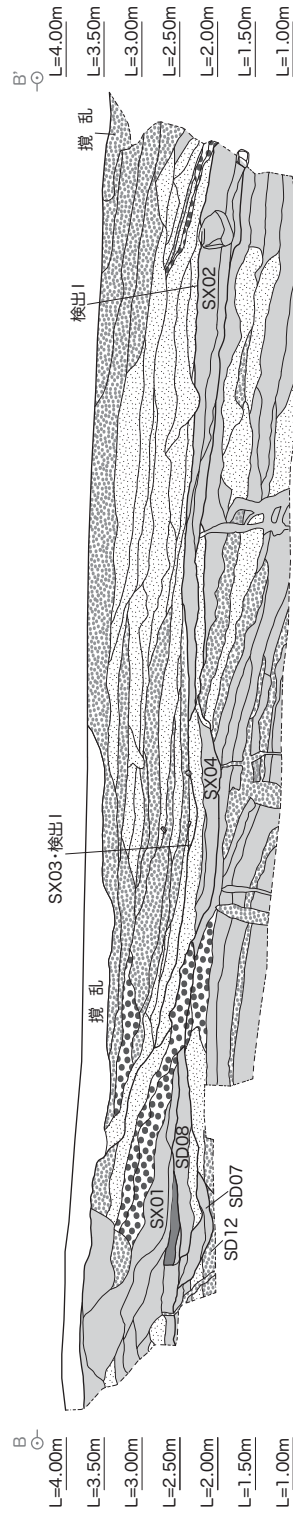


図 47 00B 区北 2 トレンチ土層図 (1:100)

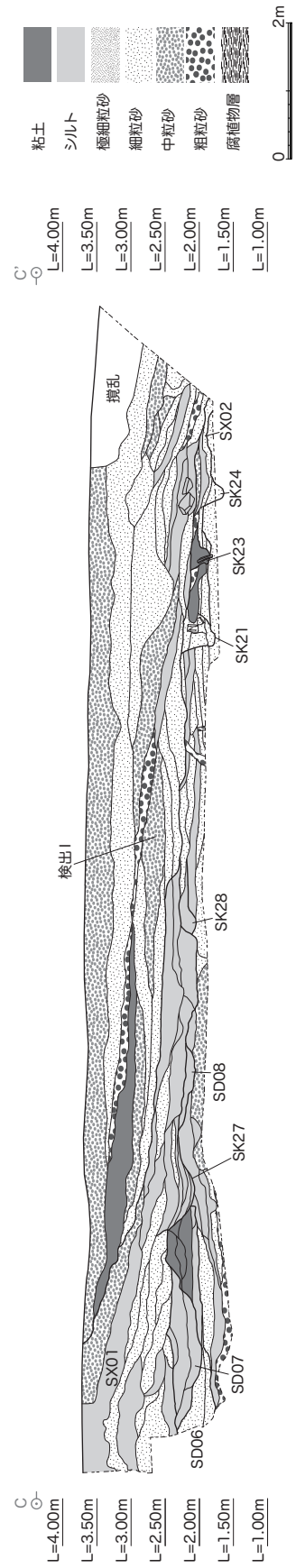


図 48 00B 区北 1 トレンチ土層図 (1:100)

られた滑車などの支柱や物資を搬出する船着き場で使われた支柱かと思われた。

SX01の東にあるSD01・SD02・SD04・SD14は現五条川に面して溝の内側で南北22.5mを囲む方形区画の境溝で、調査時にはSD14が最も古く、続いてSD01、SD02、SD04の前後関係が認められた。ただし、SD02とSD04はSD04の北端でわずかに接しているのみであり、遺構の変遷から考えるとSD02が新しいものと思われる。SD14はSD01に向かって深くなって接続する様子もみえ、本来は同一の遺構の可能性があるもので、N-32°-Eの軸線を持ち、幅1.50m 深さ0.73mで長さ10.6mを検出した。SD02より北には伸びていない。SD01はN-25°-Eの軸線を持ち、幅2.40m、深さ0.86mでSD14と接続する部分で立ち上がっている様子を検出できた。多くの漆製品、箸、折敷、板材などの木製遺物が出土した。SD02はSD01の外側をめぐる様に検出された溝で、N-34°-Eの軸線を持ち、北側は東に折れて調査区外に伸びており、南は東に屈曲した3m程の所で底面が立ち上がって途切れている、北側はSD04の北に面して東に折れて調査区外へと続く。幅2.25m、深さ0.60mを測り、SD01と同様、木製遺物が多く出土した。SD02の南西隅の屈曲部にSD03より古いSK04を確認している。調査時は井戸・土坑などのより新しい時期の遺構と考えて調査したが、出土遺物に漆製品や箸、板材などの木製遺物を比較的多く含み、ほぼSD02に重複することから、SD02の上層部分を別遺構として認識した結果の可能性が高い。SD04はSD01の東1.5m程離れて南北に流れる溝で、N-21°-Eの軸線を持ち、幅1.45m、深さ0.25mで検出できたのは11.90mである。SD01と同時存在しているならば、溝が途切れる部分とSD01が北側で途切れる部分の位置がほぼ並んでおり、区画の出入り口に当たる可能性がある。これらの遺構の時期は、SD01より大窯第3古段階～大窯第3新段階の瀬戸・美濃産陶器と「三斗付口付上清須外」・「ほしの新右衛門」木簡(W111)が出土しており、木簡に記された「ほしの新右衛門」は織田信雄分限帳に記載される人物の可能性が高いもので、城下町Ⅱ-2期～Ⅲ-1期に属するものと考えられる。SD02から

は大窯第2段階～大窯第3古段階の瀬戸・美濃産陶器、焙烙鍋、大窯第4段階の播鉢が出土していることから、城下町Ⅲ期のものである。

(6) 土塁SX01の上から掘削された他の遺構 (図42・図44)

調査区西壁に沿って確認されたSX07、SK31、SX08、SK05、SD03は別々に検出された溝や不整形な大型土坑であるが、全て表土直下から掘り込まれた断面をもち、かつ比較的短期間に埋没した地層が観察できた。SD03からは城下町期のものと考えられる漆製品なども出土していることから、これらの遺構を清須城に関わる遺構と考えた。

第3章 出土遺物

第1節 出土遺物の整理方法

今回の調査で出土した遺物は城下町期を中心にコンテナにして約180箱である。清洲城下町遺跡では、これまでに多数の地点が調査され、当埋蔵文化財センターによる報告も11報告となる。特に本報告でかかる調査地点は鈴木正貴編1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集』において報告された調査地点と隣接しており、遺構と出土遺物も相互に比較分析することが必要である。この様な視点に基づき、本報告では『清洲城下町遺跡Ⅳ』の分類を基本的に踏襲し参考にした。

土器・陶磁器については、すべての出土遺物について出土した遺構や層位、出土地点を単位に『清洲城下町遺跡Ⅳ』の分類に従い、破片数によるカウントを行い、その後実測する遺物をBランク、観察表にのみ掲載するC1*ランクの遺物を抽出した。BランクとC1*ランクの土器・陶磁器を土器・陶磁器の抽出は、およその出土した遺構の時期や器種構成を反映することを目指し、また遺跡の特徴を示す遺物を注意して選り出した。また00A区に隣接する62D区・63D区の全ての遺物について、00A区SX8001と同一遺構と考えられる出土遺物を中心に接合を行い、同様に遺物を抽出し、実測を行い、観察表を作成した。

石製品については、調査現場で出土した製品・未製品・礫の全てを現場から取り上げて分類した。まず、製品を中心に実測するものを抽出し一覧表を作成した。製品以外にも石材・形態・大きさを分類してカウントを行なった（添付清洲城下町遺跡X出土遺物石材カウント表を参照）。

金属製品についても石製品と同様に、調査現場で出土した製品・未製品・粘土塊などの全てを現場から取り上げて分類した。まず、製品を中心に実測するものを抽出し一覧表を作成した。また、鍛冶・铸造関連資料については、日鉄テクノロジー株式会社に委託して金属分析を行なった。

木製品についても石製品と同様に、調査現場

で出土した製品・未製品・木材の全てを現場から取り上げて分類した。まず、全ての出土木材を出土遺構・地点毎に木材の簡易計測とカウントを行って観察表を作成し、合わせて写真撮影を実施し長期にわたる遺物管理を行なった。整理・報告作業に入るまで長期に渡ったため、漆製品を中心に劣化が進み、写真撮影は一部の製品に限られた。実測する遺物と樹種同定分析（添付株式会社パレオ・ラボ「清洲城下町遺跡出土木材の樹種同定」を参照）を行う遺物は製品を中心に抽出した。

第2節 土器・陶磁器

陶磁器・土器類の分類に関しては、先に述べた通り『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告の分類に準拠する。また実測・写真撮影・観察表を作成した陶磁器について藤澤良祐氏からご教示を頂き、主に器種と器形、型式について反映した。本報告に関わる責任は当センターの報告担当者であり、個別の資料の計測値・調整などの詳細については添付清洲城下町遺跡X出土遺物土器・陶磁器一覧表を参照していただきたい。

(1) 00A区(図49～図56)

00A区の出土遺物は、62D区・63D区から西へ続くSX8001に含まれるものと考えられ、城下町Ⅲ-2期（大窯第4段階後半～登窯第1小期）の遺物を主体とする。

00A区検出1、SX8001(E00A001～E00A031)

E00A001～E00A017・E00A019～E00A021は瀬戸・美濃産陶器で、E00A001～E00A003は天目茶碗、E00A004は登窯第1小期の灰釉丸碗である。E00A005～E00A012は長石釉の製品で、E00A005は小碗、E00A006は角向付、E00A007は鉄絵蓋、E00A008は端反皿、E00A009～E00A011は丸皿、E00A012は内面に鉄絵の草文絵がある皿である。E00A013は黄瀬戸筒形片口鉢、E00A014は黄瀬戸鉢、E00A015は内面に蔦状の草文絵がある長石釉鉄絵大皿、E00A016は内面口縁部に葡萄唐草文、底部に直線文1条・雁2羽の鉄釉絵があ

00A 区検出 1、SX8001 (E00A001 ~ E00A031)

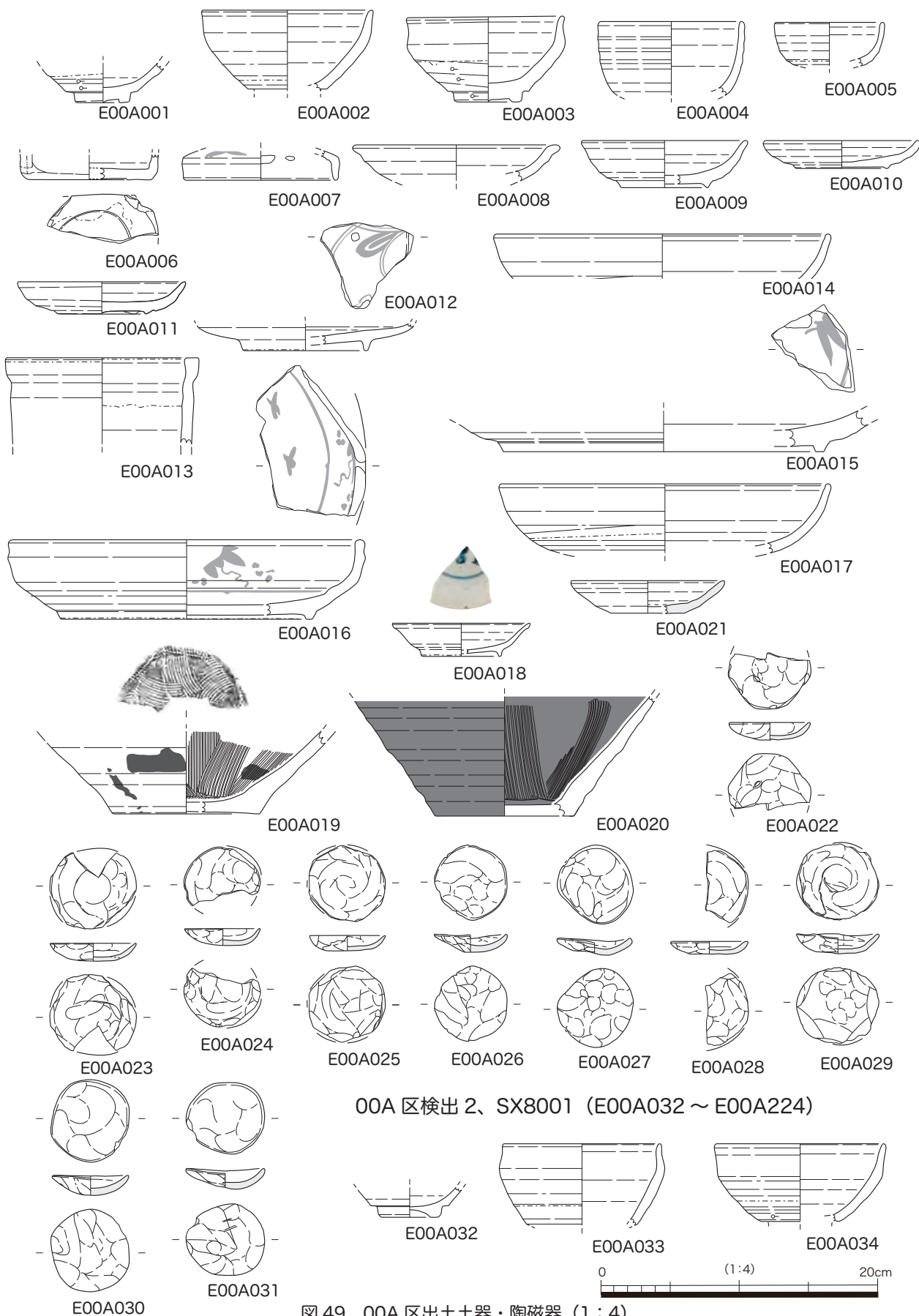


図 49 00A 区出土土器・陶磁器 (1 : 4)

る長石釉鉄絵鉢、E00A017は鉄釉の大皿で志戸呂窯産の可能性のあるもの、E00A019・E00A020は擂鉢で内・外面に煤が付着していること、E00A021は重圈皿である。E00A018は染付の磁器皿で、内面底部に直線文1条と文字かがみられる。E00A022～E00A031は土師器の非口クロ成形の小皿で、丸みのある底部から口縁部が立ち上がるもので、E00A022～E00A030が口縁部を不連続で指ナデする非口クロ成形小皿2類で、E00A031が口縁部に横ナデを施さない非口クロ成形小皿3類のものである。

00A区検出2、SX8001 (E00A032～E00A224)

E00A032～E00A045は天目茶碗で大窯第3段階後半～登窯第1小期のもの、E00A046は内・外面に線刻文のある青磁碗、E00A047は大窯第3段階後半の灰釉蓮弁文鉢で内面口縁部に波状文がみられるもの、E00A048は長石釉丸碗、E00A049は大窯第4段階末～登窯第1小期の鉄釉丸碗、E00A050は長石釉鉄絵丸碗で、口縁端部・口縁部内面・底部に各直線文1条の鉄絵があり、口縁部内面に有機物が付着する。E00A051は灰釉筒形碗の底部、E00A052・E00A053は長石釉小碗、E00A054は濃緑釉のかかる唐津産片口小杯である。E00A055は磁器の染付碗である。E00A056～E00A058は把手に注ぎ口が付く鉄釉水滴で、E00A056の把手はボタン状に粘土を貼り付けたもの、E00A057・E00A058は半円の環状把手が付くものである。E00A059は黄瀬戸向付で、外面に線刻の秋草文、内・外面を強く比熱しており、内面に有機物が付着する。E00A060～E00A062はやや丸味を帯びた方形で四隅が縦に窪む長石釉角向付で、E00A060はやや見込みが深く、外面に「×」に丸で囲んだ3個の鉄絵、E00A062は外面に蕨の鉄絵がみられる。E00A063～E00A065は鉄釉片口向付で、E00A064は鉢形になるもの、E00A063・E00A065は筒形になるものである。E00A066・E00A067はやや丸い肩部から口縁部が短く立ち上がる鉄釉茶入、E00A068はやや縦長の壺形で肩部が屈曲して短く立ち上がる口縁部にいたる鉄釉肩付茶入である。E00A069は灰釉内剥ぎ端反皿、E00A070～E00A077・

E00A083は長石釉端反皿で、E00A071は内・外面に煤が付着しており、E00A077は内面に秋草門の鉄絵が描かれており、E00A083の外面底部には「二」か「可」の墨書がみられる。E00A078は灰釉丸皿で、E00A079～E00A082・E00A084～E00A088は長石釉丸皿である。E00A079～E00A082・E00A084は内・外面の長石釉の釉調が比熱のためか灰色化しており、E00A086は内面体部に花卉紋鉄絵があり、内・外面被熱している。E00A087は内面底部に直線文2条に梵字、内面体部に直線文2条に垂下文にツル性の草本鉄絵がみられる。E00A088は内面に草本文・蕨他の鉄絵がみられる。E00A089は灰釉内禿皿で灰釉の上に鉄釉を口縁部に流し掛けするもの、E00A090は灰釉折縁菊皿である。E00A091は長石釉ひだ菊皿、E00A092は登窯第1小期の鉄釉皿、E00A093～E00A096は長石釉鉄絵皿でE00A093は内面底部に草本鉄絵がみられるもの、E00A094は内面底部に直線文2条、文字絵、体部に蔓草文の鉄絵がみられるもの、E00A095は内面口縁部に鋸歯文の鉄絵、E00A096は内面底部に葡萄と思われる草本文の鉄絵がみられる。E00A097は重圈皿で口縁部に有機物が付着することから灯明皿に使われたと考えられるもの、E00A098は鉄釉口広有耳壺で、内面口縁部から外面にかけて鉄釉がみられる。E00A099は鉄釉片口鉢、E00A100は登窯第1小期の灰釉折縁深皿、E00A101は鉄釉丸大皿である。E00A102・E00A103は黄瀬戸のもので、E00A102は口縁部内外面に灰釉後の緑釉が施された大皿か向付、E00A103は折縁菊鉢である。E00A104は登窯第1小期の美濃唐津タイプの鉄絵鉢で、内面底部に草本の鉄絵がみられる。E00A105は長石釉鉄絵大皿で、内面底部に鴨と思われる鉄絵、外面底部に墨書「屋カ」・「んカ」がみられ、外面口縁部に有機物が付着する。E00A106は磁器の染付小皿で内面口縁部に染付の直線文1条、外面に唐草文が見られるもの、E00A107は白磁の端反皿で、中国漳州窯産の可能性のある。E00A108～E00A111・E00A112～E00A121は擂鉢で、E00A108・E00A121が大窯第3段階のもの、E00A109～E00A116が大窯第4段階後

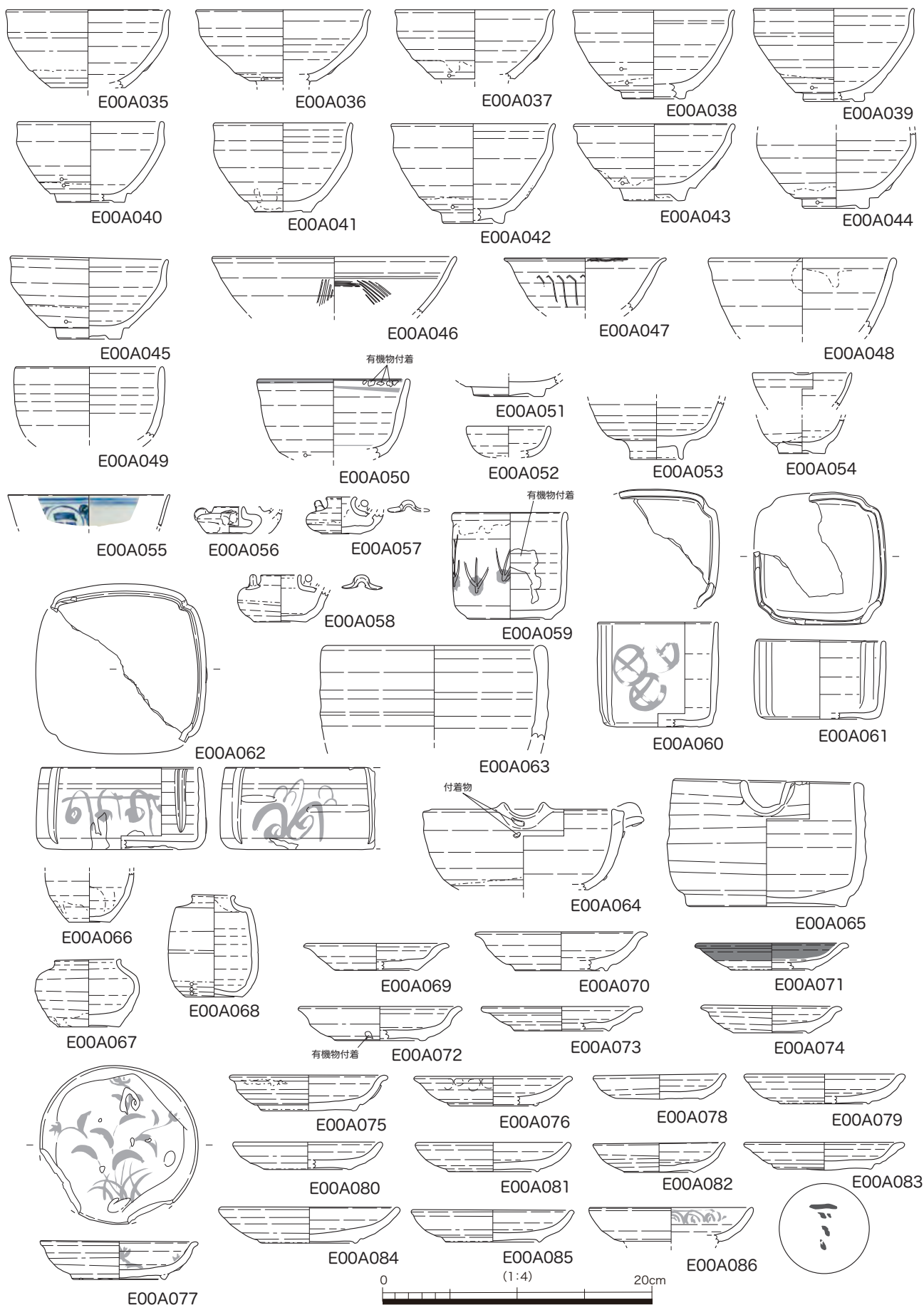


图 50 00A 区出土土器・陶磁器 (1:4)

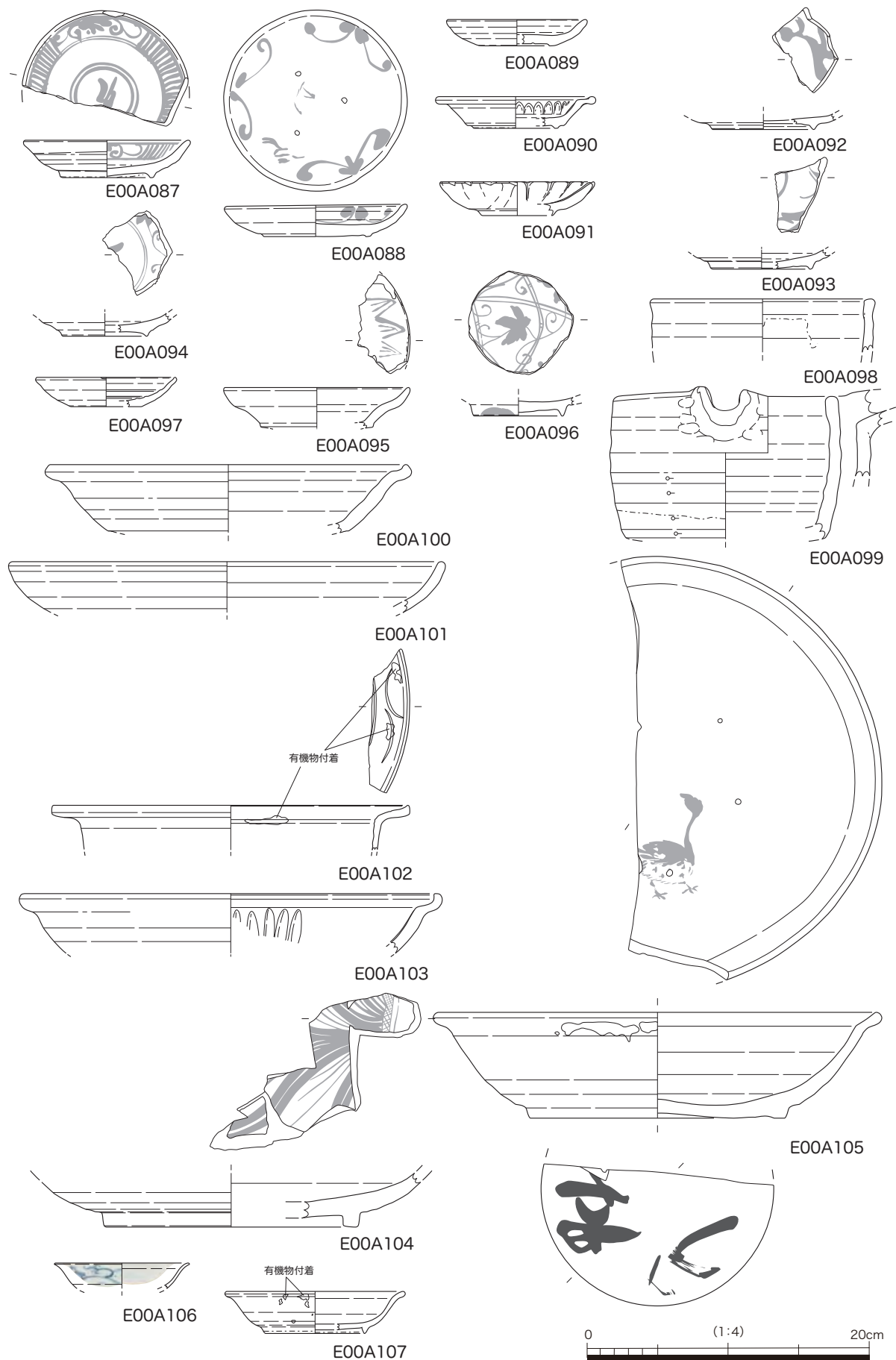


図 51 00A 区出土土器・陶磁器 (1:4)

半～第4段階末のもの、その他が大窯第4段階のもので、E00A109・E00A110・E00A112・E00A117～E00A120の内・外面に煤が付着する。E00A122は常滑産の壺で口縁部が頸部から短く立ち上がるもの、E00A123・E00A124は鉄釉壺で、E00A123は大窯第4段階の双耳壺である。E00A125・E00A126は大窯第4段階～登窯第1小期の鉄釉徳利で、E00A127は信楽産の水差である。E00A128～E00A131は常滑産の鉢で、内・外面に煤が付着しており、E00A130は外面の表面が剥離している、E00A128・E00A129・E00A131はいわゆる赤物に分類されるもの、E00A133は口縁部が外面に長く折り返して肥厚する甕で、E00A134は甕で、内・外面の底部から体部にかけて煤が付着する。E00A132は口縁部が内湾する土師器の火舎で、内・外面に煤が濃く付着する。E00A135は土師器の焼塩壺で、丸底の底部から口縁部がややすぼまるコップ状の器形をしている。

E00A136～E00A138は砥土器で、E00A136・E00A137が擂鉢の体部片を転用したもので側面を研磨しているもの、E00A138は土師器の皿底部を転用したもので、側面に研ぎ痕がみられる。

E00A139～E00A187は加工円盤で、平面円形の板状のもので、側面を破碎して成形し、側面を研磨するものがみられる。大きさは長径が3.0cm以下の小型のもの、3.1cm以上で4.0cm未満の中型のもの、4.1cm以上の大型のものにわかれ、厚みはE00A139の0.50cm～E00A184の2.00cmまであり、大きさに応じた厚みとなっている。転用した元はE00A139～E00A146が天目茶碗の口縁部から体部片、E00A147～E00A150が天目茶碗の底部片、E00A151が長石釉丸碗の体部片、E00A152が灰釉平碗の底部片、E00A153が灰釉碗底部片、E00A154～E00A157が長石釉碗の体部片、E00A158が鉄釉茶入体部片、E00A159が鉄釉向付の底部片、E00A160が鉄釉向付の体部片、E00A161が長石釉皿の底部片、E00A162が灰釉皿の底部片、E00A163～E00A178が擂鉢の体部片、E00A179・E00A180が鉄釉瓶の体部片、E00A181～E00A185が常滑産甕の体

部片、E00A186が道具瓦、E00A187が瓦質の鉢か火舎の底部片である。側面を一部・全体を研磨しているものは、E00A141・E00A143～E00A146・E00A148・E00A149・E00A159～E00A161・E00A163～E00A167・E00A169～E00A173・E00A175・E00A178～E00A182・E00A184・E00A186・E00A187がある。

E00A188～E00A209は土師器の小皿で、口縁部に横ナデ調整がみられる非ロクロ成形皿1類のE00A188と1類に比べてやや小型の口縁部に横ナデ調整がみられない非ロクロ成形皿3類のE00A189～E00A209に大きく分かれる。また非ロクロ成形皿3類においても浅くて皿状のE00A189～E00A203とほぼ板状のE00A204～E00A209がみられる。調整はナデと指押さえと思われる調整が内・外面とも底部中央付近から口縁部にかけて螺旋状に調整されており、E00A196・E00A198～E00A201・E00A203のように最後に内面をハケ調整で整えるものがみられる。

E00A210～E00A212は土師器の内耳鍋で、E00A210・E00A212は口縁部がやや内湾するもの、E00A211は平底状底部から口縁部がやや斜め上に立ち上げるものである。外面はナデ調整と指押さえ、縦ハケ調整がみられ、内面は横ナデ調整と横ハケ調整がみられ、内耳は成形後貼り付けされている。E00A213～E00A217は土師器の茶釜形鍋で、体部上半の片部に紐などを通す穿孔のある多角形から丸い把手が二個対に、底部に断面三角形の脚が3個付く。調整は内耳鍋に類似し、把手は成形後の貼り付けである。E00A218・E00A219は土師器の焙烙鍋で、E00A218は外面の口縁端部下に羽付鍋のような鰐が小さくなって受口状になったもの、E00A219は口縁部径36.4cmを測る大型のものである。

E00A220～E00A224は瓦で、E00A220～E00A222は軒丸瓦で、凸面はナデ調整、凹面弧引き痕と布目痕がみられ、E00A220・E00A222は瓦当部が素縁に珠文が廻り三巴文のもの、E00A223・E00A224は平瓦で、凸面はナデ調整とケズリ調整が見られ、凹面に弧引き後ナデ調整がみられるものである。E00A224

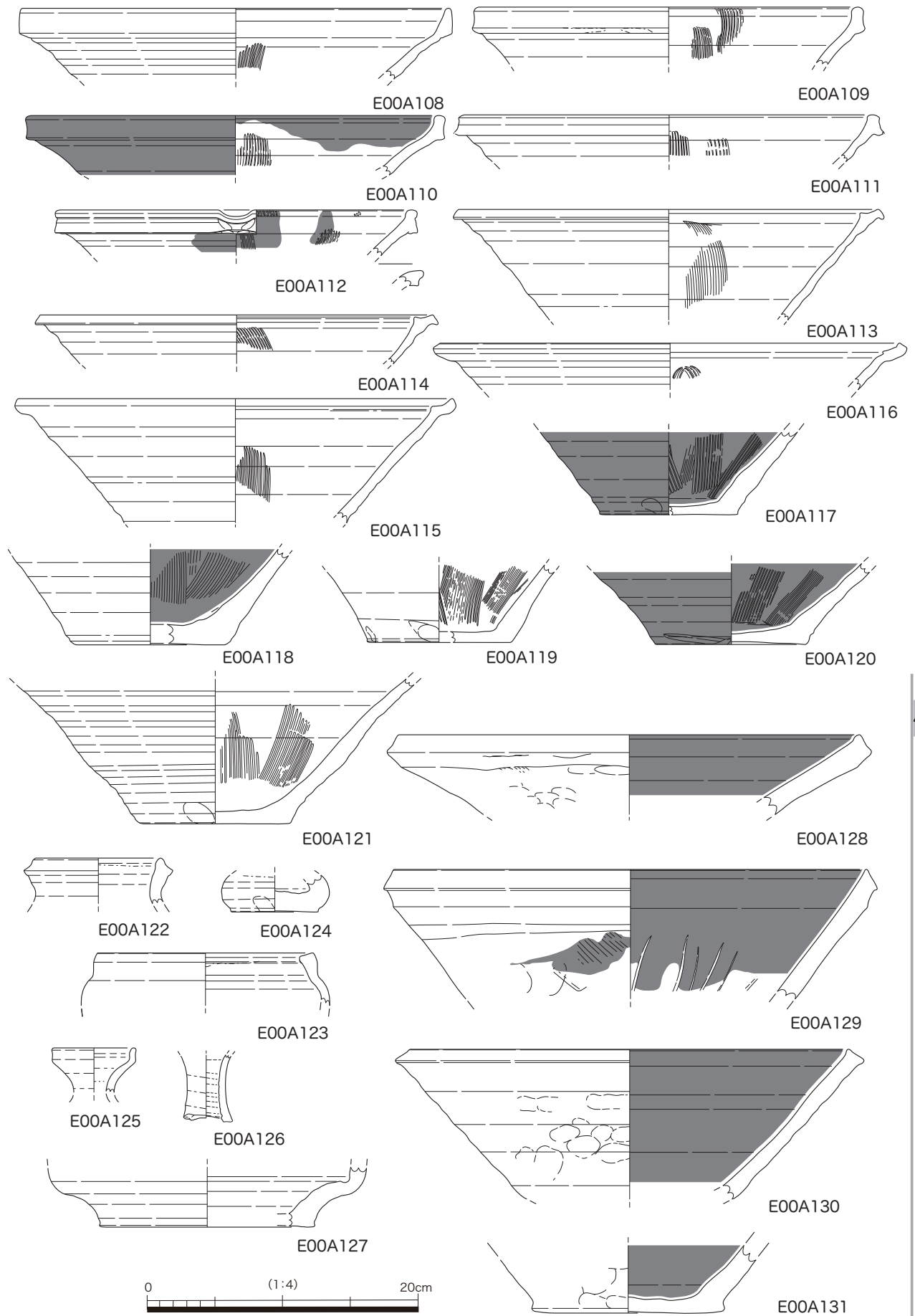


図 52 OOA 区出土土器・陶磁器 (1:4)

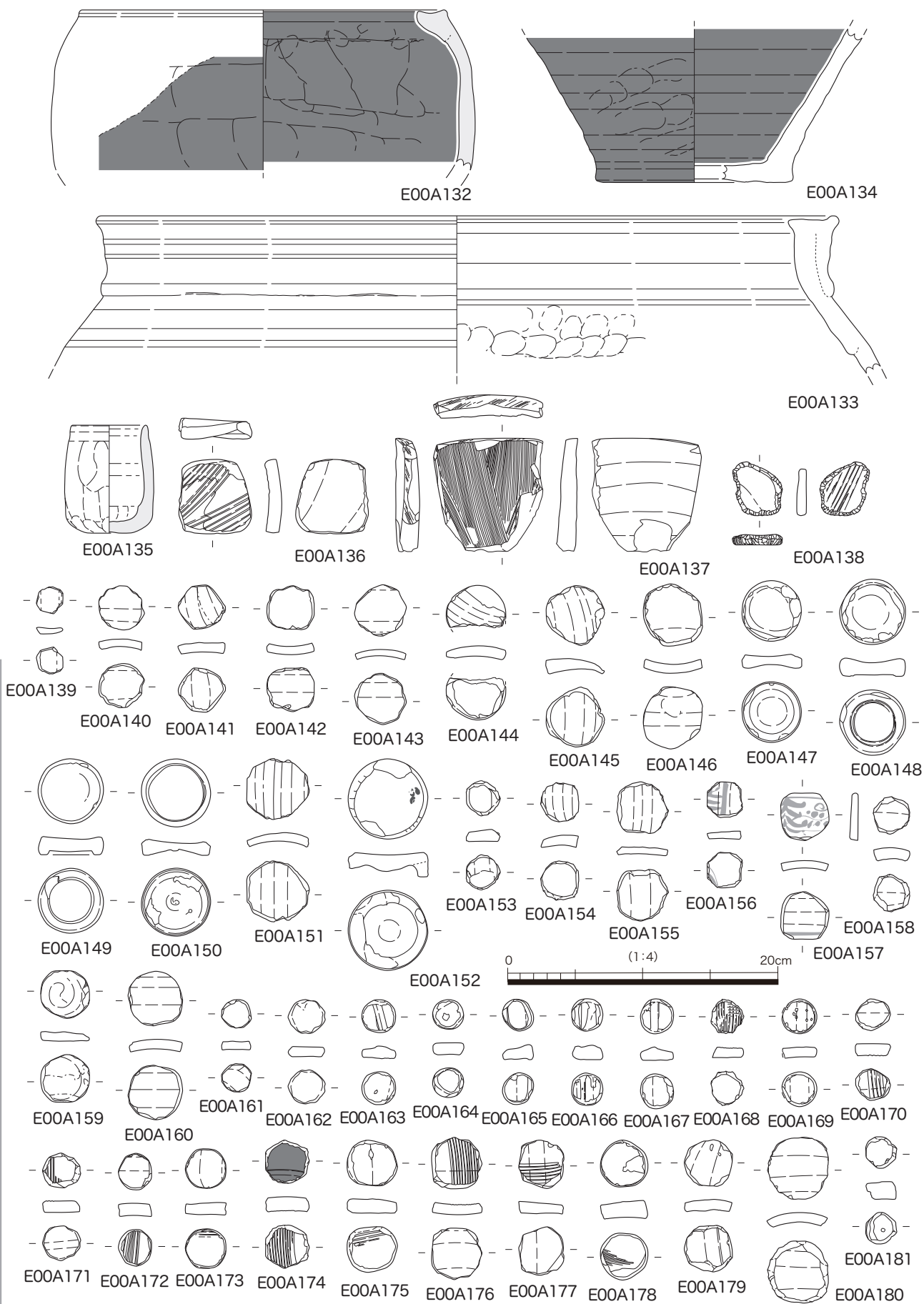


图 53 00A 区出土土器・陶磁器 (1:4)

の長さは31.8cmである。

00A区検出3、検出4、SX8001 (E00A225～E00A254)

E00A225～E00A227は、天目茶碗でE00A225が大窯第4段階前半～大窯第4段階末のもの、E00A228は鉄釉耳付水注で登窯第1小期のものである。E00A229・E00A230は長石釉端反皿で、E00A229の外底面に墨書「○」の中に「×」を入れたもの、E00A230の外底面には「○」が残る。E00A231は鉄釉甕か深鉢で大窯期のもの、E00A232は擂鉢で登窯第1小期のもの、内・外面に煤が付着している。E00A233はやや大部に丸みを持つ赤物の常滑産火舎で、前面に「U」字形に切り取られた窓がある。内面に煤が付着しており、「×」の線刻が残る。

E00A234～E00A241は加工円盤で、E00A237が小型のもの、その他が大型のものとなる。転用する元は、E00A234が灰釉丸皿の底部片、E00A235が長石釉碗の底部片、E00A236が長石釉端反碗か丸碗の底部片、E00A237が長石釉丸皿の体部片、E00A238が長石釉皿の底部片、E00A239が鉄釉瓶の底部片、E00A240が擂鉢の体部片、E00A241が平瓦片である。側面の一部・全体を研磨するものは、E00A235・E00A237・E00A238・E00A240・E00A241である。

E00A242は土師器のロクロ成形皿で、外面に煤が付着し、内面コゲが付着していることから灯明皿に使用されたと思われるものである。E00A243～E00A248は土師器の小皿で、E00A243が非ロクロ成形皿1類のもの、E00A244～E00A248は非ロクロ成形皿3類のもので、E00A244は底部に焼成後の穿孔がある。E00A248は板状になるものである。E00A249は土師器の内耳鍋で、丸底の底部に三足が付き、内部がやや深めになる。E00A250は平瓦で、凹面の煤の付着状況から葺いた平瓦の右上部部分と思われる。

E00A251は鉄釉皿の体部片を転用した小型の加工円盤、E00A252は長石釉丸碗の底部片を転用した大型の加工円盤で、側面を研磨している。E00A253は土師器の小皿で、非ロクロ成形皿3類のもの、E00A254は土師器の筒型

台で、使用方法などは不明のものである。

00A区トレンチ、表土掘削 (E00A255～E00A270)

E00A255・E00A256は天目茶碗で、E00A255が大窯第4段階前半のもの、E00A256が大窯第4段階末のものである。E00A257は長石釉鉄絵丸碗で登窯第1小期のもので、内面口縁部に直線文1条、外面口縁部に直線文2条と渦巻文の鉄絵がみられる。E00A258は長石釉小杯で大窯第4段階末のもの、外面底部に煤が濃く付着し、内面に被熱痕がみられる。E00A259は灰釉丸皿で大窯第3段階前半のもの、E00A260は灰釉内禿皿で大窯第3段階後半のものである。E00A261は三足が付く灰釉香炉で大窯第4段階のもの、E00A262は緑釉香炉蓋で大窯第4段階末～登窯第1小期のもので、落し蓋である。E00A263は長石釉葉鉄絵菊皿で大窯第4段階後半のもの、内面底部に草本の鉄絵がみられる、E00A264は長石釉鉄絵向付で大窯第4段階末のもの、体部から口縁部が稜を持って外反するもので、口縁端部の三方が内側に折り曲げられる、内面体部を蔓草文と鳥の鉄絵2単位がめぐる。E00A265は鉄釉水注か壺の底部で、大窯第4段階末～登窯第1小期のものである。E00A266は赤物の常滑産鉢で内面に煤が付着している、また内面に「×」の線刻がみられる。E00A268は土師器の内耳鍋で丸底の底部から球形の体部となり、口縁部がやや内湾しておわる。E00A269は丸瓦で、凹面は布目痕の上をナデ調整、凸面はナデ調整のもの、E00A270は平瓦で凹面は弧引き痕の上をナデ調整、凸面はナデ調整がみられる。E00A271は鴟尾の一部と思われるもので、円形の凹み部分に金箔が残る。

(2) 62D区・63D区 (図56～図59)

62D区と63D区の出土遺物は、00A区から東へ続くSX8001に含め、00A区の遺構・遺物を考える上で重要と考えられたことから、特徴のある出土遺物の100点を図化した。00A区と同様で城下町Ⅲ-2期（大窯第4段階後半～登窯第1小期）の遺物を主体とする。

62D区SD8005 (E62D001～E62D007)

E62D001～E62D007は土師器で、E62D001・E62D002・E62D007は体部上半に穿孔のある

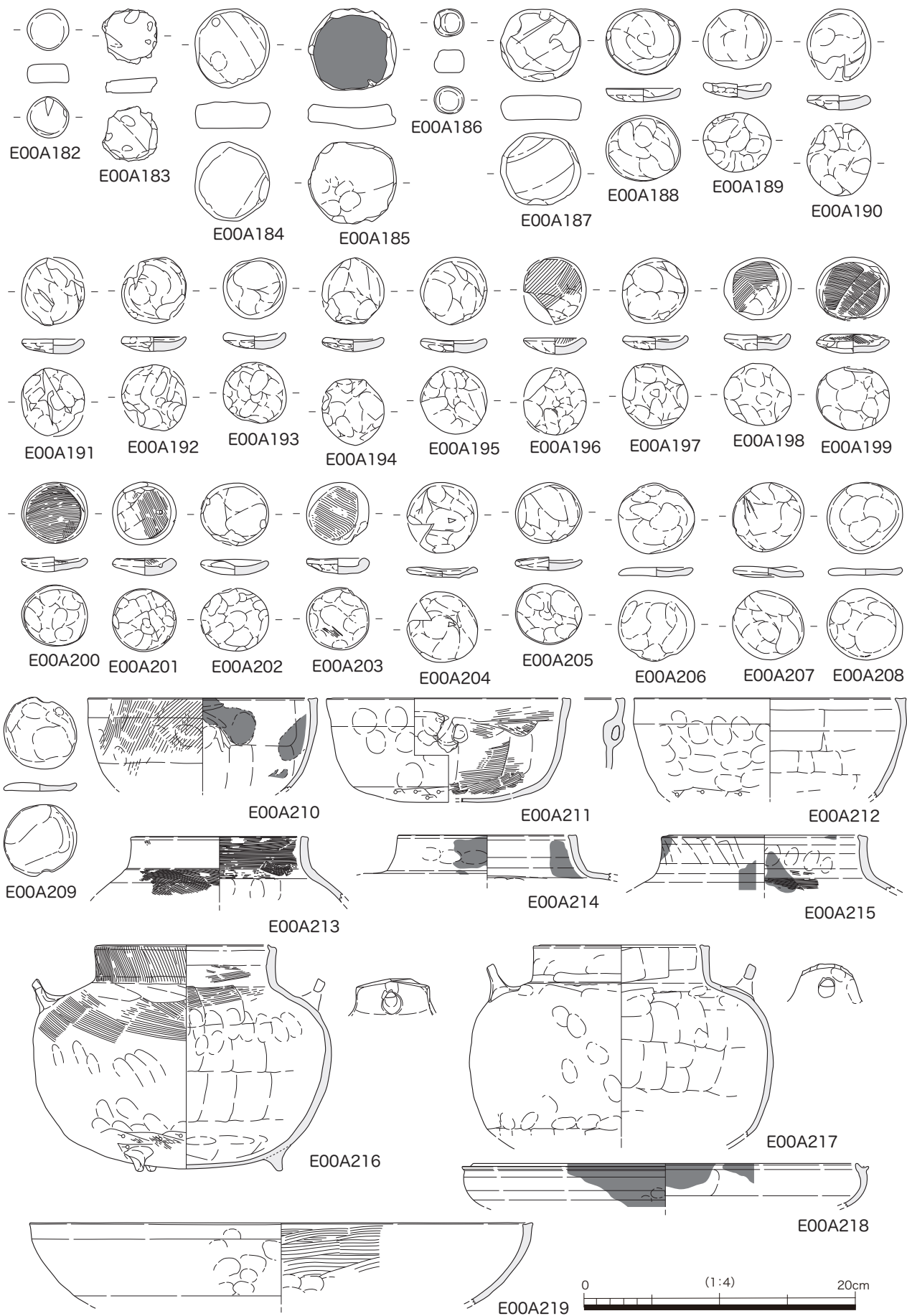


图 54 00A 区出土土器・陶磁器 (1:4)

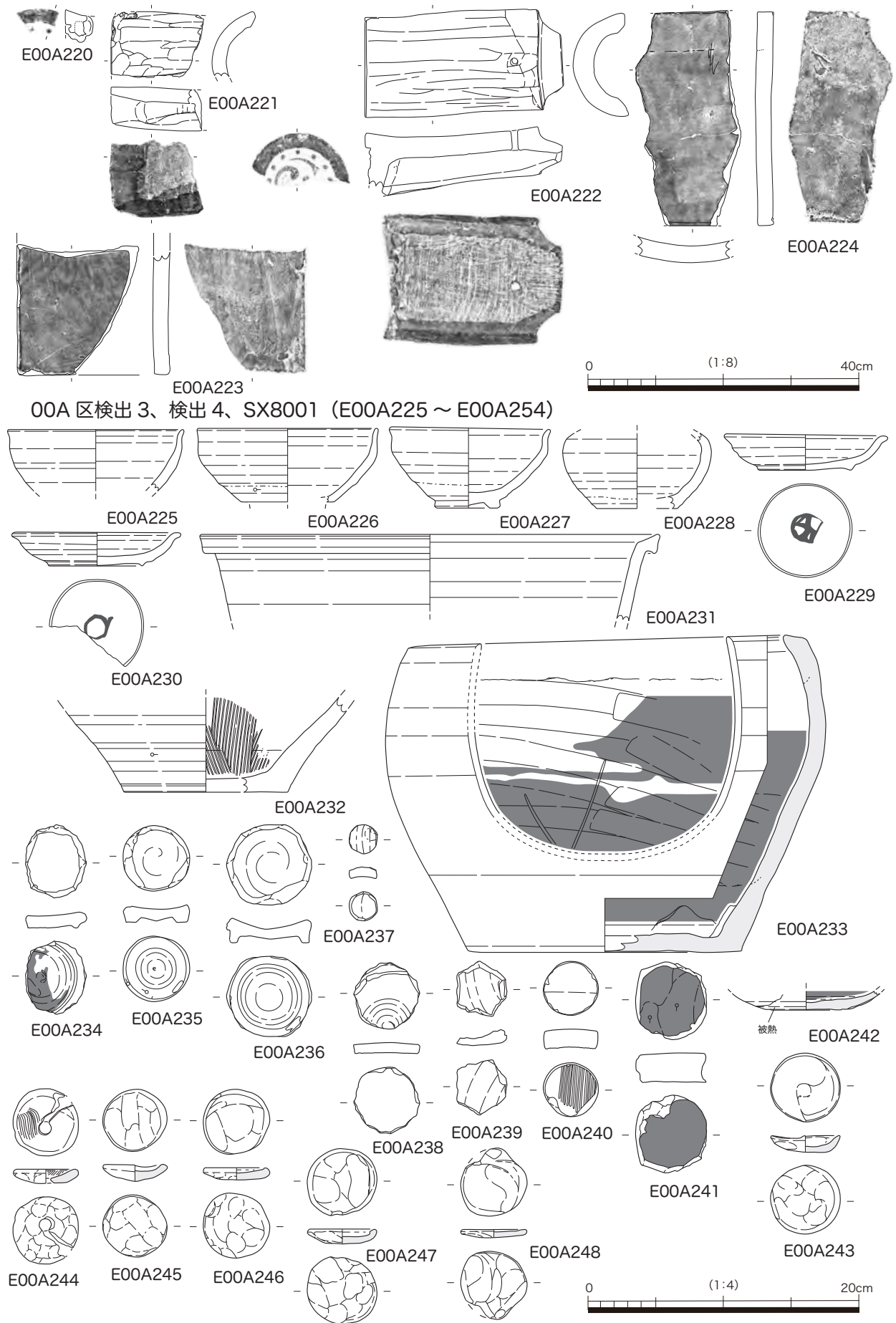
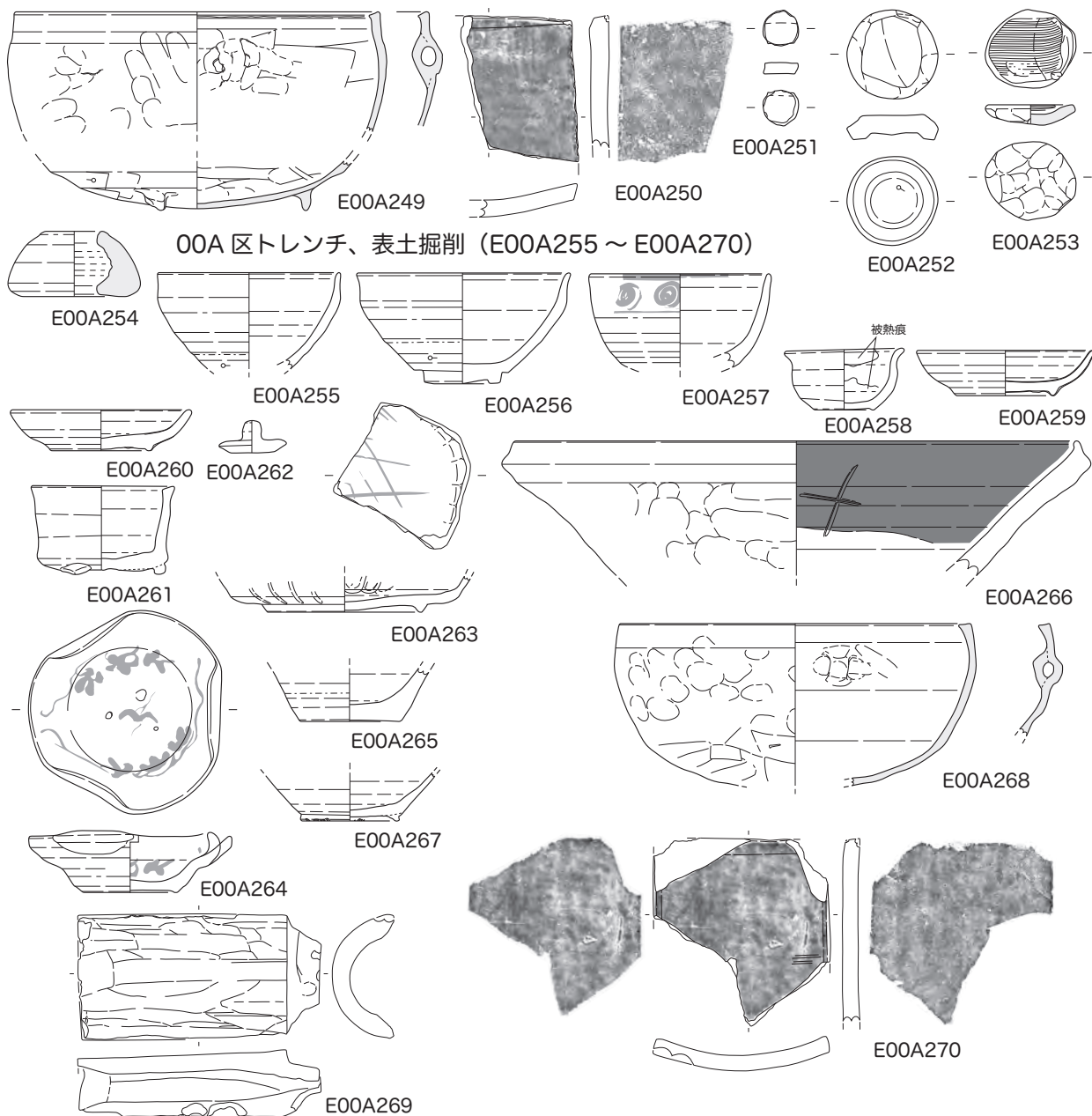


図55 00A区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は1:8)



62D 区 SD8005 (E62D001 ~ E62D007)

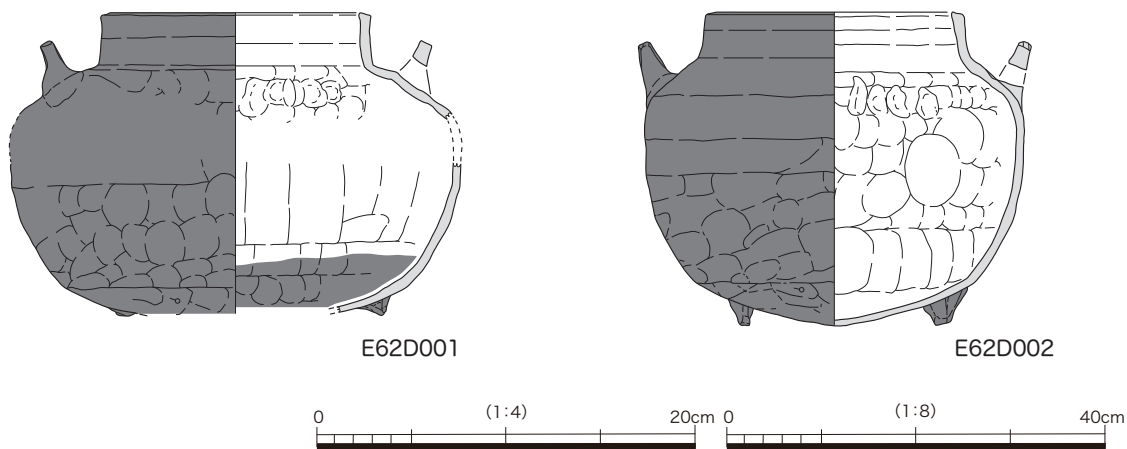


図 56 00A 区・62D 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8)

把手が付く茶釜形鍋で、E62D002はE62D001に比べて肩部が張る、E62D007はその把手の部分である。E62D003・E62D004は内耳鍋で内・外面に横ナデ調整が残り、E62D004の内面には横ハケ調整の痕跡が残る。E62D005・E62D006は小皿でE62D005は非ロクロ成形皿1類、E62D006は非ロクロ成形皿3類の板状のものである。

62D区SD8009 (E62D008～E62D009)

E62D008は鉄釉口広有耳壺で、大窯第3段階～第4段階の底部から筒状に口縁部にいたるもの、E62D009は土師器の内耳鍋で、口縁部径17.3cm、器高8.85cmの小型のものである。

62D区SD8010 (E62D010)

E62D010は大窯第3段階前半の天目茶碗である。

62D区SD8011 (E62D011)

E62D011は焙烙鍋で口縁部径29.8cmの大型のもの、煤などの付着はみられない。

62D区SE8002 (E62D012～E62D023)

E62D012は登窯第1小期の天目茶碗、E62D013・E62D014は長石釉端反皿で、E62D013が登窯第1小期、E62D014が大窯第4段階後半のものである。E62D015は磁器の染付皿で、外面に染付の直線文1条と絵、内面に花押文がみられる。E62D016は口縁部が端反りになる鉄釉大皿で、大窯第4段階のものである。E62D017は土師器の内耳鍋で、口縁部径15.5cm、器高8.5cm前後の小型のもの、E62D018は底部から丸く体部が張り、頸部が細くなる鉄釉徳利で、外面体部上半には灰釉が流し掛けされている、大窯第3段階のものである。E62D019は大窯期の鉄釉小瓶で、E62D020は大型の加工円盤で灰釉三叉文丸皿か端反皿底部を転用したもの、E62D021は土師器の皿で、ロクロ成形皿3類の丸皿、E62D022・E62D023は土師器の小皿で口縁部に横ナデ調整がみられる非ロクロ成形皿1類のものである。

62D区SE8003 (E62D024)

E62D024は大型の加工円盤で、内・外面に煤が付着する常滑産鉢体部片を転用したもので、側面を研磨する。

62D区SK8026 (E62D025)

E62D025は土師器の小皿で口縁部に断続横ナデを施す非ロクロ成形皿2類のものである。

62D区SK8032 (E62D026)

E62D026は長石釉の鼠志野角向付で、外面体部に線刻の垂下直線文4条がみられる。大窯第4段階後半のものである。

62D区SX8001 (E62D027～E62D060)

E62D027～E62D029は天目茶碗で、E62D028が大窯第4段階末のもの、E62D029が大窯第3段階後半のもので、口縁端部と外面体部下半に煤が付着し、口縁端部が細かく欠損することから、灰落としのように使用された可能性がある。E62D030は登窯第1小期の灰釉小杯で、外面に煤が付着する。E62D031は登窯第1小期の長石釉鉄絵筒型向付で、外面体部に直線文4条の鉄絵がみられる。E62D032は長石釉鼠志野ひだ向付で、内面口縁部に線刻の斜交子文がめぐる。E62D033は灰釉端反皿で、E62D034は大窯第4段階後半の長石釉丸皿である。E62D035は登窯第1小期の長石釉鉢で、内・外面に強い被熱痕がみられる。E62D036・E62D037は登窯第1小期の長石釉鉄絵大皿で、E62D036が体部片、E62D037が底部片で内面に鉄絵がみられる。E62D038は黄瀬戸折縁大皿で、内面口縁部に緑釉の「V」字文、底部に緑釉がみられる、登窯第1小期のものである。E62D039・E62D040は磁器の染付皿で、E62D039は内面に村落絵、外面底部と高台部に直線文1条が、E62D040は内面底部に瑞雲文がみられる。E62D041は尾張産の灰釉系陶器の小皿で尾張第5型式のもの、E62D042は窯道具のエンゴロで大窯第4段階～登窯第1小期のもの、E62D043は焼締陶器の壺で口縁部が内傾しておわるもの、E62D044・E62D045は常滑産の甕の底部で内面に煤が付着している、E62D046は土師器の火鉢の脚部、E62D047は～E62D051は加工円盤で、E62D047は中型のもの、その他は大型のもので、転用される元はE62D047が磁器染付皿の底部片、E62D048が播鉢の底部片、E62D049が天目茶碗の底部片、E62D050が平瓦片、E62D051が播鉢の体部片である。E62D047～E62D049・E62D051は側面の一部・全体を研磨している。E62D052～E62D058は土師器

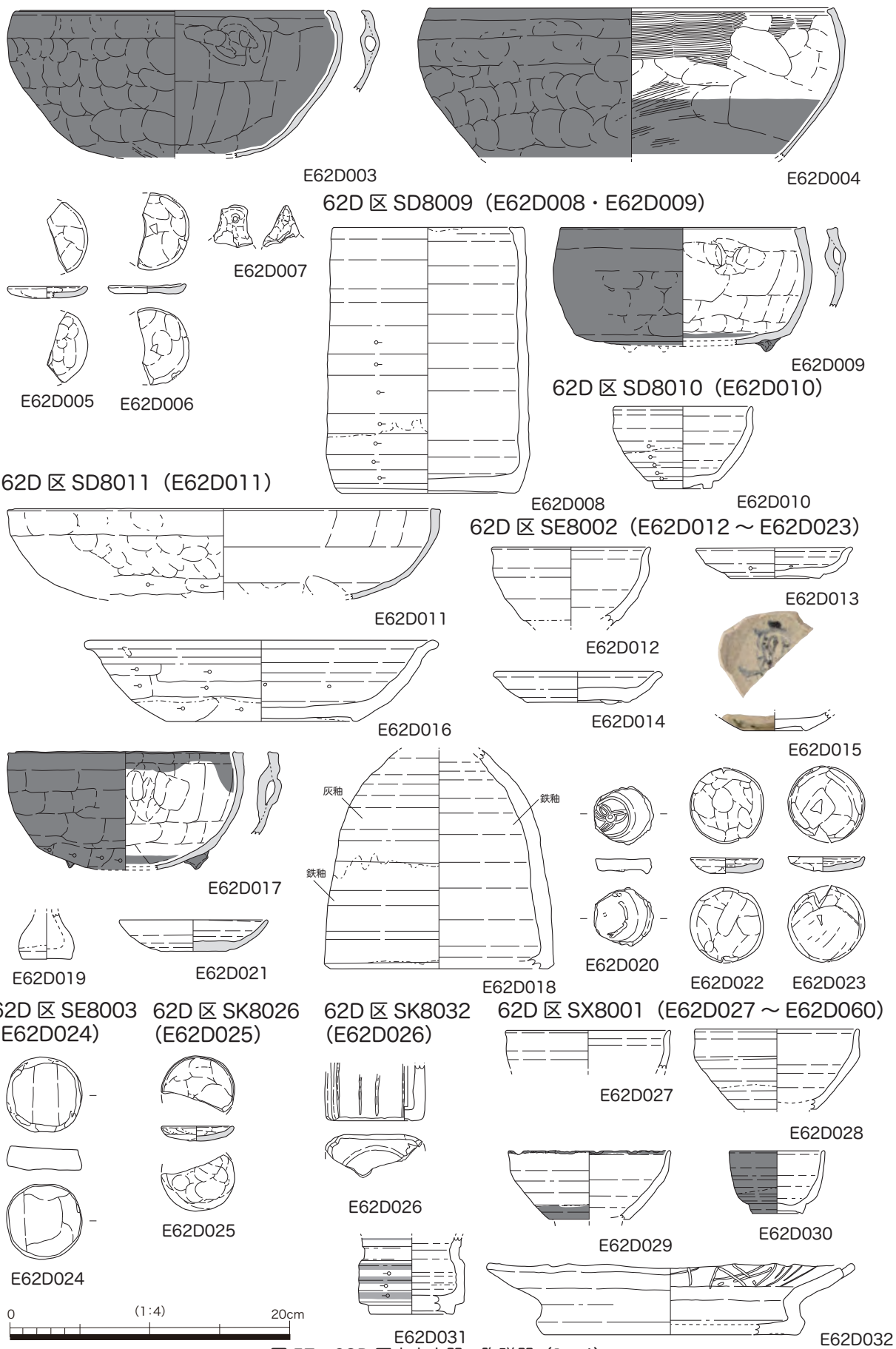


図 57 62D 区出土土器・陶磁器 (1:4)

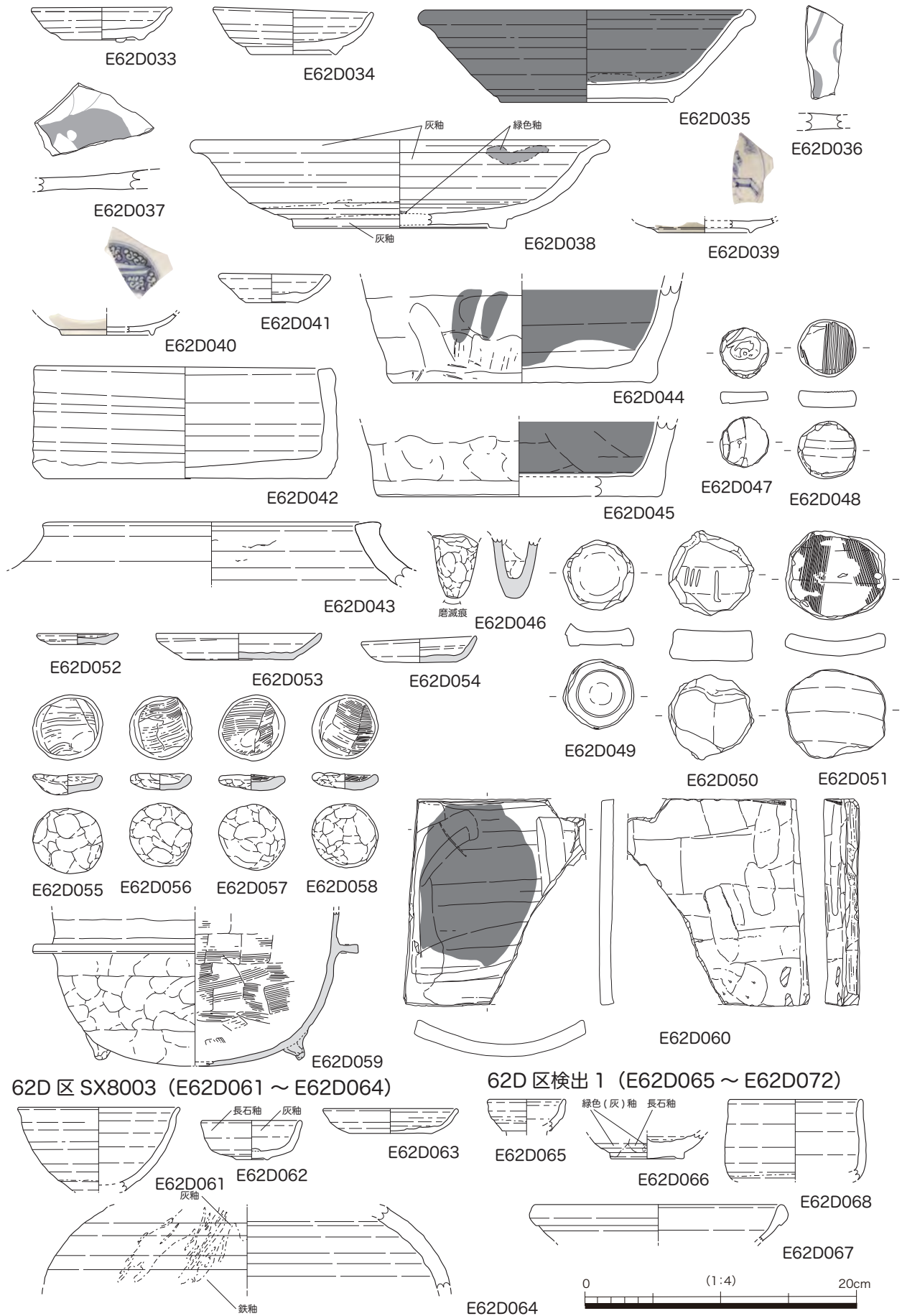


図 58 62D 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8)

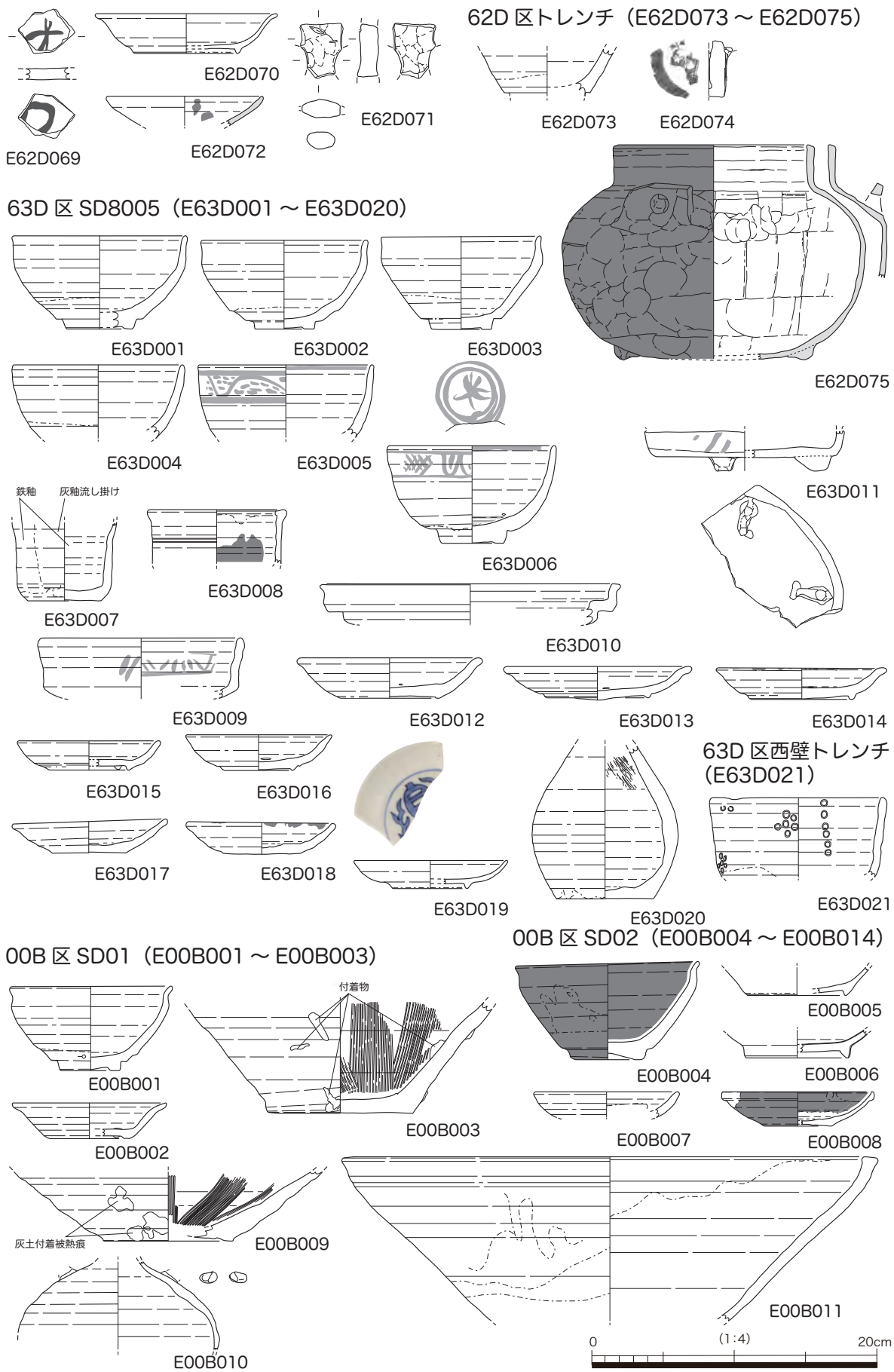


図 59 62D 区・63D 区・00B 区出土土器・陶磁器 (1:4)

の皿で、E62D052 はロクロ成形皿 1 類の小皿、E62D053 はロクロ成形皿 2 類の皿、E62D054 はロクロ成形皿 3 類の皿、E62D055 は非ロクロ成形皿 2 類の小皿、E62D056 ～ E62D058 は非ロクロ成形皿 3 類の小皿である。E62D059 は土師器の羽付釜形鍋で丸底の底部に三足が付く。E62D060 は凹面に煤が付着する平瓦で、長さ 30.6cm、幅 27.65cm、厚み 5.35cm の台形状のものである。

62D 区 SX8003 (E62D061 ～ E62D064)

E62D061 は登窯第 1 小期の天目茶碗、E62D062 は大窯第 4 段階後半の長石釉小碗で、内面に灰釉が施されている、E62D063 は大窯第 2 段階の重圈皿、E62D064 は祖母懷茶壺の肩部で鉄釉の上に灰釉が流し掛けされている。

62D 区検出 1 (E62D065 ～ E62D072)

E62D065 は大窯第 4 段階後半の小天目茶碗、E62D066 は長石釉織部碗で緑色釉が流し掛けされている。E62D067 は口縁部が外面側に肥厚する白磁碗、E62D068 は大窯第 4 段階後半の鉄釉筒型碗、E62D069 は大窯第 1 段階の灰釉縁釉挟み皿で外面底部に墨書「〇」がみられる。E62D070 は白磁の端反皿、E62D071 は土師器の取手状不明品、E62D072 はロクロ成形皿 3 類の土師器の皿で、内面底部に煤が付着することから、灯明皿に使用されたものと思われる。

62D 区トレンチ (E62D073 ～ E62D075)

E62D073 は中国産と思われる天目茶碗、E62D074 は土師器の茶釜形鍋で、内面にコゲ、外面に煤が付着する。E62D075 は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当部径 12.0cm 前後で素縁に桐紋がある清洲城下町遺跡の M401 形式のものである。

63D 区 SD8005 (E63D001 ～ E63D020)

E63D001 ～ E63D003 は大窯第 4 段階～登窯第 1 小期の天目茶碗、E63D004 は登窯第 1 小期の青織部平碗、E63D005・E63D006 は登窯第 1 小期の長石釉鉄絵丸碗で、E63D005 は内面口縁部に直線文 1 条、外面体部に直線文 2 条と波状文 1 条、列点文充填の鉄絵が、E63D006 は内面口縁部に直線文 1 条、底部に直線文 2 条、花紋鉄絵、外面口縁部に直線文 2 条、斜格子文・花卉文鉄絵がみられ、定林寺窯産

の可能性がある。E63D007 は登窯第 1 小期の鉄釉茶入で外面に灰釉の流し掛けがみられる。E63D008 は灰釉筒型香炉で外面体部に沈線直線文 2 条がある。E63D009・E63D010 は大窯第 4 段階後半の長石釉向付で、E63D009 は内面体部に直線文 2 条と垂下直線文の鉄絵がみられ、E63D010 は比較的浅い器形で、口縁部が鍵状の受口となるものである。E63D011 は大窯第 4 段階後半の長石釉鉄絵角向付で、外面体部下半に斜行線文の鉄絵があり、底部に 4 足が付く。E63D012 ～ E63D014 は大窯第 4 段階後半の長石釉端反皿で、E63D014 は内面口縁部に黒色有機物が付着する、灯明皿に使用か。E63D015・E63D016 は灰釉丸皿で、E63D015 が大窯第 4 段階前半のもの、E63D016 が登窯第 1 小期のものである。E63D017・E63D018 は大窯第 3 段階の重圈皿で、E63D018 の口縁部にはスス付着しており、灯明皿に使われたと思われる。E63D019 は磁器の染付皿で、内面底部に直線文 1 条と文字文がみられる。E63D020 は大窯第 4 段階後半の長石釉徳利で底部から体部がやや丸みをもってふくらみ、頸部が細くなるものである。

63D 区西壁トレンチ (E63D021)

E63D021 は登窯第 1 小期の織部向付で、内・外面に緑釉が施され、内面に六曜円形刺突文、垂下直線円形刺突文、外面に六曜円形刺突文がみられる。

(3) 00B 区 (図 59 ～ 図 67)

00B 区の出土遺物は、中世（鎌倉時代）から城下町Ⅲ-2 期（大窯第 4 段階後半～登窯第 1 小期）の遺物があり、特に城下町Ⅲ期に存在した清洲城に伴う瓦が多数出土していることが特徴である。

00B 区 SD01 (E00B001 ～ E00B003)

E00B001 は大窯第 3 段階後半の天目茶碗、E00B002 削り出し高台から体部が斜め上に立ち上がり、口縁部が外折して終わる鉄釉腰折皿で大窯第 3 段階前半のもの、E00B003 は鉄釉播鉢で大窯第 2 段階～第 3 段階のものである。

00B 区 SD02 (E00B004 ～ E00B014)

E00B004 は大窯第 2 段階の天目茶碗、E00B005 は白磁碗の底部、E00B006 は青磁碗の底部、E00B007 は灰釉内禿皿、E00B008 は

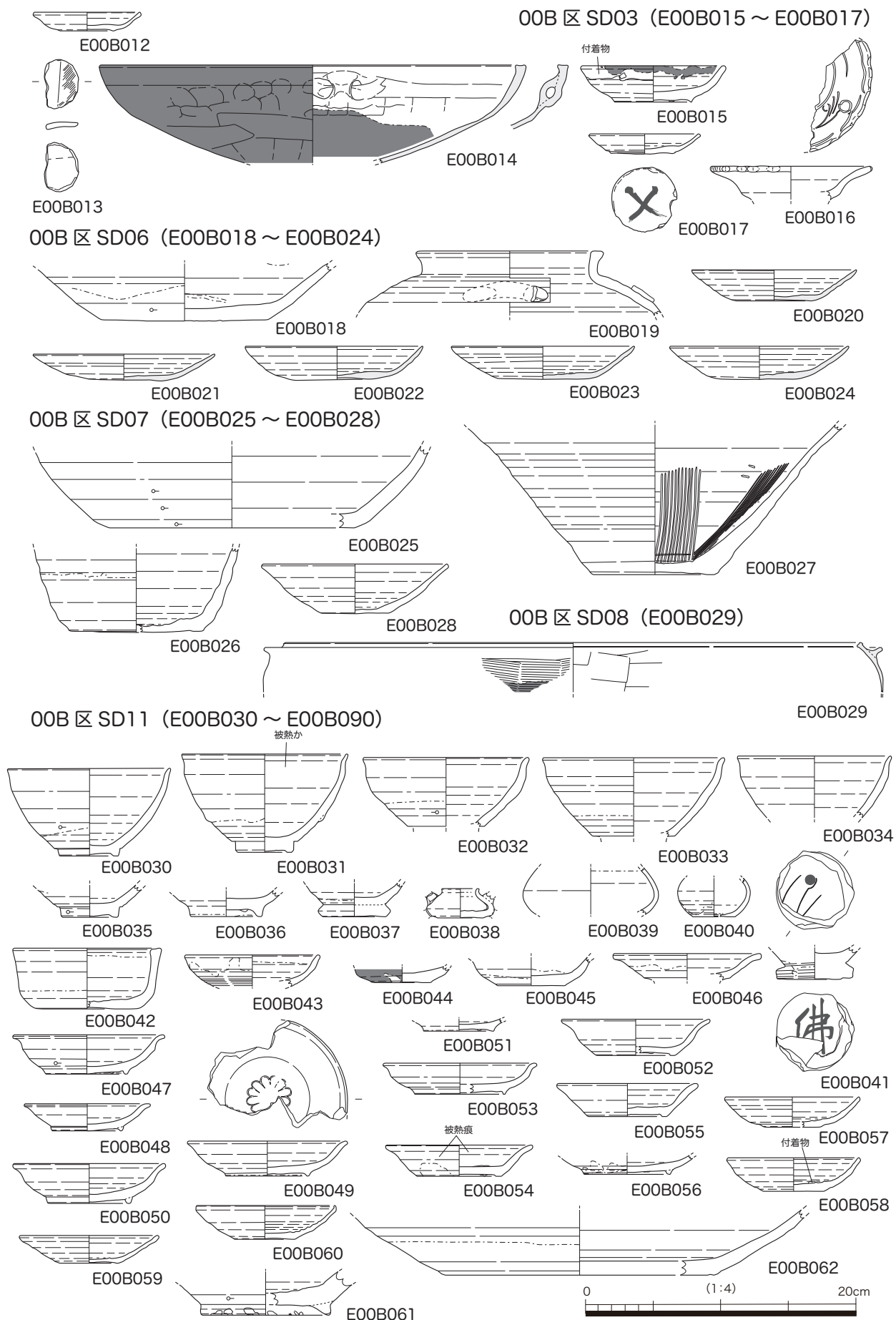


図60 00B区出土土器・陶磁器 (1:4)

重圈皿、E00B009 は搦鉢、E00B010 は鉄釉双耳德利で大窯第3段階前半のもの、E00B011 は鉄釉鉢で口縁部径 35.7cm、E00B012 は東濃型灰釉系陶器の小皿、E00B013 は加工円盤で古式土師器甕の体部片を転用したもの、E00B014 は土師器の焙烙鍋で口縁部径 31.3cm である。

00B 区 SD03 (E00B015 ~ E00B017)

E00B015 は大窯第2段階の灰釉丸皿で大窯第2段階のもの、口縁部の煤が顕著に付着しており灯明皿として使われたものと思われる。E00B016 は青磁の平皿で、内面に唐草文の線刻がみられる。E00B017 は東濃型灰釉系陶器小皿で明和窯式のものである。

00B 区 SD06 (E00B018 ~ E00B024)

E00B018 は灰釉盤類で古瀬戸後4期古段階のもの、E00B019 は口縁部が短く立ち上がる大窯期の鉄釉双耳壺、E00B020 ~ E00B024 は土師器の皿で口縁部が底部から斜め上にほぼ真っ直ぐ広がるロクロ成形皿2類のものである。

00B 区 SD07 (E00B025 ~ E00B028)

E00B025 は灰釉盤類で古瀬戸後1期~後2期のもの、E00B026 が鉄釉壺か瓶、E00B027 は搦鉢で古瀬戸後4期新段階のもの、E00B028 は東濃型灰釉系陶器山茶碗で脇ノ島窯式のものである。

00B 区 SD08 (E00B029)

E00B029 は土師器の羽付鍋である。

00B 区 SD11 (E00B030 ~ E00B090)

E00B030 は灰釉天目茶碗で、E00B031 ~ E00B035 は天目茶碗で E00B031・E00B033 が大窯第1段階のもの、E00B032 が大窯第3段階前半のもの、E00B034 が古瀬戸後4期新段階のもの、E00B035 が古瀬戸後4期古段階のものである。E00B036 は灰釉丸碗で大窯第1段階のものである。

E00B037 は灰釉仏餉具で古瀬戸後3期のもの、E00B038 は鉄釉水柱で大窯第4段階のものか、E00B039・E00B040 は鉄釉茶入で大窯第1段階~第2段階のものである。E00B041 は大窯第1段階の鉄釉仏餉具で外面底部に「佛」の墨書が残る、E00B042 は灰釉筒形香炉で古瀬戸後4期古段階のものである。

E00B043 ~ E00B060 は瀬戸・美濃産陶器の皿類で、E00B043 は大窯第1段階の鉄釉縁釉小皿、E00B044 ~ E00B046 は古瀬戸後4期新段階のもので、E00B044・E00B045 が灰釉縁釉小皿、E00B046 は灰釉腰折皿、E00B047 ~ E00B050 は大窯第1段階~第2段階の灰釉端反皿で、E00B049 の内面底部に線刻の菊花文がみられる。E00B051 は大窯第2段階~第3段階の灰釉丸皿、E00B052 は大窯第2段階の鉄釉端反皿である。E00B053 は大窯第1段階の鉄釉端反皿、E00B054・E00B055 は大窯第3段階前半の鉄釉端反皿、E00B056 大窯第1段階~第2段階の鉄釉端反皿か丸皿である。E00B057 ~ E00B060 は重圈皿で、E00B057・E00B058 が大窯第2段階のもの、E00B059 が大窯第3段階のもの、E00B060 が生田窯式のものである。

E00B061 は古瀬戸後1期~後2期の灰釉盤類、E00B062 は瀬戸産尾張10型式の灰釉系陶器の搦鉢、E00B063 は古瀬戸後4期の鉄釉大皿で内面にはね上げの太い線刻がみられる、E00B064 は古瀬戸後期の鉄釉盤類である。

E00B065 は白磁の端反碗、E00B066 は白磁の端反皿である。

E00B067 ~ E00B075 は搦鉢で、E00B067・E00B068・E00B073 が古瀬戸後4期新段階のもの、E00B069・E00B070 が大窯第1段階のもの、E00B071 が大窯第2段階のもの、E00B072 が大窯第3段階前半のもの、E00B075 が大窯第1段階のものである。

E00B076 は頸部が直立して口縁部がやや開く常滑産壺、E00B077 は口縁部が肥厚して外面に端面をもつ鉄釉甕、E00B078 は古瀬戸後4期の鉄釉口広有耳壺、E00B079・E00B080 は鉄釉德利で、E00B079 が大窯期に、E00B080 が古瀬戸後4期のものである。

E00B081 は・E00B082 は東濃型山茶碗で、E00B081 が明和窯式、E00B082 は生田窯式である。

E00B083 ~ E00B090 は土師器で、E00B083・E00B084 はロクロ成形皿3類に分類でき、E00B083 の内面底部に墨書がみられる、E00B084 の内・外面口縁部に煤が付着しており灯明皿に使用されたものと思われる。E00B085

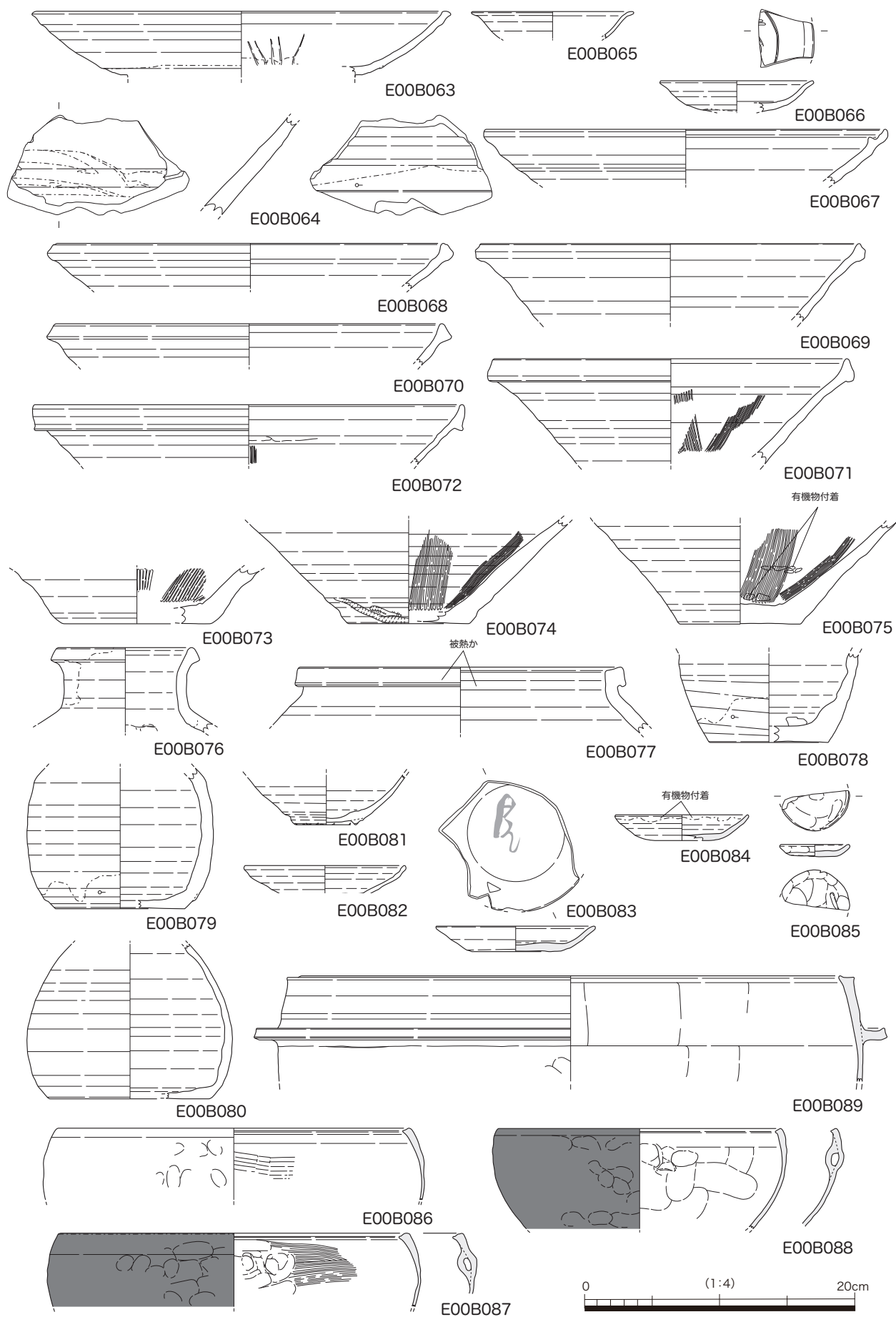


図 61 00B 区出土土器・陶磁器 (1:4)

は非ロクロ成形皿1類の小皿である。E00B086～E00B088は内耳鍋、E00B089・E00B090は羽付鍋である。

00B区SK04 (E00B091～E00B094)

E00B091は鉄釉土瓶の底部で古瀬戸後4期のもの、E00B092は常滑産甕で体部から口縁部にかけて緩やかにすばまり、口縁端部が上下に少し伸びて外側に面をもつもの、E00B093は土師器のロクロ成形皿、E00B094は土師器の非ロクロ成形皿2類の小皿である。

00B区SK10 (E00B095)

E00B095は尾張型山茶碗で、尾張7型式のものである。

00B区SK16 (E00B096)

E00B096は土師器の皿でロクロ成形皿3類のものである。

00B区SD27 (E00B097)

E00B097は土師器の皿でロクロ成形皿2類のものである。

00B区SK30 (E00B098・E00B099)

E00B098は平瓦片を転用した加工円盤、E00B099は瓦当面が方形の飾り瓦で瓦当部に三桐紋に雲文があるもので、凹部に金箔が残る。

00B区SK31 (E00B100)

E00B100は土師器の皿で、ロクロ成形皿2類のもの、内面口縁部に煤が付着する部分が2ヶ所あり、灯明皿に使われた可能性がある。

00B区SX01 (E00B101～E00B117)

E00B101は灰釉端反皿で大窯第1段階のもの、E00B102は窯道具のエンゴロで大窯第1段階のものである。E00B103は常滑産甕の底部片、E00B104・E00B105は東濃型山茶碗でE00B104は明和窯式のもので外面底部に墨書「×」がある。E00B105は窯原式のものである。E00B106～E00B117は土師器で、E00B106はロクロ成形皿2類の皿、E00B107～E00B117は非ロクロ成形皿1類の小皿である。E00B117は内耳鍋で、口縁部径26.3cmを測る。

00B区SX02 (E00B118～E00B159)

E00B118は灰釉丸碗で大窯第1段階のもの、E00B119は鉄釉燭台で古瀬戸後3期～後4期のもの、E00B120・E00B121は灰釉折縁皿で大窯第4段階前半のものである。E00B122は

磁器の染付小皿で、内面底部に菊花文、外面体部下半に鋸歯文がめぐる。E00B123は播鉢で大窯第2段階のもの、E00B124は常滑産甕で、口縁端部を上下に幅広く外側に折り曲げたもの、中野11型式に属する。E00B125は尾張型灰釉系陶器の小皿で、尾張第8型式～第9形式のものである。E00B126・E00B127は尾張型の陶丸で、E00B128は加工円盤で播鉢体部片を転用したもの、E00B129は土師器の小皿で非ロクロ成形皿3類のものである。

E00B130～E00B159は瓦で、E00B130～E00B139は丸瓦でE00B130は長さ28.8cm、幅16.65cm、E00B135は長さ31.0cm、幅17.1cmで、E00B137は幅15.3cm、E00B138は幅15.8cmを測る。表面に残る調整は、凹面に粘土の弧引き痕後成形時の布圧痕・縄目痕が残る、一部にナデ調整がされている、凸面はナデ調整痕がみられる。凹面の痕跡ではE00B130に弧引きAの痕跡、E00B135～E00B137に弧引きBの痕跡がみられる。E00B130～E00B136の軒丸瓦の瓦当部紋様は、E00B130・E00B131は素縁に三巴文、12個の珠文のM151形式、E00B132は素縁に三巴文、16個の珠文のM121b形式、E00B133は素縁に三巴文、8個の珠文のM341a形式、E00B134・E00B135は素縁に三巴文、16個の珠文のM221b形式、E00B136は素縁に珠文が残る、形式は不明である。E00B138は凹面に瓦の留板が貼り付けられており、E00B139は凸面にナデ調整後に釘穴が穿孔されている。E00B140～E00B151は平瓦で、大きさがわかるものでは、E00B146が長さ29.5cm、E00B148が幅25.9cm、E00B149が長さ33.3cm、幅29.6cm、E00B150が長さ33.3cm、幅28.8cm、E00B151が長さ34.1cm、幅28.1cmを測る。調整は凹面にE00B148で弧引きAの痕跡、E00B151で布目痕が一部にみられるが、基本的にナデ調整が全面になされている。凸面はE00B148は弧引きAの痕跡が一部に残るが基本的にナデ調整が全面になされている。瓦当部の文様はE00B140は素縁に桐文と唐草文のH102b形式、E00B141は素縁に桐文に4反転する均整唐草文のH102b形式、E00B142は素縁に唐草

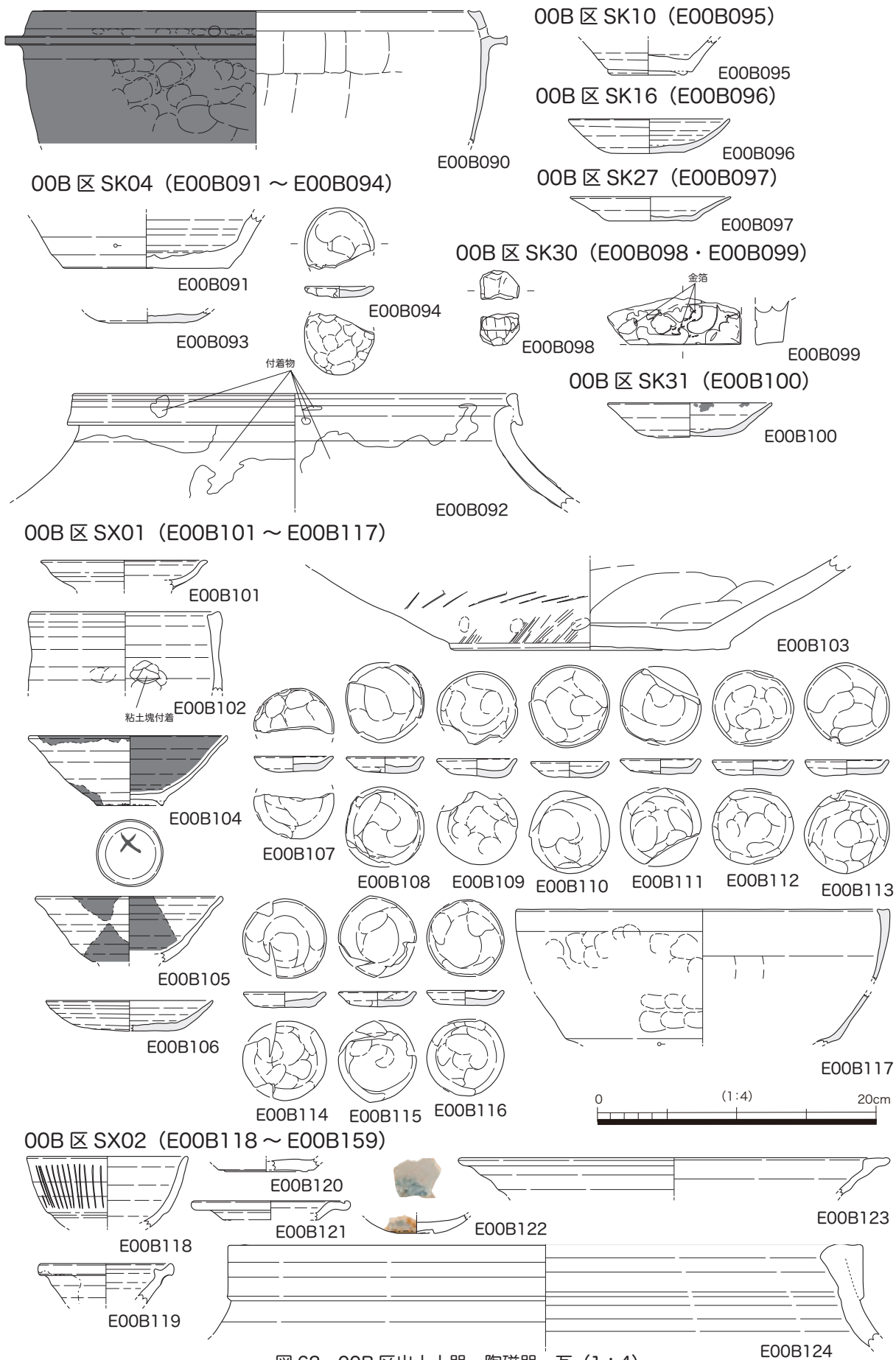


図 62 00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4)

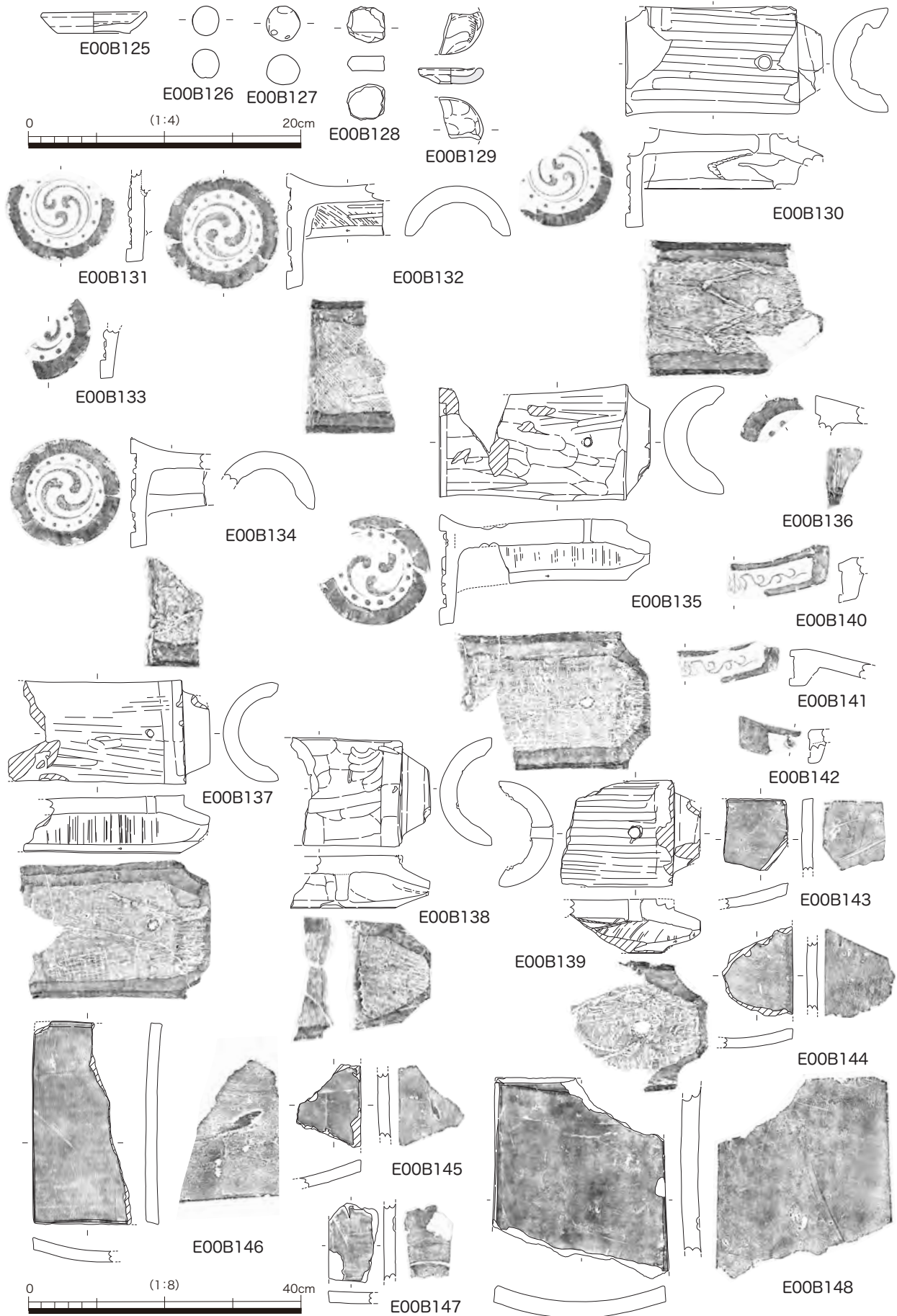


図 63 00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8)

文がみられる。E00B152・E00B153は飾瓦で、E00B152は凸面に素縁がみられるもの、凹面に弧引きBと思われる痕跡があり、凸面・凹面ともナデ調整で仕上げられている、E00B153は凸面に桐文があるもので、釘穴が穿孔されている、凸面・凹面ともナデ調整で仕上げられている。E00B154・E00B155は輪違い瓦で、縦・横の長さが14.0cm～15.7cmの丸瓦のような湾曲をもつ台形状である。凸面・凹面とも弧引きBの痕跡が残り、E00B154の凹面には縄目痕もある、どちらも凸面はナデ調整がみられる。E00B156～E00B159は道具瓦で、E00B156は長形状で先端部の厚みが薄くなる、E00B157は凸面に沈線が2条みられる、E00B158は隅瓦と思われるもので、角部がカットされるもの、E00B159は残る一辺が13.2cmの平瓦状のものである。

00B区SX03 (E00B160～E00B175)

E00B160は加工円盤で古瀬戸後4期新段階の灰釉腰折皿の底部を転用したもの、E00B161は鉄釉ひだ稜皿で大窯第3段階のもの、E00B162は染付皿で内面底部に直線文2条と草本絵、外面体部に唐草文、高台部に直線文3条がみられる。E00B163は常滑産甕で、外反して開く口縁部の端部が上下に少し大きく面を作るものである。

E00B164～E00B167は土師器のロクロ成形皿で、E00B164～E00B166は口縁部の内・外面に煤が付着しており、灯明皿に使われたもの、E00B164はロクロ成形皿2類の皿、E00B165はロクロ成形皿2類の小皿、E00B166・E00B167はロクロ成形皿3類の皿である。

E00B168～E00B175は瓦で、E00B168は丸瓦、E00B169～E00B171は軒平瓦で、E00B169の瓦当部は素縁に桐文と唐草文、E00B170の瓦当部は素縁に三子葉文と唐草文、E00B171の瓦当部は素縁に唐草文がみられる。E00B172・E00B173は平瓦で、E00B173の幅は26.4cmである。E00B174・E00B175は道具瓦で、E00B174は凸面に釘穴が見られる。

00B区SX04 (E00B176～E00B191)

E00B176は大窯第1段階の灰釉端反皿で内面底部に菊花文の印刻、E00B177は大窯第3段階の灰釉丸皿、E00B178は焼き締めの中

皿で大窯第1段階のもの、E00B179は灰釉折縁深皿で古瀬戸後2期のもの、E00B180は内面に灰釉がみられる盤類で三足が付くもの、E00B181～E00B183は播鉢で、E00B181が古瀬戸後4期新段階のもの、E00B182が大窯第3段階前半のもの、E00B183が大窯第1段階のものである。E00B184は鉄釉壺か瓶、E00B185は鉄釉徳利、E00B186は大窯第3段階～第4段階のものである、E00B187は古瀬戸後4期の鉄釉受口桶、E00B188は大窯期の鉄釉甕である。E00B189・E00B190は東濃型の山茶碗で、E00B189は大洞東窯式、E00B190は明和窯式のものである。E00B191は土師器の内耳鍋である。

00B区SX05 (E00B192～E00B199)

E00B192は加工円盤で、常滑産甕の体部片を転用したもので、側面の研磨がされている。E00B193～E00B199は瓦で、E00B193～E00B195は軒瓦で、E00B193の瓦当部は素縁に桐文と均整唐草文のみられるH102a形式、E00B194の瓦当部は三子葉文に均整唐草文のあるH112a形式、E00B195の瓦当部は素縁に唐草文がみられる。E00B196・E00B197は平瓦で、E00B197は長さ31.0cmである。E00B198・E00B199は道具瓦で、小さい台形状のものである。

00B区SX06 (E00B200～E00B208)

E00B200は楽焼碗で、高台は不明であるが、底部から丸みをもって体部が立ち上がり、口縁部がやや外に折れておわるもので、内面は黒色地に金色に発色する鉛釉、外面は白色地に緑色に発色する鉛釉か。E00B201・E00B202は土師器のロクロ成形皿で、E00B201は口縁部の内・外面に煤が付着することから灯明皿に使われたと思われるもの、E00B202は皿の底部である。

E00B203～E00B208は瓦で、E00B203は丸瓦、E00B204・E00B205は軒平瓦でE00B204は幅28.0cmで凸面に棧、凹面の両側面に鱗が付けられている。E00B204の瓦当部は素縁に桐文、均整唐草文のあるH102b形式、E00B205の瓦当部は素縁に唐草文がみられる。E00B206～E00B208は平瓦で、E00B206の凹面に墨痕がみられる。E00B207は幅26.1cm、

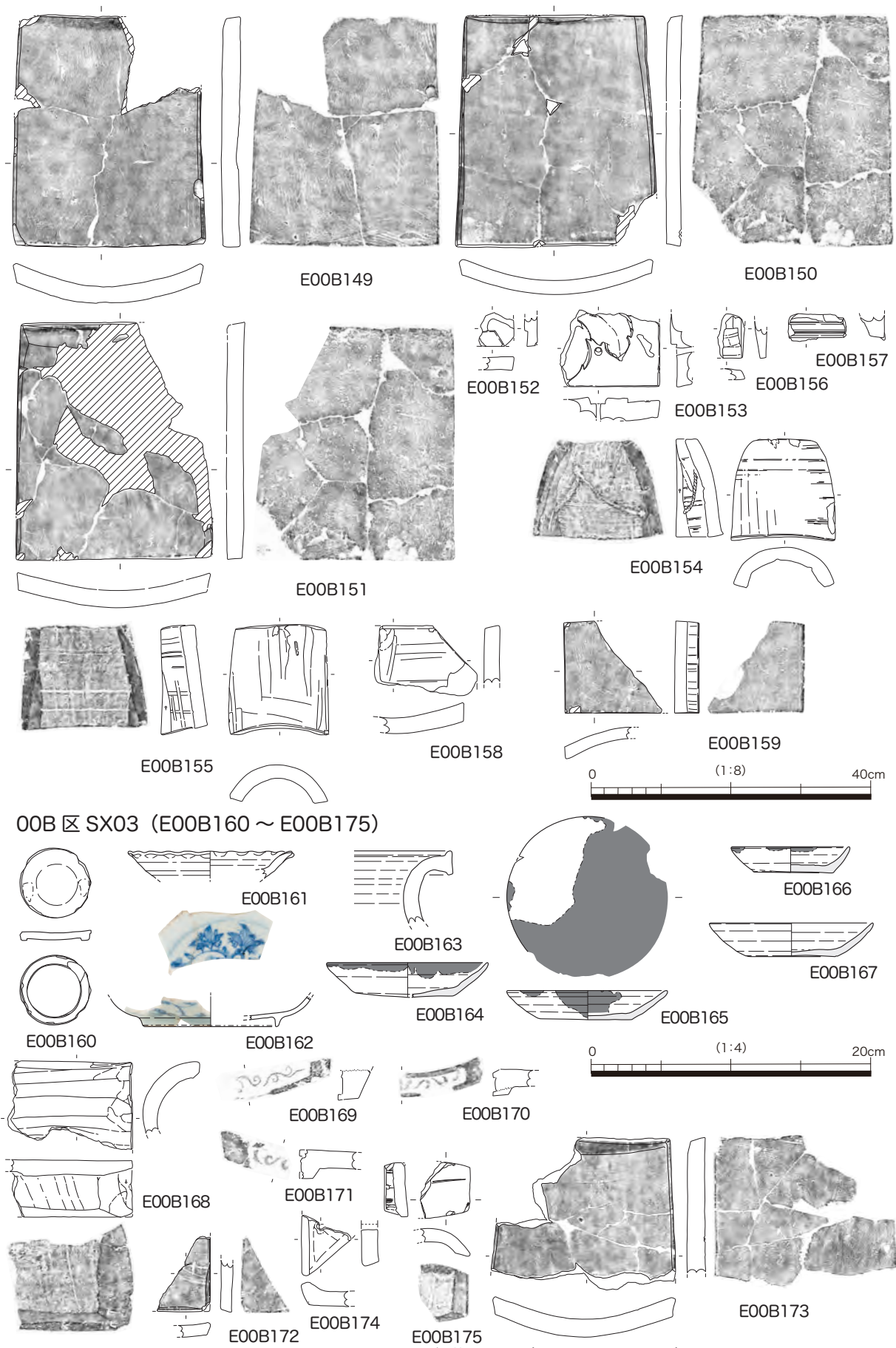
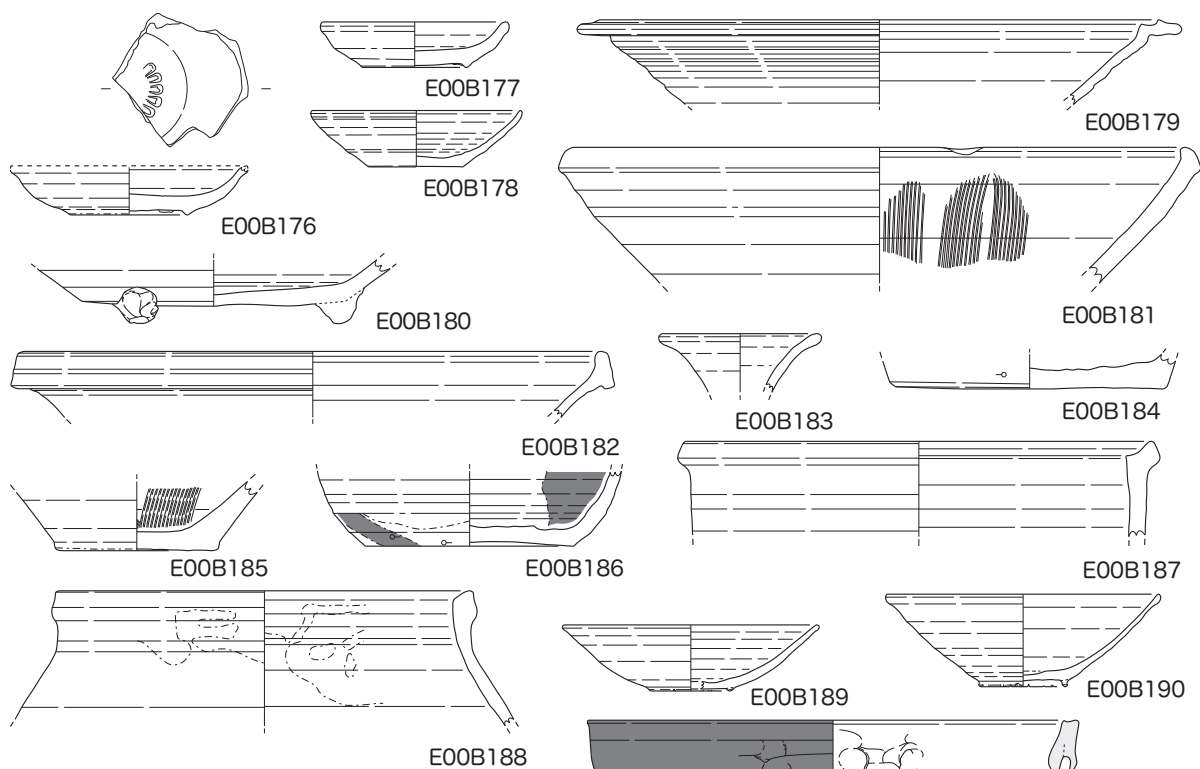
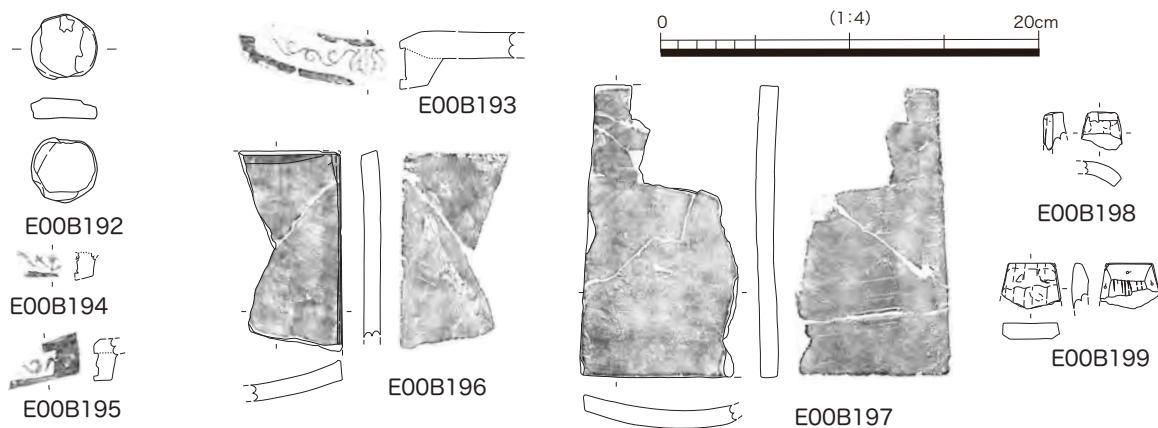


図 64 00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8)

00B区SX04 (E00B176 ~ E00B191)



00B区SX05 (E00B192 ~ E00B199)



00B区SX06 (E00B200 ~ E00B208)

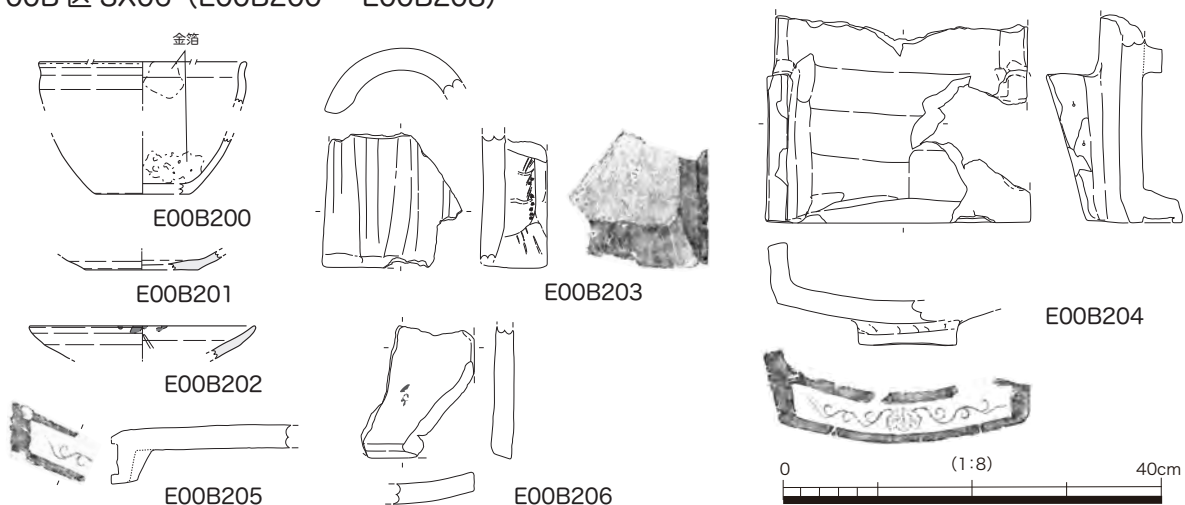


図 65 00B区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は1:8)

E00B208 は長さ 32.2cm、幅 27.9cm を測る。E00B208 は凸面・凹面ともに弧引き A の痕跡後ナデ調整されている。

00B 区 SX07 (E00B209 ~ E00B231)

E00B209 は大窯第 4 段階前半の天目茶碗、E00B210 ~ E00B212 は青磁の碗で、E00B210 は外面口縁部に雷文の線刻があり、E00B211 は口縁部径 26.0cm、E00B212 は内面底部に直線文 1 条、線刻文があるものである。E00B213 は染付碗で、内面口縁部に直線文 1 条、外面口縁部に直線文 1 条がみられる。E00B214 は大窯第 1 段階の灰釉端反皿で内・外面に煤が付着する、E00B215 は大窯第 1 段階の灰釉豆皿、E00B216 は大窯第 2 段階後半の灰釉丸皿、E00B217 は大窯第 1 段階の重圈皿、E00B218 は白磁の小皿、E00B219・E00B220 は灰釉盤類で、E00B219 が古瀬戸後 1 期～後 2 期、E00B220 が古瀬戸後 4 期のものである。E00B221 は古瀬戸後 4 期古段階の播鉢、E00B222 は大窯第 2 段階～第 3 段階の灰釉徳利、E00B223 は大窯期の鉄釉徳利である。E00B224 は・E00B225 は常滑産鉢で、E00B224 の内面には煤が付着する。E00B226 は加工円盤で、播鉢体部片を転用したもの、E00B227・E00B228 は土師器の小皿で、非口クロ成形皿 1 類のものである。

E00B229・E00B230 は土師器の羽付鍋で、E00B229 は口縁部径 22.0cm の羽から口縁部が強く内傾するもの、E00B230 は口縁部径 41.7cm の口縁部から羽までが比較的長く立ち上がっているものである。E00B231 は土製品の土鈴で摘み部に紐通しの孔が穿孔されている。

00B 区 NR01 (E00B232 ~ E00B243)

E00B232 ~ E00B243 は灰釉系陶器で、E00B232 ~ E00B239 は東濃型山茶碗、E00B240 は尾張型山茶碗、E00B241 ~ E00B243 は東濃型小皿で、E00B232 ~ E00B235・E00B241 が明和窯式、E00B236 ~ E00B238 が大畑大洞窯式、E00B239 が大畑大洞窯式(新)、E00B240 が尾張 7 型式、E00B242・E00B243 が白土原窯式のものである。墨書は E00B232 の外面底部に「十」、E00B233 の外面底部に「○」、E00B235 の外面底部に「犬」、E00B236 の外

面底部に「の」、E00B238 の外面底部に「十」、E00B239 の外面底部に墨書、E00B242 の外面底部に「可こ」、E00B243 の外面底部に「南」がみられる。

00B 区検出 1 (E00B244 ~ E00B258)

E00B244 は大窯第 3 段階前半の天目茶碗、E00B245 は登窯第 4 小期の灰釉丸碗、E00B246・E00B247 は大窯第 1 段階の灰釉端反皿で E00B246 内面底部中央部に菊花文印刻がみられる。E00B248・E00B249 は大窯第 2 段階の灰釉丸皿、E00B250 は大窯第 2 段階の灰釉稜皿、E00B251 は大窯第 2 段階の重圈皿である。E00B252 は磁器の染付皿で、内面口縁部に直線文 2 条、底部に直線文 2 条と渦巻文などが、外面口縁部に直線文 1 条、草本絵がみられる。E00B253 は大窯第 2 段階の播鉢、E00B254 は大窯第 1 段階の鉄釉花瓶である。E00B255・E00B256 は東濃型山茶碗で明和窯式のものである。E00B257 は土師器の羽付鍋、E00B258 は鬼瓦の一部と思われ瓦当部に沈線による直線文と円形文がみられる。

00B 区検出 2 (E00B259 ~ E00B262)

E00B259 は大窯第 1 段階の灰釉端反皿、E00B260 は常滑産鉢で、口縁部径 20.6cm、底部径 13.8cm、器高 8.45cm を測る。E00B261・E00B262 は東濃型の山茶碗で、E00B261 は明和窯式で外面底部に墨書「十」がある、E00B262 は白土原窯式のものである。

00B 区表土掘削等 (E00B263 ~ E00B267)

E00B263 は磁器の染付碗で、内面口縁部に直線文 3 条と波状文、外面体部上半に直線文 1 条がみられる。E00B264 は瓦当部が素縁に三角形文と唐草文がみられる H341b 形式のもの、E00B265・E00B266 は湾曲がある小型の道具瓦である。E00B267 は大窯期の鉄釉茶入である。

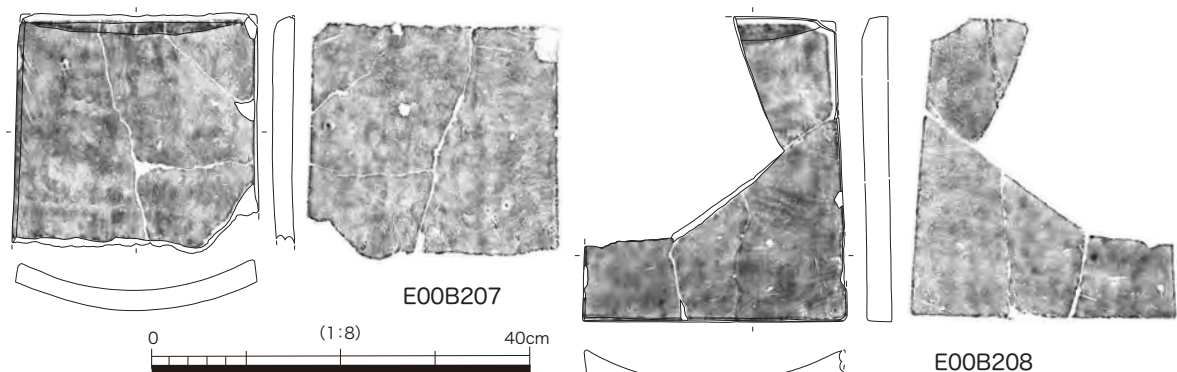
(4) 01 区 (図 67・図 68)

01 区の出土遺物は、城下町後期のものがほとんどで、少数ではあるが古墳時代前期の古式土師器や古代の灰釉陶器、土師器などがある。

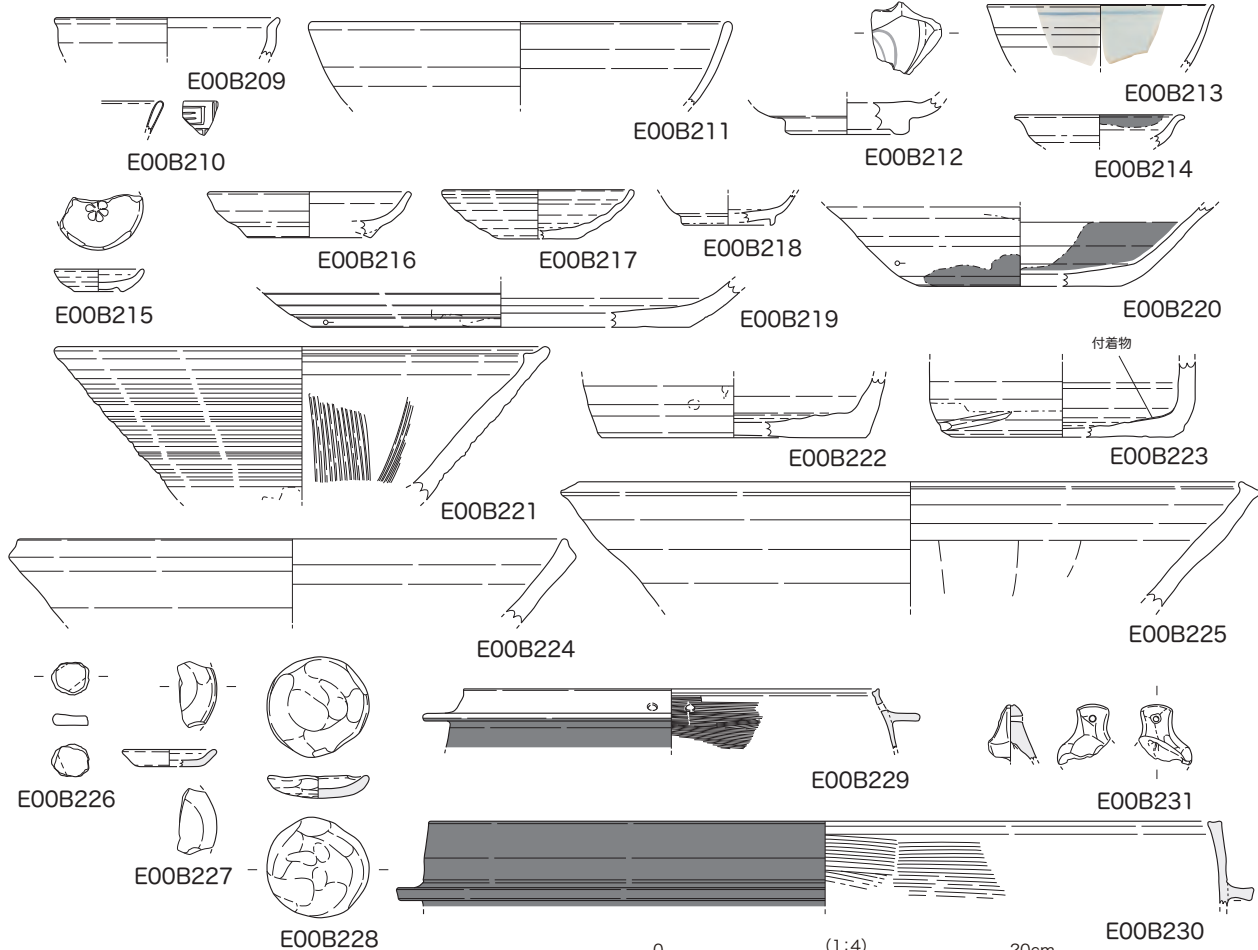
01 区 01SD (E01001)

E01001 は鉄釉花瓶で、細い頸部から口縁部が大きくひらくもので、口縁部径 13.1cm のものである。

01 区 02SD (E01002 ~ E01006)



00B 区 SX07 (E00B209 ~ E00B231)



00B 区 NR01 (E00B232 ~ E00B243)

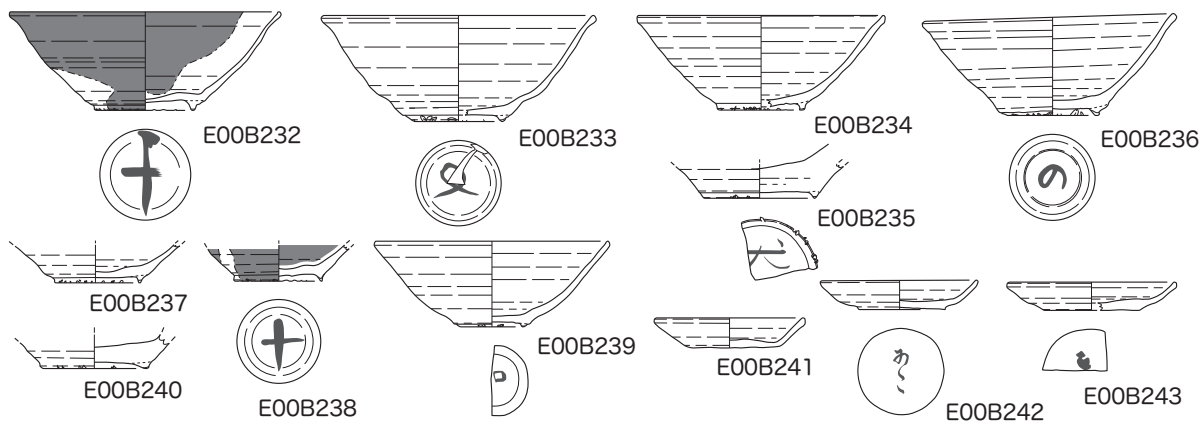
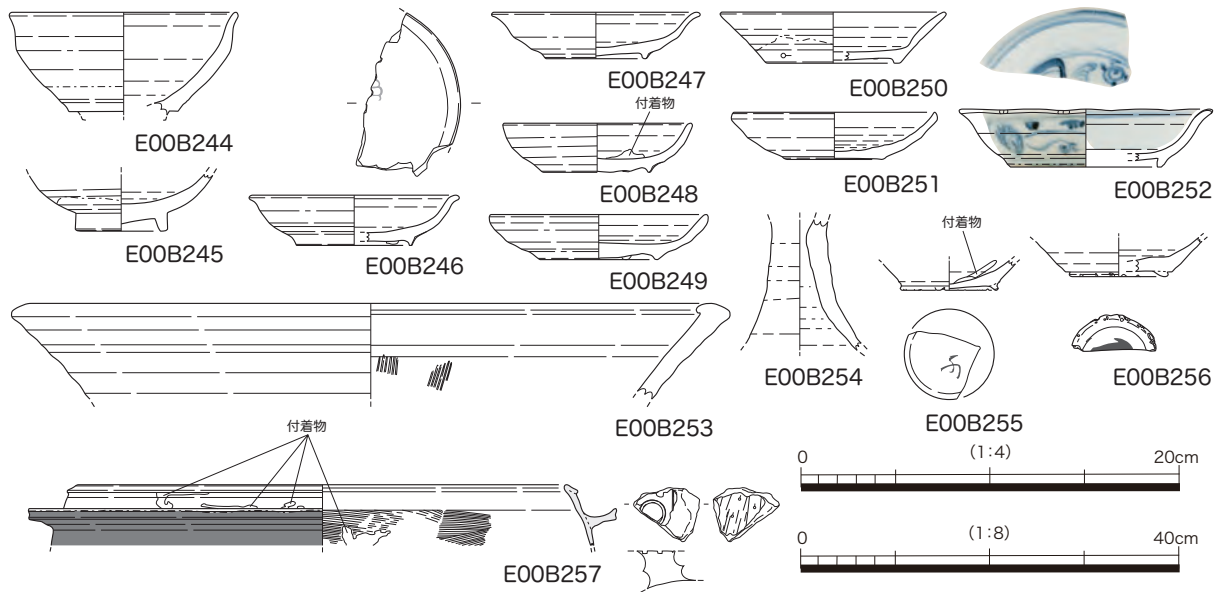
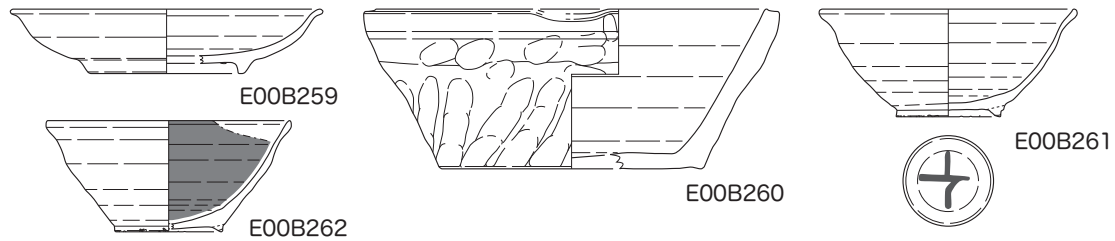


図 66 00B 区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は 1:8)

00B区検出1 (E00B244 ~ E00B258)



00B区検出2 (E00B259 ~ E00B262)

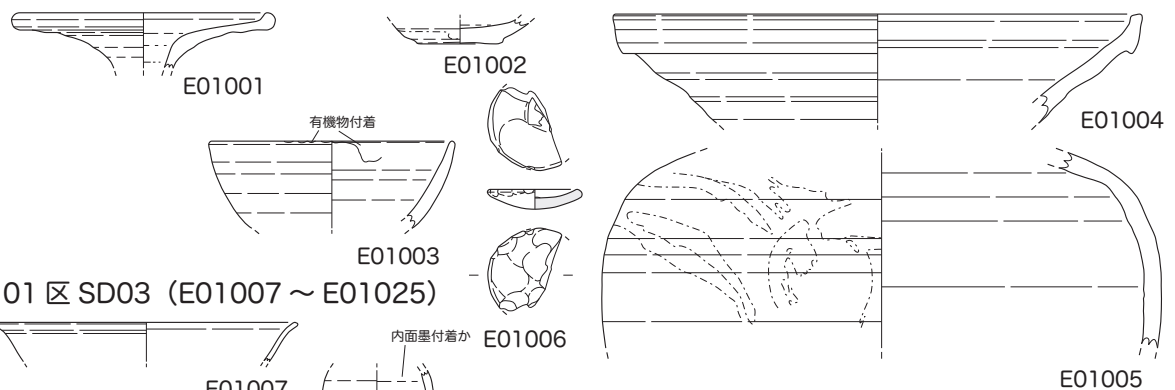


00B区表土掘削等 (E00B263 ~ E00B267)



01区SD01 (E01001)

01区SD02 (E01002 ~ E01006)



01区SD03 (E01007 ~ E01025)

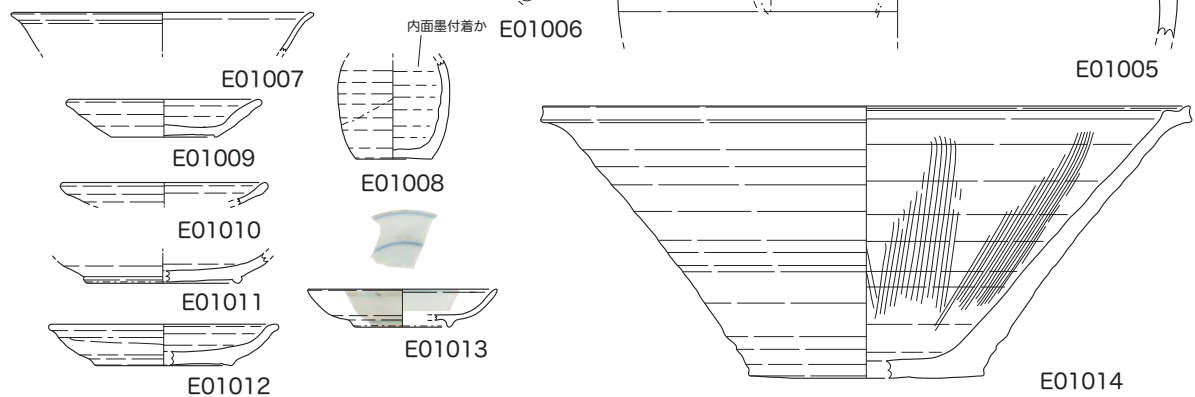


図67 00B区・01区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は1:8)

E01002～E01004は瀬戸・美濃産陶器で、E01002が大窯第1段階の灰釉の縁釉ハサミ皿、E01003が大窯第3段階後半～大窯第4段階前半の灰釉丸碗、E01004が大窯第3段階前半の播鉢、E01005は鉄釉に体部上半部に灰釉の流し掛けがみられる祖母壊茶壺、E01006が土師器小皿で、非ロクロ成形皿3類のものである。

01区SD03 (E01007～E01025)

E01007は口縁端部が端反りになる白磁碗、E01013が磁器の染付小皿である。E01008～E01012・E01014～E01017は瀬戸・美濃産陶器で、時期が判明するものでは大窯第3段階～大窯第4段階末のもので、E01008が焼成不良の灰釉茶入、E01009が灰釉稜皿、E01010が重圈皿、E01011・E01012が長石釉皿、E01014が播鉢、E01015・E01016が鉄釉小壺、E01017が鉄釉徳利の頸部である。E01010の重圈皿は内外面が被熱しており、灯明皿に使われたものと考えられる。E01018・E01019は常滑産陶器で、E01018が甕の底部、E01019が加工円盤である。E01020～E01025は土師器で、E01020～E01023は口縁部が底部から斜め上に直線的に広がるロクロ成形皿2類のもの、E01024がロクロ成形皿3類でやや器高の低い丸皿である。

01区SK01 (E01026)

E01026は瀬戸・美濃産陶器で大窯第4段階後半の長石釉中皿である。

01区SK02 (E01027)

E01027は土師器皿でロクロ成形皿2類のものである。

01区SK05 (E01028)

E01028は瀬戸・美濃産陶器で大窯第3段階～第4段階の灰釉筒型香炉である。

01区SX01 (E01029)

E01029は瀬戸・美濃産陶器で大窯第3段階の天目茶碗である。

01区東壁 (E01030)

E01030は内面に直線文2条、外面体部下半に直線文1条と草本の鉄絵がある磁器碗である。

(5) 17A区・17B区 (図68・図69)

17A区・17B区の出土遺物は、古墳時代前期の土師器や古代の須恵器なども出土するが、主

体となるのは中世から城下町期に属するもので、瀬戸・美濃産陶器では大窯第1段階～大窯第4段階前半のものがある。

17A区006SK (E17001)

E17001は土師器の壺で頸部が太く、短くやや外に立ち上がるもの、中世のものか。

17A区020SK (E17002・E17003)

E17002は青磁の皿で、体部下半で稜をもち、口縁部が外反しておわるもの、E17003は土師器の小皿で、非ロクロ成形皿2類のものである。

17A区033SD (E17004～E17011)

E17004・E17005は瀬戸・美濃産陶器で、E17004が大窯第1段階の灰釉端反皿、E17005は大窯第2段階の灰釉丸皿である。E17006～E17009は土師器皿で、非ロクロ成形皿3類のものである。E17010は瓦当部素縁に三子葉紋・唐草紋・清洲城下町遺跡のH213形式かH313形式で、各三子葉が幅狭の剣菱状のものである。

17A区034SK (E17011)

E17011は、瀬戸・美濃産陶器の播鉢で、大窯第2段階～大窯第3段階のものである。

17B区039SD (E17012～E17014)

E17012～E17014は土師器の小皿で、口縁部に横ナデ調整がみられる非ロクロ成形皿1類のものである。

17B区042SD (E17015～E17017)

E17015・E17016は土師器の皿で、E17015は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がるロクロ成形皿2類、E17016は底部から口縁部が斜めに立ち上がるロクロ成形皿1類で口縁部内面・外面にススが濃く付着しており、灯明皿と思われる。E17017は非ロクロ成形皿1類の土師器の小皿で、口縁部内面に煤が付着することから灯明皿と思われる。

17B区047SD (E17018)

E17018は磁器の染付け小皿である。

17B区060SE (E17019～E17022)

E17019～E17021は瀬戸・美濃産陶器で、E17019が大窯第3段階後半の灰釉内禿皿、E17020が大窯第3段階の灰釉丸皿、E17021が大窯第4段階前半の播鉢である。E17022は土師器の小皿で、口縁部の横ナデ調整のない非ロクロ成形皿3類で、口縁部径5.5cmである。

17B区061SK (E17023)

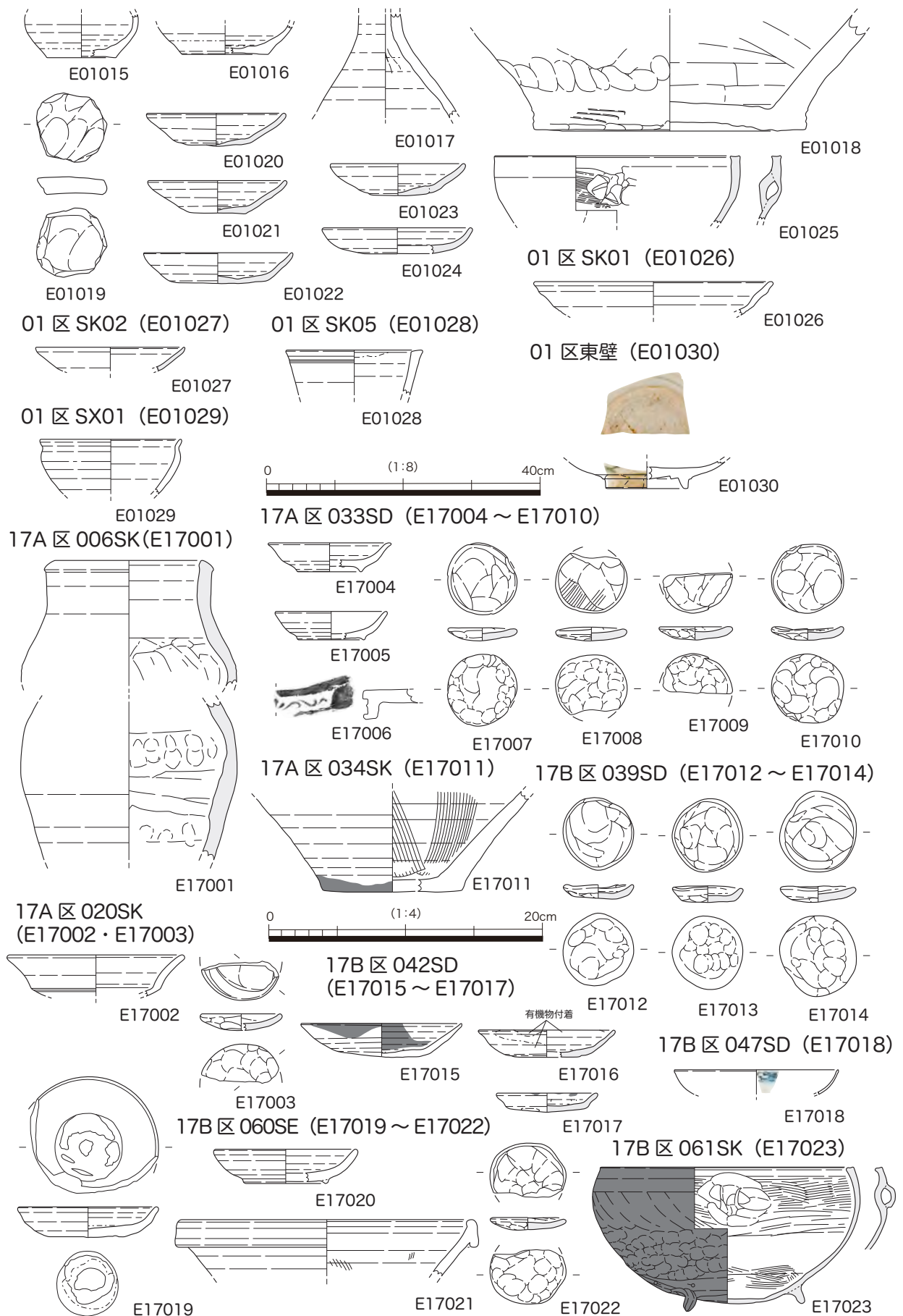
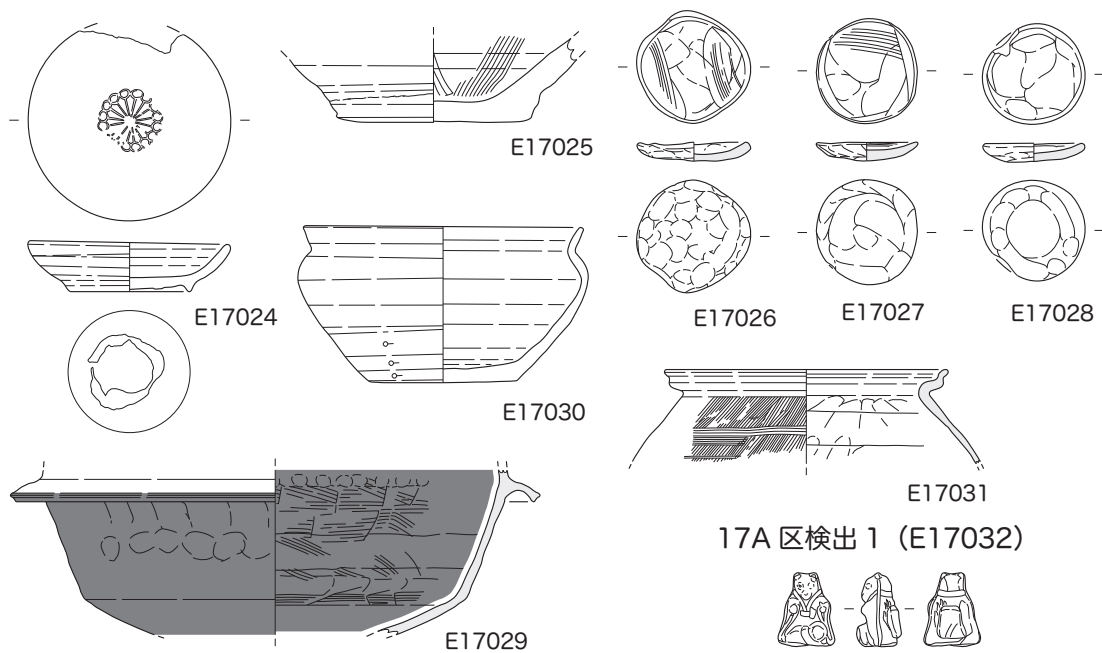
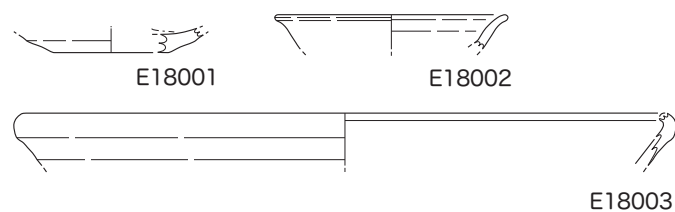


図68 01区・17区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は1:8)

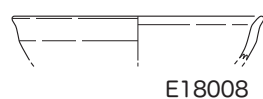
17A区・17B区 063NR (E17024 ~ E17031)



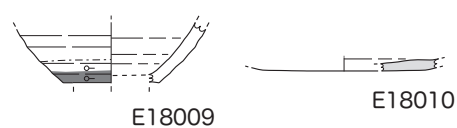
18区 001SD (E18001 ~ E18003)



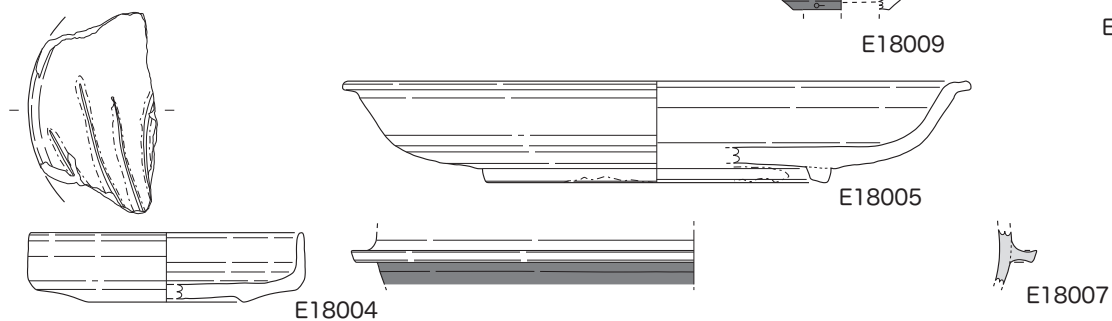
18区 003SD (E18008)



18区 014SK (E18009・E18010)



18区 002SD (E18004 ~ E18007)



18区 016SX (E18015 ~ E18030)

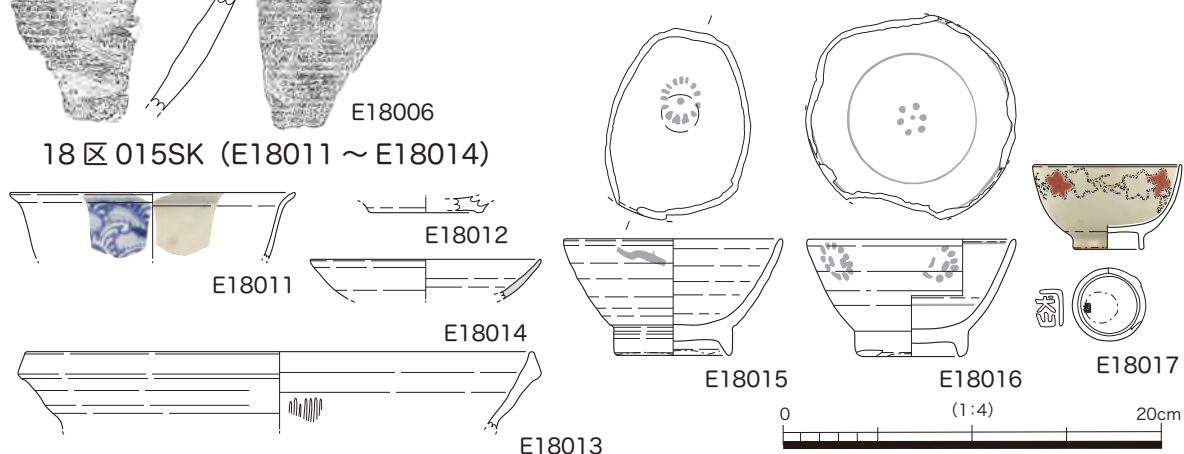


図 69 17区・18区出土土器・陶磁器 (1:4)

E17023 はやや口縁部が内湾する土師器の内耳鍋で、口縁部径 18.5cm である。

17A 区・17B 区 063NR (E17024～E17031)

063NR では、古墳時代前期前半から城下町期のものまでである。E17024～E17025 は瀬戸美濃産陶器で、E17024 が大窯第 2 段階の灰釉丸皿で内面底部に菊花文印刻がある、E17025 が大窯第 1 段階の擂鉢である。E17026～E17029 は土師器で、E17026・E17028 が非ロクロ成形皿 3 類の小皿、E17027 は非ロクロ成形皿 2 類の小皿、E17029 が羽釜である。E17030 は須恵器の鉢で、頸部から口縁部が短く立ち上がるもの、E17031 は S 字状口縁台付甕の口縁部で、体部上半に横ハケ調整が巡るものである。

17A 区検出 (E17032)

E17032 は型作りの土人形で、着物姿の狸であろうか。

(6) 18 区 (図 69～図 80)

18 区の出土遺物は、古瀬戸後 4 期～登窯第 1 小期の城下町期に属するものと登窯第 9 小期～第 11 小期以後の江戸時代後期～近代にかけてのものが主にみられる。また、発掘調査開始時にすでに遺構検出面まで近代以後の掘削が及ぶ箇所も多くみられた。この為、遺構の検出状況から戦国時代の可能性の高い遺構においても、江戸時代後期以後の出土遺物が混じるものがみられた。今回各遺構において報告する出土遺物については、この状況を含めて表現している。

18 区 001SD (E18001～E18003)

E18001 は大窯第 1 段階の鉄釉縁釉挟み皿、E18002・E18003 は大窯第 4 段階後半のもので、E18002 は灰釉腰折皿、E18003 は擂鉢である。

18 区 002SD (E18004～E18007)

E18004 は大窯第 4 段階後半の変わり黄瀬戸向付で内面に鉄釉地に灰釉草本絵が描かれている。E18005 は大窯第 4 段階の口縁部が強く外折する黄瀬戸鉢で口縁部径 32.6cm、E18006 は常滑産甕で鉄釉の釉調から、近代以後のものである。E18007 は土師器の羽付鍋である。

18 区 003SD (E18008)

E18008 は大窯第 1 段階の天目茶碗である。

18 区 014SK (E18009～E18010)

E18009 は大窯第 3 段階の天目茶碗、E18010

は土師器の皿で、ロクロ成形皿 2 類のものである。

18 区 015SD (E18011～E18014)

E18011 は中国産の染付碗で、内面口縁部に直線文 2 条、外面口縁部に直線文 2 条、体部に青海波文がみられる。E18012 は灰釉丸皿で大窯第 2 段階～第 3 段階のもの、E18013 は大窯第 3 段階の擂鉢である。

18 区 016SX (E18015～E18030)

E18015・E18016 は登窯第 11 小期の長石釉葉陶胎鉄絵広東碗で、E18015 は内面底部に十五曜文、外面口縁部に波状文 1 条の鉄絵がみられ、E18016 は内面口縁部に直線文 1 条、体部下半に直線文 1 条、底部に七曜文、外面体部に十四曜文がみられる。E18017 は江戸時代末の磁器で犬山産の灰釉小碗で、外面口縁部に紅葉絵がみられる。E18018 は肥前産磁器の染付丸碗で、外面に草花文、高台部に直線文 2 条、底部に羽の絵がみられる。E18019・E18020 は登窯第 10 小期の磁器で、E18019 は染付広東碗で内面口縁部に直線文 2 条、体部下半直線文 1 条、底部花文、外面体部に二葉文、高台部に直線文 2 条があり、E18020 は染付広東炆器で内面口縁部に直線文 1 条、体部下半に直線文 1 条、底部に六曜文、外面体部に山水図、高台部に直線文 1 条がみられる。E18021 は登窯第 9 小期～第 10 小期の鉄釉ひょうそく、E18022 は瀬戸の復興織部の丸皿、外面口縁部から内面に灰釉後鉄絵の六曜文とオモダカ絵、地面に緑釉があるもの、E18023 は登窯第 11 小期の灰釉練鉢で外面に灰釉に緑釉流し掛け、口縁端部を折り返すものである。E18024 は明治以後の高田徳利で、長石釉の地に鉄釉の「○常商店」「大黒屋」「百拾号」がある。

E18025 は常滑産の火舎で、「く」の字状口縁の体部上半に径 1.5cm 程の通風孔 2 個があり、外面口縁部～内面に煤が付着する。E18026 は加工円盤で常滑産甕の体部片を転用したものである。E18027・E18028 は江戸時代後期以後の土師器の焙烙鍋、E18029 は土師器の受口状口縁部の甕、E18030 は土人形の衣片と思われるものである。

G001・G002 は小型のガラス瓶で、G001 は丸い瓶で体部に「タムシチンキ」・「小林盛太堂」

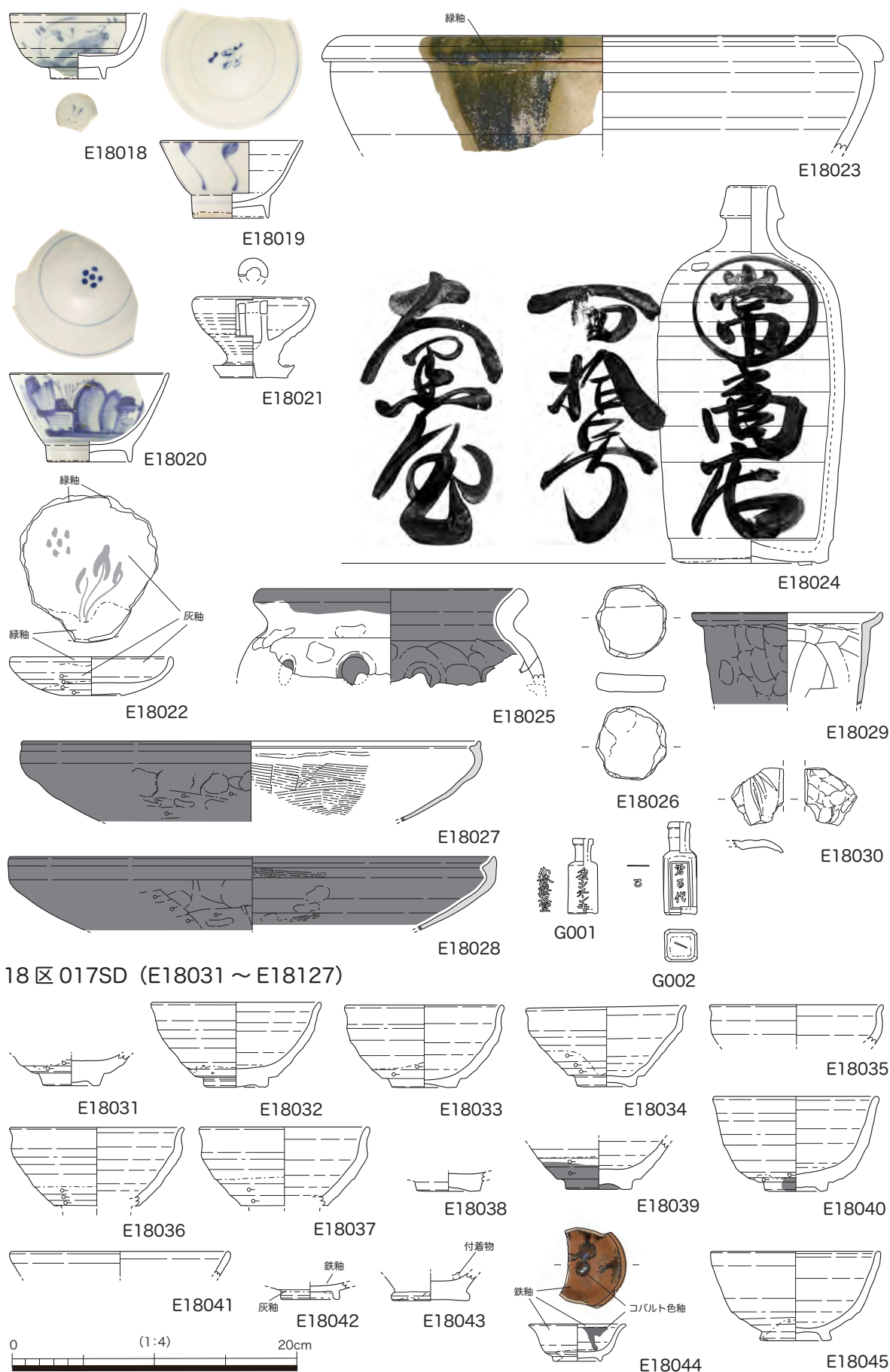


図 70 18区出土土器・陶磁器・ガラス製品 (1:4)

の陽刻がある、G002 は方形の瓶で体部に「君の代」・「乙」、底部に「一」の陽刻がみられる。

18区017SD (E18031～E18127)

E18031 は大窯第3段階後半の灰釉丸碗、E18032～E18039 は天目茶碗でE18034 が大窯第2段階、E18032・E18036・E18038 が大窯第3段階後半、E18035 が大窯第3段階、E18039 が大窯第4段階前半、E18033・E18037 が大窯第4段階後半のものである。E18040・E18041 は灰釉丸碗で、E18040 は大窯第3段階後半のものである。E18042 は登窯第9小期の湯呑で、内面鉄釉に外面灰釉のものである。E18043 は大窯第1段階の鉄釉仏餉具、E18044 は大窯第3段階前半の鉄釉小杯で内・外面に鉄釉、内面に灰釉の流し掛けがみられる。E18045 は唐津産の緑釉丸碗、E18046 は大窯第3段階～第4段階の鉄釉耳付水注、E18047 は大窯第3段階の鉄釉水滴である。

E18048 は大窯第1段階の緑釉挟み皿、E18049 は大窯第4段階前半の輪禿皿、E18050 は灰釉端反皿か丸皿、E18051 は大窯第4段階後半の長石釉端反皿、E18052・E18058・E18059 は灰釉内禿皿で、E18052 が大窯第3段階後半、E18058 が大窯第4段階後半のもの、E18059 が大窯第4段階前半のものである。E18053～E18055 は灰釉丸皿で、E18053・E18054 は大窯第4段階前半のもの、E18055 は大窯第2段階～大窯第3段階のもの、E18056・E18057 は鉄釉稜皿で、E18056 が大窯第3段階のもの、E18057 が大窯第3段階前半のものである。E18060 は美濃産の長石釉皿で登窯第7小期のもので、内面に鉄釉がみられる。E18061・E18062 は大窯第4段階の重圈皿である。E18063 は古瀬戸中4期の灰釉折縁深皿、E18064 は古瀬戸後4期新段階の灰釉腰折皿である。E18065～E18067 は美濃産染付皿の登窯第10小期のもので、E18065 は磁器皿で外面に草木絵、内面に不明の絵、E18066 は炆器小皿で内面口縁部に直線文1条、底部に草木絵、外面口縁部に草木絵、E18067 は磁器小皿で内面口縁部に直線文1条、底部に直線文と山水図、外面口縁部と高台際に各直線文1条がみられる。

E18068 は瓦質陶器の鉢で外面に煤が付

着するもの、E18069～E18076 は播鉢で、E18069・E18070 は大窯第3段階～第4段階、E18071 は大窯第1段階、E18072 は大窯第3段階後半、E18073・E18074 は大窯第4段階前半、E18075 は大窯第4段階後半、E18076 は古瀬戸後4期新段階のものである。

E18077・E18078・E18080・E18083～E18086 は鉄釉口広有耳壺で、E18077・E18083～E18085 が大窯期のもの、E18078・E18086 が古瀬戸後4期新段階、E18080 が古瀬戸後4期のものである。E18079 は江戸時代の灰釉壺である。E18081・E18082 は江戸時代後期の美濃産の鉄釉壺、E18087 は江戸時代後期の瀬戸産の鉄釉半胴、E18088 は江戸時代後期の鉄釉甕である。

E18089 は東濃産山茶碗で脇之島窯式のもの、E18090・E18091 は加工円盤で、E18090 は江戸時代後期の灰釉壺の体部片の転用したもの、E18091 は常滑産甕の体部片を転用したもので側面を部分研磨している。

E18092～E18096 は土師器のロクロ成形皿で、E18092・E18093 はロクロ成形皿2類、E18094・E18095 はロクロ成形皿3類に分類できる、E18093 は口縁部に煤が付着していることから灯明皿としての使用が推定できる。E18097～E18106 は土師器の小皿で、E18097 は非ロクロ成形皿1類、E18098～E18105 は非ロクロ成形皿3類、E18106 は非ロクロ成形皿2類で底部が丸くなる。

E18107～E18112 は土師器の内耳鍋で、内面に煤やコゲ、外面に煤が付着する。E18113～E18118 は土師器の茶釜形鍋でE18118のように内面に煤が付着するものもあるが、他は内面は煤の付着があまりなく、外面に煤の付着がみられる。

E18119 は丸瓦、E18120 は平瓦、E18121 は道具瓦と思われるものである。E18122・E18123 は常滑産火舎でE18122 は体部上半に円形孔が廻り、一對の把手が付くもの、底部にも穿孔があり、大きな楕円形の透かしがある脚台がある、内面は煤の付着が顕著にみられる。E18124・E18125・E18127 は江戸時代後期の美濃産陶器で、E18124 は灰釉碗、E18125 は灰釉香炉、E18127 は鉄釉碗である。E18126

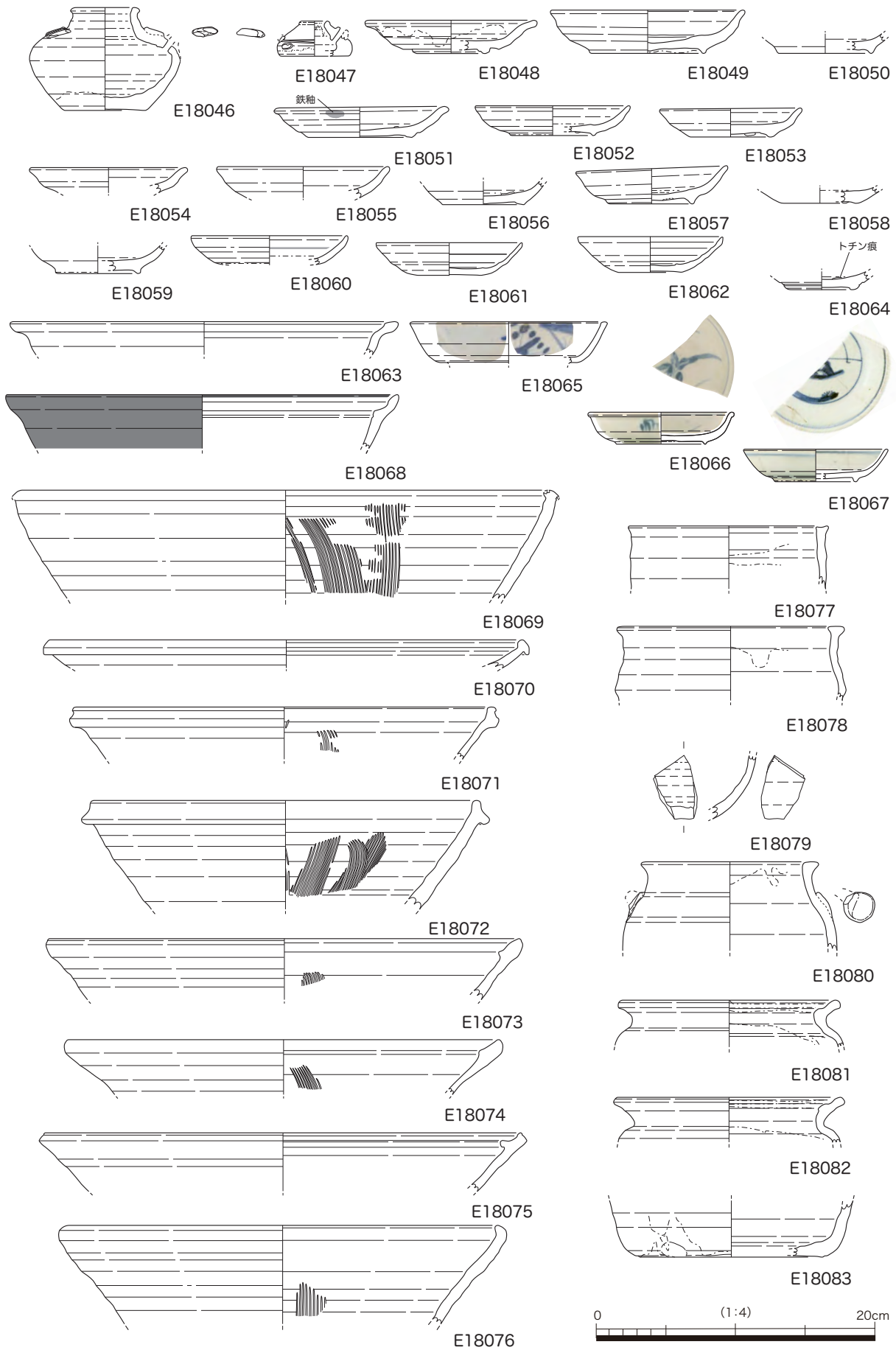


図 71 18区出土土器・陶磁器 (1:4)

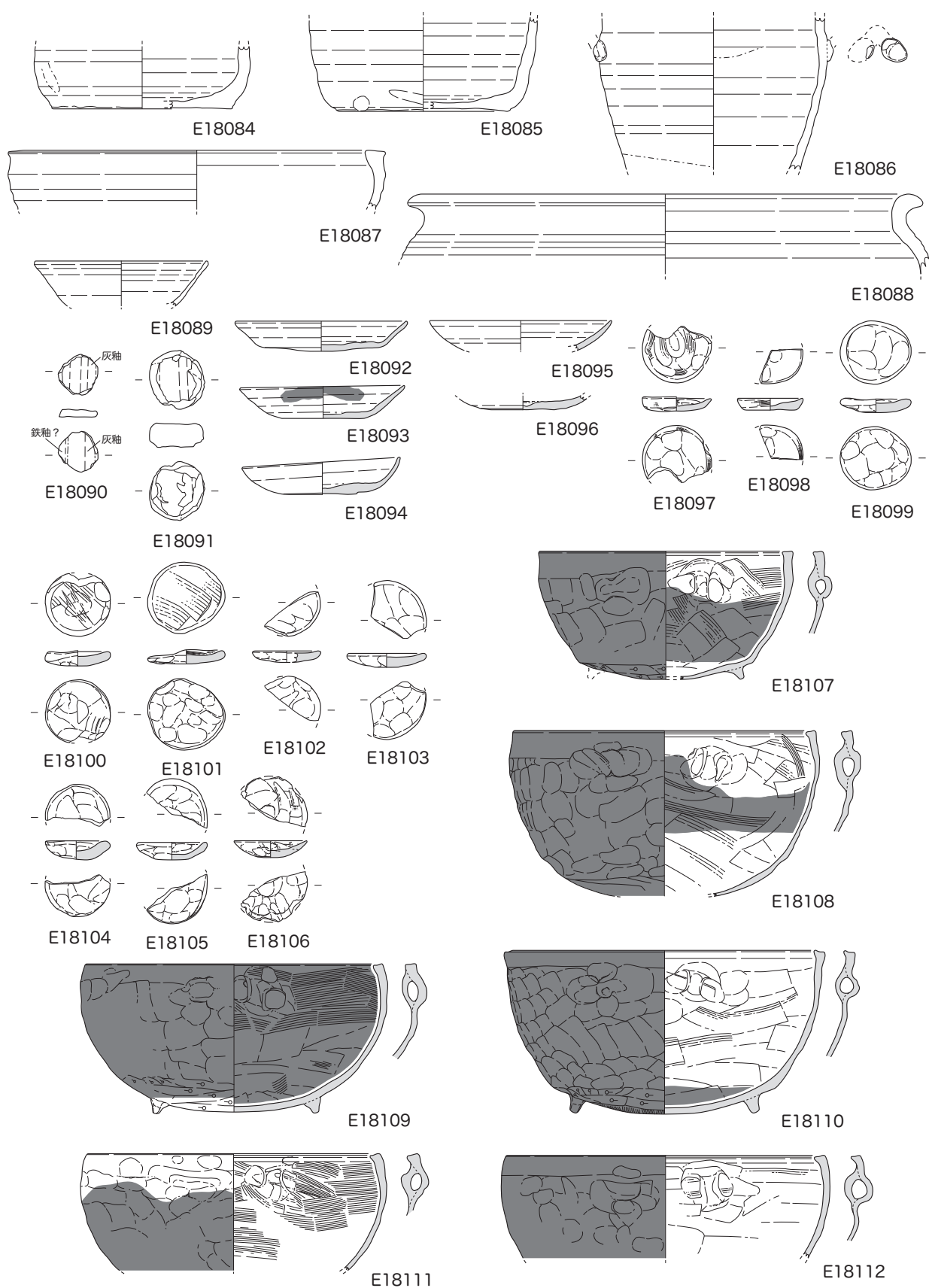


図 72 18区出土土器・陶磁器 (1:4)

は磁器の鉄釉碗で新しい時期のものである。

18区019SK (E18128～E18129)

E18128は江戸時代後期の灰釉碗、E18129は土師器の小皿で、ロクロ成形皿1類のものである。

18区021SD (E18130～E18148)

E18130・E18131は天目茶碗で、E18130は大窯第4段階後半、E18131は大窯第4段階前半のものである。E18132は江戸時代末の染付の磁器碗、E18133は江戸時代前期の鉄釉茶入・肩付、E18134は大窯第4段階前半の灰釉丸皿、E18135は大窯第4段階後半の長石釉鉄絵丸皿で、内面底部に草本文と格子文列の鉄絵がみられる。E18136は大窯第4段階前半の灰釉折縁皿、E18137は大窯第4段階後半の長石釉丸碗、E18138は大窯第3段階～第4段階の播鉢、E18139・E18140は加工円盤で、E18139は大窯第3段階後半の天目茶碗の底部を転用したもの、E18140は大窯期の灰釉瓶の体部片を転用したものである。

E18141・E18142は土師器の皿で、E18141はロクロ成形皿3類で、外面口縁部から内面に掛けて煤が付着しており、灯明皿としての使用が考えられるもの。E18142は非ロクロ成形皿1類のものである。E18143～E18148は土師器の小皿で、E18143が非ロクロ成形皿1類、E18144～E18146が非ロクロ成形皿2類、E18147・E18148が非ロクロ成形皿3類のものである。

18区022SE (E18149～E18153)

E18149は大窯第3段階後半の灰釉丸碗、E18150は大窯第4段階後半の長石釉丸碗である。E18151は大窯第4段階後半の長石釉端反皿、E18152は大窯第2段階～第3段階の播鉢、E18153は常滑産甕である。

18区023SX (E18154～E18159)

E18154は大窯第3段階前半の灰釉丸皿、E18155は大窯第4段階後半の長石釉鉄絵丸皿で内面口縁部に直線文2条とその間に草本文、底部に直線文2条と鉄絵がみられる。E18156は大窯第4段階後半の播鉢、E18157は加工円盤で、大窯第4段階の天目茶碗の底部片を転用したものである。E18158は砲弾形の製塩土器、E18159は土師器の皿で内面口縁部から外面に煤が付着しており灯明皿として転用されたものの、非ロクロ成形皿1類に分類できる。

18区024SD (E18160～E18161)

E18160は大窯第1段階の灰釉端反皿、E18161は大窯第3段階前半の鉄釉丸皿である。

18区028SD (E18162)

E18162は青磁の蓮弁文碗である。

18区029SD (E18163)

E18163は東濃産の山茶碗で、大洞東・脇之島窯式のものである。

18区030SK (E18164・E18165)

E18164は大窯第1段階の灰釉端反皿、E18165は土師器の皿でロクロ成形皿2類のものである。

18区031SE (E18166～E18169)

E18166は大窯第4段階の黄瀬戸腰折皿、E18167は大窯第3段階前半の灰釉輪禿皿、E18168は近代以後の可能性のある白磁皿である。E18169はロクロ成形の土師器の皿である。

18区032SD (E18170・E18171)

E18170は江戸時代の可能性のある天目茶碗、E18171は東濃産山茶碗で窯洞窯式のものである。

18区034SD (E18172・E18173)

E18172は大窯第3段階後半の灰釉丸皿、E18173は大窯第1段階の灰釉皿である。

18区040SD (E18174～E18183)

E18174・E18175は天目茶碗でE18174が大窯第4段階前半のもの、E18175が大窯第3段階後半のものである。E18176は大窯第4段階の黄瀬戸向付で内面底部に草花文の線刻があり、灰釉の地に緑釉が落とされている。E18177は大窯第2段階の灰釉丸皿、E18178は大窯第4段階前半の黄瀬戸中皿、E18179は東濃産の山茶碗で生田窯式のもの、E18180・E18181は播鉢で、E18180は大窯第4段階前半の播鉢である。E18182は常滑産甕、E18183はロクロ成形の土師器の皿である。

18区041SD (E18184～E18189)

E18184は口縁部が外折する青磁の碗で内面に外面に花卉文の線刻文がみられる。E18185は大窯第4段階前半の鉄釉六角杯、E18186は大窯第4段階の長石釉鉄絵丸碗で、外面体部に直線文と花卉文の鉄絵がみられる。E18187は白磁の端反皿、E18188は加工円盤で常滑産甕の体部片を転用したものである。E18189～

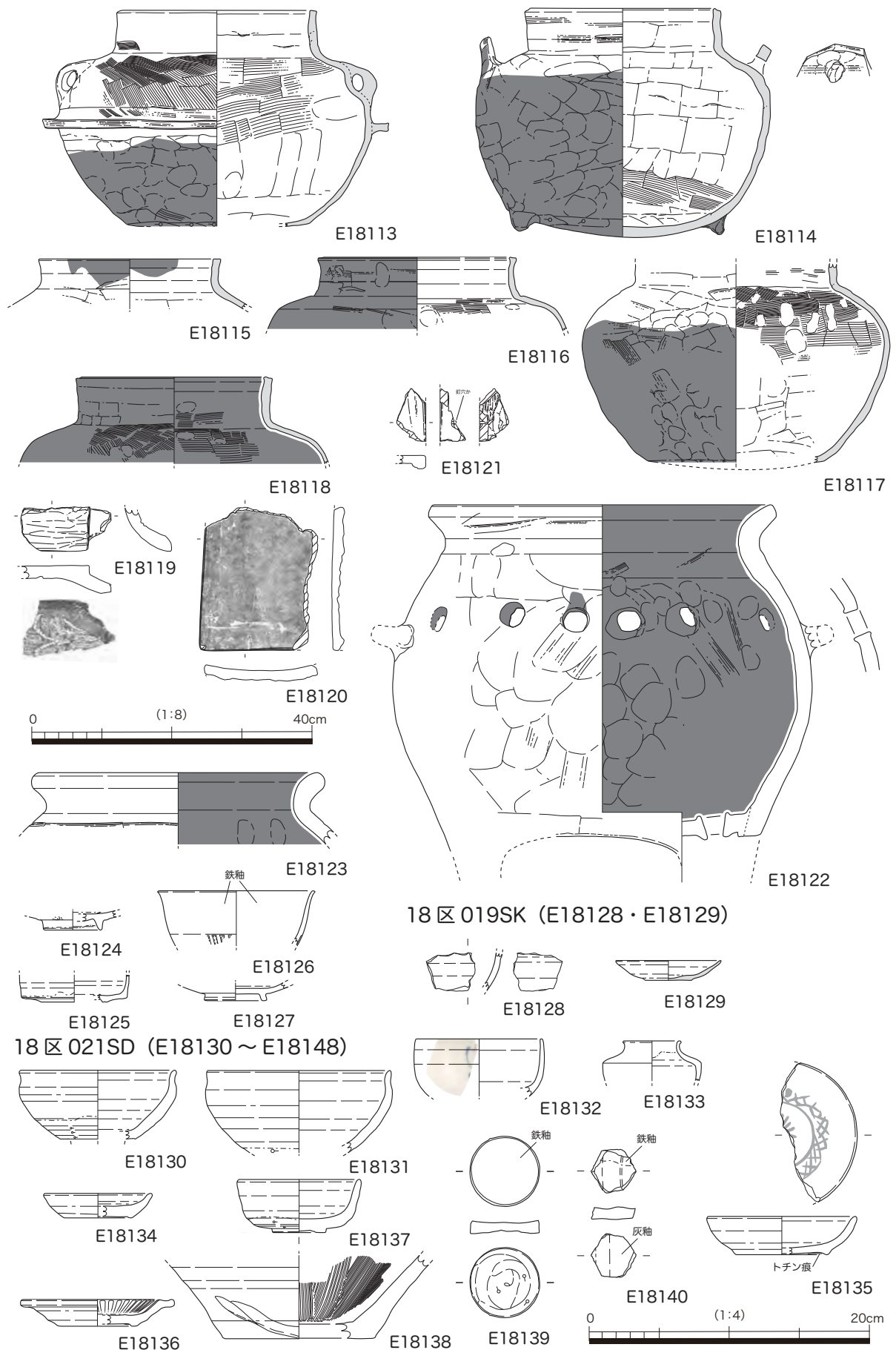


図73 18区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は1:8)

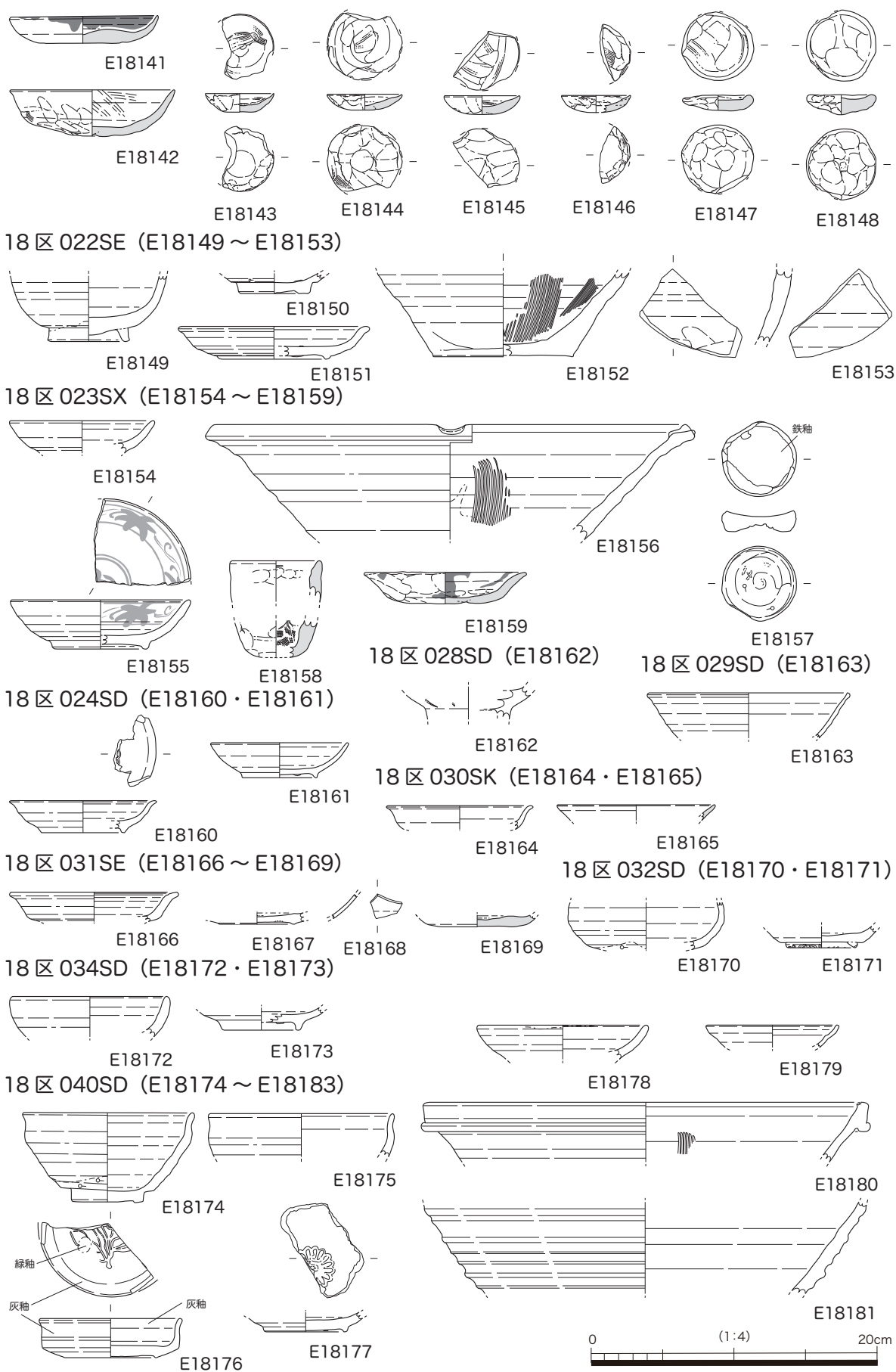


図 74 18区出土土器・陶磁器 (1:4)

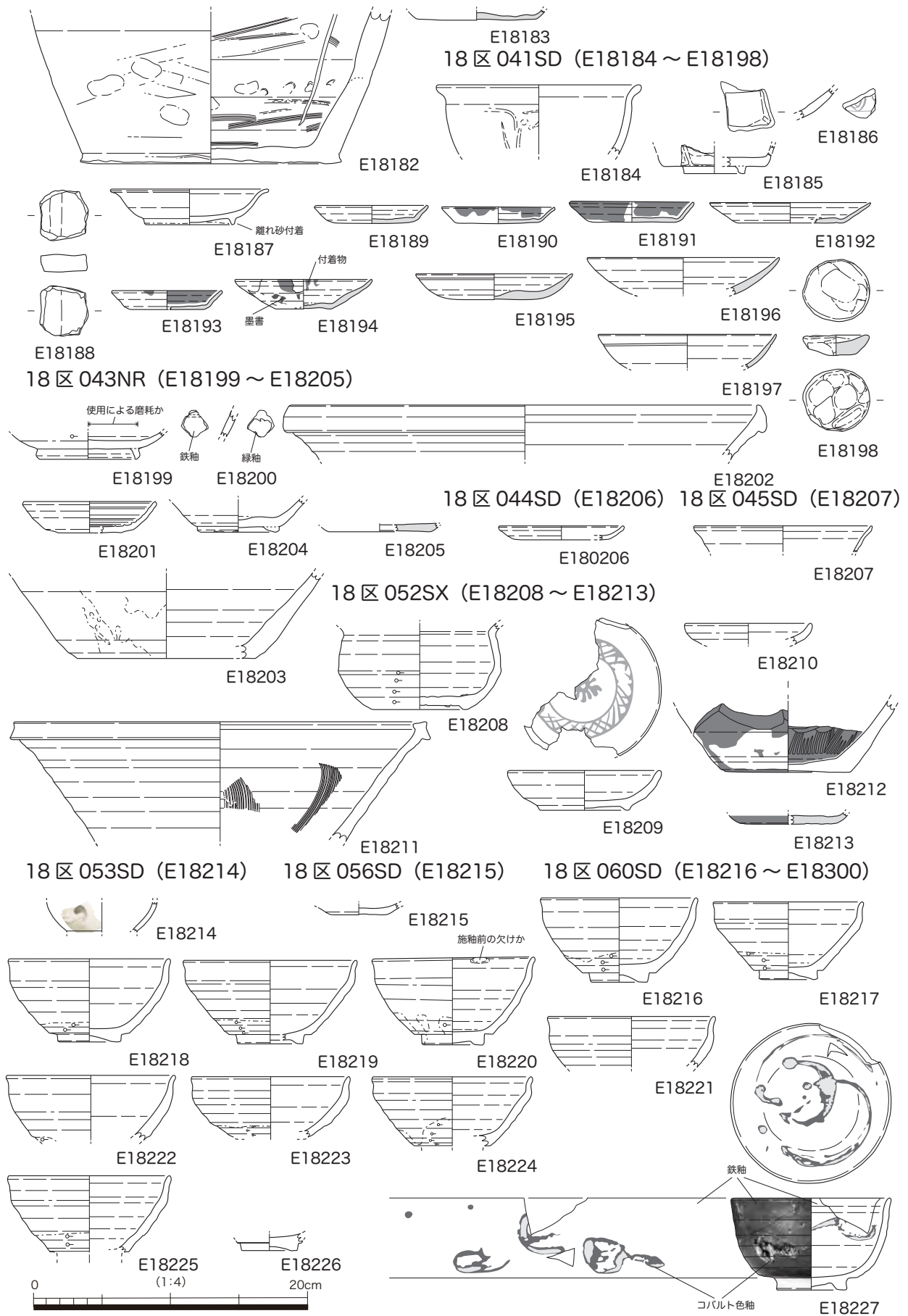


図75 18区出土土器・陶磁器 (1:4)

E18198は土師器の皿で、E18189～E18194はロクロ成形皿2類、E18195～E18197はロクロ成形皿3類、E18198は非ロクロ成形皿3類の小皿で、E18189～E18191・E18193は小皿、E18192・E18194～E18197は皿である。E18190・E18191・E18193・E18194は内・外面に煤の付着がみられ、灯明皿としての使用が推定されるもの、またE18194の外面体部に墨書がみられる。

18区 043NR (E18199～E18205)

E18199は折戸53号窯式古段階の灰釉陶器の碗である。E18200は楽焼の碗で、内面鉄釉、外面に緑色釉である。E18201は大窯第1段階の重圈皿、E18202は大窯第2段階の擂鉢である。E18203は鉄釉の祖母懷茶壺、E18204は尾張産山茶碗で尾張6型式のもの、E18205はロクロ成形の土師器の皿である。

18区 044SD (E18206)

E18206は東濃産の小皿である。

18区 045SD (E18207)

E18207は東濃産の山茶碗で大畑・大洞窯式のものである。

18区 052SX (E18208～E18213)

E18208は大窯第4段階の黄瀬戸の唾壺、E18209～E18211は大窯第4段階後半のもので、E18209は長石釉鉄絵丸皿で内面口縁部に直線文1条、底部に直線文2条とその間に斜格子文と花文の鉄絵がみられる、E18210は長石釉丸皿、E18211は擂鉢である。E18212は古瀬戸後4期新段階～大窯第1段階の擂鉢、E18213は土師器の皿でロクロ成形皿2類のものである。

18区 053SD (E18214)

E18214は近代以後の染付碗である。

18区 056SD (E18215)

E18215は江戸時代後期の瀬戸産の炆器小皿である。

18区 060SD (E18216～E18300)

E18216～E18226は天目茶碗で、E18217・E18221・E18225は大窯第2段階、E18224は大窯第3段階前半、E18216・E18218・E18220・E18223は大窯第3段階後半、E18222・E18226は大窯第3段階、E18219は大窯第4段階前半である。E18227は登窯第1小期の灰流し丸碗で、

内面鉄釉にコバルト色釉巴流し掛け、外面鉄釉にコバルト色釉流れ玉文がみられる。E18228は灰釉筒形碗で大窯第4段階前半のもの、E18229は鉄釉小碗で大窯第3段階後半のもの、E18230は鉄釉小天目茶碗で、大窯第3段階のもの、E18231は白磁の端反碗である。

E18232は大窯第1段階の鉄釉耳付小瓶、E18233は大窯第4段階前半の灰釉茶入、E18234は大窯第3段階～大窯第4段階のエンゴロである。

E18235～E18246は瀬戸・美濃産陶器の皿で、E18235が大窯第3段階の灰釉端反皿、E18236～E18240は灰釉丸皿で、E18239・E18240が大窯第2段階、E18236が大窯第3段階後半、E18237・E18238が大窯第3段階である。E18241は鉄釉丸皿で大窯第3段階後半のもので、E18242・E18243は大窯第4段階前半の灰釉端反折縁皿、E18244～E18246・E18273は重圈皿で、E18246・E18273が大窯第1段階のもの、E18244が大窯第2段階、E18245が大窯第3段階のものである。

E18247は土師器の皿でロクロ成形皿3類に分類できる、内面に煤が付着しており、灯明皿として使われた可能性が高い。E18248～E18250は白磁の端反皿である。

E18251～E18255は擂鉢で、E18254は古瀬戸後4期、E18251は大窯第1段階、E18255は大窯第1段階～第2段階、E18253は大窯第3段階前半、E18252は大窯第3段階後半である。

E18256は江戸時代後期の美濃産灰釉徳利で、混入の可能性が高いものである。E18257は常滑産鉢、E18258は尾張産の山茶碗で尾張4型式のもの、E18259・E18260は加工円盤で、E18259は土師器のロクロ成形皿を、E18260は土師器の鍋体部片を転用したものである。

E18261～E18266・E18268～E18272・E18274・E18275は土師器のロクロ成形の皿で、E18261～E18266はロクロ成形皿2類、E18268～E18272はロクロ成形皿3類のものである、E18275は内面に煤が付着しており、灯明皿の使用が推定される。E18267は土師器の小皿でロクロ成形皿3類、E18276～E18282は土師器の非ロクロ成形の小皿で、E18276～E18278は非ロクロ成形皿1類、

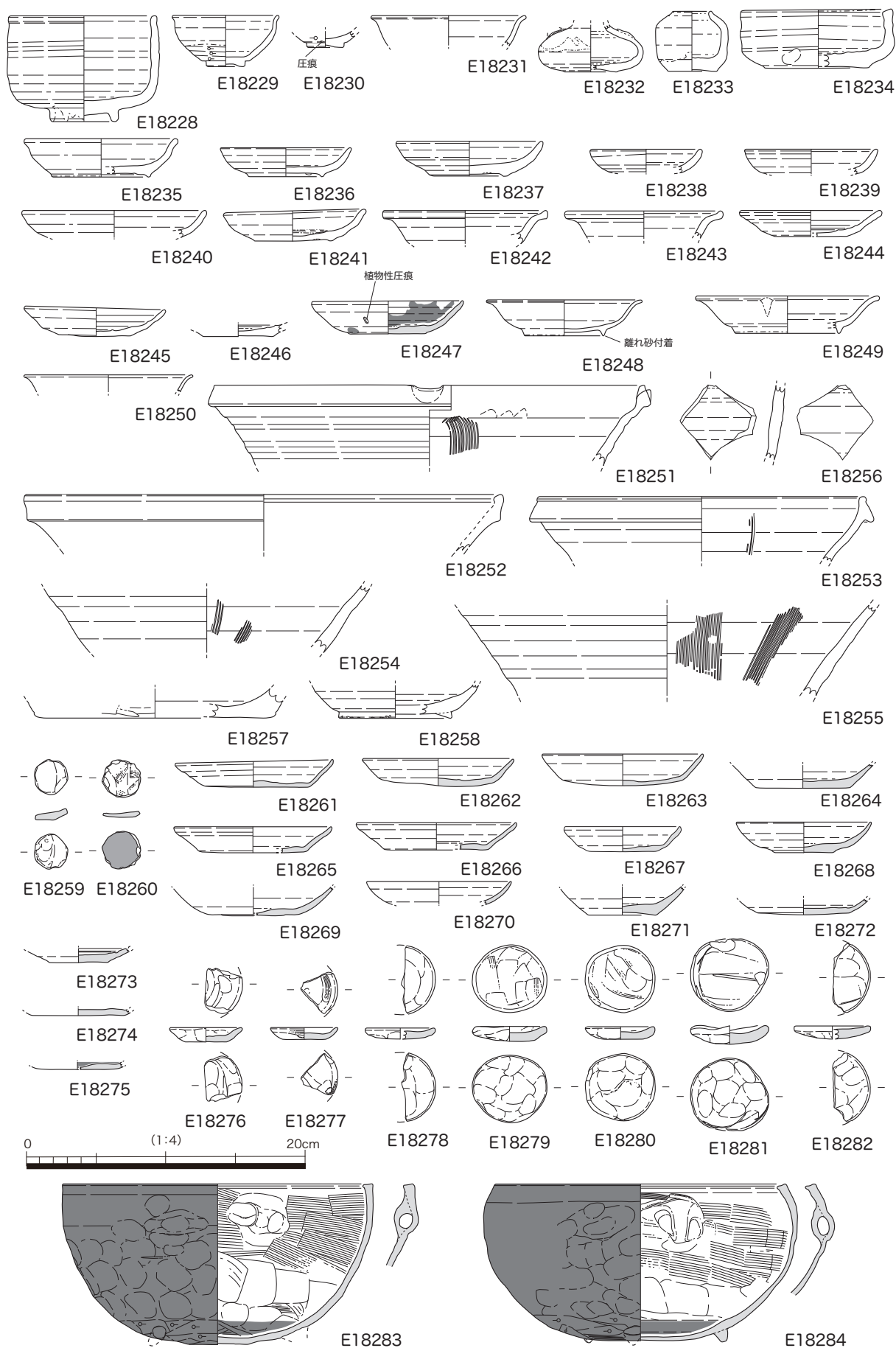


図 76 18区出土土器・陶磁器 (1:4)

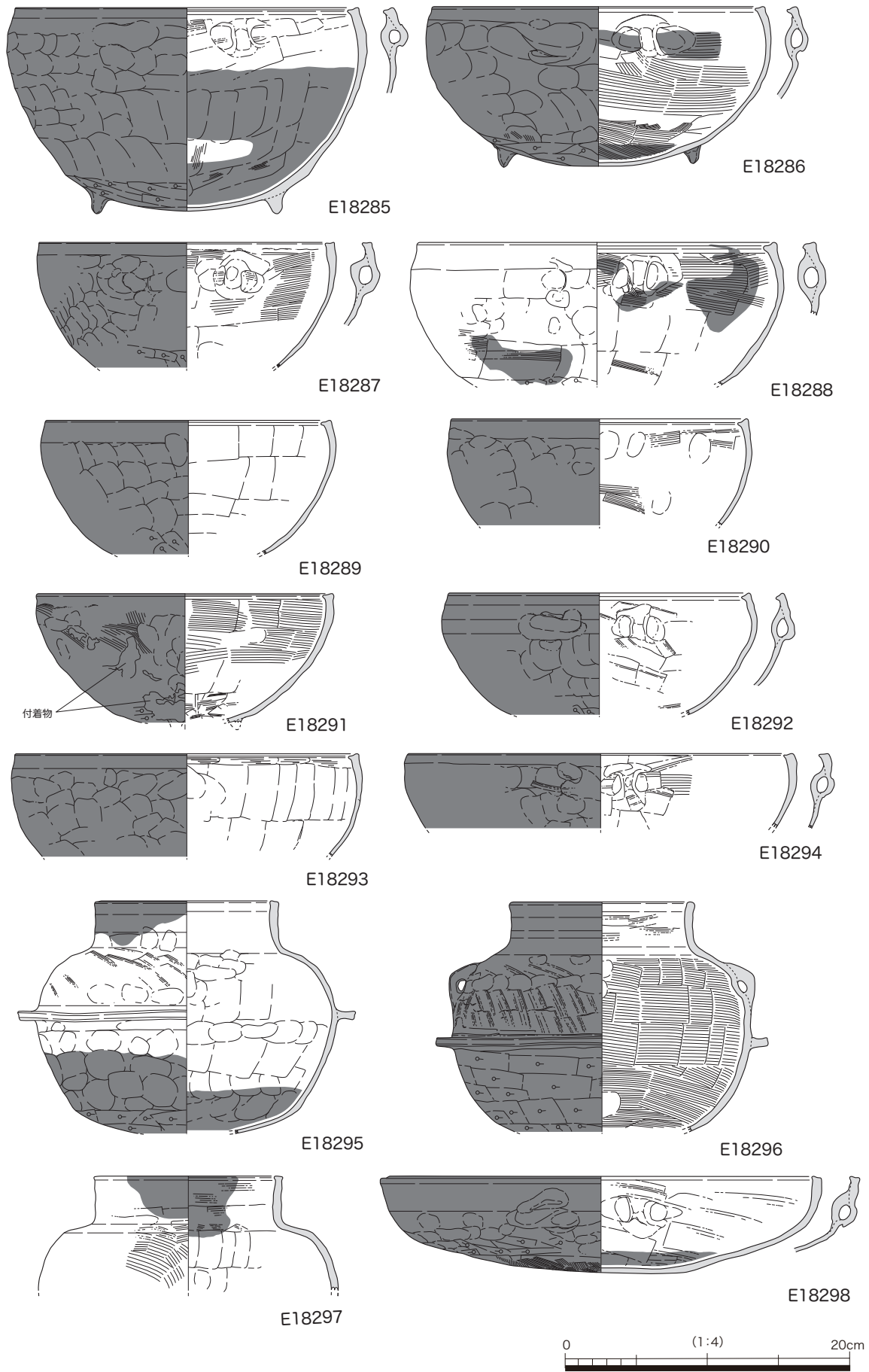


图 77 18区出土土器 (1:4)

E18279～E18282は非ロクロ成形皿3類のものである。

E18283～E18300は土師器の鍋で、E18283～E18294・E18300は内耳鍋、E18295・E18296は羽付茶釜形鍋、E18297は茶釜形鍋、E18298・E18299は焙烙鍋でE18299の焙烙鍋には内耳が付く。外面には煤が付着する。

18区062SK (E18301・E18302)

E18301・E18302は土師器の皿で、ロクロ成形皿2類のもの、E18301は外面口縁部から内面にかけて煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられ、底部に焼成後の穿孔がみられる。

18区064SD (E18303～E18307)

E18303は古瀬戸後4期新段階の天目茶碗、E18304は大窯第1段階の灰釉丸碗、E18305は大窯第4段階前半の鉄釉折縁大皿、E18306は古瀬戸後4期新段階の播鉢である。

18区066SD (E18308～E18309)

E18308は灰釉丸皿か端反皿で、E18309は大窯第3段階の鉄釉大皿である。

18区073SK (E18310～E18314)

E18310・E18311は天目茶碗で、E18310が大窯第3段階後半、E18311が大窯第3段階～第4段階のものである。E18312は大窯第1段階の灰釉端反皿、E18313は土師器の皿で、ロクロ成形皿3類のもの、内面に煤が付着しており、灯明皿と使用されたものと思われる。E18314は平瓦の隅部分である。

18区075SK (E18315～E18325)

E18315は大窯第4段階の天目茶碗、E18316は大窯第4段階後半の長石釉鉄絵丸碗で、外面口縁部に垂下直線文の鉄絵がみられる。E18317は登窯第1小期の長石釉小碗、E18318は大窯第3段階の鉄釉内海茶入、E18319は大窯第4段階後半の長石釉端反皿、E18320は大窯第4段階後半の長石釉菊ひだ皿である。E18321は中国景德鎮産の染付皿で内面に樹木図、外面体部に唐草文と直線文1条がみられる。E18322は常滑産の甕か、外面に煤が付着している、E18323・E18324はロクロ成形の土師器の皿で、E18323はロクロ成形皿2類のものである。E18325は土製品の鈴である。

18区077SD (E18326)

E18326は大窯第4段階前半の重圈皿である。

18区079SD (E18327～E18328)

E18327・E18328は常滑産の甕で、E18327は体部片、E18328は江戸時代後期以後の罌部分である。

18区083SE (E18329～E18352)

E18329は大窯第4段階前半の天目茶碗、E18330は大窯第4段階後半の長石釉碗である。E18331は古瀬戸後4期の灰釉香炉、E18332・E18333は大窯第4段階後半の長石釉端反皿、E18334は大窯第3段階の灰釉丸皿、E18335・E18336は大窯第4段階後半のもので、E18335が長石釉丸皿、E18336が長石釉鉄絵菊折縁ひだ皿で内面口縁部に草葉文、内面底部に草花文の鉄絵がみられる。E18337は江戸時代の灰釉皿、E18338は登窯第1小期の長石釉皿、E18339は大窯第4段階後半の長石釉菊皿、E18340は古瀬戸後3期～後4期古段階の灰釉直縁大皿である。E18341・E18342は播鉢で、E18341が大窯第4段階後半、E18342が大窯第3段階～第4段階のものである。E18343は備前産の徳利で、外面は鉄釉に灰釉の流し掛けがみられる、外面底部に線刻が残る。

E18344は常滑産甕で、内面にコゲが付着し、外面に煤の付着がみられる。E18345・E18346は加工円盤で、E18345は登窯第1小期の長石釉皿底部片を、E18346は大窯期の播鉢体部片を転用しており、E18345は側面が研磨されている。E18347・E18348は土師器の皿でロクロ成形皿3類のものである、E18348は内面に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。E18349は土師器の小皿で、非ロクロ成形皿3類の板状のものである。E18350～E18352は瓦で、E18350は丸瓦、E18351は平瓦、E18352は道具瓦である。

18区084SE (E18353～E18358)

E18353は大窯第1段階の天目茶碗の底部片、E18354は大窯第3段階の灰釉丸皿、E18355は大窯第1段階～第2段階の播鉢、E18356は土師器の小皿で非ロクロ成形皿3類のもの、E18357は土師器の非ロクロ成形の皿、E18358は土師器の茶釜形鍋である。

18区087SX (E18359・E18360)

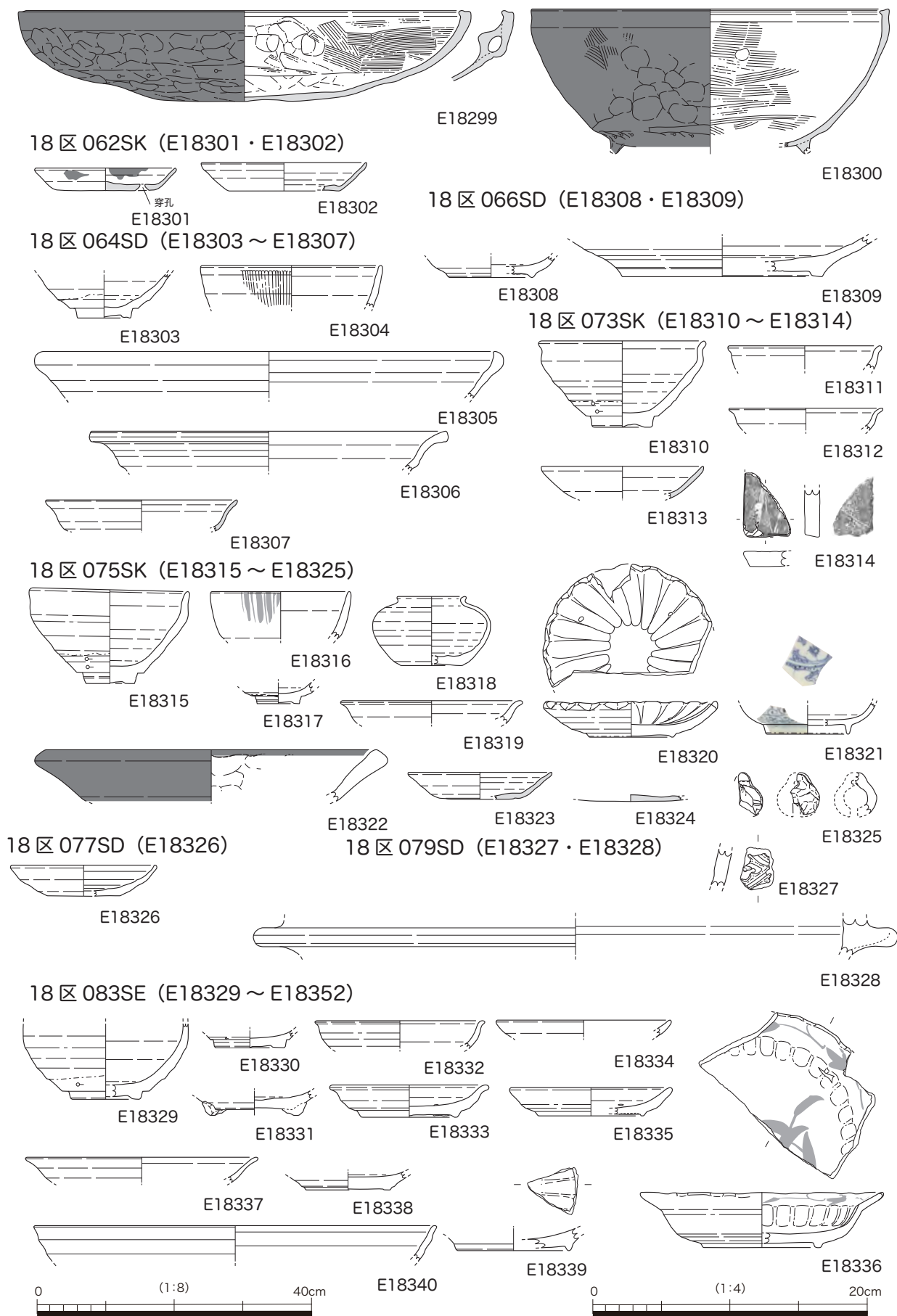


図 78 18区出土土器・陶磁器 (1:4)

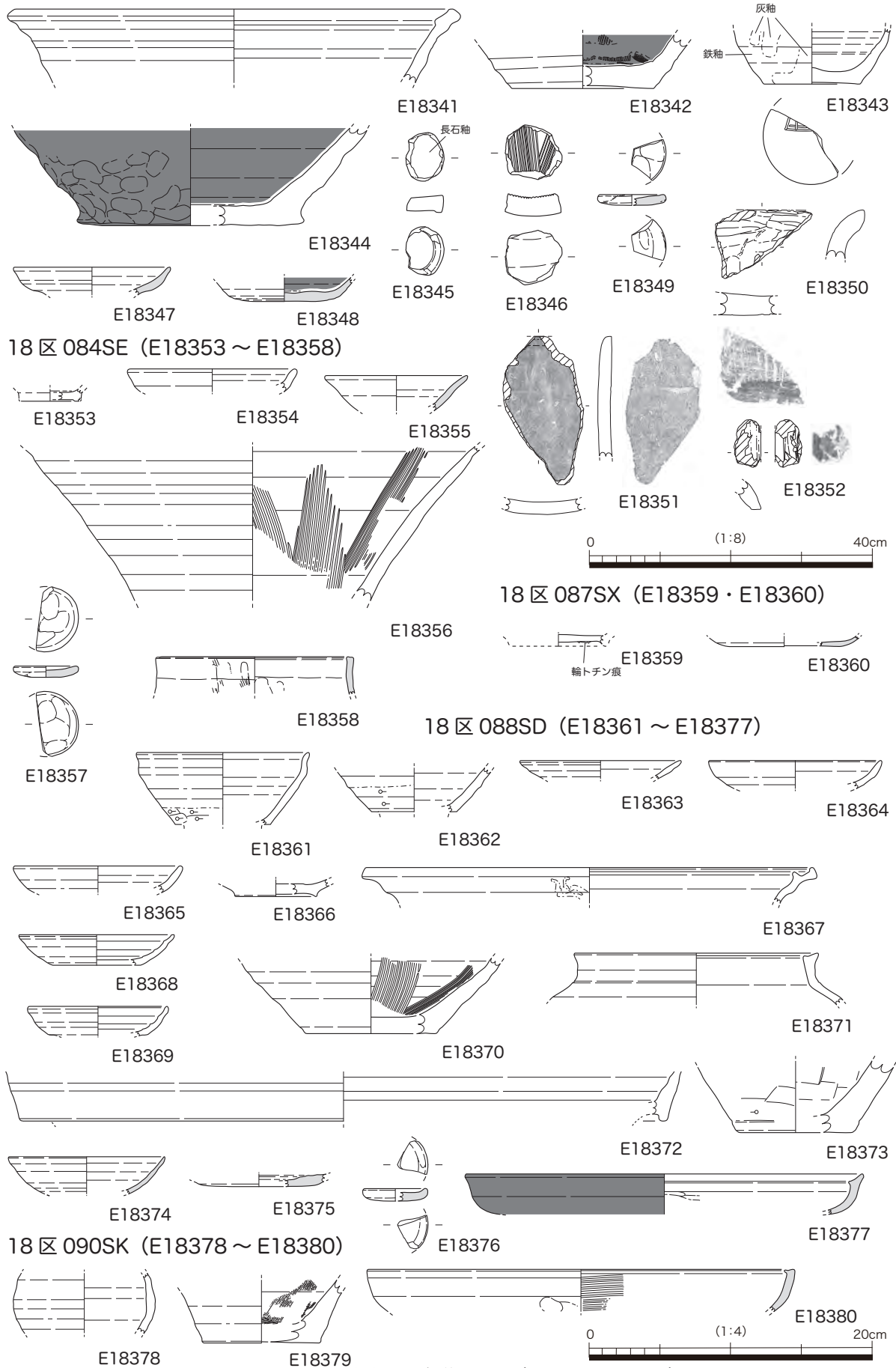


図79 18区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は1:8)

E18359は大窯第3段階後半の灰釉内禿皿、E18360は土師器の皿でロクロ成形皿2類のものである。

18区088SD (E18361～E18377)

E18361・E18362は天目茶碗で、E18361が大窯第2段階、E18362が大窯第1段階～第2段階のものである。E18363は内・外面が被熱しており、灰釉丸皿か、E18364は大窯第3段階の灰釉丸皿、E18365は大窯第3段階の鉄釉丸皿、E18366は大窯第3段階後半の灰釉内禿皿、E18367は古瀬戸第4期新段階の灰釉折縁卸目付大皿である。E18368・E18369は重圈皿で、E18368が大窯第3段階、E18369が大窯第2段階のものである。E18370は大窯第2段階の搦鉢、E18371は大窯期の鉄釉土瓶、E18372は常滑産の甕で中野10型式のもの、

E18373は常滑産の尾張型鉢である。E18374～E18377は土師器で、E18374はロクロ成形皿3類の皿、E18375はロクロ成形の皿、E18376は非ロクロ成形皿1類の小皿、E18377は焙烙鍋である。

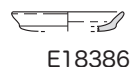
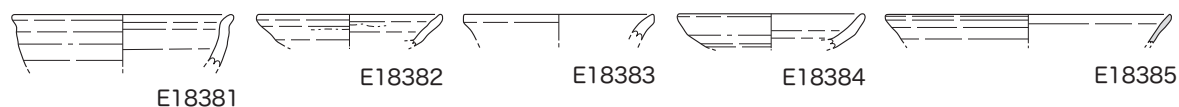
18区090SK (E18378～E18380)

E18378は古瀬戸後期の鉄釉小壺か小瓶、E18379は搦鉢、E18380は土師器の焙烙鍋である。

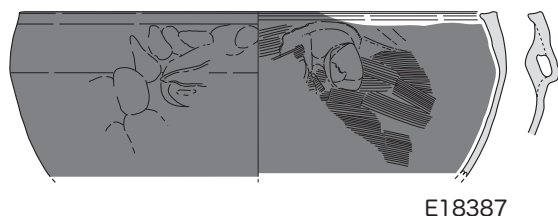
18区091SD (E18381～E18386)

E18381は大窯期の天目茶碗、E18382は古瀬戸後4期の灰釉縁釉小皿、E18383は大窯期の灰釉丸皿か稜皿、E18394は大窯第2段階の灰釉丸皿である。E18385は土師器の皿でロクロ成形皿2類のもの、E18386は土師器の小皿でロクロ成形皿1類のものである。

18区091SD (E18381～E18386)



18区093SK (E18387)



18区検出1 (E18388～E18396)

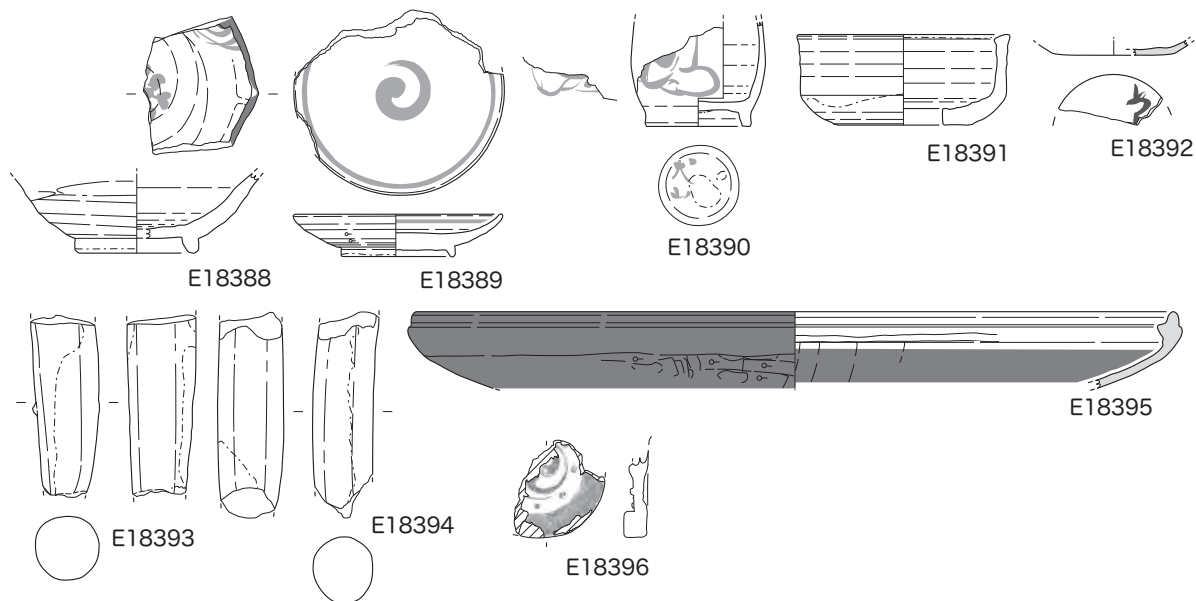


図80 18区出土土器・陶磁器・瓦 (1:4、瓦は1:8)

18区093SK (E18387)

E18387は土師器の内耳鍋で、口縁部径25.0cmである。

18区検出1 (E18388～E18396)

E18388は江戸時代後期の長石釉鉄絵鉢で内面底部に九曜文と草樹文鉄絵、E18389は大窯第4段階後半の長石釉丸皿で内面口縁部に直線文1条、底部に巴文鉄絵、E18390は犬山焼の小型徳利外面底部に「犬山」と体部に鉄絵2ヶ所がみられる。E18391は窯道具のエンゴロ、E18392・E18393は常滑産の狛犬の脚部と思われるもので、E18392が左脚部、E18393が右脚部である。E18395は江戸時代後期以後の土師器の焙烙鍋で口縁部径40.0cm、E18396は素縁の瓦当部に巴文と珠文があるものである。

第3節 石製品 (図81・図82)

石製品は48点出土した。出土点数は00A区が8点、00B区が24点、01区が0点、17A区が0点、17B区が4点、18A区が0点、18B区が1点、18C区が1点、18D区が5点、18E区が0点、18F区が5点である。00B区において出土点数が多いのは、石垣のあるSX04の整地土・埋土や石垣の裏込めに転用して用いられたものとSX04の解体に関連するSX02出土のものが含まれるからである。この中で、戦国時代から江戸時代前期にかけての遺構と遺物包含層から出土した43点と00A区に隣接する62D区・63D区から出土した1点を実測し (S001～S044)、残りの5点と62D区から出土した残り3点を計測した (S045～S052)。

石製品の内訳は、基石が3点、硯が3点、火打ち石が3点、砥石が25点、磨き石が1点、台石が2点、茶臼が3点、石臼が7点、宝篋印塔が1点、五輪塔が2点、不明品が1点ある。尚、個別の資料の計測値などの詳細については添付清洲城下町遺跡X出土遺物石製品一覧表を参照していただきたい。

基石 (S001～S003) は、全て黒色の泥岩で楕円形板状の表面を研磨されたものである。

硯 (S004～S006) は、S004・S005が泥岩、S006が砂質凝灰岩のものである。これらは、

厚みの違いはあるが、全て長方形の板状のもので、幅5.5cm～5.6cmである。

火打ち石 (S007・S008) は、チャートのもので、平面不整楕円形の薄くなる側面部に押圧剥離による打撃痕のような痕跡がみられる。

砥石 (S009～S028) は、S009～S017が凝灰岩、S018が凝灰質泥岩、S019が砂岩、S020が砂質凝灰岩、S021～S024が泥岩、S025がホルンフェルス、S026～S028が緑色凝灰岩 (笏谷石) で、厚みが2cm未満の板状のS011～S013・S018・S022・S024・S028と厚みが2cm以上の角棒状のS009・S010・S014～S017・S019～S021・S023・S025～S027がみられる。S020・S027は平面形状がバチ形になるもので、S019とS027は研ぎ目が比較的幅広の浅いくぼみ状になっている。

磨き石 (S029) はチャートの亞円礫のもので、上面と下面が平滑になっている。

台石 (S030・S031) はS030が砂岩、S031がホルンフェルスでS030は側面に敲打痕があるもので、他の製品からの転用されたものである可能性がある。S031は全体に表面が滑らかになっている。

茶臼 (S032～S034) は玄武岩で、S032・S033が上面の周縁が山形で下面に円形の擦り面がある上臼、S034は上面に一段高くなった円形の擦り面とその周囲に茶粉を受ける縁のくぼみがめぐる。どちらも擦り面には幅1mm前後の斜め線刻による三角鋸歯状の擦り目がみられる。S032・S033にみられる上臼の中央回転軸の孔径は2.5cm程、S033にみられる上臼を回転させる棒の挿入孔の深さは2.8cm、挿入孔の周りは菱形の浮き彫りになっている。

石臼 (S035～S041) は穀物などを挽いて粉にした挽臼で、S035～S038・S040・S041が花崗岩、S039が砂岩で、全体に表面が摩滅している。外径がわかるものは径28cm～35cmである。S035～S039が上臼、S040・S041が下臼、上臼の上面は周縁に平滑な縁が1cm～4cm前後めぐり、縁から中央回転軸に向かって皿状にくぼむ。下臼は上・下面とも平坦である。上臼の下面と下臼の上面は擦り面で、幅0.7cm～幅2.0cmの擦り目が斜めに三角鋸歯状にみられる、S035・S038・S041では擦り目が交差

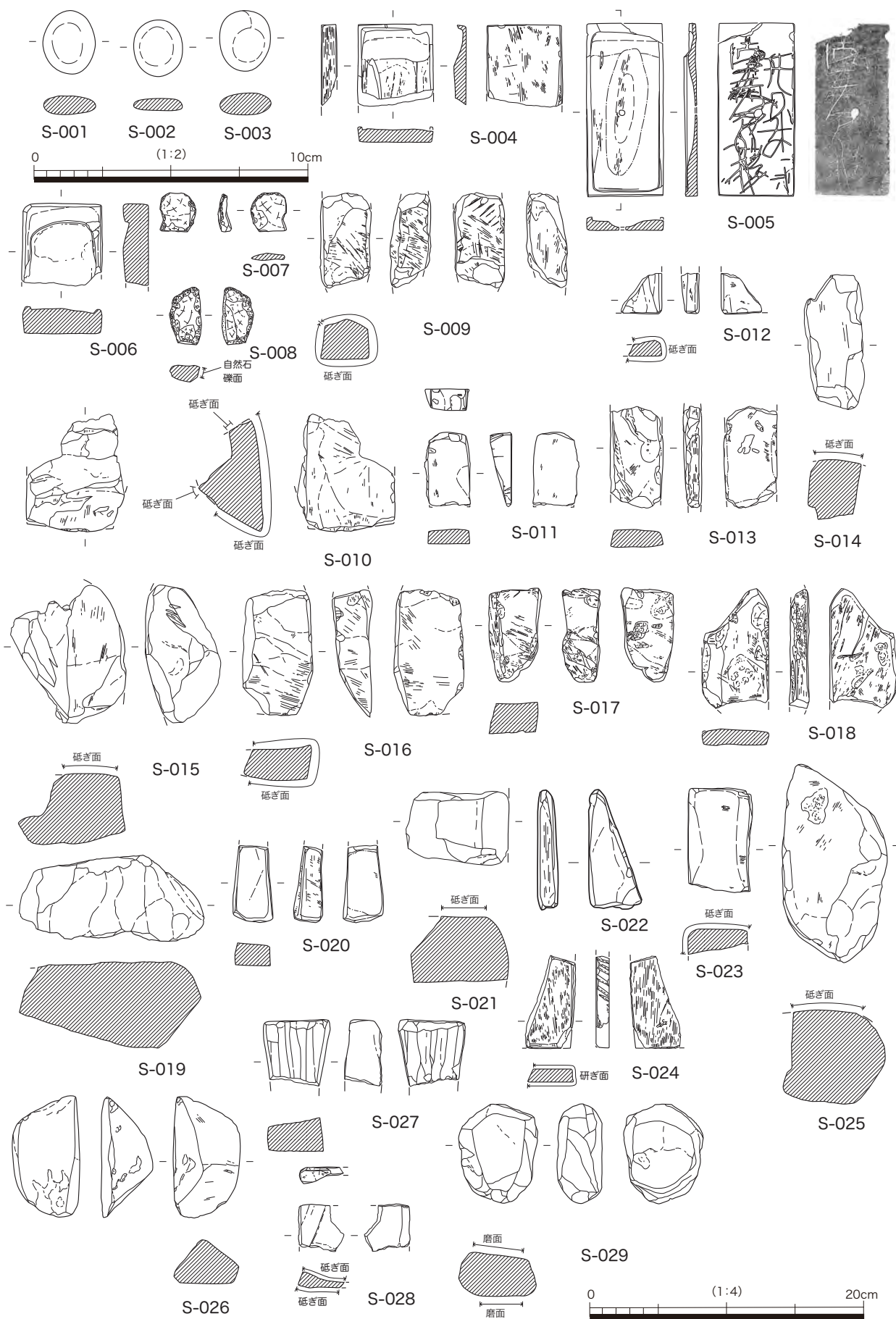


図81 石製品1 (1:4、S-001～S-003は1:2)

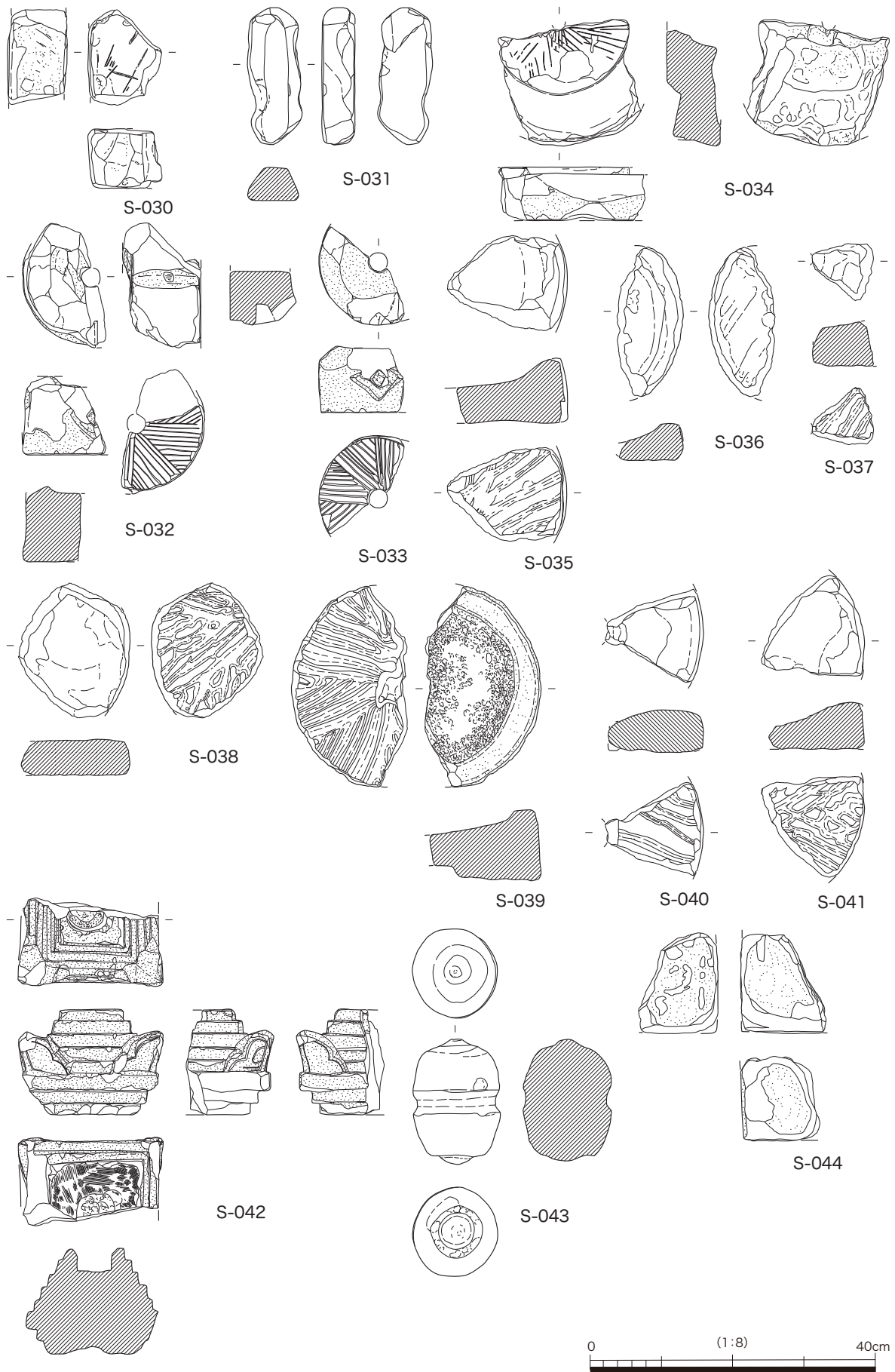


図 82 石製品 2 (1:8)

する部分がある。

宝篋印塔（S042）は笠部で、全体の半分程が残る。全体に敲打調整痕がみられ、隅飾部にその外形に沿った線刻がみられる。上面に相輪部の伏鉢とのホゾ穴、下面に塔身部に接着するホゾ穴状のくぼみがある。

五輪塔（S043・S044）はS043が空風輪部、S044が地輪部で、どちらも花崗岩である。S043は中央付近に幅3.2cm前後の浅い溝状のくびれがあり、上部は宝珠状の突出部が残り、下面にはホゾ状の突出がある。S044は立方体で、隅が摩滅して丸くなっている。

第4節 金属製品（図83・図84）

金属製品と金属加工関連資料は合わせて182点出土した。出土点数は00A区が36点、00B区が129点、01区が0点、17A区が5点、17B区が7点、18A区が3点、18B区が4点、18C区が0点、18D区が7点、18E区が2点、18F区が9点である。この中で、戦国時代から江戸時代前期にかけての遺構と遺物包含層から出土した56点と00A区に隣接する62D区から出土した3点を実測し（M001～M059）、残りの123点を計測した。個別の資料の計測値などの詳細については添付清洲城下町遺跡X出土遺物金属製品一覧表を参照していただきたい。また鍛冶・鑄造関連資料については、日鉄テクノロジー株式会社に分析を委託した。分析成果は、本報告の種別などに反映させていただいており、その分析の詳細は添付日鉄テクノロジー株式会社「清洲城下町遺跡出土鍛冶・鑄造関連遺物の分析」を参照していただきたい。

銅製品（M001～M010）は10点で、M001が中央に下側からの切り込みがあり、丸い縁が小さく波状になる飾金具、M002がカップ状でやや花卉状、下側に固定用金具がある飾金具、M003は幅2.85cm、長さ10.05cmの薄い銅板を長方形に巻いた留金具で、径1.5mm前後の孔が4個みられる。M004～M010は銭と硬貨で、M004は不明、M005が永楽通寶、M006が大元通寶、M007が治平元寶か瑞平元寶、M008が元符元寶、M009が景德元寶、M010が十銭硬貨である。

鉄製品（M011～M035）は25点ある。M011は菱形の刃部に断面長方形の長い基部がつく鋳で、刃部には中央の円形中心と5枚の心葉形花卉の透かしがあるもので、透かし部の中に漆膜が残っていたことから、本来は全体に漆が施されていた可能性が高いものである。M012は柄部を銅板で巻く刀子、M013は径0.35cmで長さ14cm程の曲がった状態の針金、M014～M016は長方形の鉄板状の製品、M017は口縁部が受け口で口縁部径21.6cmの鑄物の鍋、M018は外面側にボタン状の円形突起が残る鍋の可能性のあるもの、M019～M035は頭部を折り曲げて整形する釘で、横断面は方形から長方形のもの、M019～M029は長さ8cm以上となる長いもの、M030～M035は長さ5cm前後の短いものである。

金属加工関連資料（M036～M059）は、M036～M039は鞆の羽口、M040～M044は埵塼・炉壁・鑄型などの可能性のある土製品、M045～M048はルツボ、M049～M059は椀型滓である。

鞆の羽口は、M036が羽口先端部の上側、M037が羽口先端部の下側で送風孔の径2.3cm程、M038が羽口先端部の上側で送風孔径3.0cm程、M039が羽口の基部側で送風孔径1.6cm程である。M036～M038は炉内となる先端部側に流動鉄滓とともに白色石材が付着する。M039は送風孔径が細く、銅などの加工関連の可能性はある。M040は鑄鉄の埵塼の可能性はある鉢状土製品で、口縁部径30cm前後のもの、M041は鑄鉄の甗の炉壁の底部の可能性のあるもの、M042は炉壁の鞆座部分で、炉内の部分に流動鉄滓と白色石材が付着する。M043は鑄鉄の炉壁で、ほぼ平坦なもの炉内側に流動鉄滓が付着する、平面方形の炉形になるものか。M044は平坦な面に方形に沈線がある鑄型の可能性のある土製品である。M045～M048は土師器で厚みのある皿状のルツボで、内面や外面口縁部に銅滓と思われる赤色付着物や黒色付着物がみられる。M045は口縁部径4.1cmの小型のもの、M047は口縁部径8.0cmの中型のもの、M048は口縁部径12.8cmの大型のもので、M047・M048には口縁部に白色石材が付着する、M046の内面に

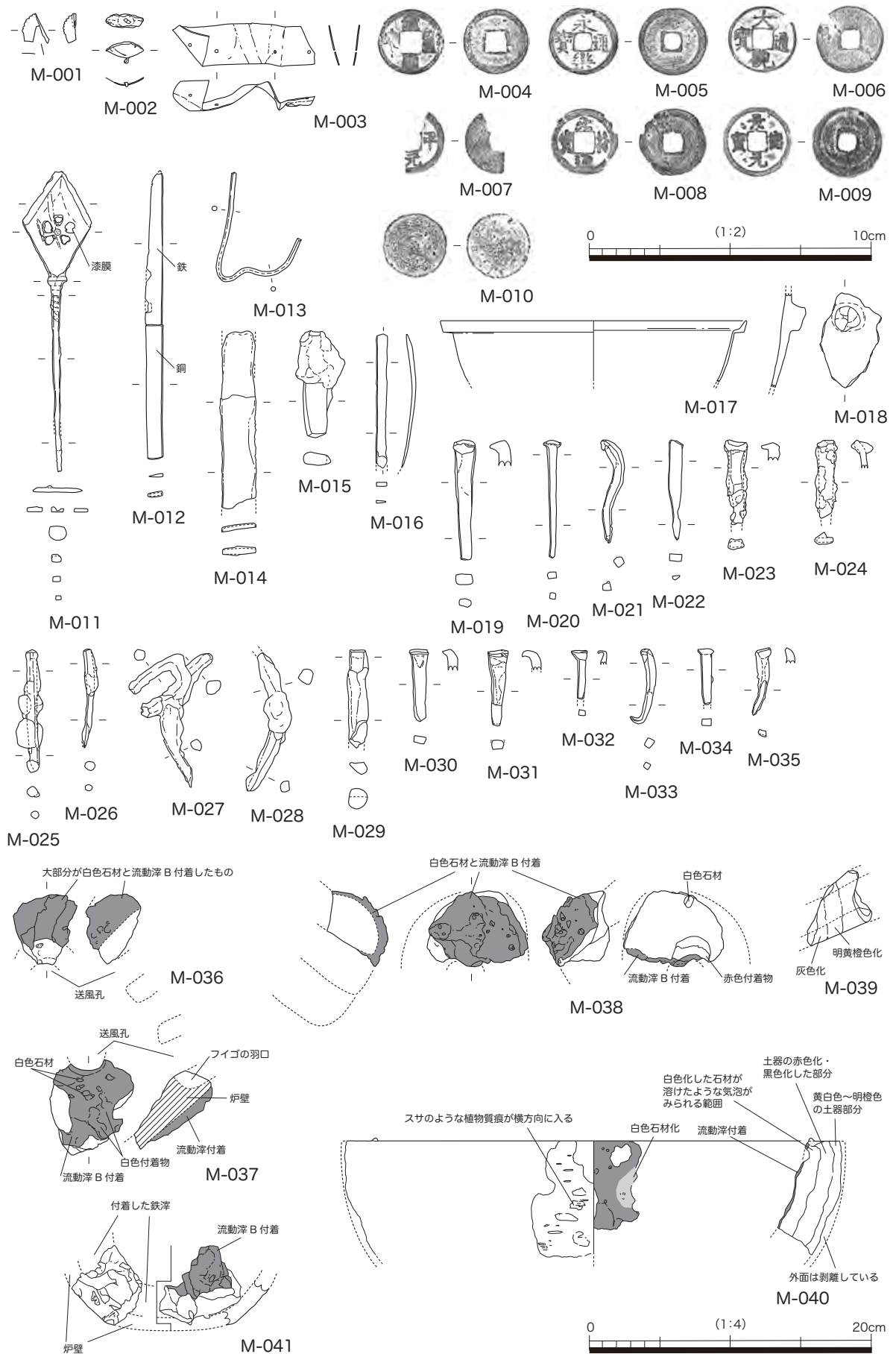


図 83 金属製品 1 (1:4、M-004～M-010 は 1:2)

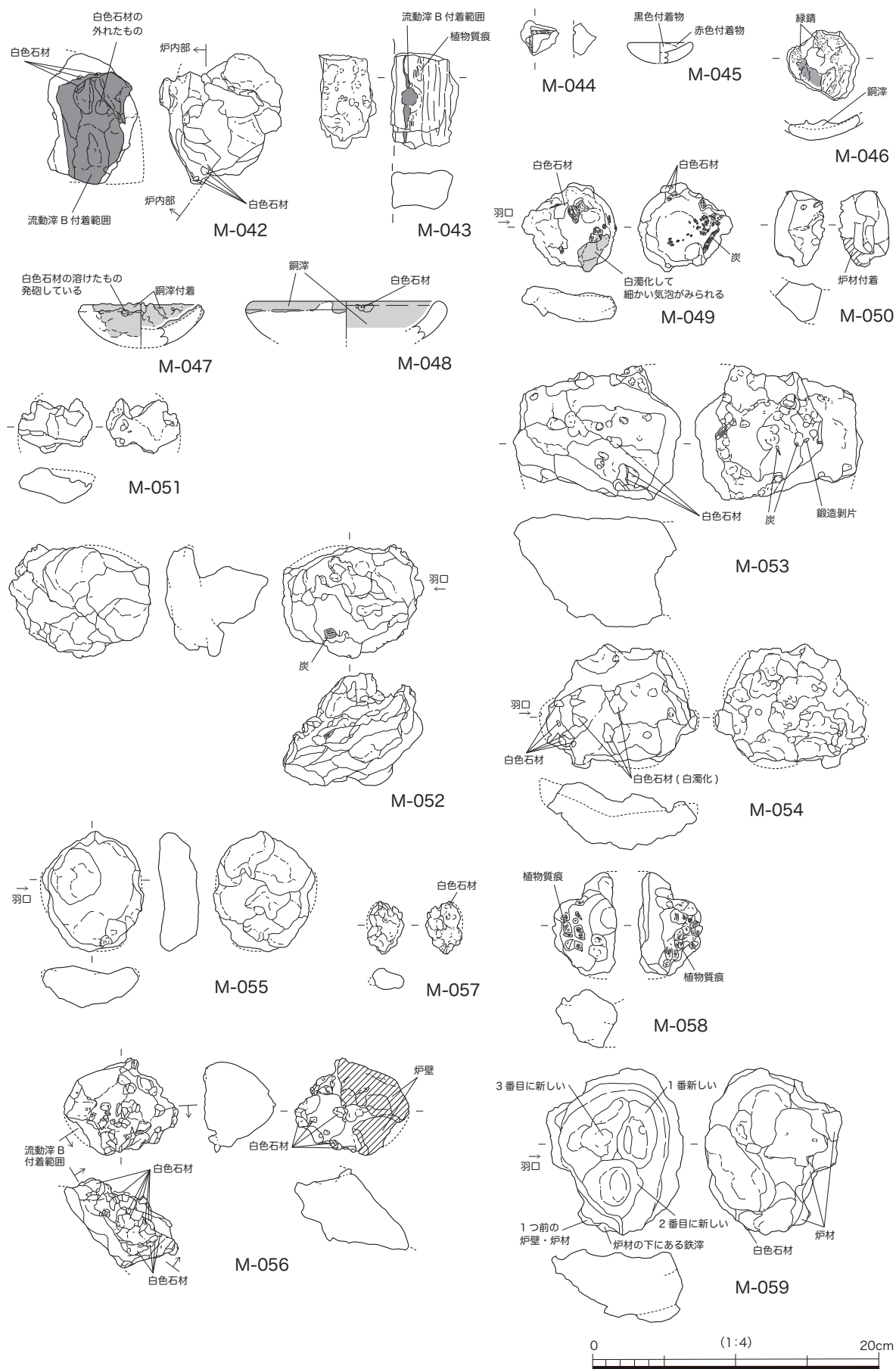


図 84 金属製品 2 (1:4)

付着する銅滓の上に緑錆がみられる。

鉄滓（M049～M059）は、色調が黒色～暗黒褐色で気泡が比較的少ないガラス質1に分類する鉄滓Aタイプがあり、気泡が少なく緻密な鉄滓A1タイプ、気泡はあるが比較的緻密な鉄滓A2タイプ、気泡が比較的多く入りやや緻密な鉄滓A3タイプに分けることができる。一つの鉄滓においても単一のタイプになる場合は少なく、鉄滓A1タイプ～鉄滓A2タイプに分類できるものはM050・M053・M057・M059、鉄滓A1タイプ～鉄滓A3タイプに分類できるものはM052・M054、鉄滓A2タイプはM049・M051・M055・M058、鉄滓A3タイプはM056がある。同じタイプに分類したもののでも、M059のような小型のものからM053のような大型のものまであり、上面に白色石材が付着するものが一定量みられる。また椀型滓の実測図では、上面や断面の形状などから上面左側を送風口側として図化した。

第5節 木製品（表1・図85～図94）

木製品は00A区の検出1～検出3のSX8001と00B区のSD01～SD03・SK30・SX02、01区SD01などにおいて多くの出土がみられた。00A区と00B区において出土した漆椀・漆皿などの漆製品は、特に脆弱な状態で、出土してからの経年による劣化もあり、現在では表面の漆膜が剥離しつつあり、自立しない状態となっている。したがって、これらの実測図では一部の計測からの復元図となっている。また、棒状製品の箸、折敷と思われる薄い板材は多くの出土点数があるが、小さな破片となっているものは実測できていない。個別の資料の計測値・調整などの詳細については添付清洲城下町遺跡X出土遺物木製品一覧表を参照していただきたい。

また木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託して行った。同定された樹種は、針葉樹ではモミ属とマツ属複雑管束亜属、コウヤマキ、スギ、ヒノキ、サワラ、ネズコ、アスナロの8分類群、広葉樹ではクスノキ科とクリ、ツブラジイ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属（以

表1 木製品・木材の樹種同定結果

樹種/器種	ク サ ビ	燃 え し	下 駄 駒	黒 漆 板	漆 椀	漆 皿	漆 箱	桶 側 板	曲 物 側 板	匙 状 製 品	ハ シ	折 敷	木 柱	井 戸 築 柱	板 状 製 品	穿 孔 板	有 孔 板	有 頭 棒	角 材	角 杭	角 杭	卒 塔 婆	不明 製 品	分 割 材	節 枝	不 明 炭	合 計						
	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？	？						
モミ属										1		1	1	1	10				1		2						18						
マツ属複雑管束亜属		1								1					7		1			2			1	1		1	15						
コウヤマキ			1									1			4												6						
スギ										10					9			1					1				22						
ヒノキ	2	1	5	1			1	5	8	1	27	3	3		34	1	1		5	1	2	2		6	1		110						
サワラ	1							1	1		15	2	1	2	1	28	2		1	1		1	2		1		63						
ネズコ													1												1		2						
アスナロ					1															1	1		1				4						
針葉樹					1																						1						
クスノキ科											1															1	2						
クリ					4															1							5						
ツブラジイ															1												1						
ブナ属					26	1																	1				28						
コナラ属アカガシ亜属															2		1										3						
コナラ属クヌギ節																										1	1						
コナラ属コナラ節					1																					3	4						
クマシデ属イヌシデ節					1																					2	3						
アサダ					4																					1	5						
ヤナギ属																									1		1						
カエデ属					4																						4						
トチノキ					14	1									1												16						
サカキ																								1			1						
ケヤキ					5																												
ナンシヤ科					1																												
カキノキ属																										1	1						
エゴノキ属																		1									1						
トネリコ属トネリコ節																										1	1						
モチノキ属						1																				2	3						
タケ亜科															1											1	2						
不明																										1	1						
合計	3	1	1	6	1	1	61	1	1	5	10	55	5	4	5	1	3	2	97	1	2	1	2	1	7	4	1	12	1	4	1	14	315

00A 区検出 1、SX8001 (W-001 ~ W-007)

00A 区検出 2、SX8001 (W-008 ~ W-076)

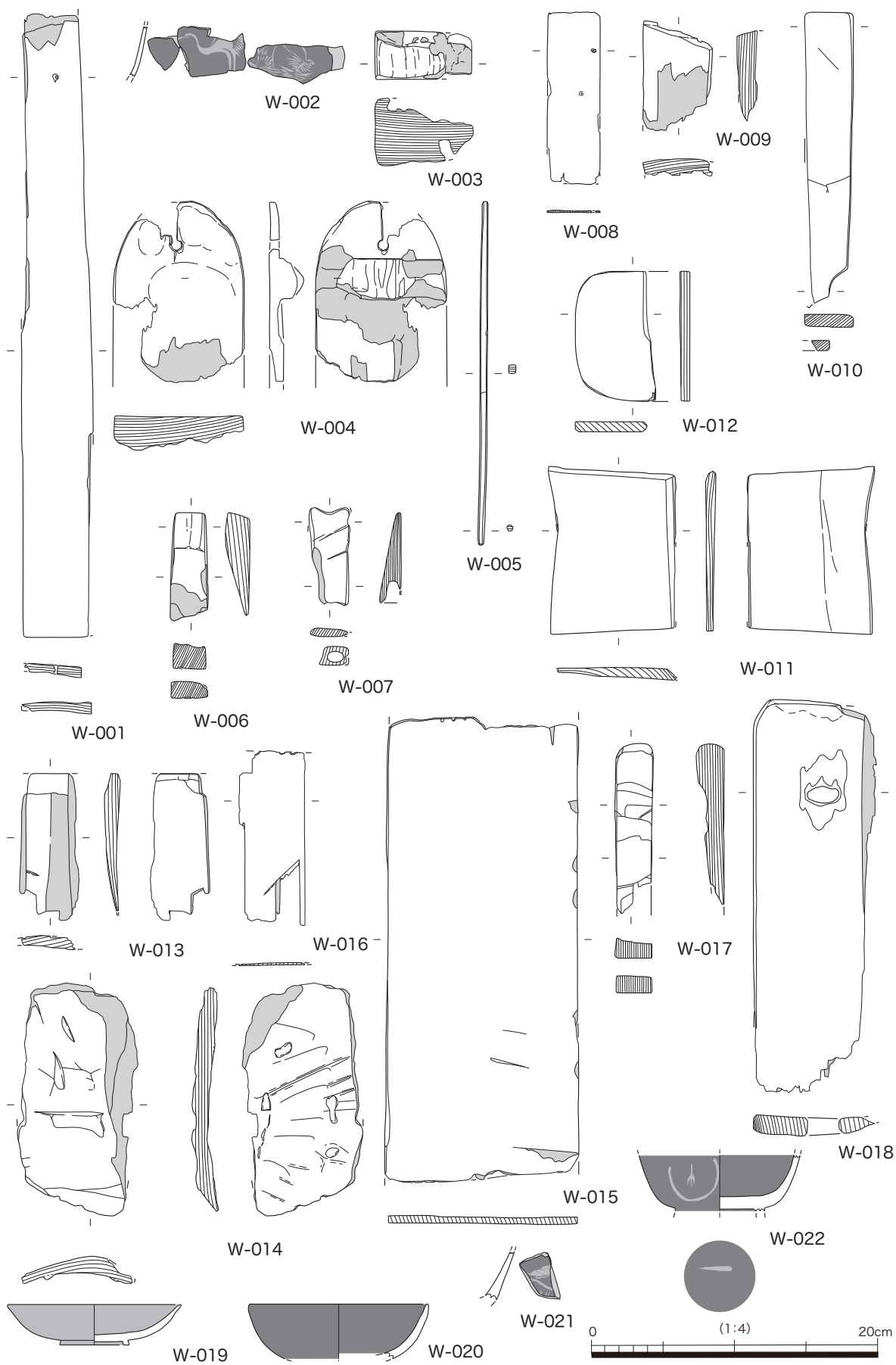


図 85 木製品 1 (1 : 4)

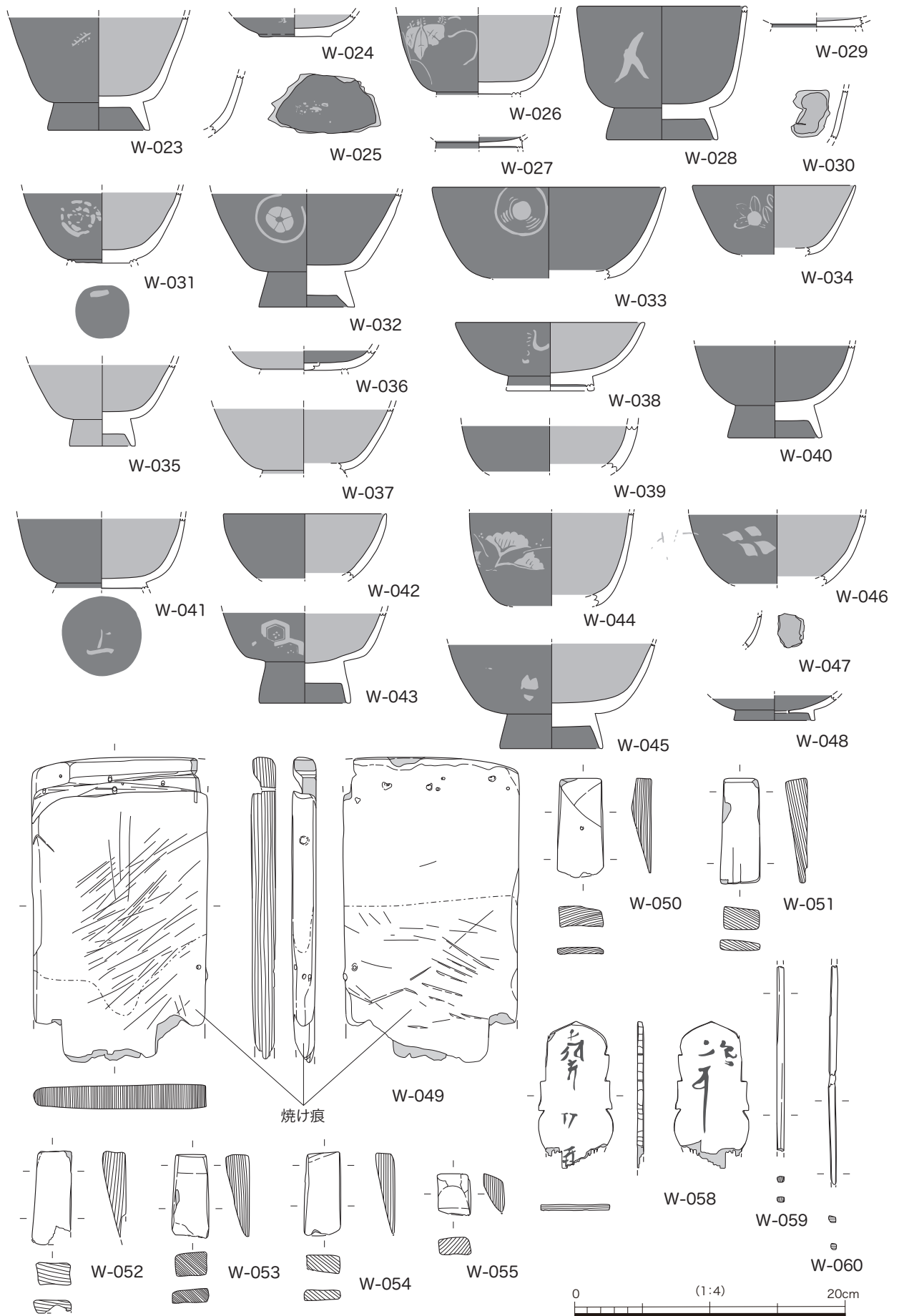


図 86 木製品 2 (1:4)

下、アカガシ亜属)、コナラ属クヌギ節(以下、クヌギ節)、コナラ属コナラ節(以下、コナラ節)、クマシデ属イヌシデ節(以下、イヌシデ節)、アサダ、ヤナギ属、カエデ属、トチノキ、サカキ、カキノキ属、エゴノキ属、トネリコ属トネリコ節(以下、トネリコ節)、モチノキ属の17分類群、単子葉ではタケ亜科1分類群の、計26分類群が確認された。木製品と樹種の関係は、表1に示す通りで、報告の詳細は添付株式会社パレオ・ラボ「清洲城下町遺跡出土木材の樹種同定報告」を参照していただきたい。

00A区検出1、SX8001(W001～W007)

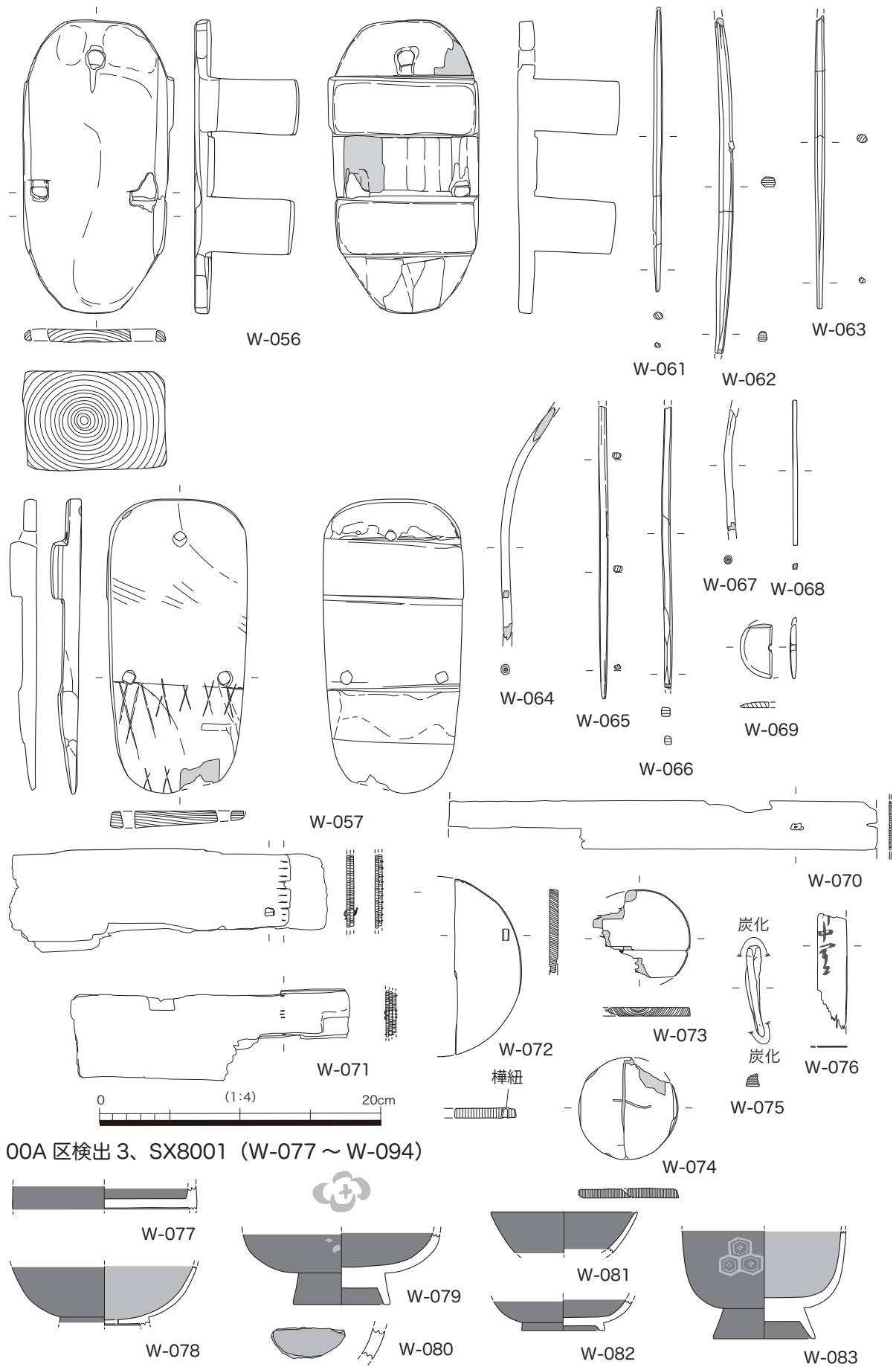
W001は幅5.0cm程、厚さ0.7cmの板、端がわかるところから39.2cmのところに穿孔がある、W002は外面黒漆(漆製品に残る黒色部分について、本来は「黒色漆」と記述して、黒漆とは分けるべきものではあるが、本報告では黒色漆を「黒漆」と便宜上記載する)に赤漆(黒色漆と同じ)の鶴と松の絵が残る漆碗、W003は下駄の歯部分で高さ3.4cm、W004は下駄のつま先側部分でくり抜き歯に台の先が丸いものの、W005断面方形から多角形の箸、W006・W007は楔で、W006が幅2.5cmで片面が斜めに削られた角材、W007が幅3.6cmで片面が斜めに削られた角材の基部側端面に径0.76cm～1.04cmの穴がみられる。

00A区検出2、SX8001(W008～W076)

W008は長さ12.0cm、幅3.6cm、厚さ0.2cmの薄い板、小穴の穿孔が1ヶ所みられる、W009は端材の板、W010は幅3.3cm、厚さ0.8cm、半月形の挟れがある細長い板、W011は厚さ0.6cm前後の幅広の薄い板、W012は厚さ0.6cmの隅丸形状の薄い板、大きな切り込みがあるものである。W013は幅1.1cmの小口端部に小さな段差がある細い板、W014はやや反りのある板で削り痕が多数みられる。W015は幅13.5cm、厚さ0.6cmの幅広の薄い板、W016は厚さ0.1cmの薄い板で折敷片か、W017は幅2.6cm、厚さ1.8cmの上面にくぼみが壇状にある板、W018は井戸枠の板と思われるもので、端部の隅が落とされている、楕円形の穴がみられ、短軸上でわずかに内湾する。

W019は漆皿で内・外面赤漆の端反皿、口縁部径12.0cm、器高2.8cm、高台部径4.6cm

のもの。W020～W048は漆碗で、W020は口縁部径12.4cmの程の外面黒漆の薄手の見こみの浅い丸碗、W021は黒漆に赤漆の草木絵がみられる薄手の碗、W022は外面黒漆に赤漆の円形文と外面底部に「一」のやや口縁部が開く筒形の碗、W023は外面黒漆に赤漆の草木絵、内面に赤漆、底部径7.2cmのものである。W024は外面黒漆に赤漆の絵、内面赤漆の丸碗、底部径5.1cm、W025は外面黒漆に赤漆の絵の碗、W026は外面黒漆に赤漆の桔梗文と唐草文の絵、内面赤漆のやや口縁部が広がる筒形の碗、W027は内・外面黒漆の薄手の碗か皿、W028は外面黒漆に赤漆の鳥絵、内面黒漆のやや口縁部が広がる筒形の碗、口縁部径約12.5cm、器高10.0cm、高台部径8.0cmである。W029は外面黒漆、内面赤漆の薄手の碗、W030は内面赤漆の薄手の碗、W031は外面黒漆の赤漆の渦巻文、底部に赤漆の「一」、内面赤漆の口縁部がやや開く筒形の碗、W032は外面黒漆に赤漆の円形花文、内面黒漆の高台が高く、口縁部がやや開く筒形の碗、高台部径6.8cmである。W033は外面黒漆に赤漆の重圈文、内面黒漆の丸碗、口縁部径13.2cm、W034は外面黒漆に赤漆の花文の絵、内面赤漆のやや口縁部が広がる筒形の碗、口縁部径12.0cm、W035は内・外面赤漆のやや口縁部の広がる筒形の碗、高台が高く、高台部径4.8cmのものである。W036は外面赤漆、内面黒漆の丸碗、W037は内・外面赤漆の口縁部がやや開く筒形の碗、W038は外面黒漆に赤漆の絵、内面赤漆のやや見込みの浅い丸碗である。W039は外面黒漆、内面赤漆の碗、やや器壁に厚みがある。W040は内・外面黒漆の筒形の碗、高台がやや高く、高台部径6.8cm、W041は外面黒漆、内面赤漆の丸碗、外面底部に赤漆の「上」が残る。W042は外面黒漆、内面赤漆の丸碗、口縁部径12.0cm、W043は外面黒漆に赤漆の六角亀甲文、内面赤漆に高い高台のもの、高台部径6.5cm、W044は外面黒漆に赤漆の樹木絵、内面赤漆の見込みのやや浅い丸碗、W045外面黒漆に赤漆の絵、内面赤漆、高台がやや高い口縁部がやや開く筒形の碗、高台部径6.7cm、W046は外面黒漆に赤漆の四花弁文、内面赤漆の丸碗、W047は外面黒漆に赤漆の絵、内面黒漆の底部に赤漆の



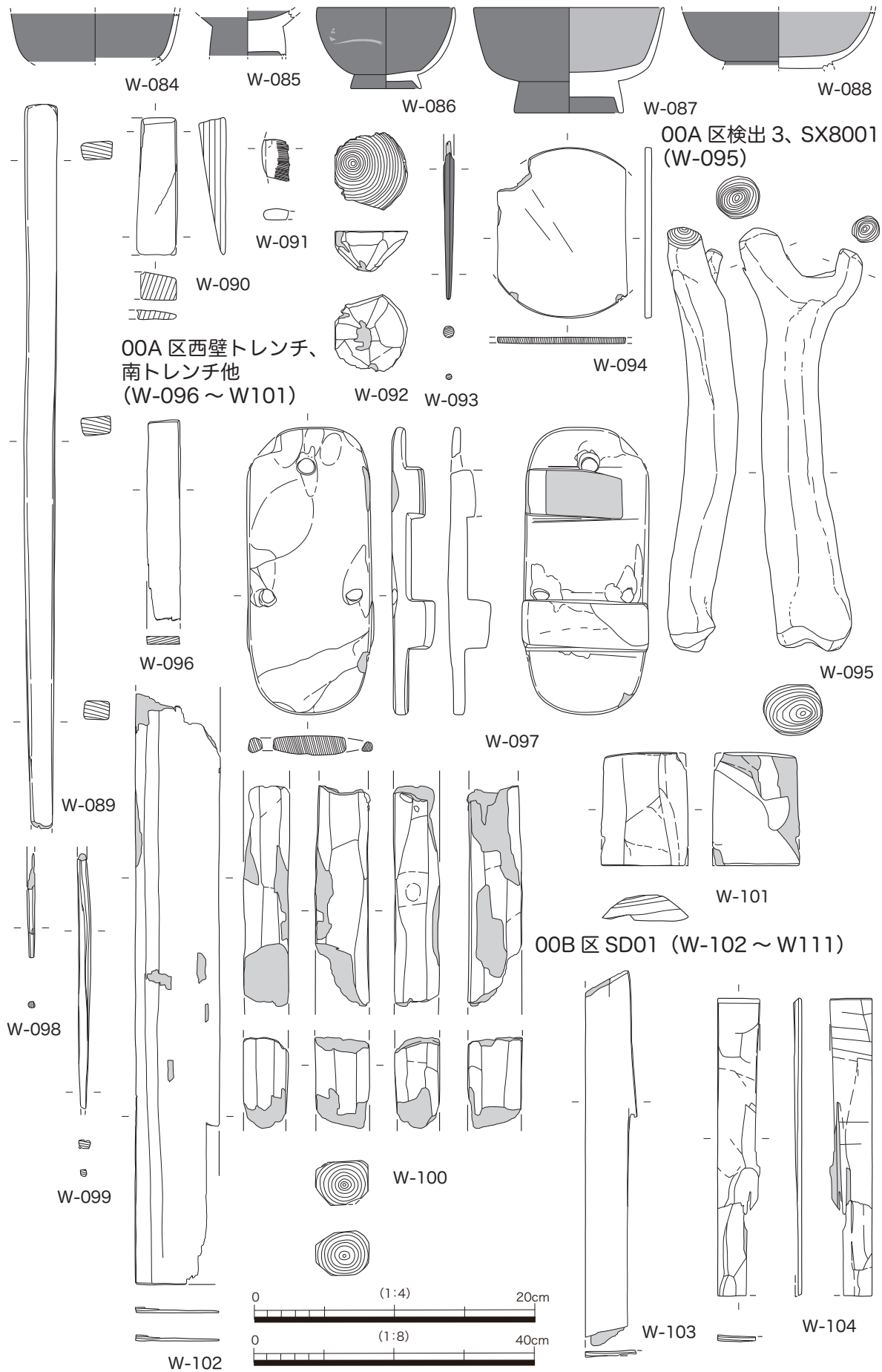


図 88 木製品 4 (1:4、W095 は 1:8)

花絵、やや高い高台の丸椀、高台部径 6.7cm、W048 は内・外面黒漆、高台の低い丸椀である。

W049 は折敷で、板の端に沿って幅 1cm の溝がある、目釘穴が 3ヶ所ある、板材長辺にも小孔が 2ヶ所あり、表・裏面に刃物痕がみられる。W050～W055 は楔で、角材の片面が斜めに削られている、W050 は長さ 7.3cm、幅 3.1cm、厚み 1.9cm、W051 は長さ 7.8cm、幅 2.9cm、厚さ 1.7cm、W052 は長さ 6.9cm、幅 2.7cm、厚さ 1.7cm、W053 は長さ 6.0cm、幅 2.7cm、厚さ 1.8cm、W054 は長さ 6.1cm、幅 2.6cm、厚さ 1.3cm、W055 は長さ 2.5cm、幅 2.2cm、厚さ 1.6cm を測り、W055 は小さいが他は形態と大きさが近似している。W056・W057 は下駄で、W056 は台の四隅を切り落とした隅丸八角形で、上面に残る浅いくぼみから右足用と思われるもの、歯の高さ 6.0cm のくり抜き歯である、W057 は台が先太の俵形で、歯の高さ 0.6cm のくり抜き歯のものである。W058 は卒塔婆の先端部で石塔形の板、両面に墨書がみられる。

W059～W068 は箸で W059 は断面方形から長方形、W060 は断面方形から台形、W061 は断面多角形から楕円形で中央部が太く両端が細くなっている。W062 は断面六角形から楕円形で中央部が太く両端が細くなっているもの、W063 は断面多角形から楕円形で先が細くなっている、W064 は断面多角形から円形のもの、W065 は断面長方形から楕円形で、先が細くなるものである。W066・W068 は断面方形、W067 は断面円形のものである。

W069 は板状の紡錘車の可能性のあるもので、径 2.2cm 程、厚さ 0.4cm で片面の縁辺が斜めになっており、中央に穿孔がみられる。W070・W071 は曲物の側板で、綴じ紐の樹皮が残る、W072～W074 は曲物の底板で、W072 が径 12.8cm、厚さ 0.7cm で樹皮紐が 1ヶ所残る、W073 は径 7.2cm、厚さ 0.6cm、W074 は径 7.3cm、厚さ 0.6cm を測る。W075 は長さ 7.5cm の両端が丸く炭化する燃えさしの様なもの、W076 は木簡で片面に墨書がみられる。

00A 区検出 3、SX8001 (W077～W094)

W077 は内・外面黒漆の筒形の漆容器で径

13.2cm のものである。W078～W088 は漆椀で、W078 は外面黒漆、内面赤漆の薄手の丸椀、W079 は外面黒漆に赤漆の絵、内面黒漆に赤漆の花弁文、高台の高い丸椀、高台部径 6.6cm を測る。W080 内面赤漆の椀、W081 は内・外面黒漆の椀で口縁部径 10.3cm のもの、W082 は外面黒漆に赤漆の四曜文を亀甲文で囲んだものを三組にしたもの、高台の高い筒形の椀、口縁部径 12.3cm、器高 7.9cm、高台部径 7.6cm を測る。W083 は内・外面黒漆の低い高台の丸椀、高台部径 5.8cm、W084 は内・外面黒漆の椀、W085 は内・外面黒漆の椀、高台がやや高く厚底になるもの、W086 は外面黒漆に赤漆の絵、内面黒漆のやや薄手の丸椀、口縁部径 9.8cm、器高 5.8cm、高台部径 5.0cm を測る。W087 は外面黒漆、内面赤漆のやや高い高台で口縁部がやや広がる椀、口縁部径 13.2cm、器高 7.35cm、高台部径 7.8cm、W088 は外面黒漆、内面赤漆のやや薄手の丸椀である。

W089 は断面長方形の角棒、細くなる側を欠損しており幅 2.3cm、厚さ 1.4cm、W090 は楔で、角材の片面が斜めに削られたもの、長さ 9.8cm、幅 2.8cm、厚さ 2.1cm のもの、W091 は櫛の背側部分、W092 は栓と思われるもので円錐形に削られたもの、W093 は箸で外面黒漆が施された断面円形のもの、W094 は曲物の底板で径 12.2cm、厚さ 0.5cm である。

00A 区検出 4、SX8001 (W095)

W095 は柱の挿又受けの可能性のあるもので、先端側が二又になっている。

00A 区西壁トレンチ、南トレンチ他 (W096～W101)

W096 は幅 2.3cm、厚さ 0.5cm の板、W097 は下駄で台が楕円形のもの、上面の痕跡から右足用で、歯が低いもの、長さ 20.5cm、幅 8.7cm、高さ 2.5cm である。W098・W099 は箸で断面円形から長方形のもの、W100 は炭化している部分がある棒で、周囲に削り痕がみられる、W101 は横断面が丸い山形に削られた板である。

00B 区 SD01 (W102～W111)

W102 は屋根材などのへぎ板と思われるもの、W103 はへぎ板、W104 は幅 2.9cm、厚さ 0.6cm の板で、両面ともカンナ等の削り痕がみ

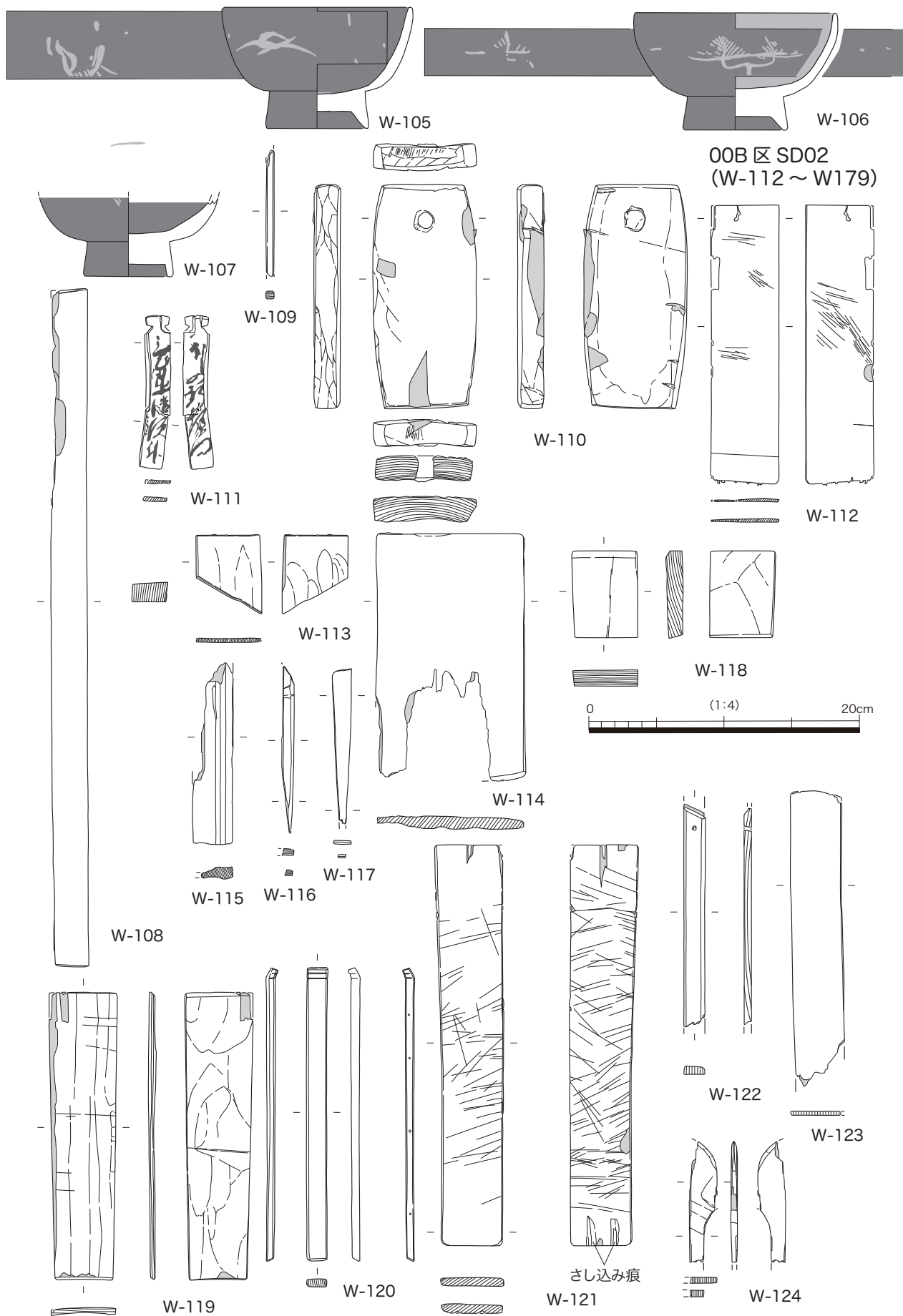


図 89 木製品 5 (1 : 4)

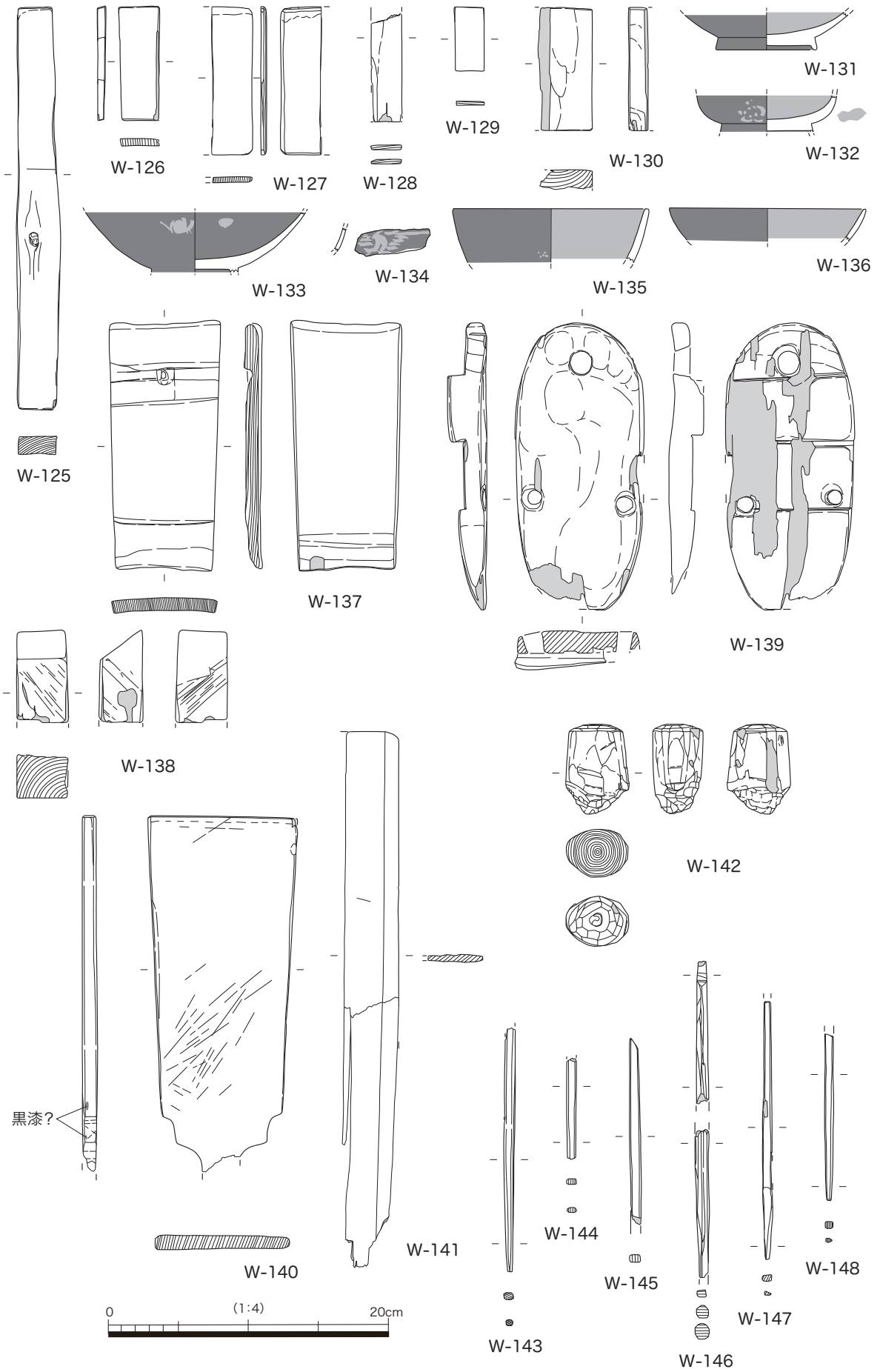


図 90 木製品 6 (1:4)

られる。W105～W107は漆碗で、W105は外面黒漆に赤漆の鳥絵、内面黒漆に底部に赤漆の絵、高台の高い丸碗、口縁部径13.8cm、器高9.0cm、高台部径7.4cm、W106は外面黒漆に赤漆の松の絵、内面赤漆、高台の高い丸碗で、口縁部径14.7cm、器高8.7cm、高台部径7.4cm、W107は外面黒漆に赤漆の絵、内面黒漆の底部に赤漆の「一」、高台の高い丸碗、高台部径6.3cmである。W108は角棒で、長さ50.2cm、幅2.7cm、厚さ1.4cmの横断面やや台形のもの、W109は箸で断面方形のもの、W110は有孔板で、小口側がやや幅狭になる長方形のもの、長さ16.5cm、幅7.6cm、厚さ1.9cmを測り、側面が細かく削られている。W111は長方形の板状のもので、板の片側端部近くに両側面から挟りが入っている。部分的に欠損しているが、長さ11.4cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを計る。両面に墨書があり、「三斗付口上清須外」・「ほしの新右衛門」と書かれている。形状から荷札木簡と考えられる。

00B区SD02 (W112～W179)

W112～W130は板で、W112は幅5.0cm、厚さ0.2cmの薄い板で両面に短軸上から斜めの線状の刃物痕が見られる、W113は台形の長さ5.8cm、幅4.8cm、厚さ0.3cmのもの、W114は長さ18.4cm、幅10.5cm、厚み0.9cmの長方形のやや厚い板、W115は長軸方向に浅く削られた溝がみられるもの、W116は断面方形から長方形で幅0.9cm、厚さ0.5cmの先端が尖る棒状のもの、W117は厚さ0.2cmの薄い板状のもの、匙などの柄か、W118は長さ6.5cm、幅4.7cm、厚さ1.1cmの長方形のもの、削り痕が残る、W119は長さ21.3cm、幅4.9cm、厚さ0.4cmの長い薄板、W120は片端が鈍角に折れて鍵状になっている、長さ22.0cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmのもの、W121は長さ29.7cm、幅4.8cm、厚さ0.5cmの板で片端に2ヶ所の差し込み痕、短軸方向に多数の刃物痕跡がある。W122は幅1.5cm、厚さ0.5cmのもので1ヶ所小さな円形の穿孔がある、W123は幅3.8cm、厚さ0.3cmの薄く長い板、W124は厚さ0.4cmのものでしゃもじを縦に半裁したものか、W125は長さ23.8cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmの棒状のもの、W126は長さ8.3cm、

幅2.8cm、厚さ0.5cmの薄板、W127は長さ10.5cm、厚さ0.4cmの薄板、W128は幅2.3cm、厚さ0.3cmの薄い板、W129は長さ4.6cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmの長方形の薄板、W130は比較的大きな削り痕がみられる角材状の板、長さ8.9cm、厚さ1.3cmである。

W131～W136は漆碗で、W131は外面黒漆、内面赤漆の高台の低い碗、高台部径7.0cm、W132は外面黒漆に赤漆の花絵、内面赤漆の丸碗、W133は外面黒漆に赤漆の花？絵、内面黒漆に赤漆の絵、口縁部が大きく開く碗、W134は外面黒漆に赤漆の絵のある薄手の碗の体部片、W135は外面黒漆に赤漆の絵、内面赤漆のもの、口縁部径13.9cm、W136は外面黒漆、内面赤漆のやや見込みの浅い碗、口縁部径13.7cmを測る。

W137は桶の側板で、幅8.0cm、高さ18.1cmを測る、外面にタガを締めた横帯状の凹みがあり、内面の下側にも底板の痕跡がみられ、上部のタガ付近に穿孔がみられる。W138は片端が斜めに切られた角材、幅3.5cm、厚さ3.0cmで側面に刃物痕が多数みられる。W139は一体型の下駄で、長さ20.5cm、幅9.2cm、高さ2.5cmの台が楕円形のもの、上面に残る痕跡から右足用と思われる。W140は羽子板形の建築材、側面に黒漆痕と思われるものがあり、片方の端部にえぐりがある、表面に刃物痕が多くみられる。W141は長く薄い板、W142は荒く周りが削られている駒形の栓である、長さ6.2cm、幅4.0cm、厚さ3.4cm。

W143～W175は箸で、断面方形・長方形から多角形・楕円形に削られて両端が細くなるもの、全体の長さはW159・W171で分かるもので24cm～25cm前後、幅と厚さは、W146・W149・W150の1cm前後のものを除くと、0.5cm～0.7cmのものが主体である。

W176～W178は小型の曲物の底板で、W176は径8.9cmの楕円形のもので厚さ0.9cm、W177は径5.3cmの円形のもので厚さ0.3cm、W178は径4cm前後の楕円形のもので厚さ0.2cmである。W179は片端部が焼けて炭化している棒で、長さ14.2cm、削って成形されている。

00B区SD03 (W180～W184)

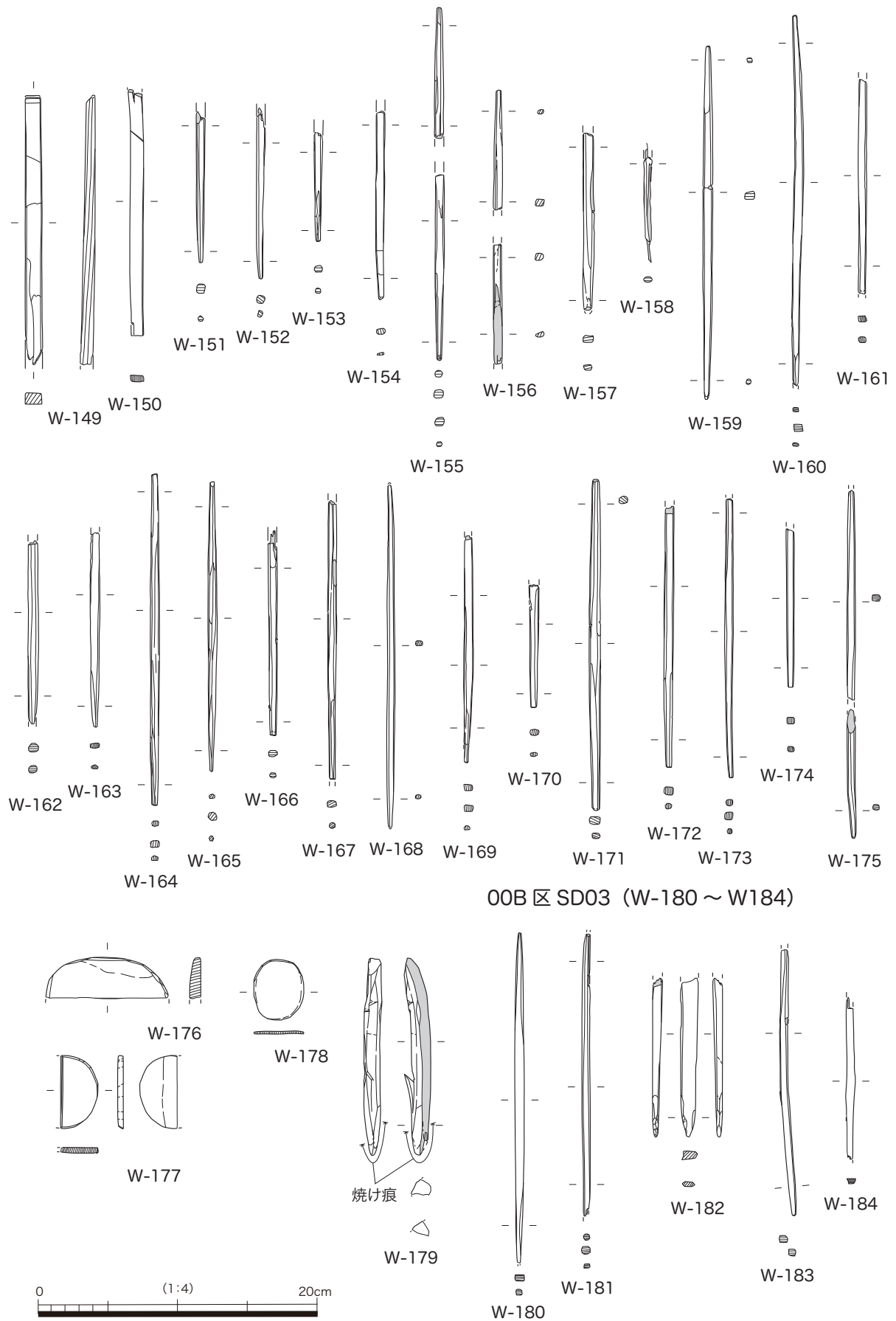
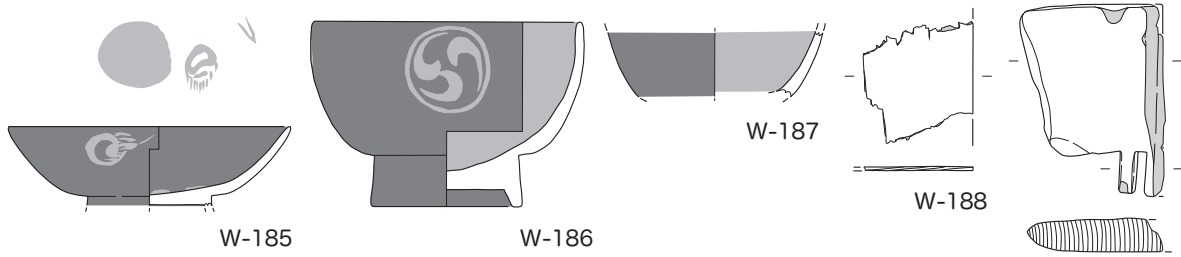
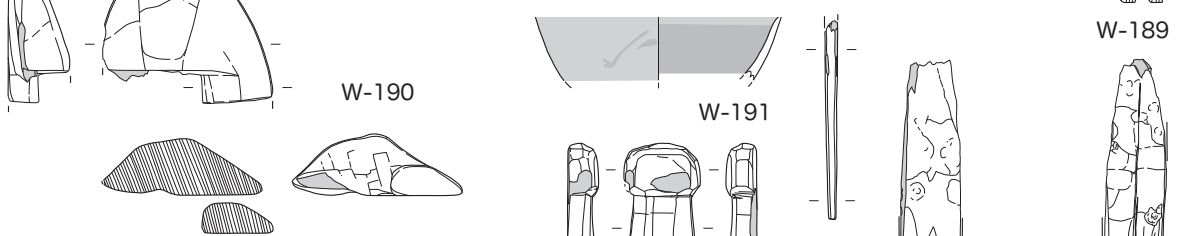


図 91 木製品 7 (1:4)

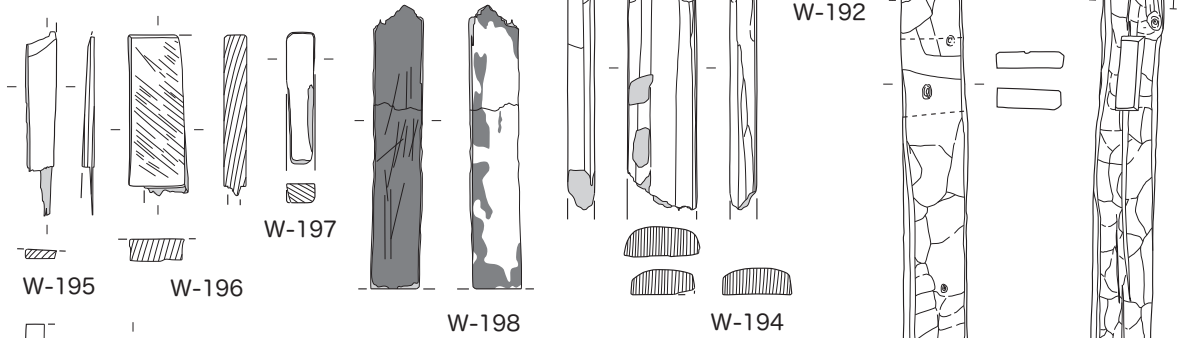
00B区SK04 (W-185 ~ W190)



00B区SK30 (W-191 ~ W194)



00B区SX02 (W-195 ~ W203)



00B区NR01 (W204)

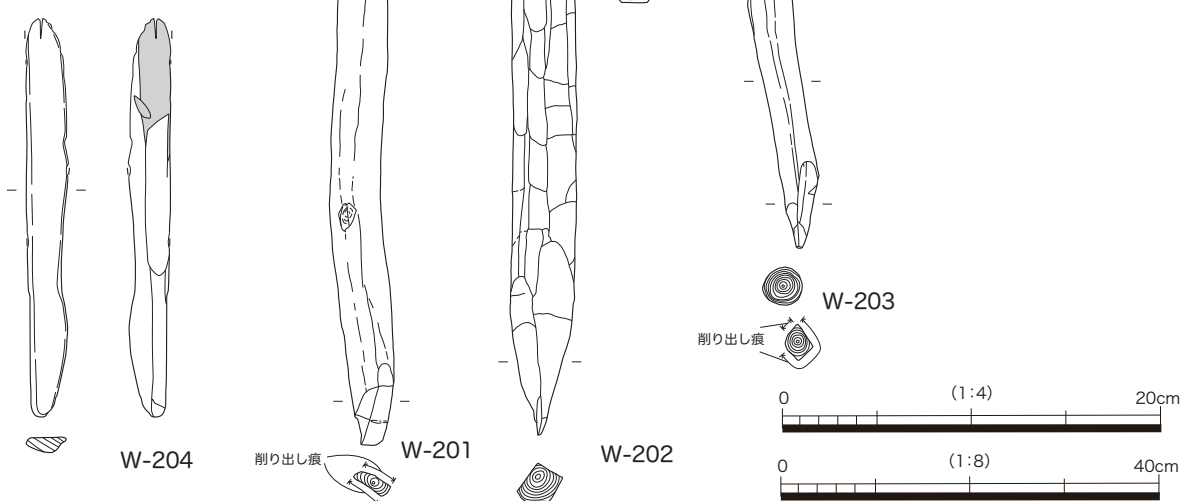
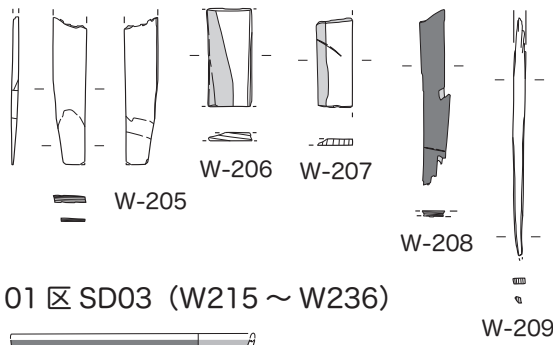
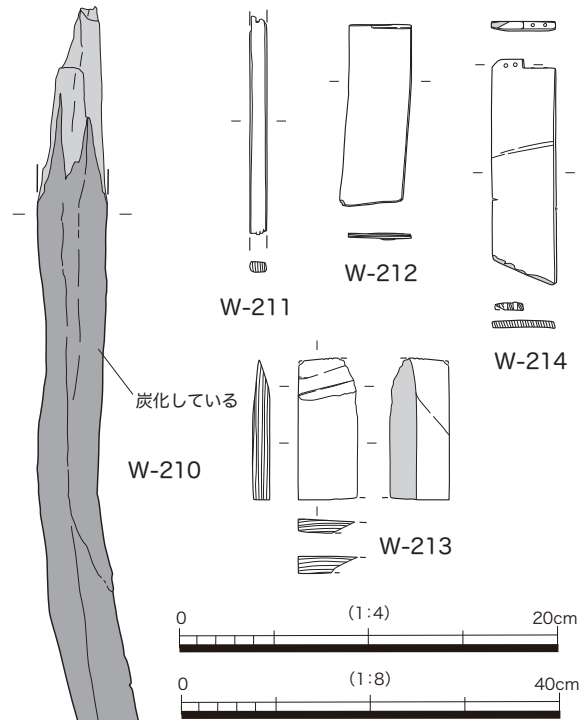


図92 木製品8 (1:4、W-193は1:16、W-201 ~ W-203は1:8)

00B区検出1 (W205 ~ W209)



00B区西トレンチ・西壁トレンチ・
北2トレンチ・2トレンチ (W210 ~ W214)



01区SD03 (W215 ~ W236)

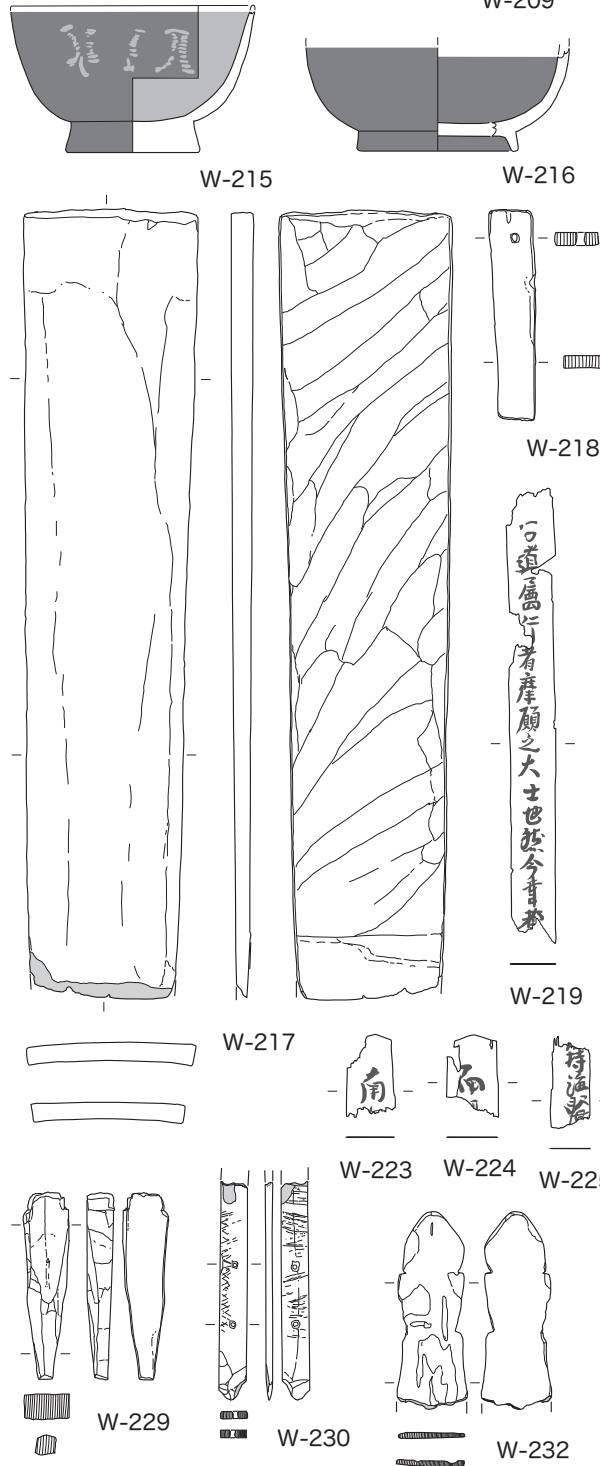


図93 木製品9 (1:4、W210は1:8)

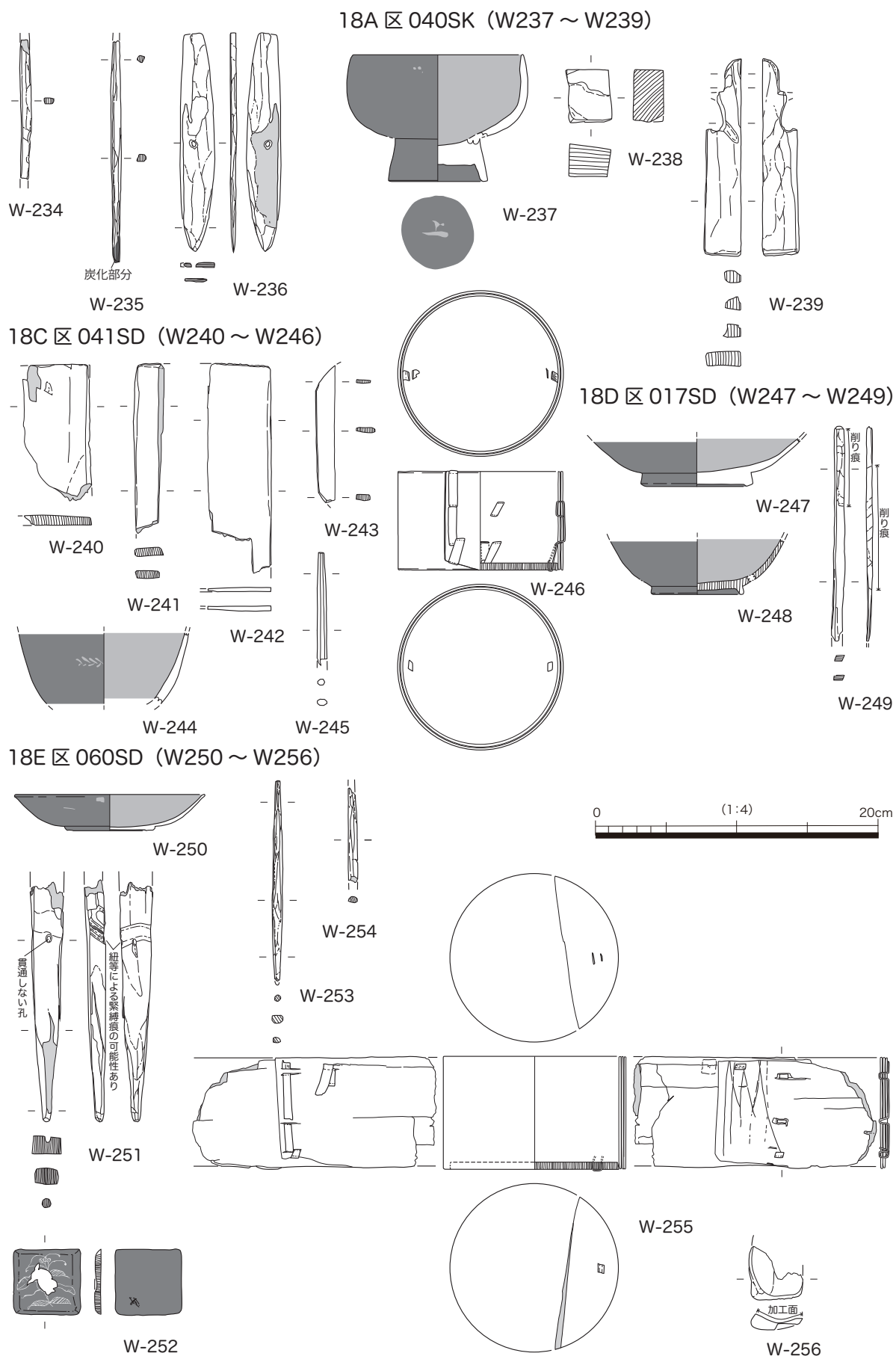


図94 木製品 10 (1:4)

W180～W184は箸で、W143～W175と大きさと形態は同様である、W182はやや偏平で、先端が削り尖らせている。W180は長さ23.6cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。

00B区SK04 (W185～W190)

W185～W187は漆碗で、W185はやや見込みの浅い碗、外面黒漆に赤漆の流れ玉の絵文、内面黒漆に底部の赤漆の流れ玉の絵文、口縁部径15.0cm、W186は外面黒漆に赤漆の巴文が三方、内面赤漆の高台がやや高い見込みの深い丸碗、口縁部径14.0cm、器高9.8cm、高台部径7.7cmを測る、W187は外面黒漆、内面赤漆の碗である。W188は折敷と思われる薄板、厚さ0.2cm、W189は側面にソケット状の切り込みがあるもので建築材か、W190は丸い山形で面取りがあるもので下側は差し込み用か、二又になる。

00B区SK30 (W191～W194)

W191は口縁部径13.0cmの漆碗で外面黒漆の上に金彩、その上に赤漆の絵、内面赤漆に口縁部の金彩がみられる。W192は箸で断面方形から長方形のもの、W193は長さ193cm以上、幅12.5cm、厚さ11.0cmの断面方形の柱、表面がカンナにより削られており、片隅が削り尖らせている、一部黒塗りがみられる、柱に長方形の貫抜き穴がみられる。W194は有頭棒で、片面は丸く削り出されており、片面は平坦になっている。

00B区SX02 (W195～W203)

W195は～W199は板で、W195は幅1.6cm、厚さ0.4cm程の板材、W196は端面や片面に削り痕がみられるもの、幅3.1cm、厚さ1.1cm、W197は断面長方形の板、幅1.4cm、厚さ0.9cmを測る。W198は両面に炭化部分がみられるもので、片面に刃物痕がみられる、幅2.5cm、厚さ0.3cmである。W199は細長い薄板で、幅0.8cm、厚さ0.1cmである。W200はやや台形状の角材、長さ4.7cm、幅3.1cm、厚さ2.8cmを測る。W201～W203は杭で、W201は小枝のみ削られた径5.0cmの丸柱、W202は断面六角形に削られた角柱で径6.7cm、W203は径4.2cmの丸柱である。

00B区NR01(W204)

W204は断面三角形の板材で幅2.1cm、厚

さ0.8cmである。

00B区検出1 (W205～W209)

W205～W209は板で、W205は細長い板材で片端が斜めに削り出されている、幅1.7cm、厚さ0.3cm、W206は厚さ0.4cm、W207は厚さ0.4cm、W208は厚さ0.25cmでW206～W208は同じ形状のものである。W209は箸で断面長方形のものである。

00B区西トレンチ・西壁トレンチ・

北2トレンチ・2トレンチ (W210～W214)

W210は径4.5cmの丸杭で全体が炭化しているもの、W211は断面長方形の箸と思われるもの、W212は幅3.3cm、厚さ0.2cmの薄板、W213は片端が斜めに削り出されている楔で、幅4.8cm、厚み1.9cmを測る、W214は箱板の一部と思われる幅3.3cm、厚さ0.4cmの薄板で、片端部の突出部に2ヶ所の小孔、その凹み部に小孔2ヶ所がみられる。

01区SD03 (W215～W236)

W215・W216は漆碗で、W215は外面黒漆に赤彩の絵文3個、内面赤漆、やや高台の高い丸碗、高台部径7.0cm、口縁部径は13cm前後のもの、W216は内・外面黒漆の丸碗、高台部は径8.0cmである。W217は桶の側板で、内面側がわずかに内湾する、内面側に削り痕が多数残る。W218は上部に径0.5cm程の穿孔のある長方形の板材で木札と思われるもの、墨書はみられなかった。W219～W228は柿経の断片で、上部と思われるものは山形になっており、幅2.5cm～2.6cmが残る。W219は「□道属行者摩頂之大士□然今當都」、W220は「營勢□者□」、W221は「□断之勢奉□□□依之」、W222は「□春草□□□春」、W223は「南□」、W224は「□南□」、W225は「□持海□□」、W226は「南無」、W227は「海水」、W228は「南無」の文字がみられる。W229は栓で、上部は板状で下部5cm程が断面方形に端側が細く削り出されている、W230は穿孔のある細長い板で、片端部が剣状に削り出される、板材中央に径0.3cm前後の穿孔が3cm離れて2個ある、両面の短軸方向に刃物痕が多数みられる。W231～W233は卒塔婆で、W231は上部に左右からの切れ込みがある有頭状の長い板材、上部の切れ込みの下に長さ2.0cm、幅0.8cm程

の楕円形の穿孔がみられる、W232 は塔形が小さく表現されるもの、W233 は厚みのあるもので上部の塔形が比較的明確に作り出されているものである。W234・W235 は箸で、W234 は断面長方形形状のもので上・下端を欠損している、W235 は断面方形形状のもので片端部が炭化している。W236 は短剣形をする筥で、身の中央部で幅広になり、柄側でやや細くなっており、先端が鋭く削り出されている、中央部に径 0.5cm 程の穿孔がある。

18A 区 040SK (W237～W239)

W237 は漆の口縁部がややすばまる高台の高い丸椀で、外面黒漆に赤漆の絵文、外面底部に赤漆の「上」、内面赤漆、口縁部径 12.0cm、器高 9.0cm、高台部径 6.8cm を測る。W238 は角材で長さ 3.6cm、幅 3.0cm、厚さ 2.4cm、W239 は片端が抉りのある板材で建築部材と思われるもの、長さ 13.9cm、幅 2.5cm、厚さ 1.0cm である。

18C 区 041SD (W240～W246)

W240～W243 は板で、W240～W242 は長方形形状のもので W240 は厚さ 0.7cm、W241 は厚さ 0.5cm、W242 は厚さ 0.3cm、W243 は円形状の板が割れたもので、厚さ 0.3cm を測る。W244 は漆の椀で、外面黒漆に赤漆の綾杉文、内面赤漆、W245 は箸で断面八角形に削られたもの、W246 は曲物で、径 11.8cm、器高 7.0cm を測る、径 11.0cm の円形の底板に側板が二重に巻かれており、二方で樹皮により固定されている。

18D 区 017SD (W247～W249)

W247・W248 は漆椀で、W247 は外面黒漆、内面赤漆、やや浅い皿状の椀、高台部径 6.3cm、W248 は外面黒漆、内面赤漆の椀、高台部径 6.3cm である。W247 は劣化のために体部が底部から開いたために皿状になっている可能性がある。W249 は断面長方形の箸である。

18D 区 060SD (W250～W256)

W250 は口縁部がやや端反りにひらく漆皿で、外面黒漆に赤漆の絵文、内面赤漆のもの、口縁部径 13.4cm、器高 2.5cm、高台部径 6.1cm を測る、W251 は片端が尖る断面長方形の角棒、太くなった部分に紐ずれのような緊縛痕と貫通しない小孔がある。W252 は一辺 6.6cm ～

6.7cm の方形の飾り板で、上面・下面とも黒漆で上面に金彩の草花絵、上面の縁が山形となる。W253・W254 は断面長方形から楕円形の箸、W255 は曲物で、径 12.3cm、器高 8.0cm のもの、径 11.8cm の円形の底板に三重の側板を巻いて樹皮で留めている。W256 は凹みの整形のある不明製品である。

第4章 自然科学的分析

第1節 清洲城下町遺跡の金属製品の 蛍光X線分析

堀木真美子・杓名貴彦*・鈴木正貴・蔭山誠一

1. はじめに

本項では、今回の調査区および隣接調査区(99A区等)で出土した、金属製品とその生産関連遺物について、主な金属元素の特定を目的に分析を行なった。2002年に刊行した報告書(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集

清洲城下町遺跡VIII)においては、99A区や97B区からは、鏡や飾金具、刀子、煙管、筭、銭などの銅製品、鉛玉などの他に、金属関連遺物として、鉄滓、韃の羽口、銅塊、とりべ(ここではルツボと称す)などが出土していることが報告されている。またこの報告を行なった際には、99A区の非鉄金属製品および金属関連遺物の出土状況から、飾金具や筭などの小型の銅製品の生産(銅細工師)に関わる資料群であると予想された。

今回の調査区では、金属製品や金属関連遺物が、数は少ないものの出土している(図95・表1)。金属製品としては、飾金具(M001・M002)や留金具(M003)、刀子(M012)がある。金属関連遺物は韃の羽口(M-039)やルツボの破片(M-045, M-046, M-048)が存在した。今回の調査区が99A区の南側となることや、製品だけではなく、ルツボなどが出土していることなどから、99A区との関連が強いと予想される。また2007年度に愛知県埋蔵文化財センター内に蛍光X線分析装置が配備されたことから、今回新たに出土した遺物と2002年に報告されたものと合わせて、写真撮影、透過X線撮影および元素の同定分析を行なった。

2. 分析方法と試料

分析方法は、試料の写真撮影を行なったのち、三重県立総合博物館内のデジタルX線透過装置(エクスロン・インターナショナル社製)をも

ちいてX線透過画像を撮影した。それらの画像を参照しつつ、測定箇所を特定し、蛍光X線分析を行なった。分析装置は、愛知県埋蔵文化財センター内の(株)堀場製作所製XGT-5200IIを使用した。測定条件は、雰囲気:大気中、X線照射径:100 μ m、測定時間:100s、X線管球:Rh、管電圧:50kVである。各試料において、最低2箇所の測定ポイントを設定し、測定を行なった。検出された元素のうち、土壌成分と思われるSi(珪素)、Al(アルミニウム)、については、金属成分とは見なさなかった。またFe(鉄)については、試料の状態から、土壌による付着物か製品の構成元素であるかを判断した。

なお、遺物の写真撮影は杓名が担当し、X線透過撮影は、三重県立総合博物館の間瀬 創氏と甲斐由香里氏にご協力をいただいた。蛍光X線分析は堀木が行なった。

分析に用いた試料および測定点は図95・図96・図98に示した。図96と図98の遺物は、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集清洲城下町遺跡VIIIで報告されたものである。図中のP-01、P-02などは蛍光X線を照射した場所を示す。検出されたおもな元素については、各箇所毎で検出されたものを示した。

3. 分析結果

図95・表2は、00A区・00B区・18A区・18B区・62D区で出土した金属関連遺物のうち、色調から銅を含んでいると思われる製品と、金属製品の加工に関わる遺物から今回分析を行なったものを示している。M001, 002, 003は色調から、銅を含んでいると予想され、X線分析の結果からも銅が確認された。このうちM002については、P-02, 03の蛍光X線分析でAu(金)の微弱なピークが認められた。が、模様などは確認できなかった。M003の板状の銅製品についても、透過X線画像と蛍光X線分析の結果からも、模様等は確認できなかった。M012は、刀子の柄部分でCu(銅)が、刃部でFe(鉄)が検出された。この柄部分においては、P02に

* 国立科学博物館理工学研究部

において、銅板の継ぎ目が観察され、その継ぎ目からはSn(錫)が検出された。M039は羽口である。先端部に白色の付着物質がみられたことから、その部分の分析を行なった。その結果、Cu、Pb(鉛)、Fe、Mn(マンガン)が検出された。このうち、FeとMnは粘土胎土に普通に含まれるため、付着物にFeやMnが含まれていたかは不明である。M045,046,048はルツボとしたものである。皿状の陶器に分厚い付着物が見られるものである。付着物は緑青と思われる緑や、赤褐色の不定形な付着物である。M045ではCuとAs(ヒ素)が、M046ではCu、Pb、SnとAsが確認された。

図96・図97・表3、図98・図99・表4は、本報告に隣接する調査区から出土した遺物である。ほぼ同時期の遺物と思われることから、今回の分析試料とした。図96・図97・表3は金属製品で、3096,3099は飾金具と目貫と思われる銅製品である。それぞれ3箇所を測定した。3098ではCu、Pb、Asを、3099ではCu、Pb、As、Sn、Zn(亜鉛)を確認した。3100から3104は刀子などである。3102は3099と同様にCu、Pb、As、Sn、Znを確認した。その他のものは、主にCuが確認されている。3106と3107は匙状のものである。共にCu、Pbが確認でき、3106ではZnが含まれていた。3108ではCu、Pbが、3109はCuだけが検出された。3111から3115までは、小さな塊であったり棒状のもので、製品よりは細工などの材料かと思われるものである。主にCuが確認されている。3112と3117ではCuの他にPbが確認された。3111と3114、3117ではCu以外の主要な元素としてAsが確認された。3118と3119はキセルである。3118ではCu、Znが主に、1箇所Pbが確認された。3119ではCu、Pb、Znが主として確認でき、継ぎ目と思われる箇所でSnが確認された。3120はCu、Pb、Sn、Asが確認できた。

図98・図99・表4は、金属製品の加工に関わる遺物である。「ルツボ」とした3170から3196、3216は、皿状の焼物に、スラグ状の物質が付着しているものである。用途として、取鍋として溶融した金属を受けるために使用したのか、坩堝として容器内で金属を溶融させたの

かは判断できなかったため、便宜上「ルツボ」とした。3170、3183、3184ではCu、Pb、Asが確認された。3171、3188、3190、3192ではCuとPbが、3175、3198、3191はCuが確認された。3177では、全ての測定点でPbが、P-01、05のみでCuが確認された。3180では3点の測定点でCu、Pb、Znが確認された。3196はP-02でのみCu、Pb、Znが確認され、他の測定点ではPbが確認されなかった。3198では全ての測定点でZnが確認された。この3198は取手付きの小壺の形状を成しており、取手の外側部分からはCuが確認された。3216はルツボの蓋と思われるもので付着物部分を測定するとCuが全ての測定点で、P-04以外の4箇所でZnが確認された。3200、3204、3232は不定形の金属塊と思われる。これらはいずれもCuとSnが安定して確認できた。3232はCuとSnに加え、PbとZn、Sb(アンチモン)が確認できた。3231はPbが確認された。

4. 考察

○キセルや刀子の鞘のつなぎ目について

今回の分析試料のうち、キセルの吸口である3119では、板状の素材を綴じ合せたと思われる部分から、Snが検出されている。図100に3119のSnが確認された測定点P-04とP-05の画像を示す。画像中の直線部分が合わせ部分である。測定箇所は、十字の中心の円形部分である。P-04では平坦部分を測定し、P-05では凸部を測定している。その結果、P-04ではCu、Pb、Znが確認され、P-05ではCu、Pb、Znに加えSnが確認できた。そこで元素マッピングを行なった結果、Snが直線状に分布することが確認できた。これは真鍮製の板を筒状にした際に錫を用いてつなぎ合わせたものと思われる。

○亜鉛に関わる遺物について

今回の分析試料の中で、特質すべき遺物が3198の「ルツボ」である。この遺物に関しては、堀木ほか(2020)にてすでに報告を行なっているが、清洲城下町遺跡では6点の亜鉛に関わる遺物が確認されている。ここでは、3198について報告を行う。複数の測定点でZnが確認され、このうち「ルツボ」の外側面や取手部分から

はCuが認められた。「ルツボ」の容器内の測定箇所からは、Zn以外の金属材料由来の元素は認められなかった。図101に元素マッピングの画像を示す。堀木ほか（2020）で報告を行なった他の5点の遺物に関しても、同様にほとんどの測定点でZnが確認され、数カ所の測定点でCuが確認されている。これらのZnが集中して認められる「ルツボ」が、Znを含む銅製品と、どのように関係したかは現時点で確認することはできないが、今後これらZnを含む「ルツボ」とそれ以外の「ルツボ」、Znを含む銅製品などとの出土位置や時期の関係を整理し、生産活動の様子を明らかにできればと考える。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP26350385 の助成を受けたものである。

<参考文献>

鈴木正貴・蔭山誠一（2004）「清須城下町における銅製品生産ー愛知県における金属器生産（7）」『研究紀要 第5号』、p.47-62、愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

堀木真美子・杵名貴彦・鈴木正貴・蔭山誠一（2020）「清洲城下町遺跡出土の「るつぽ」の分析-99A区-」『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第99集 『清洲城下町遺跡 VIII』2002

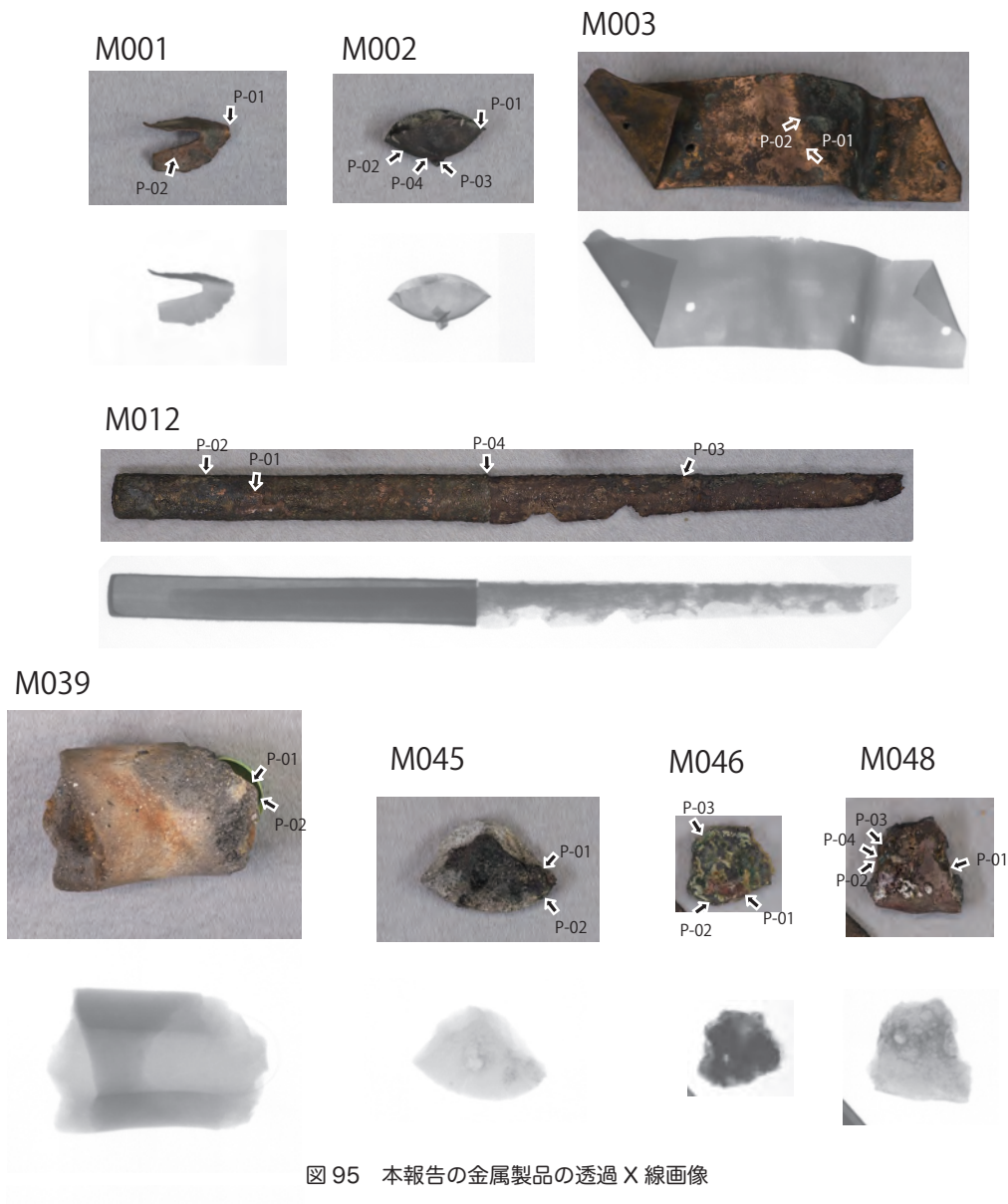


図 95 本報告の金属製品の透過 X 線画像

表 2 本報告の金属製品の分析結果

番号	調査区	遺構	種別	形状等	測定箇所	検出された主な元素			
M001	00A	西壁トレンチ	銅製品（飾金具）	扁平	P-01	Cu	As		
					P-02	Cu	As		
M002	00B	検出 1	銅製品（飾金具）	球状の板	P-01	Cu	As		
					P-02	Cu	As	Au?	
					P-03	Cu		Au?	
					P-04	Cu	As		
M003	00A	検出 2	銅製品（留金具）	板	P-01	Cu	As		
					P-02	Cu	As		Fe
M012	00A	検出 1	鉄製品（刀子）	柄	P-01	Cu			
				柄の継ぎ目	P-02	Cu	Sn		
				刃	P-03				Fe
				柄の元	P-04	Cu			
M039	18B	017SD	韃の羽口の先端部	付着物	P-01(白)	Cu		Fe	Mn
					P-02(白)	Cu	Pb	Fe	Mn
M045	00A	検出 1	ルツボ	付着物	P-01	Cu	As		
				付着物	P-02	Cu	As		
M046	62D	検出 1	ルツボ	付着物	P-01(赤)	Cu	Pb	As	Sn
					P-02(黒)	Cu	Pb		Sn
					P-03(断面)	Cu	Pb		Sn
M048	18A	検出 2	ルツボ	付着物	P-01(黒粒)	Cu	As		
					P-02(黒)	Cu			Fe

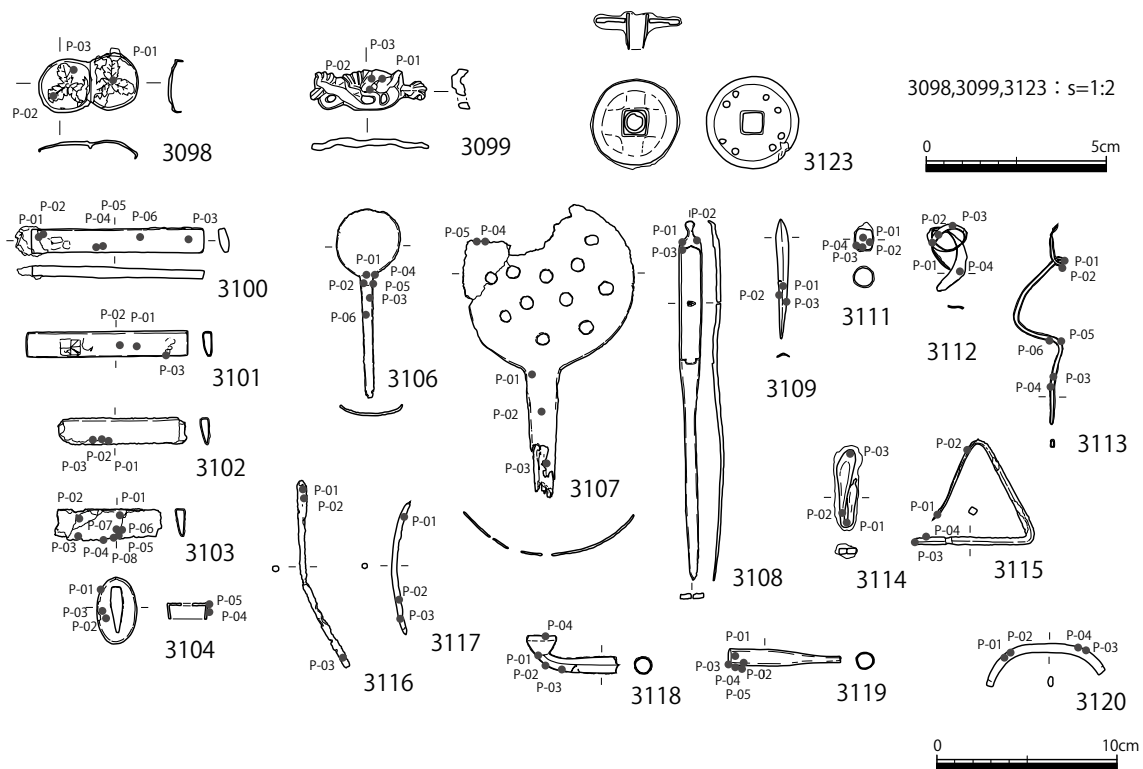


図 96 報告済の金属製品実測図

表 3 報告済の金属製品の分析結果

資料番号	出土地点	種 類	測定点	金属元素					
3098	97B	NR02植物層	銅製品(飾金具)	P-01	Cu	Pb	As		
				P-02	Cu	Pb	As		
				P-03	Cu	Pb	As		
3099	95B		銅製品(目釘かくし)	目貫	P-01	Cu	Pb	As	Sn
					P-02	Cu	Pb	As	Sn
					P-03	Cu	Pb	As	Sn
					P-03	Cu	Pb	As	Sn
3100	97B	NR02植物層	銅製品(小柄)	P-01	Cu				S
				P-02	Cu	Pb			
				P-03	Cu				
				P-04	Cu				
				P-05	Cu				
				P-06	Cu				
3101	97B	NR02植物層	銅製品(小柄)	P-01	Cu	Pb			
				P-02	Cu	Pb			
				P-03	Cu	Pb			
3102	99B	整地層	銅製品(小柄)	P-01	Cu	Pb	As	Sn	Zn
				P-02	Cu	Pb	As	Sn	Zn
				P-03	Cu	Pb	As	Sn	Zn
3103	96	検II	銅製品(刀子サヤ)	P-01	Cu				Zn
				P-02	Cu				Zn
				P-03	Cu		As		Zn
				P-04	Cu		As		
				P-05	Cu				
				P-06	Cu		As		S
				P-07	Cu				
				P-08	Cu			Sn	
3104	97C	検I	銅製品(ノコギリ)	P-01	Cu	Pb		Sn	
				P-02	Cu				
				P-03	Cu				
				P-04	Cu	Pb			
				P-05	Cu				
3106	97B	中央トレンチII	銅製品(サジ)	P-01	Cu				Zn
				P-02	Cu				Zn
				P-03	Cu	Pb			Zn
				P-04	Cu	Pb			Zn
				P-05	Cu	Pb			Zn
				P-06	Cu	Pb			Zn
3107	97B	南壁トレンチII	銅製品(灰匙)	P-01	Cu			Sn	S
				P-02	Cu	Pb			
				P-03	Cu	Pb			
				P-04	Cu	Pb			
				P-05	Cu	Pb			
3108	97B	NR02植物層	銅製品(斧)	P-01	Cu	Pb			
				P-02	Cu	Pb			
				P-03	Cu	Pb			
				P-03	Cu	Pb			
3109	96	T06 SX01の下	銅製品(留金具)	P-01	Cu				
				P-02	Cu				
				P-03	Cu				
				P-03	Cu				
3111	99A	SK116	銅片	扁平	P-01	Cu		As	
					P-02	Cu		As	
					P-03	Cu			
					P-04	Cu		As	
3112	99A	SK94	銅製品(金具)	円盤状	P-01	Cu	Pb		
					P-02	Cu	Pb		
					P-03	Cu	Pb		
					P-04	Cu	Pb		
3113	99A	SD12	銅製品(不明)	棒状	P-01	Cu			
					P-02	Cu			
					P-03	Cu			
					P-04	Cu			
					P-05	Cu			
					P-06	Cu			
3114	99A	1SK94	銭貨(不明)	P-01	Cu		As		
				P-02	Cu		As		
				P-03	Cu				
3115	99A	SK182	銅製品(不明)	棒状	P-01	Cu			
					P-02	Cu			
					P-03	Cu			
					P-04	Cu			
3116	99A	SK94	銅製品(不明)	棒状	P-01	Cu			
					P-02	Cu			
					P-03	Cu			
3117	95B	SK192	銅製品(線)	P-01	Cu	Pb	As		
				P-02	Cu	Pb	As		
				P-03	Cu				
3118	95B	トレンチ	銅製品(キセル雁首)	P-01	Cu				Zn
				P-02	Cu				Zn
				P-03	Cu	Pb			Zn
				P-04	Cu				Zn
3119	99A	SK88	銅製品(キセル吸口)	P-01	Cu	Pb			Zn
				P-02	Cu	Pb			Zn
				P-03	Cu	Pb	Sn		Zn
				P-04	Cu	Pb			Zn
				P-05	Cu	Pb	Sn		Zn
3120	95B	SK183	銅製品(不明)	棒状	P-01	Cu	Pb	As	Sn
					P-02	Cu	Pb	As	Sn
					P-03	Cu	Pb	As	Sn
					P-04	Cu	Pb	As	Sn

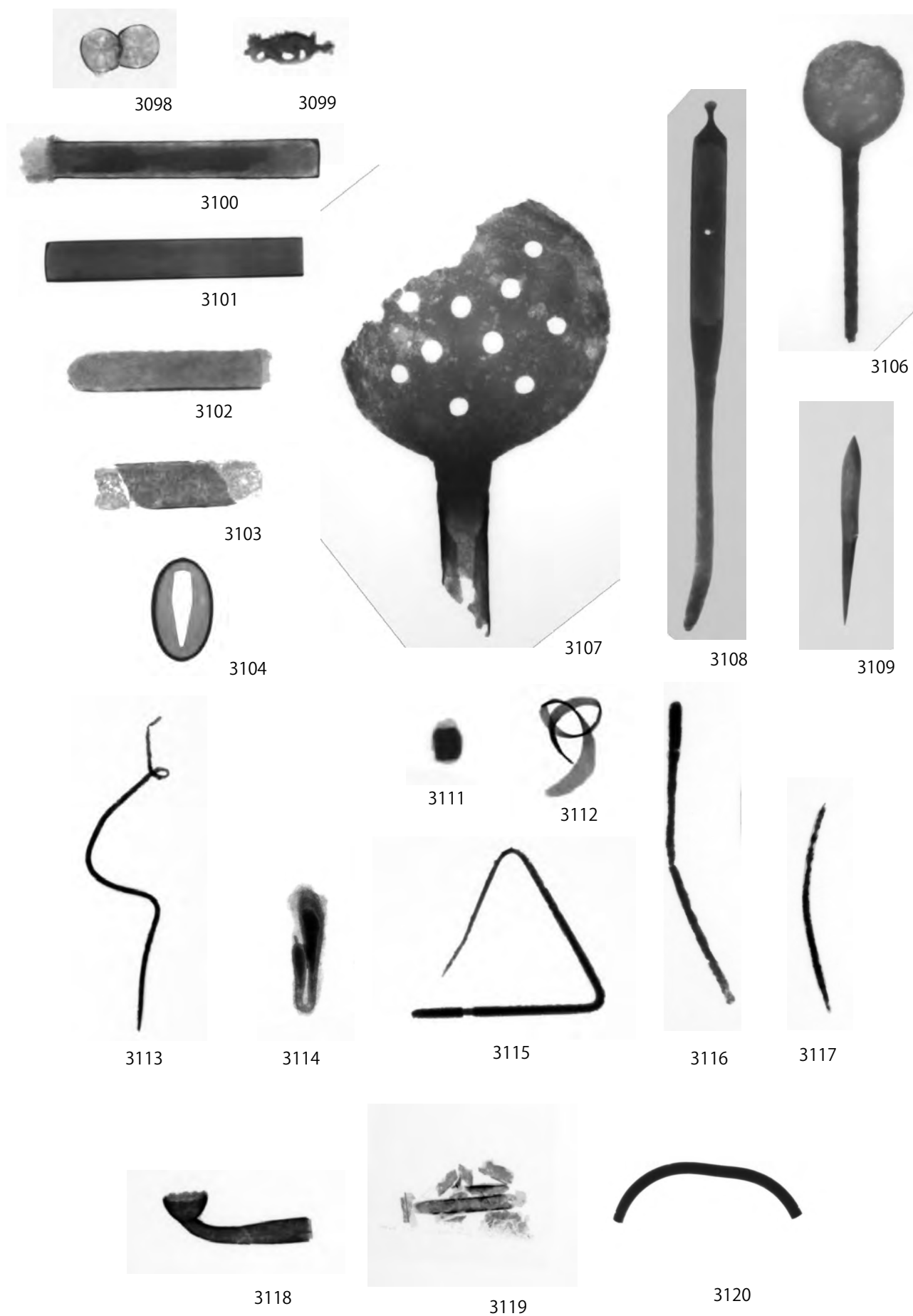


図 97 報告済の金属製品の透過 X 線画像

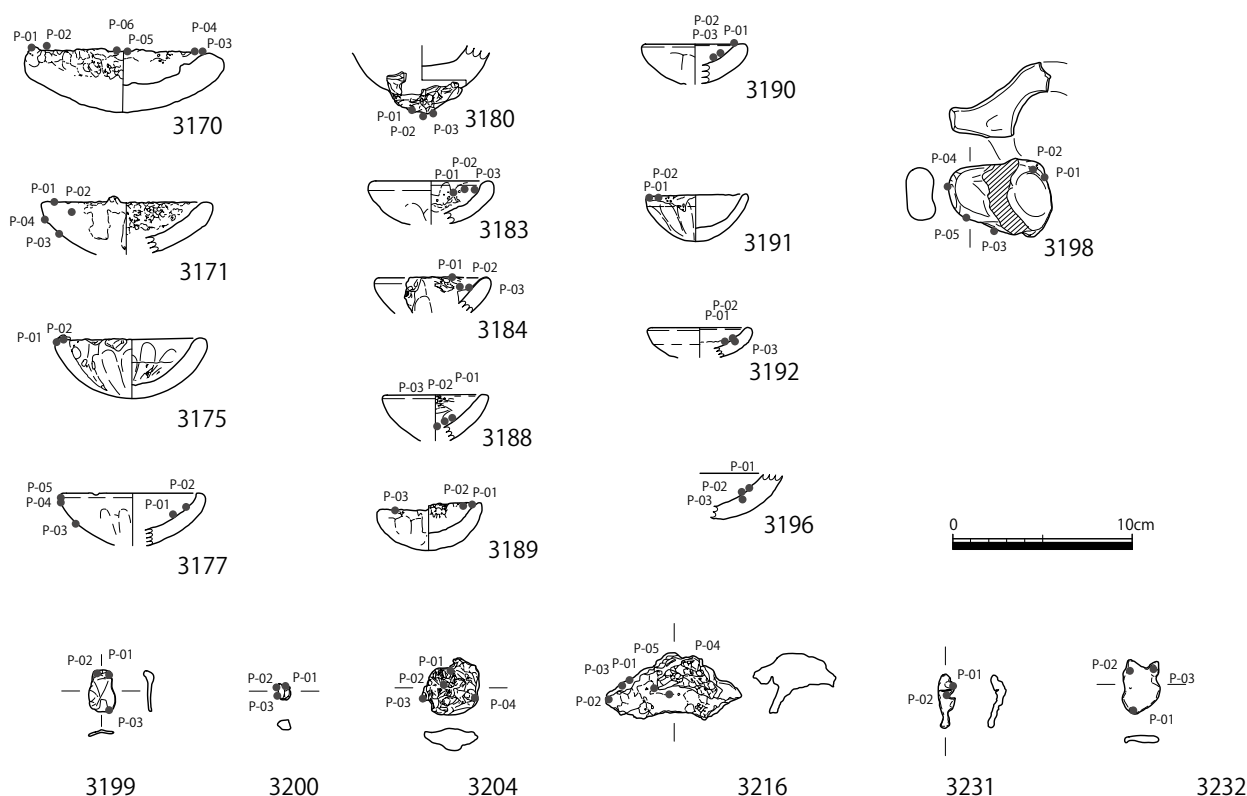


図 98 報告済のルツボ・銅滴・銅塊実測図

表 4 報告済のルツボ・銅滴・銅塊の分析結果

資料番号	出土地点	種 類	測定点	金属元素			
3170	99A	検II	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	As
				P-02	Cu	Pb	As
				P-03	Cu	Pb	As
				P-04	Cu	Pb	As
				P-05	Cu		As
3171	99A	検II	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	
				P-02	Cu	Pb	Zn
				P-03	Cu		
				P-04	Cu		
3175	99A	SK198	ルツボ 椀型	P-01	Cu		
				P-02	Cu		
3177	99A	検II	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	
				P-02		Pb	
				P-03		Pb	
				P-04		Pb	
				P-05	Cu	Pb	
3180	99A	SK89	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	Zn
				P-02	Cu	Pb	Zn
				P-03	Cu	Pb	Zn
3183	99A	検II	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	As
				P-02	Cu	Pb	As
				P-03	Cu	Pb	As
3184	99A	SK198	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	As
				P-02	Cu	Pb	As
				P-03	Cu	Pb	As
3188	99A	SK198	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	As
				P-02	Cu	Pb	
				P-03	Cu	Pb	
3189	99A	検II	ルツボ 椀型	P-01	Cu		
				P-02	Cu		
				P-03	Cu		
3190	99A	検II	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	Bi
				P-02	Cu	Pb	Bi
				P-03	Cu	Pb	Bi

資料番号	出土地点	種 類	測定点	金属元素			
3191	99A	SK89	ルツボ 椀型	P-01	Cu		
				P-02	Cu		
3192	99A	検II	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	
				P-02	Cu	Pb	
				P-03	Cu	Pb	
3196	99A	検II	ルツボ 椀型	P-01	Cu	Pb	Zn
				P-02	Cu	Pb	Zn
				P-03	Cu		Zr
3198	99A	SD12	ルツボ 柄付	P-01			Zn
				P-02	Cu		Zn
				P-03	Cu		Rb
				P-04			Sr
				P-05	Cu	Pb	Zn
3199	99A	NO113	銭貨(不明)	P-01	Cu	Pb	As
				P-02	Cu	Pb	Sn
				P-03	Cu	Pb	
3200	99A	検II	銅塊 礫状	P-01	Cu		Sn
				P-02	Cu		Sn
				P-03	Cu		Sn
3204	99A	SK89	銅滴 椀型	P-01	Cu		Sn
				P-02	Cu		Sn
				P-03	Cu	Pb	Sn
				P-04	Cu		
3216	99B	整地層	(ルツボフタ?)	P-01	Cu		Zn
				P-02	Cu		Rb
				P-03	Cu		Zn
				P-04	Cu		Zr
				P-05	Cu	Pb	
3231	95A	検I-1	鉛塊? 棒状	P-01		Pb	
				P-02		Pb	
3232	95A	検I-1	銅塊 扁平	P-01	Cu	Pb	Sn
				P-02	Cu	Pb	Zn
				P-03	Cu	Pb	Sb

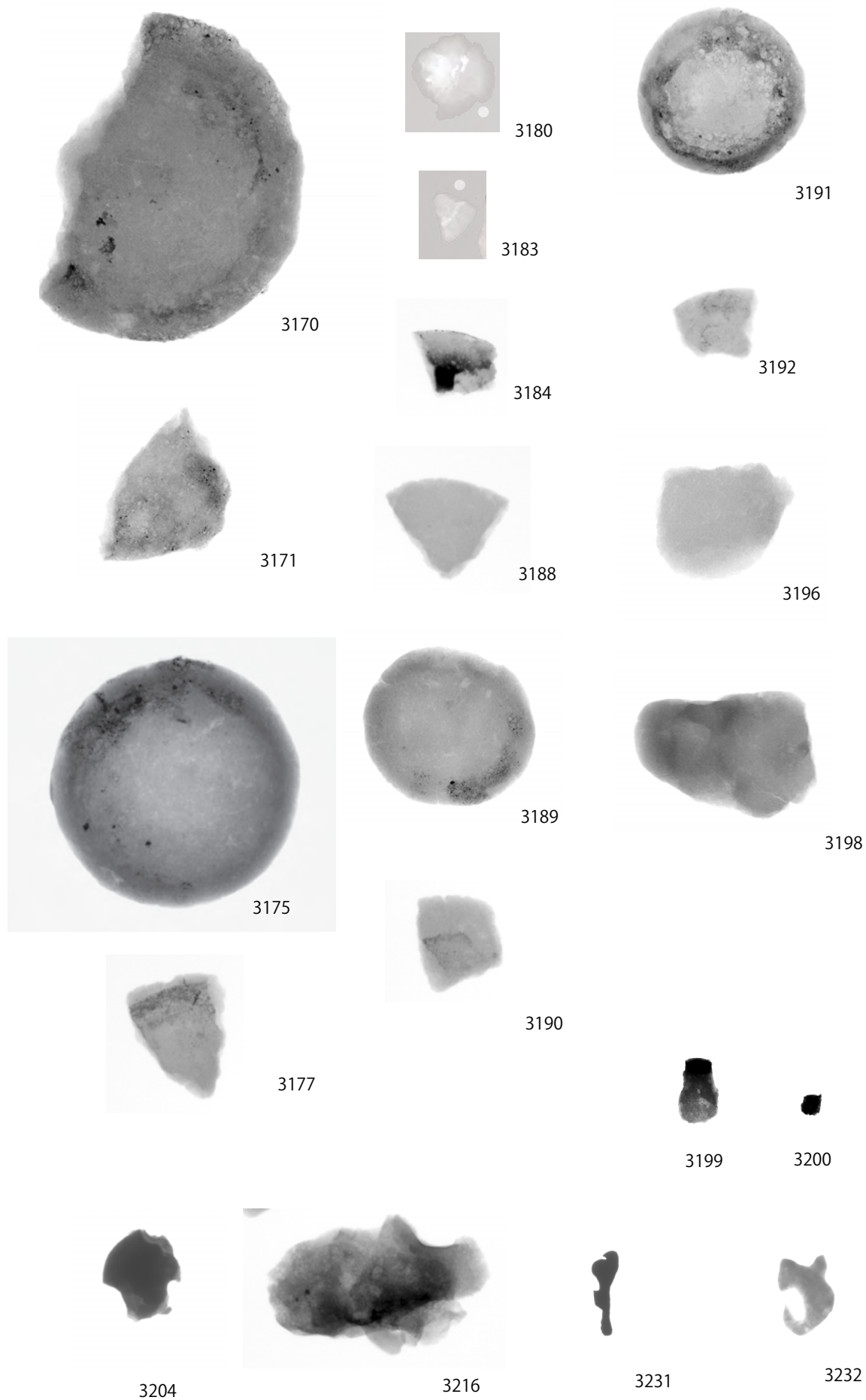
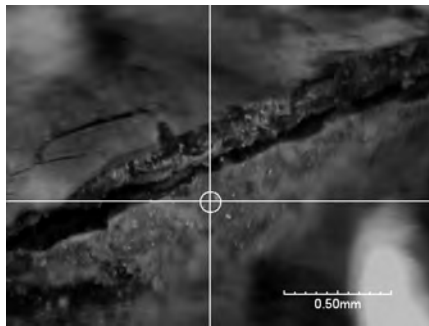
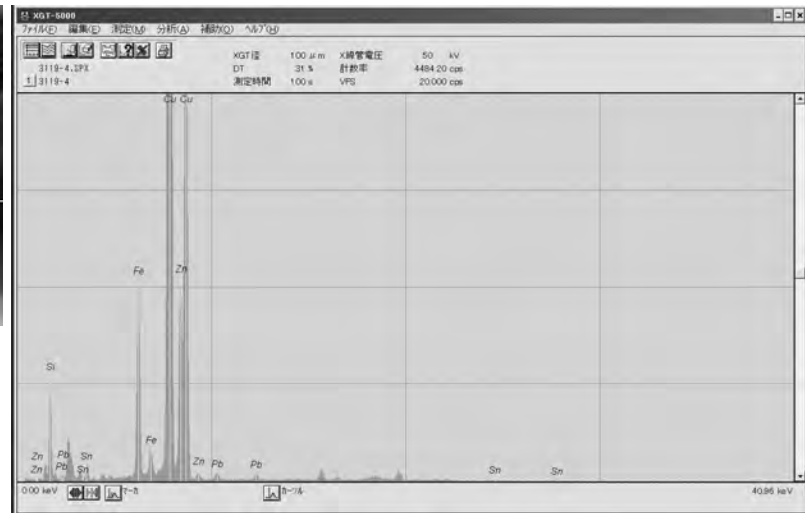


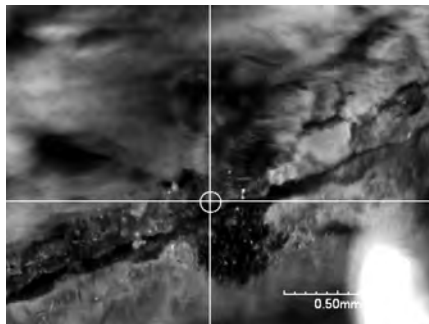
図 99 報告済のルツボ・銅滴・銅塊の透過 X 線画像



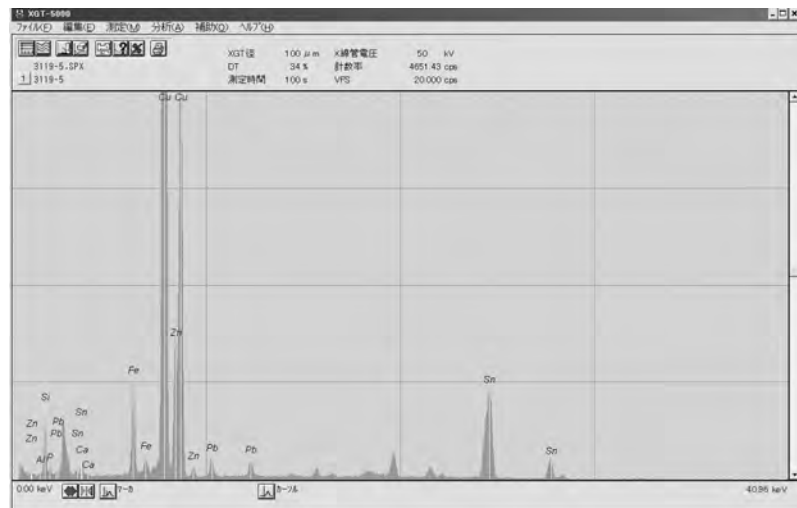
▲ P-04 測定箇所



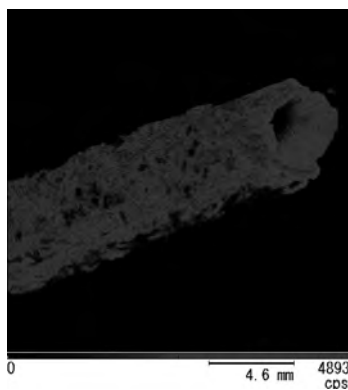
▲ P-04 測定箇所のスペクトル



▲ P-05 測定箇所



▲ P-05 測定箇所のスペクトル

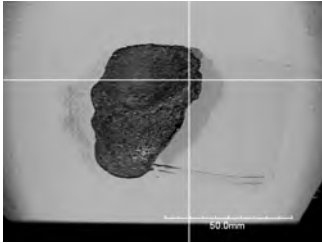


▲ Cu の分布状況

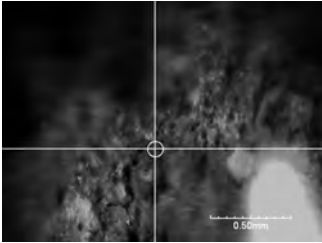


▲ Sn の分布状況

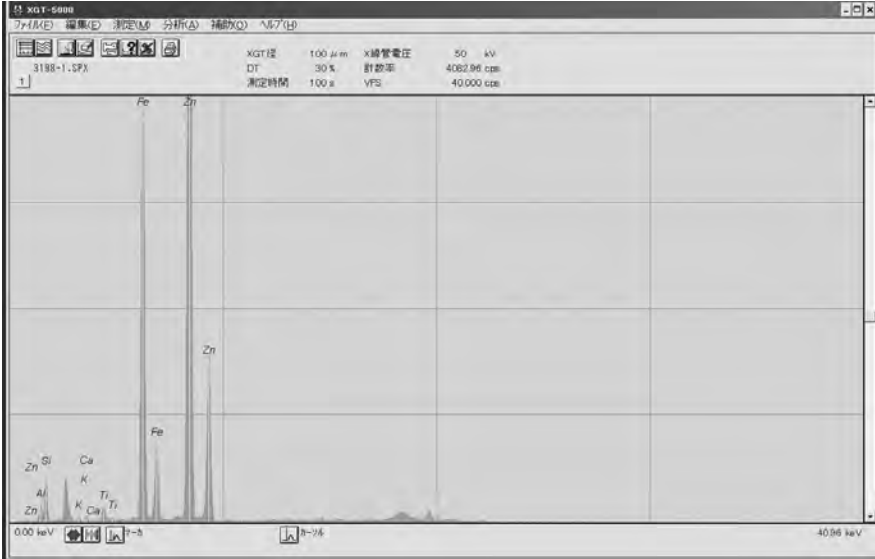
図 100 金属製品 3119 (キセル 吸口) の分析結果



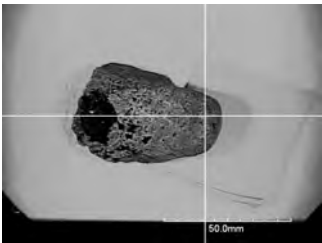
▲ P-01 測定箇所



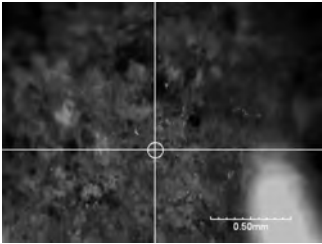
▲ P-01 測定箇所拡大



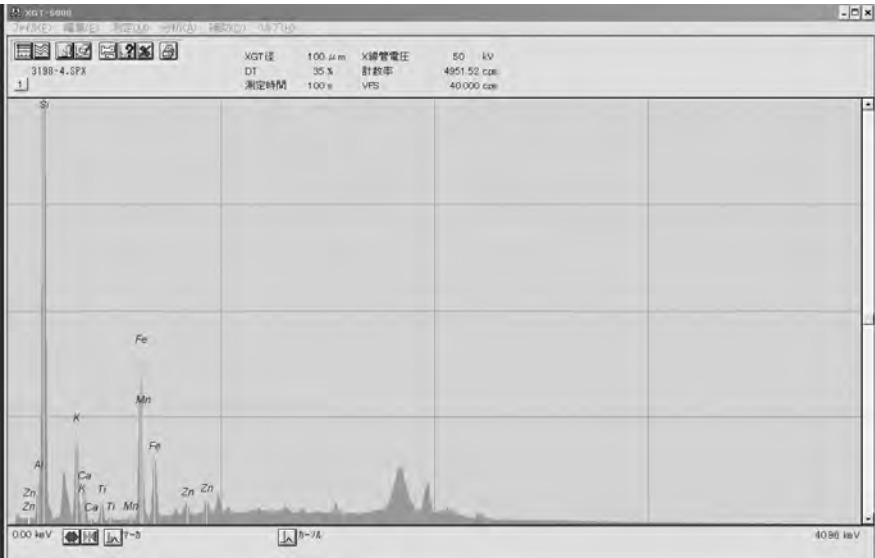
▲ P-01 測定箇所のスペクトル



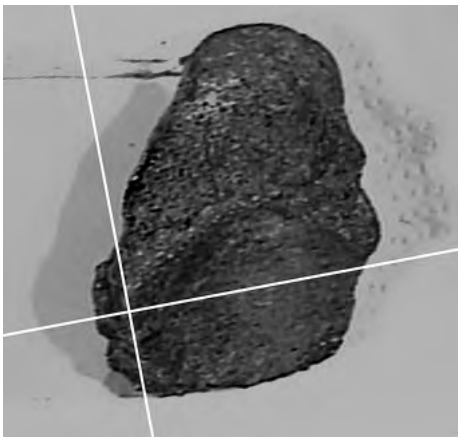
▲ P-04 測定箇所



▲ P-04 測定箇所拡大



▲ P-04 測定箇所のスペクトル



▲ 「ルツボ」 3198



▲ Zn 分布状況

図 101 ルツボ 3198 の分析結果

第2節 清洲城下町遺跡における層序と古環境

鬼頭 剛・株式会社パレオラボ AMS 年代測定グループ

1. はじめに

清洲城下町遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および地形解析の結果を報告する。

2. 試料および分析方法

各調査区で地表から、あるいは遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。また、各調査区の層序断面からは放射性炭素年代測定の試料を採取した。分析方法の詳細を以下に記す。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。加速器質量分析法は125 μ m の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.3(較正曲線データ: INTCAL13)を使用した。なお、 2σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された放射性炭素年代誤差に相当する 95.4% 信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

調査地点を含めた広域的な周辺地形を解析するため、1/2500 スケールで等高線図を作成した。作成には愛知県西春日井郡清洲町発行(市町村合併前の地図を用いたので発行時の市町村名を使用する。)の「都市計画図(1/2500)」、同郡春日町の「都市計画図(1/2500)」、同郡新

川町発行の「都市計画基本図(1/2500)」、同郡西春日町発行の「都市計画図(1/2500)」、財団法人名古屋都市整備公社発行の「用途地域指定図(1/2500)」にプロットされた標高値を基に等高線間隔 0.2m で描画した。なお解析にあたって、河川堤防や高速道路、工場や学校のような、人工的に建設・造成されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。描画後には現地踏査を実施し、さらに航空写真を基に検討を加えた。

3. 分析結果

(1) 各調査区での試料採取

清洲城下町遺跡の 17A 区・18B 区・18E 区の 3 調査区において層序の記載と分析試料を採取した。調査年度の古い順に記す。

17 区は、五条川の東西方向にかかる橋のうちのひとつ船枋(ふないり)橋が、五条川の左岸堤防にかかる場所からまっすぐ東へゆるやかに下って傾斜する東西方向の道路に沿う南側に、西から 17A 区、17B 区として設定された。調査地点は五条川の流路から約 50m 東にある。17A 区の南側で東西 2.3m、南北 2.4m の長さのトレンチが掘削された(図 102)。トレンチの壁面でみられる地層は、白色～灰白色を呈する下位層と灰色の上位層とに大きく 2 層に区分される(図 103a)。下位層より、標高 1.00m ～ 1.80m には灰白色(新版標準土色帖によるカラーチャートで 5Y8/2; 以下ではカラーチャート記号のみを記す)あるいは明褐色(7.5YR5/6)の粗粒砂の混じる細粒～中粒砂層が堆積し、その上に標高約 1.80m ～ 3.50m までを灰色(5Y4/1)を呈する現代の水田耕作土やにぶい黄褐色(10YR5/4)の現代の盛土によって覆われている。下位層の砂層の断面には葉片などの植物片が濃集する層準もみられる。砂層にはシルトや粘土の基質が少なく淘汰は良好である。また、トラフ状斜層理が観察される。この砂層中の、層厚約 1cm のレンズ状に挟まれる植物片の濃集層について、トレンチ西側の標高 1.39m で放射性炭素年代測定用の試料 1 を(図 103b)、トレンチ北側の標高 1.36m で試料 2 を採取した(図 103c)。

五条川流路河川敷の高水敷に設定された 18

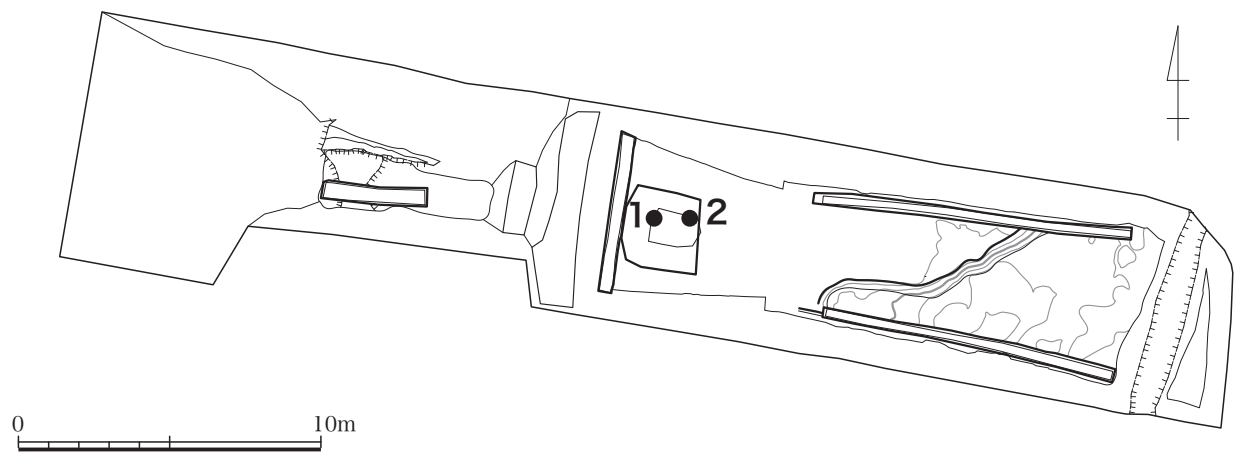


図 102 17A 区における分析試料採取地点
黒い丸は採取地点、数字は試料番号を示す。

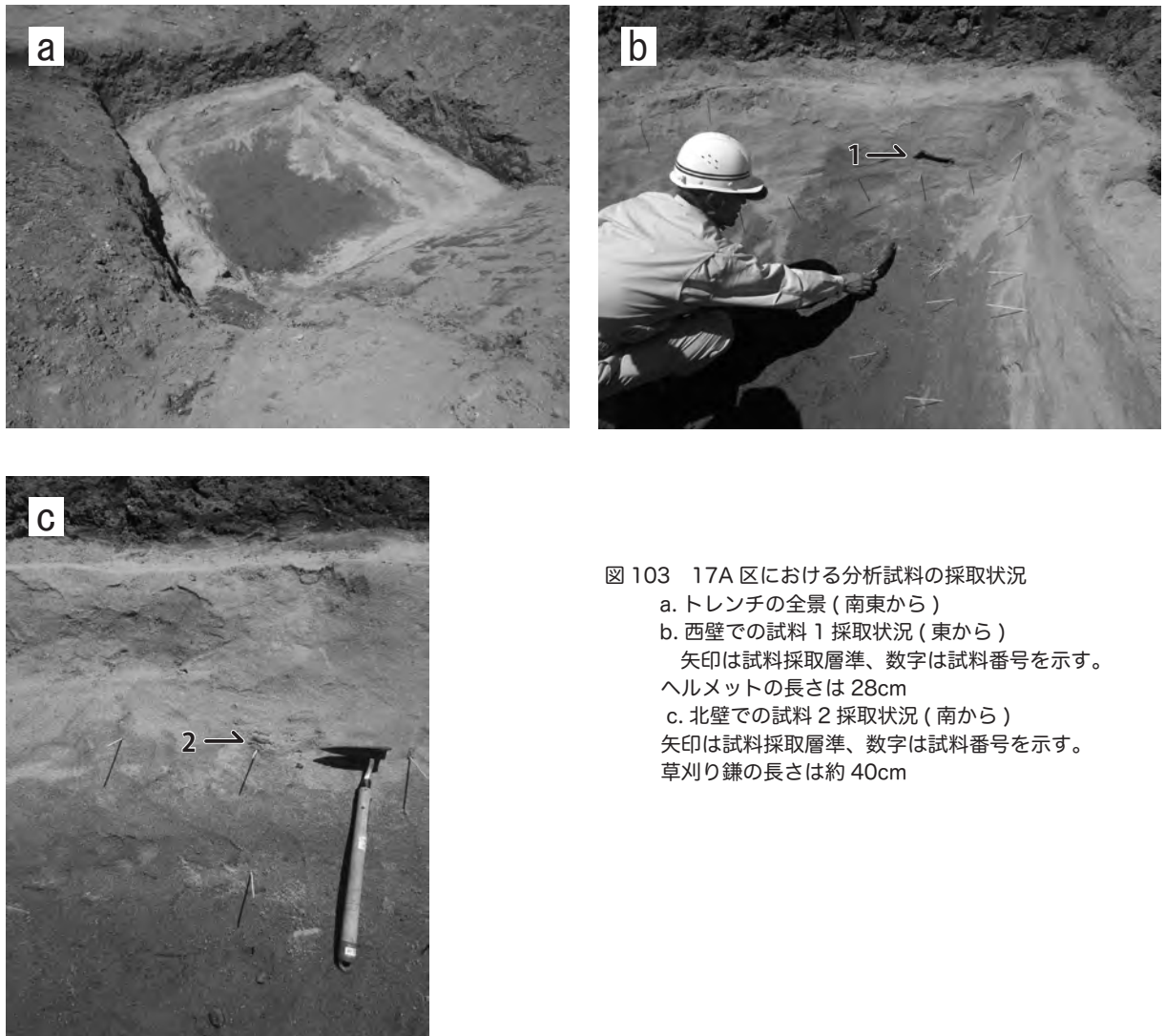


図 103 17A 区における分析試料の採取状況
a. トレンチの全景（南東から）
b. 西壁での試料 1 採取状況（東から）
矢印は試料採取層準、数字は試料番号を示す。
ヘルメットの長さは 28cm
c. 北壁での試料 2 採取状況（南から）
矢印は試料採取層準、数字は試料番号を示す。
草刈り鎌の長さは約 40cm

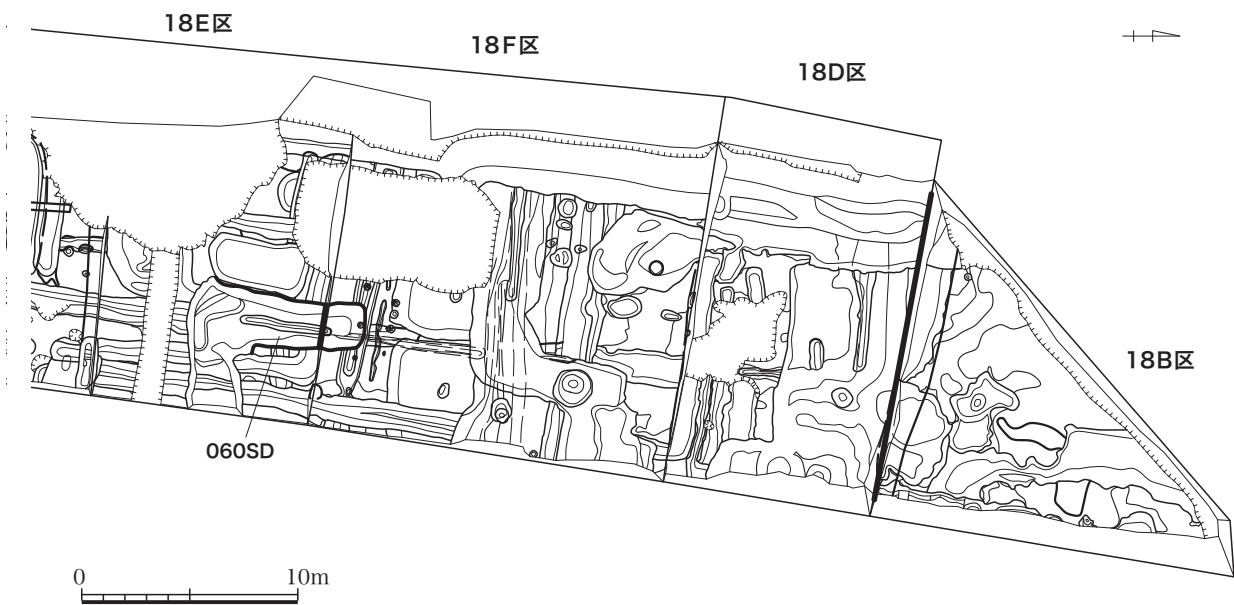


図 104 18B 区, 18E 区の地層観察および分析試料採取地点
太線が分析試料を採取した地層断面にあたる。

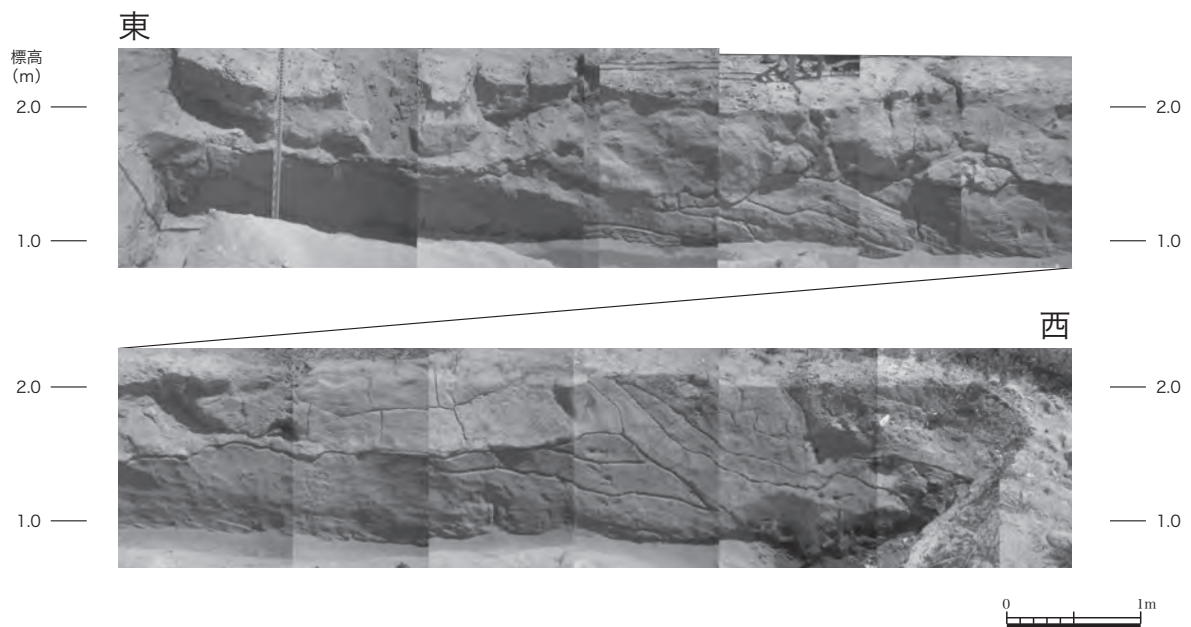


図 105 18B 区南端における東西方向の地層断面
標高 1.5m 付近を境に上位層ではシルト成分が、下位層では砂成分が卓越する。

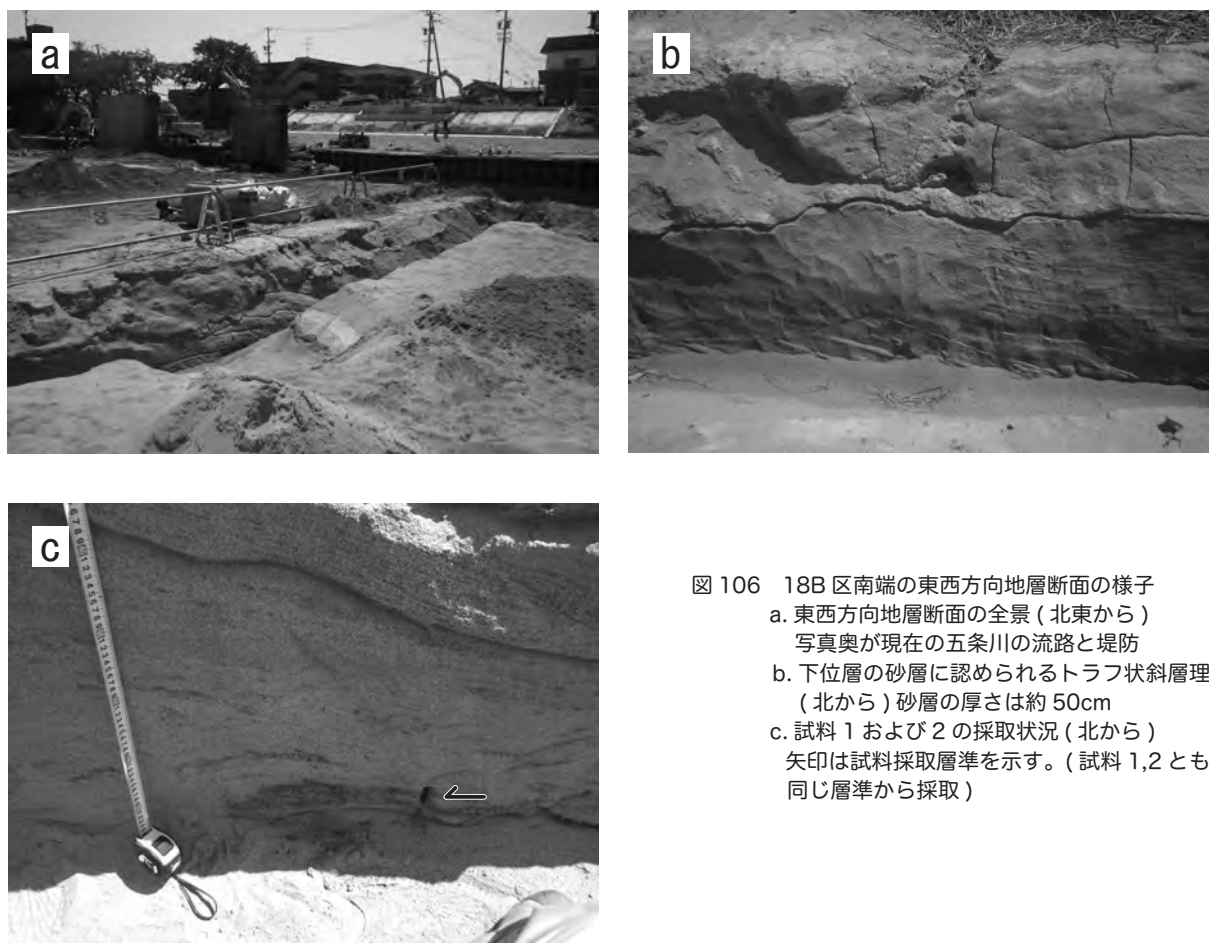


図 106 18B 区南端の東西方向地層断面の様子

- a. 東西方向地層断面の全景（北東から）
写真奥が現在の五条川の流路と堤防
- b. 下位層の砂層に認められるトラフ状斜層理
（北から）砂層の厚さは約 50cm
- c. 試料 1 および 2 の採取状況（北から）
矢印は試料採取層準を示す。（試料 1,2 とも
同じ層準から採取）

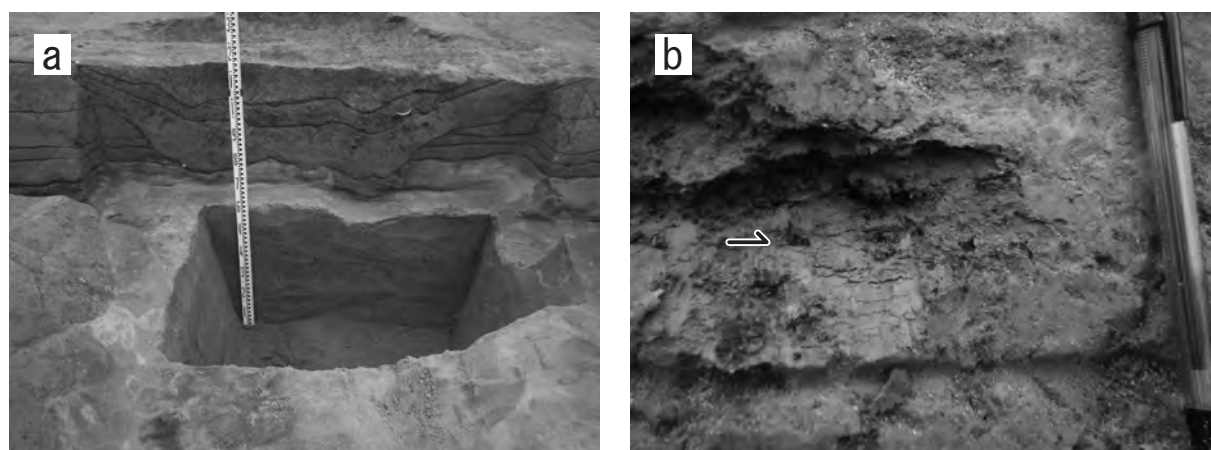


図 107 18E 区北端の遺構 O60SD と下位層の東西地層断面

- a. 遺構 O60SD 堆積物と下位の中粒砂層の堆積状況（南から）
遺構検出面の標高は約 2.0m
- b. 遺構 O60SD 堆積物内の試料 1 堆積状況（南から）
矢印は試料（炭化材）と試料採取層準を示す。
ボールペンの径は 1cm

区は、北から 18B 区、18D 区、18F 区、18E 区、18A 区、18C 区に分けられた。18B 区の南端（18B 区と 18D 区との境界）では東西方向に長さ 14.53m のトレンチが掘削された（図 104・図 105・図 106a）。掘削されたトレンチの西の端は現在の五条川の流路左岸から東に約 1m の近距離にある。トレンチで観察される地層は標高 1.45m 付近を境にして 2 層に分けられる。下位層である標高 1.00m ～ 1.45m には淡黄色（2.5Y8/3）や灰白色（2.5Y8/2）の中粒砂層が堆積する。この砂層を覆って上位層となる標高 1.45m から標高 2.00m までの地層は、堆積物の構成粒子の粒度や色調の差により 2 層に分けられた。この 2 層は、にぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する細粒砂混じりシルト層や、にぶい黄橙色（10YR6/4）の中粒砂層であり、下位層である標高 1.00m ～ 1.45m の中粒砂層を広く覆っている。上位層のこれらの地層は考古遺構を埋める堆積物で前者は 017SD の、後者は 022SE を埋める堆積物である。標高 1.00m ～ 1.45m でみられる中粒砂層と標高 1.45m ～ 2.00m までの考古遺構を埋める堆積物を削剥するのが、トレンチの西の端でのみみられる標高 1.00m ～ 2.00m 考古遺構の地層である（図 105 下段右端）。褐色（7.5YR4/3）あるいは、にぶい黄橙色（10YR7/2）で細粒砂の混じる粘土質シルト層ないしシルト層からなり、出土する考古遺物から明治時代の堆積物であると推定されている。標高 1.00m ～ 1.45m の下位層でみられる中粒砂層には明瞭な堆積構造が認められ、トラフ状斜層理や板状斜層理が観察された（図 105・図 106b・図 106c）。斜層理から求められる古流向はおおむね北東から南西方向を示した。本砂層の標高 0.98m から放射性炭素年代測定用の炭化材と木材片の 2 試料を採取した（図 106c）。

18E 区の北端（18E 区と 18F 区の境界）において考古遺構 060SD の横断面（東西断面）とその下位層の堆積状況を確認した（図 103・図 106a）。標高 1.60m 付近を境に地層は下位層である砂層と、それを覆うシルト層や粘土層からなる。下位層は標高 0.96m から標高 1.60m まで、にぶい黄色（2.5Y6/3）を呈する細粒砂～中粒砂層が堆積する。基質としてシルトや粘土

といった細粒な堆積物粒子をあまり含まず、淘汰は良い。この砂層を覆って標高 1.60m から標高 2.00m までに褐色（10YR4/4）のシルト混じり細粒砂層や、黄褐色（2.5Y5/3）の粘土層ないし粘土質シルト層が堆積する。なお、標高 2.00m 前後が 18E 区の遺構検出面の標高となる。これらの地層を掘削して考古遺構 060SD が埋積される。遺構を埋める地層は下位層より灰黄褐色（10YR5/2）の粘土質シルト層、それを覆う褐灰色（10YR4/1）の極細粒砂層、さらにそれらを覆うにぶい黄褐色（10YR5/3）の極細粒砂層からなる（図 106a）。遺構を埋める堆積物中には、下位層でみられた標高 0.96m から標高 1.60m までの細粒砂～中粒砂層や、それを覆う標高 1.60m から標高 2.00m までのシルト混じり細粒砂層や粘土質シルト層に比べると、肉眼でも観察できる径 2 ～ 3mm ほどの炭化物が多く含まれており、その特徴から地層を区分することができる。遺構を埋める堆積物の、とくに褐灰色（10YR4/1）の極細粒砂層には炭化物が多く認められる。考古遺構 060SD を埋めるこの褐灰色極細粒砂層中の標高 1.85m の層準より放射性炭素年代測定用の炭化材を採取した（図 106b）。

（2）放射性炭素年代測定

17A 区・18B 区・18E 区の 3 調査区、3 地点で採取した試料 5 点の放射性炭素年代測定を行った（表 5 ～ 表 7）。古い数値年代では、17A 区の標高 1.00m ～ 1.80m でみられた粗粒砂の混じる細粒～中粒砂層の標高 1.39m で採取された植物の生材（試料 1）が 2780-2742 cal yrs BP (831-793 BC: PLD-39324) の 2700 年前代があるものの、同じ調査区かつ同じ砂層内の標高 1.36m より採取された植物の生材（試料 2）は 1185-1065 cal yrs BP (765-886 AD: PLD-39325) と 1100 年前代を示した。18B 区の南端で掘削されたトレンチにおいて、標高 1.00m ～ 1.45m の中粒砂層と互層する灰黄褐色を呈する細粒砂の混じるシルト層の標高 0.98m からは試料を 2 点採取しており、試料 1 は 1264-1171 cal yrs BP (686-779 AD: PLD-39326) を、試料 2 は 1262-1198 cal yrs BP (688-752 AD: PLD-39327) と共に 1200 年前代であった。18E 区の考古遺構 060SD の遺構を埋める

表5 17A 区分析試料の放射性炭素年代測定結果

試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	17A	1.39	粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂層	生材	2639 $\pm$ 23	-23.90 $\pm$ 0.23	831 - 793 BC (95.4 %)	2780 - 2742 (95.4 %)	PLD - 39324 (AMS)
2	17A	1.36	粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂層	生材	1219 $\pm$ 22	-24.78 $\pm$ 0.20	765 - 886 AD (81.4 %) 713 - 745 AD (14.0 %)	1185 - 1065 (81.4 %) 1238 - 1206 (14.0 %)	PLD - 39325 (AMS)

表6 18B 区南端、東西方向地層断面の放射性炭素年代測定結果

試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	18B	0.98	灰黄褐色細粒砂混じりシルト層	炭化材	1241 $\pm$ 21	-24.14 $\pm$ 0.19	686 - 779 AD (73.0 %) 790 - 869 AD (22.4 %)	1264 - 1171 (73.0 %) 1160 - 1082 (22.4 %)	PLD - 39326 (AMS)
2	18B	0.98	灰黄褐色細粒砂混じりシルト層	生材	1235 $\pm$ 24	-25.72 $\pm$ 0.31	688 - 752 AD (42.7 %) 787 - 877 AD (38.6 %) 759 - 780 AD (14.0 %)	1262 - 1198 (42.7 %) 1163 - 1074 (38.6 %) 1191 - 1170 (14.0 %)	PLD - 39327 (AMS)

表7 18E 区遺構 060SD から採取した分析試料の放射性炭素年代測定結果

試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	18E	1.85	灰黄褐色粘土質シルト層	炭化材	336 $\pm$ 21	-26.86 $\pm$ 0.21	1481 - 1638 AD (95.4 %)	470 - 312 (95.4 %)	PLD - 39328 (AMS)

灰黄褐色 (10YR5/2) の粘土質シルト層中に分散して含まれる炭化材は 470-312 cal yrs BP (1481-1638 AD: PLD-39328) と今回分析に供した試料の中ではもっとも新しい数値年代であった。

(3) 遺跡周辺の等高線図

東西約 2.9km、南北約 4.1km の範囲全体では等高線間隔 0.20m で、標高 1.40m から標高 6.40m までの等高線が描かれる (図 108)。解析範囲全体では図の北と北東方向で相対的に高く、北名古屋市法成寺米田付近の標高 6m を超える場所が解析範囲内でもっとも標高の高い場所となる。対して、図の西と南西方向で相対的に低く、北の稲沢市井之口鶴田町から南のあま市小路や石作までには標高値 1.40m よりも低い場所がみられる。解析範囲の中央を五条川が北から南へ流れており、五条川の流路から西へ最大距離 1.8km には福田川が、東へ最大距離 940m には水場川がそれぞれ北から南へ流下している。解析範囲の中央付近を北西 - 南東方向に東海道本線が通り、それに並行して東海道本線の東に県道名古屋一宮線や、さらに東側に国道 22 号線が通っている。国道 22 号線は清須市朝日地域で名古屋第二環状自動車道 (通称: 名二環) と交差する。解析範囲の南西には北西から南東方向に東海道新幹線や名古屋鉄道 (通称: 名鉄) 本線が通り、南東角には東海交通事業城北線が通っている。

解析図の等高線間隔には粗密差がみられ、粗

密差の空間的な配置状況から低平な場所の起伏が読み取れる。解析範囲では等高線が閉曲線となり島のように相対的に標高の高いところや、それらの間に散見される谷地形が判別できる。標高の高いところでみられる特徴を北から南へ順に述べる。

1. 図の北側、稲沢市下津寺前町には標高 5.00m ～ 5.40m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 200m、北東 - 南西に約 130m の島状に標高の高い地形がみられる。
2. 図の北方、清須市春日屋敷には標高 4.00m ～ 4.80m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 260m、北東 - 南西に約 160m の島状に標高の高い地形がみられる。
3. 図の中央、清須市春日野方には標高 4.00m ～ 4.60m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 530m、北東 - 南西に約 170m の島状に標高の高い地形がみられる。
4. 図の中央、稲沢市北市場本町から清須市一場にかけて標高 4.00m ～ 5.00m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 800m、北東 - 南西に約 240m の島状に標高の高い地形がみられる。
5. 図の中央から南端にかけて、清須市春日川中から清須市鍋片にかけての標高 4.00m ～ 4.80m の閉曲線で囲まれた南北に約 2300m、東西に約 320m の島状に標高の高い地形がみられる。
6. 図の南方、清須市廻間から土田にかけて名鉄本線新清洲駅の北にひろがる地域には、廻間に

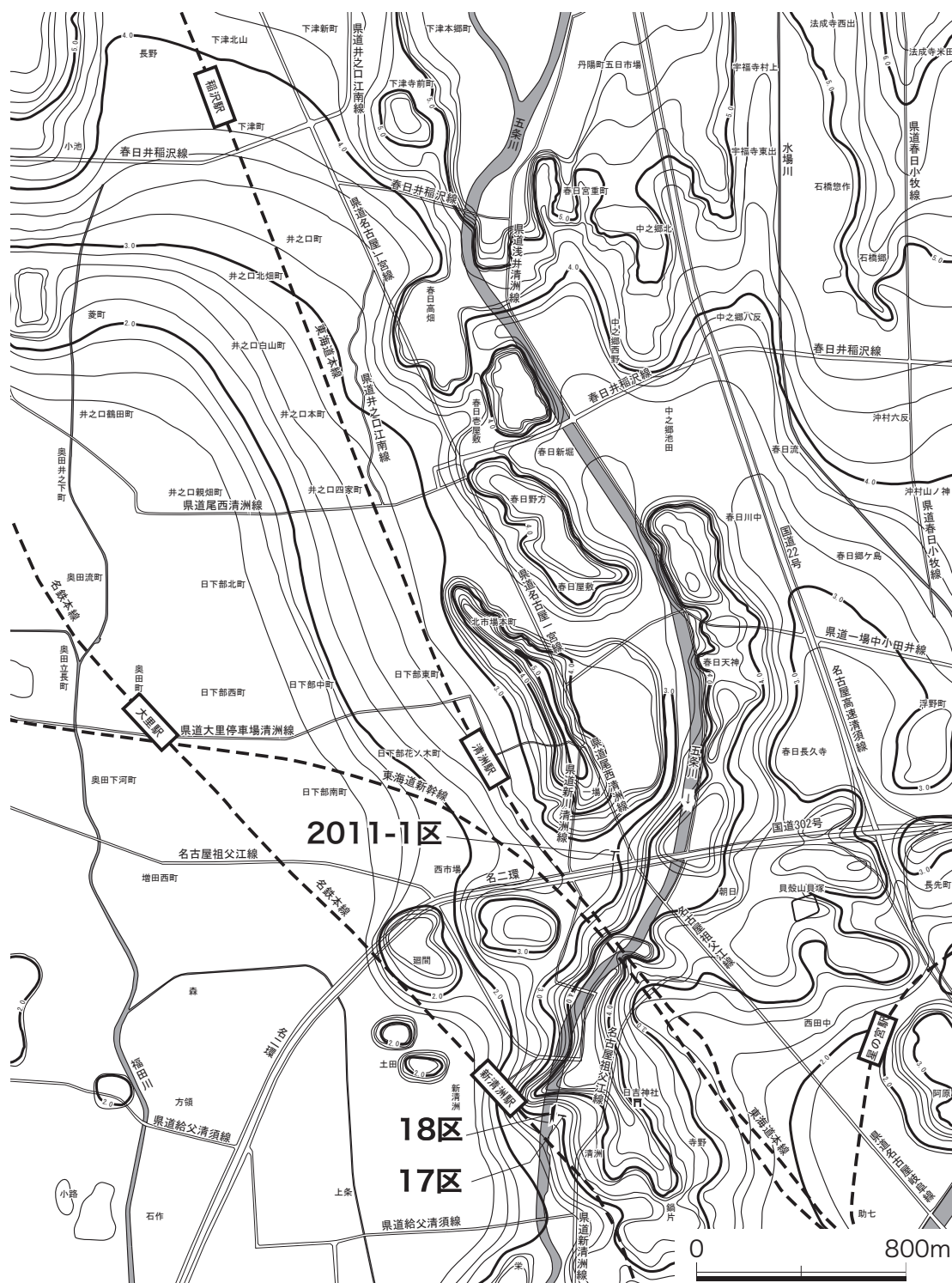


図 108 清洲城下町遺跡と周辺地域の等高線図

17区・18区が今回の調査地点、2011-1区は清須市による調査地点を示す。

において北西-南東に約290mの長さで、北東-南西に約190mの長さの島状に標高の高い地形と、さらにその東にも南北の距離約160m、東西距離約220mの島状に標高の高い地形がみられる。また、土田には南北距離約100m、東西距離約150mの島状に標高の高い地形が2つ見られる。このように解析範囲には相対的に周りよりも標高の高い島状の地形が9つ認められる。

いっぽうで、谷地形もみられる。北東から南西へ順に列記する。

1. 図の北東、北名古屋市宇福寺村上から北名古屋市中之郷八反を通り、清須市春日川中、春日長久寺、名古屋市西区長先町にかけて標高2.00m～5.00mで北から南にのびて南に開口する谷地形が認められる。
2. 図の中央付近において、清須市春日宮重町から北名古屋市中之郷西野、中之郷池田、清須市春日天神、清須市西市場にかけて標高1.40m～5.80mで北から南西方向にのび、南西方向に開口する谷地形がみられる。
3. 図の西側、稲沢市長野から稲沢市菱町、井之口鶴田町、奥田立長町、あま市方領、あま市石作にかけて標高1.40m～5.00mで北から南へのび、南方向に開口する谷地形が認められる。この谷地形内を現在の福田川が流れている。上記のほかにも相対的に標高が高い凸状地形を刻む微小な谷地形がみられるものの、解析範囲には大きく3つの谷地形が認められる。

4. 考察

(1) 清洲城下町遺跡で観察される砂層について

河川の流路には土木工学、河川工学的に細かな区域が設定されており、河川流路の両側に並行する、堤防と堤防とに挟まれる範囲を河川区域とよび、堤防によって氾濫や洪水から守られて住居や農地がひろがる範囲を河川区域に対して堤内地とよぶ。実際の流路が流れる河川区域は、堤防の部分の堤防敷と流路部分の堤外地とに分けられる。堤外地はさらに通常、水が流れている低水路と、洪水時に増水し水位が高くなった時だけ流れる高水敷に分けられる。今回の清洲城下町遺跡の調査区は、清須市清洲町内を流れる五条川の堤外地側の高水敷に18区が、

堤内地側に17区が設定された。いずれの調査区も現在の五条川流路にきわめて近い場所での調査であるため、五条川が現在の位置を流れるようになった時期に関する地質情報が得られるものと期待された。

さて、堤内地側の17区において、深掘を実施した17A区では標高1.00m～1.80mには灰白色を呈する粗粒砂の混じる細粒～中粒砂層が堆積し、その上を標高1.80m～3.50mまでが現代の水田耕作土や現代の盛土によって覆われていた。一般に堤内地の土地利用は住居や農地に使われるため、標高1.80m～3.50mまでが水田耕作土や盛土であったことは想定内ではあった。ところが、水田耕作土と盛土の下位層には淘汰の良好な中粒砂～粗粒砂層が確認でき、さらに砂層には、堆積物が運搬される際に地層につくる特徴的な縞模様であるトラフ状斜層理の堆積構造が良好に保存されていた(図103)。トラフ状斜層理は河川流路といった一定の方向へ向かう流れ(一方向流という)が、流路の底につくる砂堆(デューン)の移動とその累積によって形成されるものである。この砂堆の形態には二次元と三次元のものがあり、二次元的なものが板状(プラナー)斜層理、三次元的なものがトラフ状斜層理にあたる(Harms, et al., 1975)。一般に三次元的な方が大きな流速で形成される(Costello and Southard, 1981)。17A区の深掘で確認された細粒～中粒砂層にはトラフ状斜層理が認められたことから、調査地点はかつて河川の流路底であり、堆積物を運搬する水理エネルギーの高い、水深が浅くて流速の速い水の流れがあったことがわかる。また、その年代について、細粒～中粒砂層の標高1.39mから採取した生材(試料1)の放射性炭素年代が2780-2742 cal yrs BP(831-793 BC: PLD-39324)、細粒～中粒砂層の標高1.36mから採取した生材(試料2)の放射性炭素年代が1185-1065 cal yrs BP(765-886 AD: PLD-39325)で、約2700年前代と約1100年前代(8世紀～9世紀)の2つの数値年代が得られた(表5)。いっぽうで、堤外地側の18B区においても、標高1.00m～1.45mの中粒砂層にはトラフ状斜層理や板状斜層理が観察されたことから(図105・図106)、18B区の地

表 8 清須市 2011 年調査地点試料の放射性炭素年代測定結果
調査区 1tr. 地点 1

試料 No.	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	1.53	暗灰色粘土層	炭化材	1081 $\pm$ 18	-24.17 $\pm$ 0.15	948 - 1020 AD (66.1 %) 895 - 926 AD (29.3 %)	1002 - 931 (66.1 %) 1055 - 1025 (29.3 %)	PLD - 21359 (AMS)
2	2.13	青灰色砂質シルト層	炭化材	694 $\pm$ 20	-24.45 $\pm$ 0.19	1275 - 1305 AD (78.7 %) 1365 - 1383 AD (16.8 %)	675 - 645 (78.7 %) 585 - 567 (16.8 %)	PLD - 21360 (AMS)
3	2.50	浅黄色シルト層～砂質シルト層	炭化材	345 $\pm$ 18	-24.38 $\pm$ 0.15	1542 - 1634 AD (59.1 %) 1475 - 1529 AD (36.3 %)	408 - 316 (59.1 %) 475 - 421 (36.3 %)	PLD - 21361 (AMS)
4	2.80	灰白色シルト層	炭化材	16264 $\pm$ 45	-24.90 $\pm$ 0.18	17878 - 17558 BC (95.4%)	19827 - 19507 (95.4 %)	PLD - 21362 (AMS)

点も河川流路底であったことがわかった。この中粒砂層の標高 0.98m から採取した炭化材 (試料 1) の放射性炭素年代が 1264-1171 cal yrs BP(686-779 AD : PLD-39326)、同じ層準から採取した生材 (試料 2) の放射性炭素年代が 1262-1198 cal yrs BP(688-752 AD : PLD-39327) と約 1200 年前代 (7 世紀～8 世紀) であった。

述べてきたように、17 区と 18 区の標高 1.00m ～ 1.80m には細粒～中粒砂層や中粒砂層が確認でき、それらの砂層にはトラフ状斜層理や板状 (プラナー) 斜層理がみられることから、17 区から 18 区にかけての地下にはかつて当地を流下していた河川流路堆積物があることがわかった。また、放射性炭素年代測定により河川が流下していたのは約 1200 ～ 1100 年前代 (7 世紀～9 世紀) であったと推定される。

(2) 清須市における砂層の分布

今回の清洲城下町遺跡の調査地点では、17A 区では標高 1.00m ～ 1.80m には灰白色を呈する粗粒砂層の混じる細粒～中粒砂層が堆積し、18B 区では標高 1.00m ～ 1.45m には淡黄色や灰白色の中粒砂層が、18E 区でも標高 0.96m から標高 1.60m までを、にぶい黄色の細粒砂～中粒砂層が堆積していた。これらの砂層には明瞭なトラフ状斜層理や板状斜層理が認められたことから、調査地はかつて河川流路であったことがわかる。この流路の数値年代について、17A 区の標高 1.00m ～ 1.80m でみられた細粒～中粒砂層の標高 1.36m より採取された植物の生材が 1185-1065 cal yrs BP (765-886 AD : PLD-39325) と 1100 年前代を示した。また、18B 区の南端で掘削されたトレンチにおいては、標高 1.00m ～ 1.45m の細粒砂の混じるシルト層の標高 0.98m から試料を 2 点採取し、試料 1 が 1264-1171 cal yrs BP (686-779 AD:

PLD-39326)、試料 2 は 1262-1198 cal yrs BP (688-752 AD: PLD-39327) と 1200 年前代を示した。放射性炭素年代測定により、調査地点を河川が流下していたのは約 1200 ～ 1100 年前代 (7 世紀～9 世紀) であったと推定される。この考古遺跡の基盤層として確認される砂層に関して、今回の清洲城下町遺跡の調査地点から北へ約 1.3km の清須市一場神明前において清須市により行われた調査結果が参考になる (柴垣・寛編, 2012)。調査は名二環および国道 302 号線が尾西清洲線と交わる交差点から北西方向で行われた (図 108)。2011 年 (平成 23 年) に実施された調査ではアルファベットの T の字形の調査区が設定され、南北方向に長い調査区が 1tr.、東西方向に長い調査区が 2tr. とされた。これらの調査区では遺跡の基盤層の確認のためにバックホーによる掘削が行われ、1tr. では調査区南東角で地点 1、調査区の中央で西壁に沿って地点 2 を、2tr. では調査区の北壁に沿って東西方向に約 20m の長さでトレンチを掘削し地点 3 とした。南北方向に長い調査区 1tr. の南東角の地点 1 では (図 109)、下位層より標高 -0.45m ～ 1.40m には明黄灰色 (2.5Y6/6)) を呈する粗粒砂層が堆積し、この砂層を標高 1.40m ～ 1.70m で暗青灰色 (10BG3/1) の粘土層が覆う。この粘土層の標高 1.53m の層準で放射性炭素年代測定用の試料 1 を採取した。標高 1.70m ～ 1.85m は褐色 (10YR4/6) の砂質シルト層で、標高 1.85m ～ 2.05m は黄灰色 (2.5Y5/1) の砂質シルト層からなる。標高 2.05m ～ 2.35m は青灰色 (5B5/1) の砂質シルト層で、本層の標高 2.13m で放射性炭素年代測定用の試料 2 を採取した。標高 2.35m ～ 2.75m は浅黄色 (2.5Y7/3) のシルト層ないし砂質シルト層からなり、オリーブ黒色 (5Y3/1) の砂混じりのシルト質粘土層のブロックが混じ

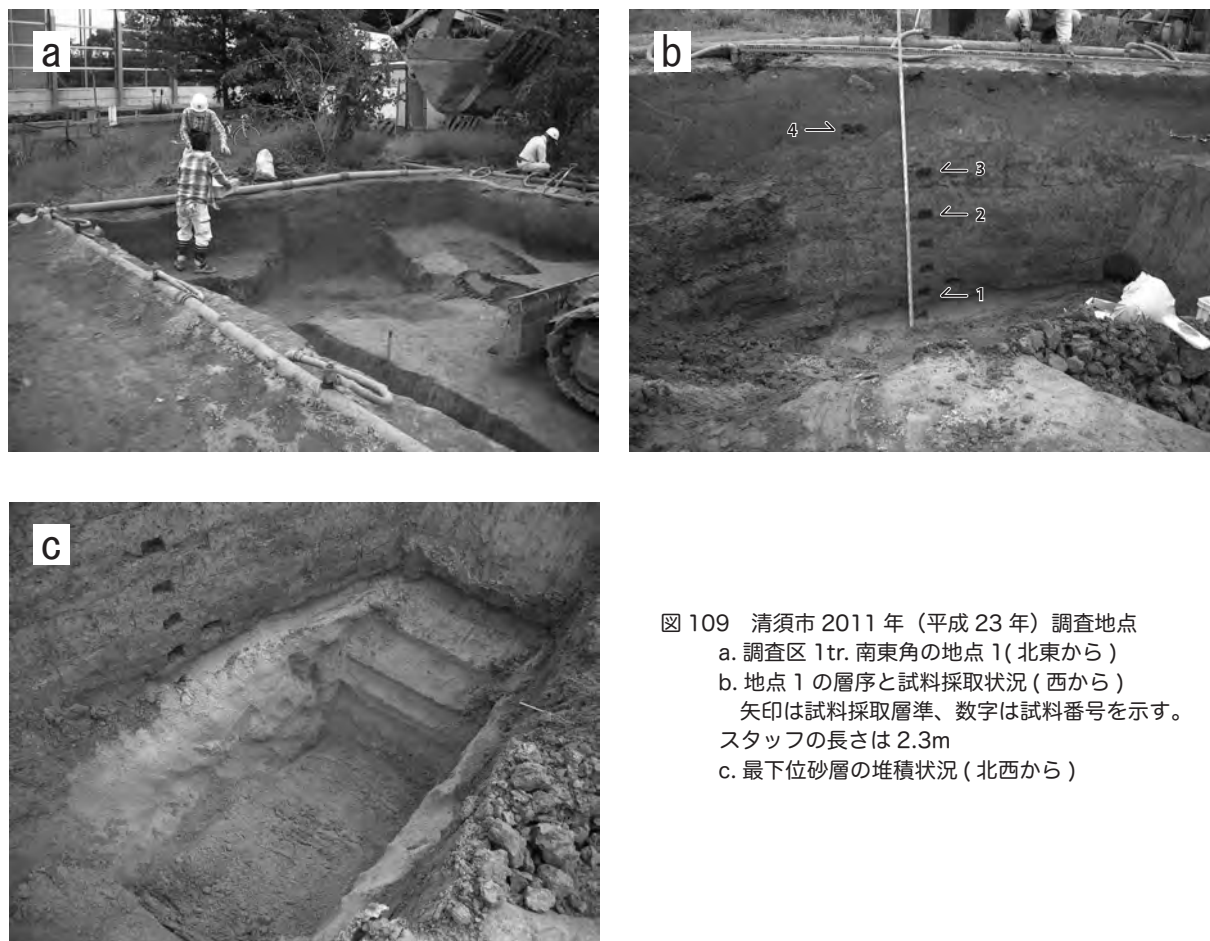


図 109 清須市 2011 年（平成 23 年）調査地点
a. 調査区 1tr. 南東角の地点 1(北東から)
b. 地点 1 の層序と試料採取状況(西から)
矢印は試料採取層準、数字は試料番号を示す。
スタッフの長さは 2.3m
c. 最下位砂層の堆積状況(北西から)

る。本層の標高 2.50m で放射性炭素年代測定用の試料 3 を採取した。標高 2.75m ～ 3.15m は灰白色 (N7/0) のシルト層からなり、オリーブ黒色 (5Y3/1) の砂混じりのシルト質粘土層のブロックが混じる。本層の標高 2.80m で放射性炭素年代測定用の試料 4 を採取した。標高 3.15m ～ 3.30m は暗灰色 (N3/0) の砂質シルト層であり、現代の水田耕作土であった。本層の頂部標高 3.30m が地表面となる。清須市一場神明前でも標高 1.40m を境として地層は下位層である標高 -0.45m ～ 1.40m には粗粒砂からなる砂層が観察され、その上を覆って標高 1.40m ～ 標高 3.30m にはシルトや粘土からなる細粒な堆積物で覆われており、今回の愛知県埋蔵文化財センターの調査地と同様な層序関係が観察されている。この一場神明前でみられた地層の堆積年代について、放射性炭素年代測定によると標高 1.40m ～ 1.70m の暗灰色粘土層の標高 1.53m から採取した炭化材が 1002-931 cal yrs BP (948-1020 AD: PLD-21359)、標高

2.05m ～ 2.35m の青灰色砂質シルト層の標高 2.13m から採取した炭化材が 675-645 cal yrs BP (1275-1305 AD: PLD-21360)、標高 2.35m ～ 2.75m の浅黄色シルト層ないし砂質シルト層の標高 2.50m から採取した炭化材が 408-316 cal yrs BP (1542-1634 AD: PLD-21361)、標高 2.75m ～ 3.15m の灰白色シルト層の標高 2.80m から採取した炭化材が 19827-19507 cal yrs BP (17878-17558 BC: PLD-21362) であった(表 8)。なお、これらの ^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: INTCAL20) を使用したことをお断りしておく。最下位層の砂層からは数値年代が得られていないものの、砂層の上を覆う標高 1.53m の粘土層の数値年代が 1002-931 cal yrs BP (948-1020 AD: PLD-21359) であり、約 1000 ～ 900 年前代(10 世紀～11 世紀)に堆積していたことがわかった。最下位層の砂層を覆う粘土層の数値年代が得られたことから、最下位層の砂層の堆積年代はこの粘土層よりも古くな

くてはならないため、約1000年前以前の堆積年代が予想される。愛知県埋蔵文化財センターの今回の調査地点で確認された下位の砂層が約1200～1100年前代（7世紀～9世紀）であった。清須市の調査でみられた粘土層の数値年代とは200年ほどの差異がみられるものの、今からおよそ1000年前代前後には、北の清須市一場神明前から新清洲駅のある南へ約1.3kmの間には、堆積構造として斜層理がみられるような水深が浅くて流速の速い活動的な河川流路が流れていたことがわかる。この特徴は現在の五条川の流路底で観察される砂層のものと同様であり、約1000年前代前後に調査地を流下していた河川景観は、河川流路の分岐数や川幅・流量などは不明であるが、現在われわれが目に見えている景観とは大きく変わらないものと思われる。

（3）調査地周辺の地形解析

東西約2.9km、南北約4.1kmの範囲全体では標高1.40mから標高6.40mまでの等高線が描かれた。等高線の空間配置をみると等しい値の等高線ひとつひとつは北西から南東方向に並行し、解析範囲全体では北および北東方向で相対的に標高は高く、南西方向で低く、北東から南西方向へ標高が次第に低くなる傾斜地形であることがわかる。これらの等高線の空間的な配置状況から地形の起伏が読み取れ、相対的に周りよりも標高の高い島のような凸状の地形が9つと大きく3つの谷地形が認められた。これらの地形の起伏のうち、以下では現在の五条川の流路に沿う地形に注目したい。現在の五条川について解析図をみると、北の稲沢市下津本郷町から清須市春日新堀を通り、図の中央にある南の春日天神までに至る範囲では、五条川の流路は周りよりも相対的に低い谷地形の中を流下している。また、その流路に沿って、流路の近傍には、たとえば解析図北の清須市春日壺屋敷において標高4.00m～4.80mの閉曲線で囲まれた北西-南東に約260m、北東-南西に約160mの島状に標高の高い地形、その南にある清須市春日野方には標高4.00m～4.60mの閉曲線で囲まれた北西-南東に約530m、北東-南西に約170mの島状に標高の高い地形、さらに南の稲沢市北市場本町から清須市一場にかけての標

高4.00m～5.00mの閉曲線で囲まれた北西-南東に約800m、北東-南西に約240mの島状に標高の高い地形が五条川の流路の西側に認められる。また、流路の東側には、解析図の中央から南端にかけて認められる清須市春日川中から清須市鍋片にかけての標高4.00m～4.80mの閉曲線で囲まれた南北に約2300m、東西に約320mの島状に標高の高い地形のうち、北の春日川中から春日天神を通り春日長久寺に至るまでは、五条川流路に沿って周りよりも相対的に標高の高い凸地形を形成している。低地を形成する河川環境では、河川の氾濫に伴って流路の両側には堆積物の累積により周りよりも相対的に標高の高い地形が堤防状をなす、いわゆる自然堤防をつくる。現在の五条川の流路の、北の稲沢市下津本郷町から清須市春日新堀を通り南の春日天神までに至る範囲では、河川流路の西および東の両側には周りよりも標高の高い凸地形が認められた。これらは五条川のつくる自然堤防であり、流路に沿う凸状の地形が明瞭に現れている。

対して、五条川流路の中央から南側、北の春日長久寺付近から朝日を通り南の清須市鍋片に至る範囲では、春日川中から鍋片にかけての標高4.00m～4.80mの閉曲線で囲まれた南北に約2.3km、東西に約320mの島状に標高の高い地形がみられるが、五条川の流路は本来流下できない周りよりも標高の高い場所を流れていることがわかる。解析図を基にすれば、清須市春日天神付近から南の部分の五条川の流路に関して、現在の流路の西側に標高2.00mから標高3.00mの等高線で表される谷地形が認められる。頭の中の想像で行なう実験、いわゆる思考実験をすれば、図の中央の春日天神付近に広範囲に一斉に雨を降らせた場合、位置（ポテンシャル）エネルギーの低い最短距離を流れるという水のもつ物理学的・水理学的性質から、標高2.00m～3.00mの等高線で示された谷地形があった現在の五条川流路の西側を、北の春日天神から西の清須市西市場へ、あるいは北の春日天神から名鉄本線の新清洲駅北側を通り清須市土田へと向かって流れ下るはずである。ところが、実際の五条川の流路は春日天神から朝日を通り鍋片までの間を、周りよりも相対的に標

高の高い凸地形のある場所を通っており、自然の状態ではあり得ない場所を流れているのである(図108)。つまり、春日天神から朝日を通り鍋片までの間は人工的に流路の方向が規制されていると考えなくてはならない。さらに解析図の南側、日吉神社の立地する清須市清洲・寺野・鍋片の標高2.00mから標高4.00mの凸地形上は、これまでに発掘がされてきた清洲城下町遺跡の調査範囲に当たり、かつての城や町家が検出されてきた所である。ヒトの生業活動が盛んであった場所であり、河川流路が人工的に制御・規制されている可能性が考えられる。さらに地形の特徴を解析図より読み取ると、現在の名鉄本線、新清洲駅の東に位置する今回の調査地の北には、標高3.00mから標高4.00mまでの、現在の新清洲駅にかけて北西-南東方向の幅約170m、北東-南西方向に約220mで西に突き出した舌状の地形が認められる。舌状地形の南には、舌状地形とは正反対に標高3.00mから標高4.00mまでに北西-南東方向の幅約300m、北東-南西方向に約280mで南西方向に開口した谷地形がみられる。今回の調査地点は舌状地形の南側縁辺に位置していることがわかる。この舌状地形に関わるヒトの生業活動について、たとえば18E区の考古遺構060SDからは、瀬戸・美濃窯産陶器の大窯第四段階末である16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土する。愛知県埋蔵文化財センターの鈴木正貴は、瀬戸・美濃産陶磁器の年代観をまとめた藤澤(1987,1988,1989)を基に清洲城下町遺跡における時期区分を行ない、城下町期I期、城下町期II期、城下町III期に区分した(鈴木、1994,1995)。この区分に従えば、18E区の考古遺構060SDは城下町期III期に当たり、さらにIII-1、III-2(この順に新しくなる)と細分される時期のIII-1期末ごろの遺構と考えられるようである(蔭山誠一氏のご教示による)。考古遺構060SDの溝の規模から中・上級の武家屋敷域、あるいは寺社を囲む溝と推定され、生業活動が盛んであった地形との推定とも調和的である。さらに、舌状地形の南には標高3.0mから標高4.0mまでに北東-南西方向の距離約280mで南西方向に開いた谷地形がみられた。先の18E区の考古遺構060SDから出土する土

師器・陶器は北東側から廃棄されているとの考古学的な所見があり、解析図から読み取れる谷の開口方向とも調和的であった。いずれにせよ、解析図の名鉄本線、新清洲駅の東には標高3.0mから標高4.0mの等高線に表れる、距離約220mで北東から南西の方向をもつ西へ突き出した舌状地形がみられた。今回の調査結果では地形の南端には武家屋敷域、あるいは寺社の存在が推定されたことから、舌状地形上の、標高が相対的に高い尾根状の場所には、さらなるヒトの生業活動跡が検出される可能性がある。

謝辞

本論を作成するにあたり、2011年(平成23年)の清須市による清洲城下町遺跡の発掘調査では、清須市教育委員会の柴垣哲彦氏と株式会社島田組の笥和也氏には地層観察の機会を与えていただいた。図表の作成では国際文化財株式会社にお手伝いいただいた。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- Costello, W.R. and Southard, J.B., 1981, Flume experiments on lower-flow-regime bedforms in coarse sand, *J. Sed. Petrol.*, 51, 849-864.
- 藤澤良祐編, 1987, 瀬戸市歴史民族資料館研究紀要 VI, 瀬戸市歴史民族資料館, 260p.
- 藤澤良祐編, 1988, 瀬戸市歴史民族資料館研究紀要 VII, 瀬戸市歴史民族資料館, 239p.
- 藤澤良祐編, 1989, 瀬戸市歴史民族資料館研究紀要 VIII, 瀬戸市歴史民族資料館, 269p.
- Harms, J.C., Southard, J.B., Spearing, D.R. and Walker, R. G., 1975, Depositional Environments as Interpreted from Primary Sedimentary Structures and Stratification Sequences, *Short Course Notes*, 2, SEPM, Dallas, 161p.
- 柴垣哲彦・笥和也編, 2012, 清須市埋蔵文化財調査報告 III 清洲城下町遺跡 III- 清須市一場地内道路敷設に伴う発掘調査報告 -, 清須市教育委員会・イデアコンサルタント株式会社・株式会社島田組, 32p.
- 鈴木正貴編, 1994, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第53集清洲城下町遺跡 IV(本文編), 愛知県埋蔵文化財センター, 282p.
- 鈴木正貴編, 1995, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集清洲城下町遺跡 V, 愛知県埋蔵文化財センター, 266p.

第5章 総括

第1節 清洲城下町遺跡の遺構変遷

ー南部地区と御園地区ー

ここでは、本報告でかかる南部地区の00A区・01区・17A区・17B区・18A区～18F区と御園地区の00B区における調査成果をまとめ、これまでの調査成果を参考に清洲城下町遺跡全体の中でどのように位置付けができるのか整理してまとめたい。まずは調査区毎の調査結果を整理し、その後に調査における課題などについて若干分析を行う。

1. 南部地区南半部（00A区）

00A区は名鉄名古屋本線の南側に位置する地点で、既報告においても南部地区南半部の中で分析が行われている。愛知県埋蔵文化財センターによる『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告にある63D区～91C区～90F区と『清洲城下町遺跡Ⅶ』報告にある95A区・95B区、清須市教育委員会による2015区の報告（清須市2017）がある。（1）00A区SX8001（図110）

00A区で確認できた土坑SX8001は東に隣接する62D区・63D区において確認されている城下町Ⅲ-2期のSX8001の西側部分にあたる。『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告において土坑Ⅲ類（比較的大規模で、平面プランが方形または長方形を基準とした形態となるもの。）とされたもので、今回の調査により東西22.5m、南北45m以上の規模が確認できた。出土した瀬戸・美濃窯産陶器では大窯第4段階から登窯第1小期のものを主体に出土し、城下町Ⅲ-2期に位置付けられてきた遺構である。『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告では区画8007に伴う巨大な土坑とされており、居住空間とは考えられていない。本報告にあたり、この大型土坑が清須越しに伴う廃棄土坑とも考えたが、多様な出土遺物が、遺構の南西側から廃棄されたものと考えられ、遺構の北東側では出土遺物が希薄となることから、遺構全体が引越しに伴う廃棄土坑とは考えられないものと考えられた。

次にSX8001の軸線について検討すると、

遺構の軸線は00A区と63D区ではN-8°-Wとなり、00A区の南西隅に確認できたSD01も同じ軸線をとる。一方で62D区で確認されている東上端ラインの軸線はN-10°-Eとなり、62D区・63D区で確認されている溝SD8005・SD8009の軸線N-10°-Eと類似する。SX8001内部には、西上端から中位に残る南北の石列SX01が確認でき、石積みの護岸が存在した可能性がある。

（2）周囲の遺構との関係（図110～図112）

周囲の遺構について検討すると、城下町Ⅲ-1期には溝Ⅴ類（溝の規模による分類は『清洲城下町遺跡報告Ⅳ』第三章 城下町期の遺構第4節 溝にある溝の分類に準拠する、以下は同じ）の62D区SD8008の北側に区画8001、SD8008と溝Ⅴ類のSD8010の間に区画8002、SD8010の南から91C区の北側にかけて区画8003と区画8004が設定されており、大型の土坑SX8003が区画8002から区画8003の中にある。城下町Ⅲ-2期には溝Ⅳ類～Ⅴ類の62D区SD8005の西側で溝Ⅳ類～Ⅴ類のSD8006の北側を区画8007、SD8006と溝Ⅳ類～Ⅴ類のSD8009の間を区画8008、SD8009と溝Ⅳ類～Ⅴ類の91C区SD8013の間を区画8009として設定されており（清洲城下町遺跡Ⅳ）、井戸のSE8001とSE8002が区画8008と区画8009の境界となるSD8009付近にある。掘立柱建物SB8001と井戸SE8003は区画8009の中にある。遺構からの出土遺物では今回第3章で資料化したSX8001・SD8005・SE8002・SX8003では大窯第4段階～登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、SD8009・SD8010から大窯第3段階～第4段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土している。またSD8011からは土師器焙烙鍋が出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

次に95A区では溝Ⅴ類～溝Ⅵ類のSD01～SD04・SK26、95B区では溝Ⅳ類～Ⅴ類のSD101・SD102・SD107・SK207が確認されており、95A区SK26は城下町Ⅲ期、その他は城下町Ⅲ-2期とされる。95A区・95B区の東に隣接する62B区・91C区・90Fa区で確



図110 00A区・62D区・63D区・91C区・95A区の遺構変遷 (1:500)

認されている遺構と合わせて検討すると、95A区SD04と95B区SD101は溝Ⅴ類の62B区SD8024と溝Ⅳ類～Ⅴ類の62B区・90Fa区SD8028・SD8030と同じ軸線をもち、また95A区SD04と62B区SD8024と同一である可能性があつて、道路SF8001の東側側溝と考えられるものである。また95B区SD102と同SD107は62B区SD8025との関連性から城下町Ⅲ-1期の区画8005の西側とされ、SD102の北を区画8014、SD107の南を区画8015とした(清洲城下町遺跡Ⅷ)。後述するSD108が清須市2015区242SDと90Fa区SD8030に囲まれた範囲を区画8012と考えると区画8015の南北幅は6m前後となる。また62B区SD8025と同SD8028の前後関係から、方形区画8005の後に道路SF8001が城下町Ⅲ-2期に形成された(清洲城下町遺跡Ⅷ)。

清須市教育委員会による2015区の調査においては(清須市2017)、90Fa区SD8031の西に延長する位置で溝Ⅳ類～Ⅴ類の2015区242SDが確認されており、区画8012は242SDの北側に東西35m以上の区画となる。また溝Ⅳ類～Ⅴ類の90Fa区SD8032もSD8031に隣接して同一軸線で東西に流れていることから、溝の掘り直しや区画の変遷が考えられる。90Fa区SD8030の北端部で途切れる部分の西に242SDと軸線がほぼ同一である95B区SD108があり、この溝を区画8012の北端部に当てると、南北26.5m前後となる(90Fa区SD8030の北端部の西に隣接するSK8145・SK8146は同じ城下町Ⅲ期とされる)。これはこれまで現地付近に残る字の地名から「櫓」の軍事的施設が想定されてきたものである(清洲城下町遺跡Ⅳ・Ⅴ)。この242SDの南に約11mに152SD、152SDから南約3mに134SD、134SDから南約3.5mに133SD、133SDから南約4mに078SD、078SDから南約14mに017SDがほぼ同じ軸線を持つ溝Ⅳ類～Ⅴ類の東西溝として確認されており、城下町Ⅲ-2期に属する可能性のある区画溝と考えられる。133SD・134SD・152SDは約5m間隔で同一方向に並行することから、間口が細い短冊型地割の町屋が想定されている(清須市2017)。またこれらの東西溝に直行する南北

溝132SD・033SDがあり、SF8001を構成するSD8028やSD8030のような道の側溝が想定されている(清須市2017)。他の遺構では、134SDと重複して古い127SKや152SDと重複して古いSK151など五輪塔の笠(火輪)部が出土する土坑など柱穴の可能性のあるものがあり(清須市2017)、先に述べた東西溝が同一時期ではなく、また周囲に居住域が展開した可能性が高い。

以上より、00A区・62D区・63D区・62B区・91C区・90Fa区・95A区・95B区・清須市2015区における遺構の時期はあまり時期差がなく、かつ62D区・91C区北側では大きくは城下町Ⅲ-2期において土坑62D区SX8003のa段階、東西溝62D区SD8009・91C区SD8013などのb段階、南北溝62D区SD8005のc段階、東西溝62D区SD8006・井戸62D区SE8001・SE8002・SE8003などのd段階に区分できる。90Fa区・95A区・95B区・清須市2015区でも同様に、先に検討した溝や土坑は正方位に近い62B区SD8025・95B区SD102・同SD107を構成する区画8005は、62D区・91C区北側で段階を想定した古い段階に当たる可能性が高く、SF8001を構成する62B区SD8024・同SD8028・同SD8030と同じ軸線を持つ溝や区画は新しい段階にあたるものと思われる。また先に述べた95A区SD02は遺構の軸線方向から考えると62D区SD8005から23m～24m程西を並行して流れており、関連が想定される遺構である。同様にSD02と同一時期ではないが、95A区SD01とSD03は同一の溝になる可能性があり、91C区SD8012・SD8016は同SD8018(SD8014・SK8067)も軸線が近く、10mの間隔をもって南北に流れる一連の溝と考えられる。

(3) 00A区SX8001の性格

よって、SX8001は時期の判明する主要な遺構との前後関係などは不明であるが、井戸62D区SE8001の北10m前後にあるSK8005より古いようであることから、東西や南北方向に溝が掘削される段階のものと思われる。掘立柱建物62B区SB8001は井戸SE8003とは建物南側が重複するものと思われ、溝SD8005とも0.5m～1.0m程しか離れていないことか

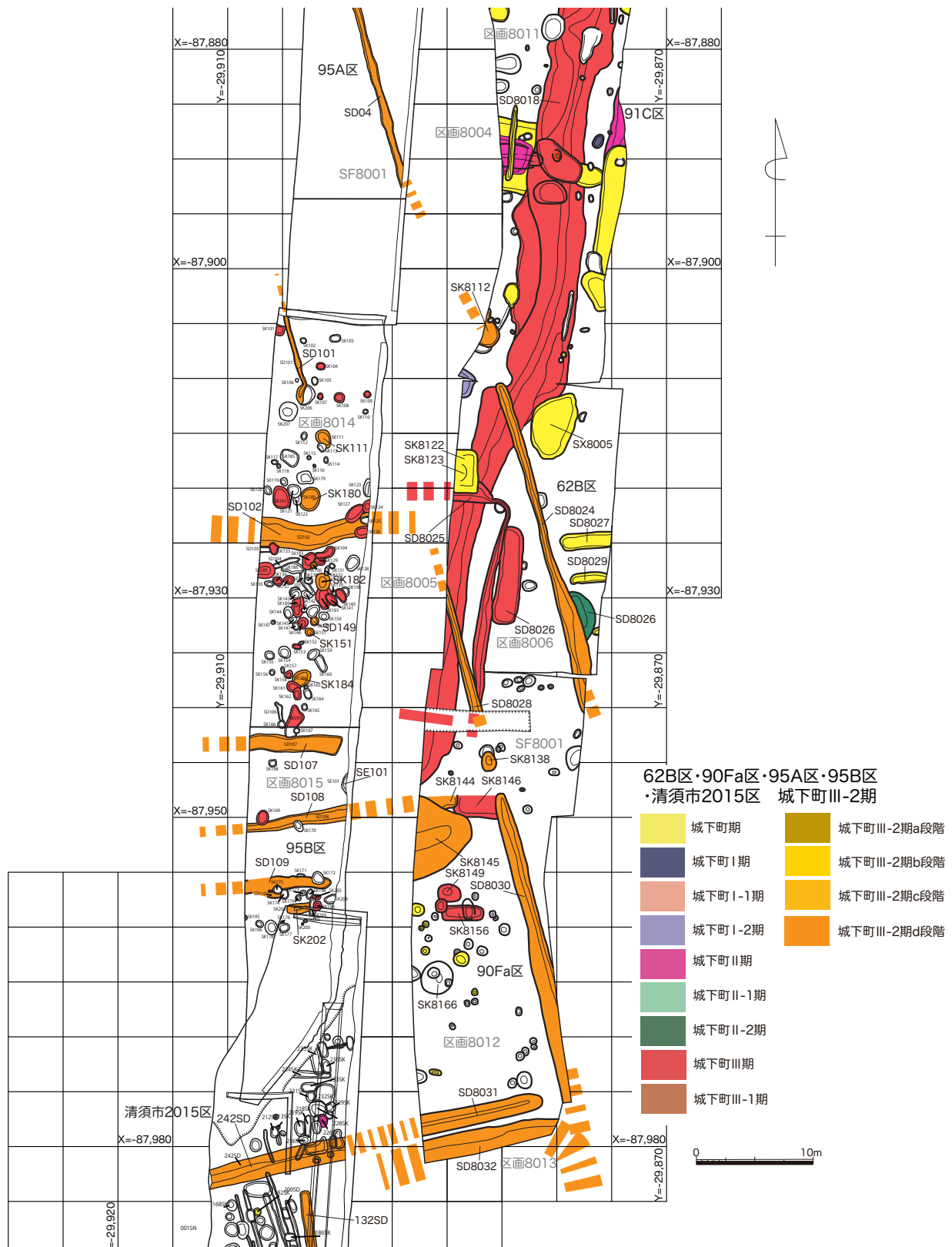


図 111 62B 区・90Fa 区・91C 区・95B 区の遺構変遷 (1 : 500)



図 112 90Fa 区～90Fc 区・95B 区・清須市 2015 区の遺構変遷（1：500）

ら同一存在する可能性は低く、東西溝 62D 区 SD8009・SD8013 の段階のものと考えておきたい。

このように考えてくると、井戸が存在する段階は、遺構の位置関係から東西溝 62D 区 SD8005・91C 区 SD8017 や 土坑 SK8076 と共存する可能性があるが、東西溝 62D 区 SD8009・91C 区 SD8013 には伴わない。ここで述べている溝は幅が 1m ～ 2m 前後の溝Ⅳ類・溝Ⅴ類に分類されるもので、小型の区画Ⅰ類・区画Ⅱ類にあたる下級クラスの居住域一町屋の想定がなされてきたものであるが（清洲城下町遺跡Ⅳ・Ⅴ）、町屋域において想定される長細い区画のいわゆる短冊型地割に伴う区画が東西や南北の溝であるかという認識の問題があるように思われる。これまでの分析では、ほぼ同時期の井戸が一定の近い間隔で存在する列状分布を形成することをもって町家域想定条件とするならば、単純に遺構の重複・位置関係からは同時存在は少ないように思われる。したがってあまり明確な根拠はないが、この地区は純粋な町屋域ではなく、中・下級の武家屋敷域があって、さらに町屋域への変遷が想定できないであろうか。よって SX8001 は中・下級の武家屋敷域に伴う大きな遺構であり、00A 区で確認された石列を評価するならば、溝Ⅰ類に相当する可能性がある。さらに付言するならば、62D 区・91C 区北側では、溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれた方形状区画のある中・下級の武家屋敷域・寺社域の段階から井戸で構成される町屋域への変遷が想定され、90Fa 区・95A 区・95B 区・清須市 2015 区では、想定した溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれる方形状区画は最も新しい時期の中・下級の武家屋敷域・寺社域と道 SF8001 の段階であると想定できないであろうか。

2. 南部地区北半部（01 区・17A 区・17B 区・18A 区～18F 区）

01 区・17A 区・17B 区・18A 区～18F 区は名鉄名古屋本線の北側に位置する地点で、愛知県埋蔵文化財センターによる清洲城下町遺跡Ⅳ報告にある 63S 区・89D 区・91B 区の南にある。

（1）01 区の遺構変遷（図 113～図 115）

01 区では東西溝 SD01 ～ SD03 が確認され

ており、およそ北側の SD01 から南にある SD03 にかけて溝が掘り直されたことがわかる。SD01 ～ SD03 の深さは 0.32m ～ 0.51m と浅いが幅は 2.5m 以上あるものばかりで、SD01・SD02 は溝Ⅳ類に、SD03 は溝Ⅲ類に相当する。溝の軸線は SD01・SD02 が N-85°-E のほぼ正方位、SD03 が N-17°-W の正方位からやや南東に振れる軸線となる。興味深いのは先に述べた SX8001 の 00A 区と 63D 区の軸線に類似するのが SD01・SD02 で、62D 区の軸線に類似するのが SD03 となる。出土した瀬戸・美濃窯産陶器は、SD02 が大窯第 3 段階～大窯第 4 段階前半、SD03 が大窯第 3 段階～大窯第 4 段階後半のものが出土することから城下町Ⅲ-1 期のものと考えられる。SD03 からは陶器・土師器の他に卒塔婆や柿経などの木製品が出土しており、墓域が隣接する寺院に関わる溝の可能性もある。SD03 の出土遺物は溝の北側から廃棄された様子が窺え、また SD01 ～ SD03 の埋没が北からの土砂堆積により埋まっていることが確認できる。よって SD01 ～ SD03 の北側に寺院に伴う区画が想定され、この区画の北側の溝は 18A 区・18C 区で確認されているほぼ同時期の 040SD・041SD が軸線が N-91°-W の正方位で対応していることから、この区画は溝の内側で南北 32m ～ 37m を測る。

（2）17A 区・17B 区の遺構変遷（図 113～図 115）

次に 17A 区・17B 区では、城下町Ⅱ-1 期と想定される自然流路 063NR、城下町Ⅲ-1 期と想定される井戸 060SE、溝 039SD・042SD、城下町Ⅲ-1 期～Ⅲ-2 期に想定される溝 033SD がある。060SE と 063NR・039SD・033SD には重複部分があり、城下町Ⅱ-1 期から城下町Ⅲ-2 期にかけて 4 段階の遺構変遷が確認できる。城下町Ⅱ-1 期の 063NR は 18A 区・18C 区 043NR とほぼ同時期で、流れる方向からも同一の自然流路である可能性がある。続く城下町Ⅱ-2 期は不明であるが、063NR が流れていた可能性もある。城下町Ⅲ-1 期ではまず居住域の一部と考えられる 060SE があり、城下町Ⅱ期以後の遺物出土する 020SK・034SK などの土坑があることから、城下町Ⅲ-1 期には井戸 060SE に伴う段階、042SD と 039SD に伴う居住域の段階を経て、城下町Ⅲ-1 期～

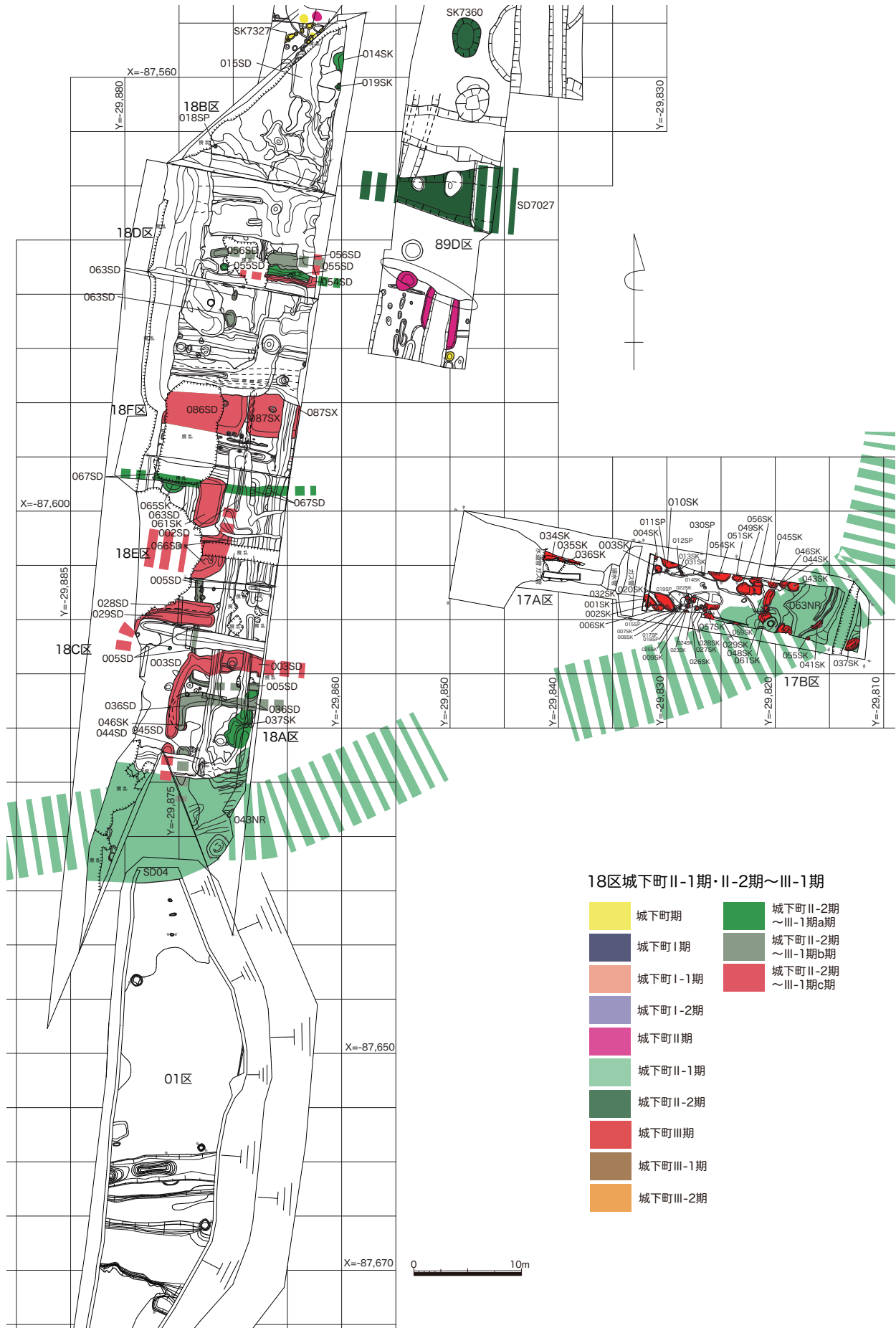


図 113 01区・17A区・17B区・18A区～18F区の城下町Ⅱ-1期～Ⅲ-1期の遺構変遷 (1:500)

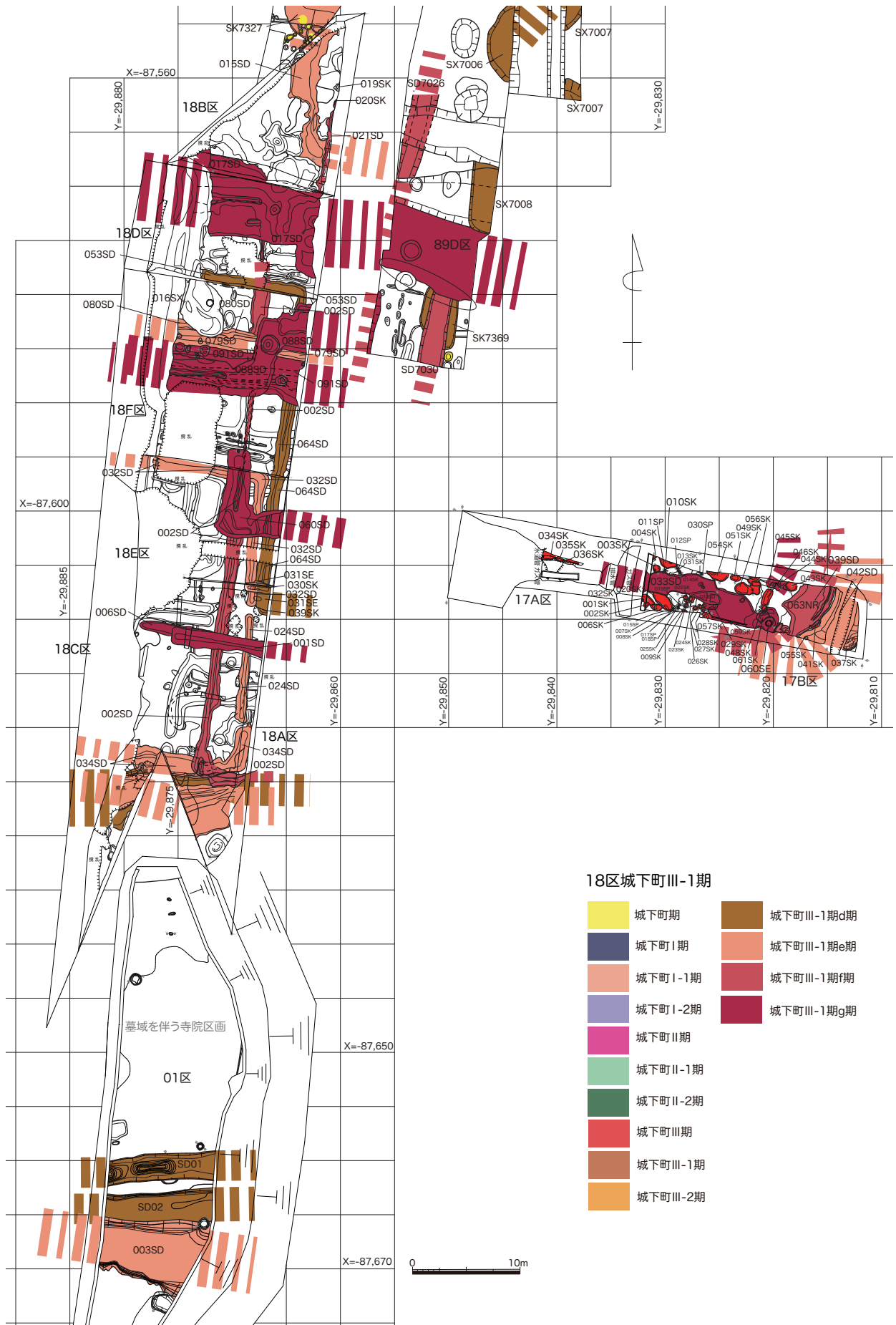


図 114 01 区・17A 区・17B 区・18A 区～18F 区の城下町Ⅲ-1 期の遺構変遷 (1 : 500)

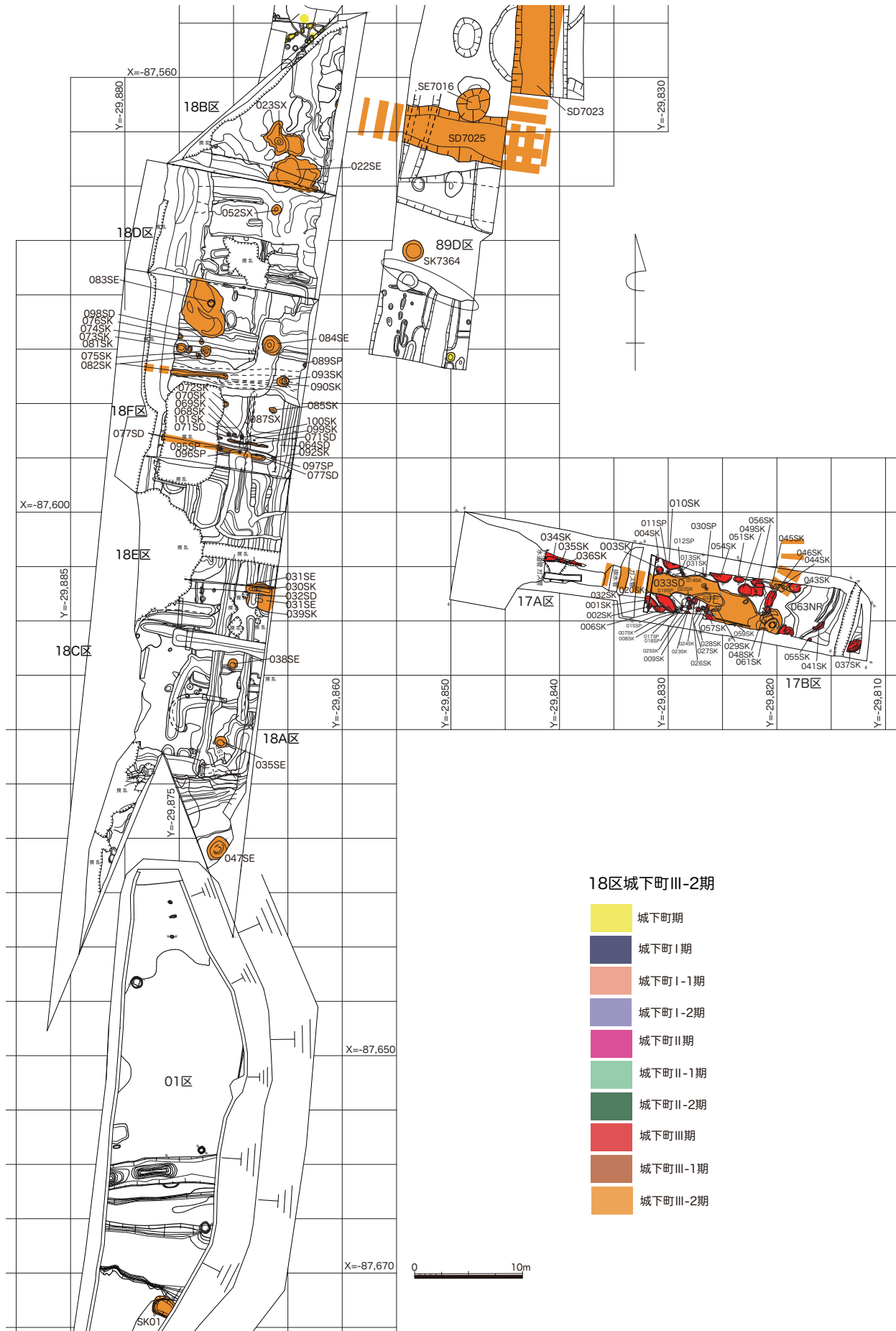


図115 01区・17A区・17B区・18A区～18F区の城下町III-2期の遺構変遷（1：500）

Ⅲ-2期の033SDの段階の変遷が考えられる。033SD・039SD・042SDは、溝の北西側を区画しており、深さは浅いが幅は溝Ⅲ類～溝Ⅳ類の規模をもつことから、上級クラスの武家屋敷や寺院・神社などの区画が想定される。033SDは溝の軸線や位置から18E区060SDにつながる可能性があり、この想定で東西48m程の区画となる。039SDと042SDは、18E区の南側で18A区の他の溝とつながる可能性もあるが、その東で北に折れて曲がる可能性もある。

(3) 18A区～18F区の遺構変遷(図113～図115・表9)

最後に18A区～18F区の遺構変遷を考える。この調査区では、最も古い遺構は、城下町Ⅱ-1期の自然流路043NRが18A区・18C区の南端を東北東から西南西に流れており、続いて城下町Ⅱ-2期～城下町Ⅲ-1期に想定できる溝のある段階、最後に城下町Ⅲ-2期に想定される井戸や土坑がある段階の大きく3時期に区分できる。さらに遺構の重複・位置関係から、大窯第4段階後半の瀬戸・美濃窯産陶器が出土する18A区・18C区041SD以後の城下町Ⅲ-1期を4段階(城下町Ⅲ-1期のd期～g期)と同041SDより古い時期のものと考えられる城下町Ⅱ-2期～城下町Ⅲ-1期を3段階(城下町Ⅱ-2期～城下町Ⅲ-1期のa期～c期)に区分したのが、表9である。

(A) 城下町Ⅱ-1期

先に述べた043NRが流れる段階で、17B区063NRとつながる可能性がある。

(B) 城下町Ⅱ-2期～城下町Ⅲ-1期

a期：18D区055SD・18F区086SD・同087SX・18E区065SX・同067SD・18A区037SKの段階で、18A区・18C区の南北方向の溝より古い可能性がある遺構の時期である。086SDと087SXが溝になるか土坑になるか不明であるが、055SDと064SDは幅1m以下の規模の溝Ⅵ類の東西方向の溝で、溝の間隔は約20mである。037SKは不整形な土坑で、自然流路の可能性もある。

b期：18D区056SD・18F区(18E区)063SD・18A区005SD・18A区036SD(18C区045SD)の段階で、18A区から18E区の東側を囲む溝Ⅵ類の005SDと18A区南東側を囲む溝Ⅴ類

の036SD・045SDの2つの区画が成立する。036SDと045SDが西辺の北側にて途切れる部分が区画の入口となる可能性があり、その想定にたてば003SDと036SDの西側に道・通路の存在が想定される。

c期：18D区054SD・18E区061SK・同066SD・18C区028SD・同029SD・18A区003SD(18C区044SD)の段階で、061SDは南北の幅は溝Ⅳ類に相当するが、北に折れた部分は溝Ⅴ類で、区画溝になるかは不明である。18D区の北西側を囲む溝Ⅵ類の054SDの区画、18A区南東側を囲む003SD(044SD)の区画、その北西側3.5m～4m並行してはしる028SD・029SDがみられる。これらの溝が関連して同時に存在したとすると、東から南に折れる道・通路が想定される。028SDと054SDの間は南北約30mの区画となる可能性がある。

(C) 城下町Ⅲ-1期

d期：18F区053SD・18E区064SD(18F区・18E区039SK)・18A区041SD(18C区)の段階で、溝Ⅴ類の053SD・064SD・039SDはつながる可能性があるが、053SDは18F区を064SDは18E区と18F区の東外側を囲むものと思われるものである。18B区015SDもこの段階になる可能性がある。また、041SDは01区SD01～SD03に伴う寺院の区画の北側溝になる可能性が高い。

e期：18B区015SD・18F区080SD・同079SD・18E区032SD・18A区024SD・18A区034SD(18C区)・18A区040SD(18C区)の段階で、溝Ⅴ類の015SDは91B区SK7327に続く溝で、18B区の東端部から89D区を囲むと思われるものである。032SD・024SD・034SDは18E区と18C区の西側を囲む南北26m前後の方形区画を構成する溝と考えられ、区画の東辺に溝の途切れる場所が2ヶ所あることから、南北の道・通路に面している可能性がある。079SDと080SDは溝Ⅴ類の東西溝で、北にある015SDまで16m程、南にあ032SDまで10m程の位置にあり、中間を区画するものであろうか。南にはd期から続く01区にある寺院の区画の北側溝と思われる040SDがある。

f期：18B区021SD・18A区SD002(18E区・18F区)の段階で、溝Ⅳ類の002SDが18A区

表9 18区の遺構変遷

時期 調査区	城下町 II-1期	城下町II-2期～城下町III-1期			城下町III-1期				城下町III-2期
		a期	b期	c期	d期	e期	f期	g期	
18B区						015SD	↘021SD		023SX ↘022SE
18D区		055SD	→056SD	↘054SD				017SD	052SX
18F区					053SD			088SD	084SE
			063SD			080SD		↗091SD	083SE 073SK・075SK
		086SD				079SD			093SK 078SD
18E区									077SD (092SK・ 095SP～097SP) 068SK～070SK・ 099SK～101SK
		087SX			064SD				
18A区 ・ 18C区		065SK ↘067SD		061SK	064SD	→032SD		060SD	
			063SD	066SD					
				028SD ↘029SD	064SD (039SK)	→032SD 024SD 034SD		006SD ↘001SD	031SE ↘030SK
			005SD						
		037SK	→036SD (045SD)	→003SD (044SD)					038SE
									035SE
	043NR				041SD	→040SD	→002SD		047SE

遺構番号の中で、SD：溝Ⅱ類の溝（SD）、SD：溝Ⅲ類の溝（SD）、SD：溝Ⅳ類の溝（SD）、SE：井戸とその可能性のある遺構
城下町Ⅱ-1期の043NRは大塚第2段階、城下町Ⅲ-1期のd期041SDは大塚第4新段階で長石釉製品が入る、城下町Ⅲ-1期
は大塚第4段階までの時期、城下町Ⅲ-2期は登窯第1小期の製品が出土する時期で、ここでは井戸が形成される町屋域の時期

北東側から18E区東側と18F区南東側を囲むものと思われるもので、18F区091SDまでは明確に辿れるが、091SDの北は同じ方向の溝を検出したが、溝底が浅く同一の溝でない可能性が高い。よって002SDは南北35m程の方形区画を形成していた可能性が高い。021SDは幅が不明であるが、溝底が土坑状に落ち込む部分が確認できた。

g期：18D区017SD・18F区088SD・同091SD・18E区060SD・18A区001SD・同006SDの段階で、東西溝の091SDは調査区中央部で北に折れて、さらに東に屈曲する088SDに掘り直されており、006SDはやや溝が東側に溝が短くなって001SDに掘り直されている。この段階は溝Ⅱ類の017SD、溝Ⅲ類の088SD・091SD・060SD、溝Ⅳ類の001SDと大規模な溝が主体で、017SDは89D区に伸びる。また017SDは18D区東端で南に折れて立ち上がり、088SDは先に述べたように

18F区東側で二度折れて調査区の東外側に伸びる。また060SDは東から伸びてきて北に折れて088SD・091SDの南5mの位置で止まり、001SD・006SDも18C区北側で立ち上がる。017SDと088SD・091SDの間隔は南北10m程、091SDと060SDの間隔は南北10m程、060SDと001SDの間隔は南北9.5m程で、大規模な区画の複雑に入り組んだ門・入口や大道・通路が屈曲する辻部分に当たるのであろうか。060SDは17A区033SDとつながる可能性があり、遺物の出土状況から陶器・土師器は北東側から廃棄された可能性が高い。

(D) 城下町Ⅲ-2期

清洲城下町遺跡Ⅳ報告にある城下町Ⅲ-2期の町屋域として想定される段階で、井戸・土坑・区画境の柱穴列・溝などがみられる。井戸と井戸の可能性のあるものは、18B区023SX・同022SE、18D区052SX・18F区083SE・同084SE・同093SK・18A区031SE・同

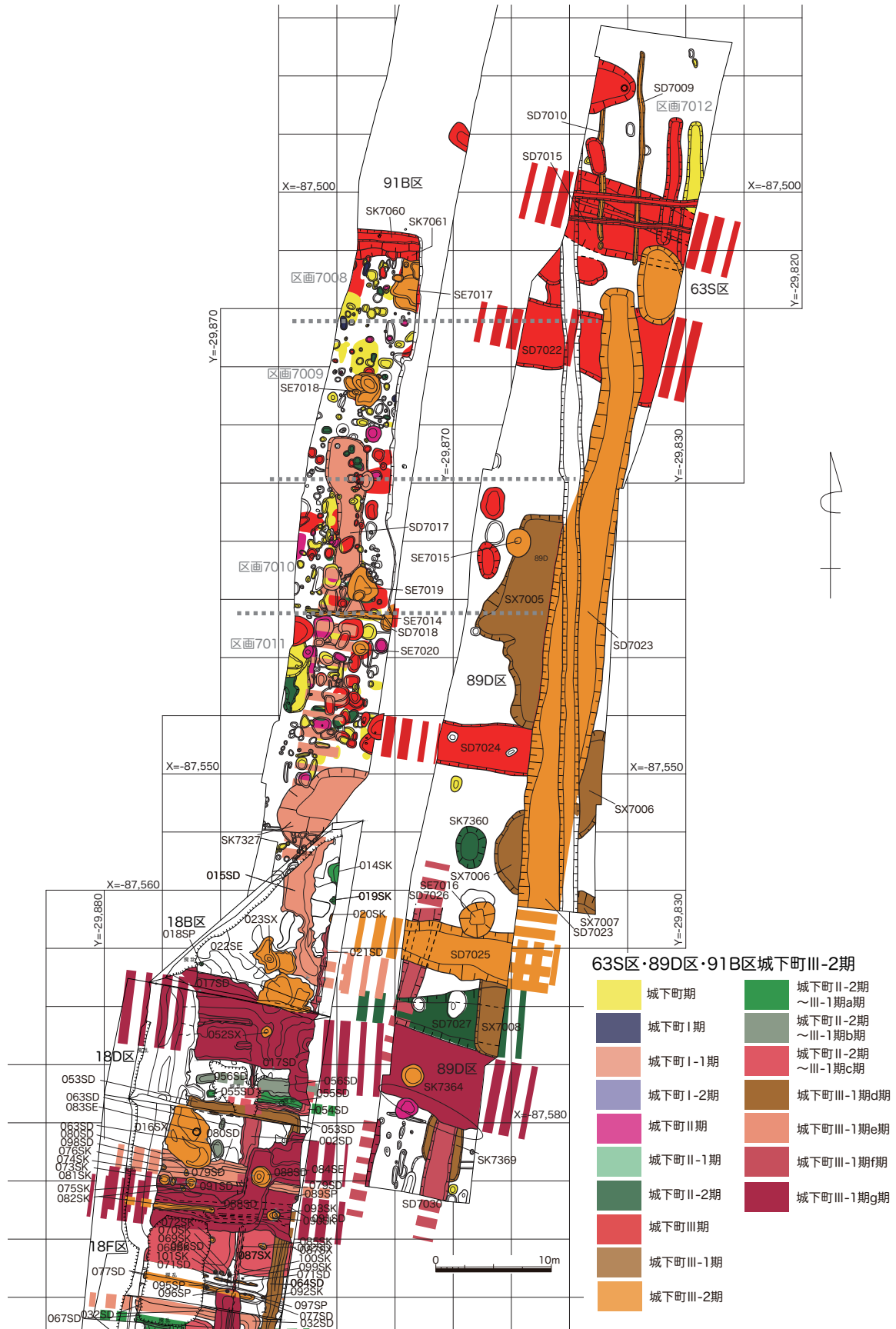


図 116 63S 区・89D 区・91B 区・18F 区の遺構変遷 (1 : 500)

038SE・同 035SE・同 047SE がある。土坑は 18F 区 073SK・同 075SK・同 085SK・18A 区 030SK がある。区画の境を示す柵と思われる柱穴列や溝は 18F 区 071SD・同 078SD・同 077SD（これに伴う 092SK・095SP～097SP）・068SK～070SK・099SK～101SK が確認できた。井戸の間隔は 023SX と 022SE・052SX は 1m 以内で南北 8m 程の間に隣接しており、052SX から南に 10m 離れて 084SE、同じく西に 3.5m 離れて 083SE、同じく南東に 2m 離れて 093SK が隣接してある。093SK から南に 5m～6m 離れて、071SD・077SD（これに伴う 092SK・095SP～097SP）・068SK～070SK・099SK～101SK の区画の境を示すと思われる柱穴列や溝が東西方向にみられ、この部分には小道・通路も存在した可能性もある。そして 093SK から南に 18m に 031SE があり、031SE から南 4.5m に 038SE、038SE から南 6m に 035SE、035SE から南 8m に 047SE が南北に並んで確認された。これは 89D 区と 91B 区南側に設定された井戸を伴う区画 7008～区画 7011 の南に続く東西に細長い幅 5m～10m 程の区画が 7 区画ほど続く状況を示しているものと思われる。そして区画の中には土坑などがみられ、居住域に伴うものと思われる。

（4）91B 区南側・89D 区・63S 区の遺構との関係（図 116）

ここでは、前節で述べた 18 区と隣接する 91B 区南側・89D 区・63S 区の遺構との関係を述べてこの地区のまとめとしたい。

『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告において城下町Ⅲ-1 期以前と城下町Ⅲ-2 期の遺構変遷が想定されている。城下町Ⅲ-1 期以前において、63S 区では溝Ⅱ類～Ⅲ類の SD7015・SD7022、89D 区では SX7005・SX7006・SE7015・SK7360・SK7366・SE7016、91B 区南側では SK7253・SK7270 などの城下町Ⅲ-1 期以前の土坑が抽出されている。城下町Ⅲ-2 期において、63S 区 SD7009・SD7010・SE7013・SX7004、89D 区 SD7023・SD7025・SK7308・SK7310・SK7363、91B 区 SK7060・SE7017～SE7020・SK7327 などが抽出されている。そして城下町Ⅲ-2 期には 91B 区において北から井戸 SE7017～SE7020 が 3m～13m の

間隔で南北に列状に存在することから、これらの井戸を中心に SE7017 に伴う区画 7008、SE7018 に伴う区画 7009、SE7019 に伴う区画 7010、SE7020 に伴う区画 7011 の 4 つの東西に細長い区画を東にある SD7023 と南にある SD7025 でさらに囲むことを想定した。また SD7023 は井戸を伴う細長い区画の背割り溝の想定もされた。また SD7023 の西上端の北延長線上にある SD7010 と東上橋の北延長線上にある SD7009 の東側にある範囲を区画 7012、SD7025 の南を区画 7013 とした。

今回の報告にあたり、89D 区・91B 区の遺構からの出土遺物を検討した結果からは、SD7023・SD7025 は大窯第 4 段階～登窯第 1 小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、城下町Ⅲ-2 期に存在した遺構であることを確認した。また先に述べた 63S 区 SD7015・同 SD7022、89D 区 SD7023・SD7025・SX7005・SX7006、91B 区南側では SK7327・SD7017 などの他に、89D 区 SD7023・SD7024・SD7030 などでは、大窯第 4 段階後半までの瀬戸・美濃窯産陶器が出土する遺構があり、89D 区 SD7027 では大窯第 3 段階の瀬戸・美濃窯産陶器を中心とした出土遺物があることを確認できた。18B 区の発掘調査時に 015SD の北が 89D 区 SK7327 に繋がり、さらに 91B 区 SD7017 付近まで伸びる可能性も想定された。また一方で、SD7025・SD7027 は 18B 区の遺構検出面が 2.0m より低い高さであったためか、溝の西側延長部分を確認することができなかった。同様に 89D 区で確認された SD7022 は 91B 区では溝が伸びていないためか確認されていない。

63S 区・89D 区・91B 区南側で確認された SD7015・SD7017・SD7022・SD7023～SD7025・SD7027 は、幅 4m を超える溝Ⅱ類～Ⅲ類の溝であり、また SD7026・SD7030 も幅 2m を超える溝は溝Ⅴ類に分類されるものである。城下町Ⅲ-2 期に属する可能性のある SD7027 を除くと、これらの溝は 18 区における遺構変遷で想定した城下町Ⅲ-1 期の d 期～g 期に対応する可能性が高い。89D 区南端部にある溝では、SD7026(SD7028)・SD7030 の段階、18D 区 SD17 とその東側の溝の段階、SD7025 の段階の 3～4 時期の変遷がみられ、

18D区SD17が18区のg期に相当するので、SD7026・SD7030の段階は18区のd期～f期にあたる。18区のe期に分類した18B区015SDは91B区SK7327やSD7017に対応する可能性が高く、89D区を囲む区画溝と考えられるので、その他の遺構の前後関係や調査区外にのびる溝は、時期の決まる溝とは異なる時期の溝と考えられる。

最後に井戸と溝との関係であるが、『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告で指摘されたように、89D区SD7023やSD7025が城下町Ⅲ-2期の遺構として91B区で確認された井戸に伴う東西に細長い区画の大囲い溝の可能性はあるが、18区や89D区では井戸と溝は重複するものが多い。全ての井戸が溝より新しいわけではないが、全体としては井戸が溝より新しい傾向がある。溝の分析にあたり、溝の規模では溝Ⅱ類～溝Ⅴ類に相当するものが多く、近在する溝は複雑に変遷して同時存在のものは少ないようである。よって、短冊型地割の区画に対応するのは、例えば91B区南側のSE7019の南0.8mにある幅0.6m程の東西溝SD7018のような溝Ⅵ類に分類されるような小規模な溝などが対応するように思われる。また、これまでも溝の規模に応じた区画の規模の違いが想定されており（清洲城下町遺跡Ⅴ）、このことを併せて考えると溝Ⅱ類～Ⅲ類に相当する溝は中・上級の武家屋敷域・寺社域を構成する区画溝に、溝Ⅴ類に相当する溝は下・中級の武家屋敷域・寺社域を構成する区画溝に対応するものと思われ、溝の規模に応じた出土遺物量の多寡が反映されてくるものと考えておきたい。

（5）南部地区の小結

南部地区では、城下町Ⅱ-1期以前の城下町に関する明確な遺構は確認できず、旧五条川の旧河道と考えられる自然流路が広く展開した可能性が高い。城下町Ⅱ-2期では、南部地区の91B区付近までは溝Ⅱ類～Ⅲ類の溝で囲まれるような比較的大きな区画が営まれ、その南に位置する18区でも比較的小規模な区画が営まれたものと考えられる。続く城下町Ⅲ-1期（後半）には、南部地区北半部では溝Ⅱ類～Ⅴ類の溝で囲まれるような大小様々な区画が営まれ、18A区・18C区南端部から01区にかけて寺院

の可能性が高い区画を想定できた。この時期の最終段階では大規模な溝が屈曲してめぐる区画が18F区から17B区に存在した可能性を指摘した。南部地区南半部では、この時期の明確な遺構がみられない。

続く城下町Ⅲ-2期には、南部地区北半部では井戸が南北に列状に分布する状況が現れ、溝Ⅵ類に相当する溝や柵列などに区画された東西に細長い区画が全体に広がることを追認した。南部地区南半部では、この時期以後に遺構が展開し、その北側では溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれた区画や00A区SX8001が前半期に営まれ、後半期に井戸が南北に列状に分布することから、東西に細長い区画が全体に広がることを想定した。この南部地区南半部の南側では、前半期は北側と同じ溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれた区画が形成されたが、後半期は軸線を西に振る溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれた区画や道SF8001が形成されることを明らかにした。この中には地名から想定される「櫓」の存在した可能性もある。

南部地区全体に見ると、当初（城下町Ⅱ-2期～Ⅲ-1期以後）は大小の様々な規模の方形状区画を構成すると思われる溝が北から南へと展開していく過程が想定でき、城下町Ⅲ-2期以後に町屋域を想定するような東西の細長い区画がその北側から遅れて形成されていくことが窺われた。課題としては細長い区画に伴う井戸は想定できたが、方形状区画に伴う井戸の存在があまり明確ではないように思われる。遺跡全体の中では一部のみの調査であるため、未調査部分に井戸が存在するのだろう。

3. 御園地区（00B区）

00B区は清須城本丸の天守台跡から北東約220mに位置する地点で、北約60mには現在の名古屋環状道路の地点で愛知県埋蔵文化財センターによる調査が行われ、後期清須城の北側中堀（60A区～60D区SD52）が確認されている（清洲城下町遺跡Ⅱ）。

（1）中世（図117）

調査区の南側にて14世紀～15世紀の河道部にあたるNR01が確認されている。

（2）城下町Ⅰ期～城下町Ⅱ-2期（図117・図118）

城下町Ⅰ期以前の遺構として、溝Ⅲ類～Ⅳ類

のSD12と溝Ⅳ類～Ⅴ類のSD06～SD08、土坑SK27・SK28があり、城下町Ⅰ期～城下町Ⅱ-2期に形成された土塁SX01、城下町Ⅱ-2期の遺構として溝Ⅳ類のSD11がある。SD07・SD11・SD12はN-25°-E～N-30°-Eの軸線をもち、SD06もこれらに直行するN-67°-Wであるが、SD08はN-32°-Wの軸線をもって斜行する。SD08を除く溝と土塁SX01は軸線が対応しており、SX01は旧五条川の西岸堤防と考えられるものなので、およそ地形に制約された地割と考えられる。SD06・SD08は東南東に伸びることから、現在の五条川にかけて区画が存在した可能性が高い。その他の溝は、区画など性格は不明である。

(3) 城下町Ⅲ期 (図118)

調査区の北側に造成基壇SX04が造成され、基壇の東側と南側に石垣SW01が築かれる。土塁SX01と方形状基壇SX04に囲まれた南側に

は溝SD13の北側にSX01からのスロープ状に下がる幅6m程の通路と、溝Ⅳ類～Ⅴ類のSD01・SD02・SD04・SD14に囲まれた区画がある。溝は調査区の東外側を囲んで、旧五条川に面していたものと思われる。これらの遺構の時期は、SD01より大窯第3古段階～大窯第3新段階の瀬戸・美濃窯産陶器と「三斗付口上清須外」・「ほしの新右衛門」の墨書のある荷札木簡が出土しており、木簡に記された「ほしの新右衛門」は織田信雄分限帳に記載される人物の可能性が高いもので、城下町Ⅱ-2期～Ⅲ-1期に属するものと考えられる。SD02からは大窯第2段階～大窯第3古段階の瀬戸・美濃窯産陶器、焙烙鍋、大窯第4段階の播鉢が出土していることから、城下町Ⅲ期のものである。第2章でも述べたが、SD01とSD14の途切れる部分は東西に並んでおり、同時に存在すれば区画への出入り口が想定でき、SD02の調査区南東隅

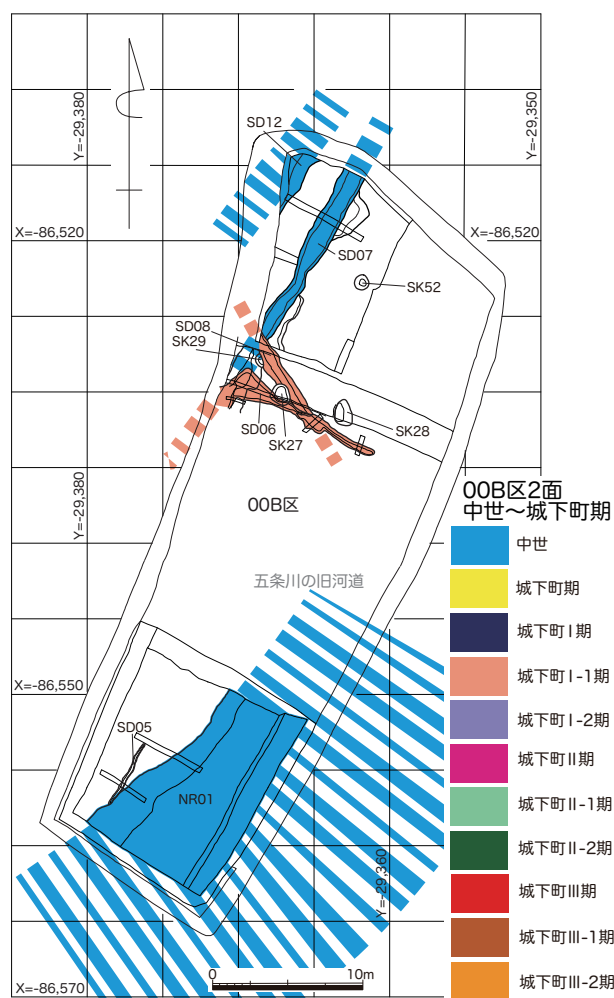


図117 00B区2面 中世～城下町期の遺構変遷 (1:500)

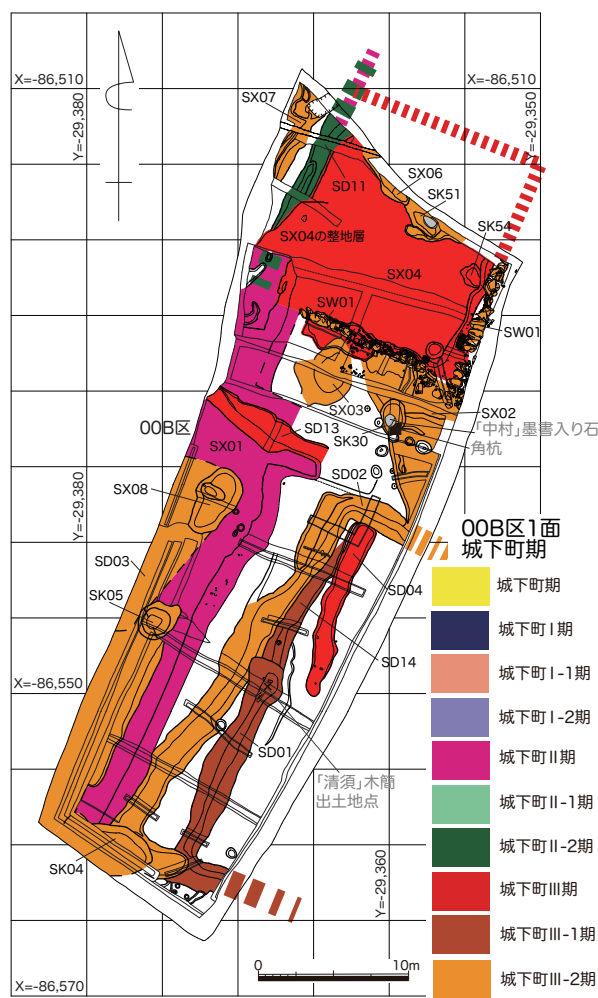


図118 00B区の城下町Ⅱ期～Ⅲ-2期の遺構変遷 (1:500)

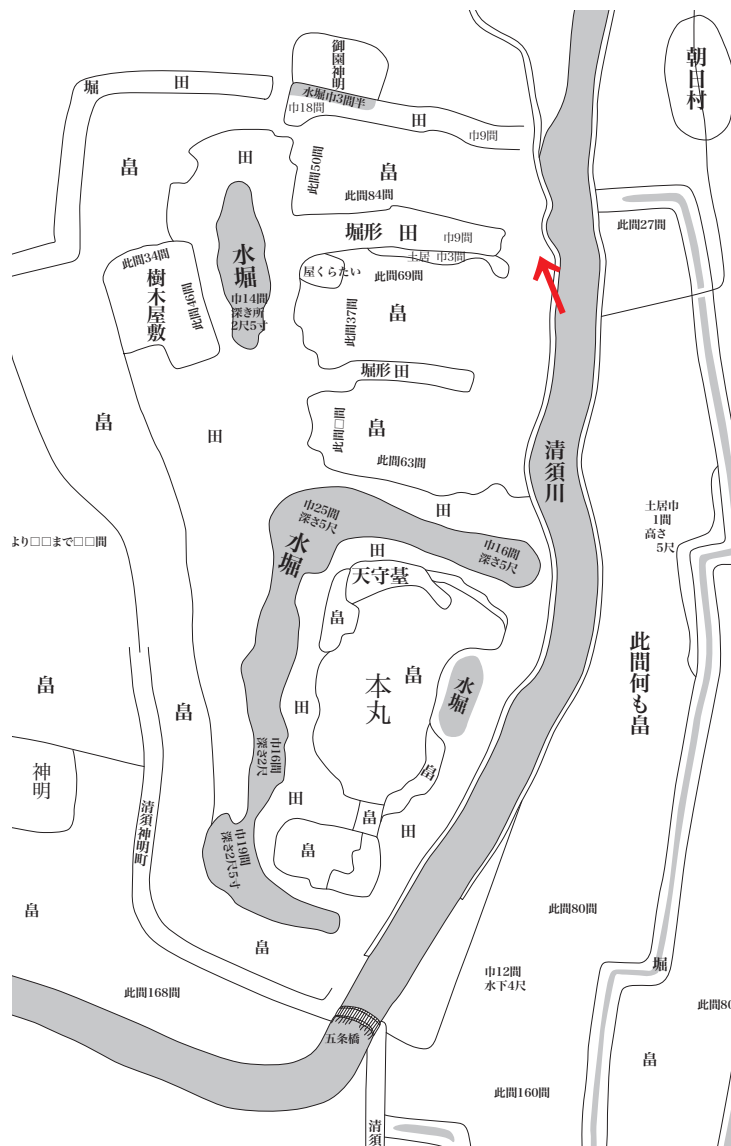


図 119 名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城絵図』（中央部分）における 00B 区の位置（赤色矢印）

で止まるところも同様な出入り口の存在が推定できる。SD02 のめぐる範囲から南北約 24m を囲む区画溝と考えられ、SD01 から荷札木簡が出土していることから、この区画が後期清須城に関わる船着場であった可能性が高い。また石垣 SW01 で護岸された方形基壇 SX04 には櫓などの建物もあった可能性がある。

以上の城下町Ⅲ期の遺構より新しい遺構として、SX02 と SX03 がある。出土遺物には江戸時代以後のものが無いが、SX04・SW01 の南から東にかけて溜まる堆積であること、多くの瓦や石垣の石材と思われる石材やその裏込めの可能性ある礫が多数出土したことから、城

下町Ⅲ-2 期にあたる清須越しに伴う遺構を想定したい。SX02 中にある SK30 も、墨書のある巨礫の砂岩や角柱が遺存しており、土坑の埋没する堆積状況からもほぼ同時期のものと考えられることから、清須越しに伴う遺構と考えておきたい。

（4）00B 区の後期清須城の中における位置

発掘調査時から、調査地点が五条川に東面して 60B 区・60C 区で SD52 として報告され、名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城絵図』に描かれた御園の下に東西にのびる「水堀」である中堀の南側で、天守臺から北にある内堀と考えられる「田」と「水堀」の北側にあることは明らかであり、さらに相対的位置から『春日井郡清須村古城絵図』に描かれた「御園」の下に東西にのびる「水堀」の南で「畑」を挟んで南に東西に描かれた「堀形田」の東端付近に位置することは予想された（図 119）。

本報告において、00B 区南西隅部にて確認された SD03 など在这个「堀形田」の東端部分に想定したり、また鈴木正貴が推定したこの「堀形田」の南にある「土居」の部分をも 00B 区北側にある SX04 に当てること（鈴木 2012）も考えた。しかし、00B 区は愛知県公文書館所蔵明治 17 年（1884）作成『地籍字分



図 120 00B 区の調査中の風景（南より、丸の位置が SX04 の位置）

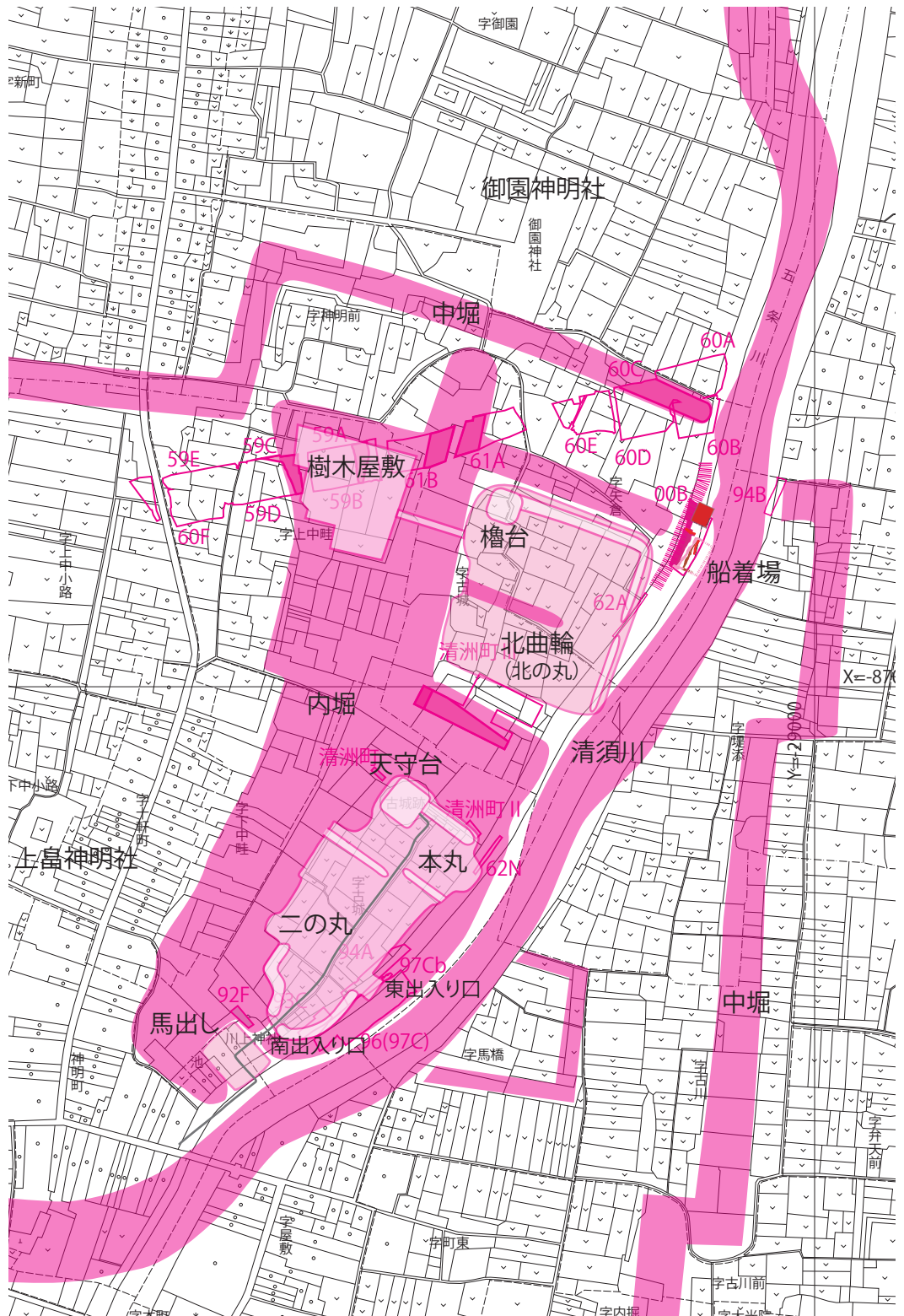


図 121 00B 区の船着場の想定 (1 : 5,000)

鈴木正貴 2012 「後期清須城本丸考—臼杵市立臼杵図書館所蔵絵図を中心に—」

『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第 13 号掲載の図 18 と図 23 を合成一部改変作成

全図』の五条川の西岸堤から五条川にかかる位置にあり (図 121)、金原 宏 (金原 1986) や鈴木 (鈴木 2012) が想定した『地籍字分全図』の東西にのびる田域をこの「堀形 田」に当て、00B 区の一部が『春日井郡清須村古城絵図』の

「堀形 田」に重複しないで、この「堀形 田」の東で堤道が五条川に張り出して曲がる部分の南側に当てるのが妥当と考えられた。また、00B 区の SX04 は五条川にやや張り出した屈曲部分として調査時には残っていた (図 120)。

このような検討結果から、00B区を含む五条川へ張り出した屈曲は『地籍字分全図』には現われず、また『春日井郡清須村古城絵図』には堤・道が五条川へ張り出した屈曲として描かれているが、城に関わる施設はこの部分に描かれていない。よって、00B区にて確認された後期清須城に関わる遺構は、中堀の内側にある曲輪内の部分ではなく、五条川と堀に挟まれた地点にある溝SD01・SD02・SD04・SD14などに囲まれた船着場と船着場に隣接する石垣SW01を伴う方形基壇SX04に推定される施設（例えば櫓状建物）が想定される。

4. まとめ

最後に城下町Ⅲ期における遺構を形成する時代背景を考えたい。

御園地区に見られた後期清須城に伴う船着場はこれまでの清須城の研究の中で、江戸時代の絵図などに描かれていない部分における遺構のあり方を示すものとして、貴重な成果を提供できた。これはSD01出土の墨書木簡に残された「ほしの新右衛門」が織田信雄分限帳に記載された人物の可能性が高いものであり、後期清須城の成立と合わせて、興味深い成果となった。

南部地区ではこれまでの調査・研究により、東西の細長い地割から想定される町屋域の展開が城下町Ⅲ-2の特徴とされてきた。今回の分析により、南部地区の遺構変遷の中では、この井戸の列状分布から想定される東西の細長い地割の形成が城下町Ⅲ-2期であることを改めて追認し、城下町Ⅱ-2期から展開する大小の方形区画が展開した後で、登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土する遺構のものであることが明らかにできた。これを清洲城下町遺跡の歴史と併せて考えると、この城下町Ⅲ-2期の始まりは出土遺物では織部などに代表される登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産陶器が指標であるが、遺構の形成もその前後にあることがわかる。この時期は慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いと江戸幕府成立以後で尾張藩主が松平忠吉から徳川義直である時期と重なる。よって南部地区における城下町Ⅲ-2期の遺構群の形成が、江戸時代における街道整備などと連動した城下町整備と関連したものと考えられるのである。

以上、少ない手がかりから推測を重ねる部分も多くあり、また既報告の調査成果との整合性を急ぎ考えるあまり、遺構の理解が不十分になる部分もあると思われる。今後の調査と研究に託すところである。本報告を作成するにあたり、清須市教育委員会の柴垣哲彦氏と当埋蔵文化財センターの鈴木正貴氏には多くのご教示とご支援をいただいた。記して感謝の意としたい。

参考・引用文献

- 金原 宏 1986 「清洲城下町の堀の復元」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 1994 「第V章 城下町期の遺構配置」『清洲城下町遺跡Ⅳ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 1995 「第IX章 考察 第2節 城下町の復元的研究(1995年覚書)」『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 2012 「後期清須城本丸考—白杵市立白杵図書館所蔵絵図を中心に—」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号、(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 遺構・出土遺物の時期区分は次の文献に準拠している
- 鈴木正貴 1995 「第IX章 考察 第1節 清須城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史陶磁史篇四』、また本報告に関わる瀬戸・美濃窯産陶器は藤澤良祐氏によるご教示を頂いている。
- 清洲城下町遺跡の遺構の時期などを考える上では、刊行された全ての報告書を参考にしているが、本文に関わるものをここでは挙げる。
- 小澤一弘編 1992 『清洲城下町遺跡Ⅱ』『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴編 1994 『清洲城下町遺跡Ⅳ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴編 1995 『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴・宮腰健司他 2002 『清洲城下町遺跡Ⅷ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集」財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 田邊一元・柴垣哲彦 2017 『清洲城下町遺跡Ⅸ-総合治水対策特定河川事業に伴う発掘調査報告書-』「清須市埋蔵文化財調査報告Ⅹ」愛知県尾張建設事務所・清須市教育委員会・株式会社イビソク

第2節 清洲城下町遺跡における茶陶の分布 — 黄瀬戸と楽系陶器 —

1. はじめに

桃山陶器と認識される茶陶類は、清洲城下町遺跡出土遺物の中でも調査時、また整理段階においても比較的目的を引き抽出され易い資料である。

このうち多量に出土する志野釉・長石釉の製品は清洲城下町遺跡の時期区分、城下町期 III 期の遺構の時期を決定する指標ともなっている^(註1)。ただ、向付などの茶陶のほか碗・皿類の汎用飲食器までの器種が広範かつ多量に出土するため、同時期の遺構の展開を把握するには有効な資料であったが、出土地点の性格の違いを鮮明にするものではなかった。そこで瀬戸・美濃窯産陶器のうち桃山陶器初期の段階に登場する黄瀬戸^(註2)を軸に茶陶の共伴関係から分析を試みることにした。また、地元瀬戸・美濃窯の製品ではない茶陶として楽系の軟質陶器（主に碗・水滴）を選択し、これらの分布域の比較・検討を行った。

2. 清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸資料

清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸の器種には、大皿・鉢類、向付、半筒碗、筒形容器などがある（図122・図123）。大皿・鉢類では、銅鑲鉢、輪花鉢と呼称される器形をはじめとして、向付類には半筒形や猪口などの様々な形状・規格のものがあり、黄瀬戸に特有ともいえる形と焼締陶器や錆釉・鉄釉・志野（長石）釉製品大皿・鉢などの素地に共通するような、口縁部を折縁状にする器形、平鉢形や浅鉢形などがある。黄瀬戸にはへうによる刻紋や印花、櫛状工具による波状文などの施文がみられ、黄釉の地に緑彩（胆礬）、褐彩（鉄）が施される。窯詰方法の違いも認められ、内面などに小さな目跡のみられるもの、トチンや重ね焼の置き跡が明瞭なものがあり、前者の器壁は全体にやや薄手で丁寧な造りとなる傾向が認められる。大皿類の施文方法では、前者にはへうによる刻紋、後者には波状文が多いという対応関係が認められる。

3. 茶陶の共伴関係

黄瀬戸と共伴する主な茶陶器種の有無を表10～表13に示す（ただし瀬戸・美濃窯産天目茶碗、志野・長石釉の小型の皿類は城下町期 III 期に共通するため、項目から除外している）。

（1）91A 区 SK6151 は天正地震（1586 年）以降の掘削と考えられる遺構であり、17 世紀初頭の資料を含む城下町期 III-1 期の基準資料となっている。長軸 11.9m、短軸 10.5m、深さ 0.85m の規模をもつ平面形状が不定形となる大型の廃棄土坑であり、複数の土坑が重複する。黄瀬戸は内面にへうによる花文を施した大皿（9,10）があり、志野では向付・折縁皿、その他の茶陶に筒形碗、瀬戸黒茶碗、灰釉向付、茶入、花瓶、唐津窯産向付・碗があり、景德鎮窯系青花、漳州窯系青花皿も一定量が含まれる。

（2）63S・89D 区 SD7023 は幅 5.2m、深さ 0.63m の規模の溝である。南北方向に続く 53.6m の範囲が確認されており、側溝のような性格が想定されている。黄瀬戸は大鉢、向付（1,21,40）があり、図化資料に志野では四方向付が数点、志野織部向付・大皿などがあり、大皿類には織部平鉢、青花、朝鮮産白磁、備前窯産製品も含まれる。その他に楽茶碗、筒形碗、沓茶碗、美濃唐津向付、建水や茶壺、唐津窯産向付などが含まれる。青花皿の数点には漆継が認められる。

（3）61C・61D 区 SK7029 は、城下町期 III-2 期の基準資料である。長軸 17.36m、検出幅 7.47m、深さ 1.59m の規模をもつ大型の方形土坑であり、性格は不明ながら隣接する寺院（久証寺）との関連も指摘されている。黄瀬戸は繊細な造りの鉢・向付（3,4,24,25）があり、志野では大型の浅鉢形向付・水注・蓋付小壺・志野茶碗など多様な器形や鉄絵文様がみられる。他にも青花大皿、大皿（焼締、錆・鉄釉）、瀬戸黒茶碗、筒形碗、花生、唐津窯産向付があり唐津窯産ひだ皿は複数がみられる。図化資料に茶入は 6 点があり、茶陶器種・形態のバリエーションや個体数も豊富である。

（4）99A 区 SK31,SK33 は直径がそれぞれ約 3.4m と 1.8m、深さ約 0.8m の規模をもつ土坑であり、出土遺物は接合関係にある。黄瀬戸は

鉢・浅鉢形向付(5,6,22)があり、ほかに青花碗・丸皿が含まれる。瀬戸・美濃窯産製品では重圈皿が伴うのみである。99A区全体では黄瀬戸向付・筒形容器・半筒碗など(31,32,34,36,37,43)があり、志野向付・盤・大皿、志野茶碗、鼠志野向付・大皿、鳴海織部向付、美濃唐津向付など多様な形態のものがみられ、他に筒形碗、沓茶碗があり、大皿(焼締、錆・鉄釉)も多数が出土している。99B区全体では黄瀬戸向付・小鉢など(8,29,30,33,38)があり、その他に志野茶碗、志野向付・盤・大皿、灰釉向付、瀬戸黒茶碗、黒織部茶碗、大皿(錆・鉄・灰釉)、遺物の接合関係にあるSD20、SX01では、黄瀬戸と共に楽(茶碗と菊皿)が出土している。

(5) 10A・B区全体では黄瀬戸大皿(13,14,15)があり、志野では向付・碗がみられるが大皿類も含めて少量である。他には織部向付・織部沓合蓋、華南三彩鉢などがある。

(6) 11B区全体では黄瀬戸向付・大皿・中皿・碗など(17,19,23,28,42)があり、志野向付は少なく、志野茶碗、志野丸碗、焼締大皿、建水、青花碗・皿、瓦質風炉などがみられる。

(7) 朝日西遺跡59F区SK133では黄瀬戸大皿(16)が出土している。共伴資料は不明である。このほか包含層出土資料に、黄瀬戸鉢・大皿・小杯など(7,12,18,44)があり、灰志野向付、青花大皿、楽茶碗、織部沓茶碗、水滴が数点と朝鮮産徳利などがみられる。59G区SD63では楽茶碗と共に志野向付、沓茶碗、長石釉折縁桜花皿が出土しているほか、茶入や向付類が一定量出土する遺構が散漫ながらも広がりを見せる。

(8) 00A区,62D区SX8001は大窯第3段階後半から連房式登窯第1小期までの遺物を含む巨大な方形土坑である。黄瀬戸は大皿・鉢・筒向付・筒形片口鉢があり、志野向付・大皿類も数多く含まれ、他に鼠志野大皿、長石釉鉄絵大皿・向付、茶入、水滴、美濃唐津大皿、唐津窯産碗、信楽窯産水指がみられる。

(9) 18区002SDでは黄瀬戸向付と大皿、017SDでは黄瀬戸輪弁皿と唐津碗、031SEでは黄瀬戸腰折皿、052SXでは黄瀬戸鉢と長石釉鉄絵丸皿がある。遺構単位の茶陶器種のセット関係は明確ではないが、調査区全体では志野丸

皿が多く含まれるなど、城下町期III-1期終盤からIII-2期を中心とした遺構が濃密に分布している。

以上から遺構で共伴する器種を整理すると、黄瀬戸「向付」を含む遺構では、志野(長石)向付・大皿・鉢、焼締・錆(鉄)釉の大皿類、茶入などの瀬戸・美濃窯産製品が併せて含まれる割合が高い。これに青花大皿、備前大皿、楽茶碗、朝鮮徳利、青花・白磁青磁の皿、水滴(楽、瀬戸・美濃窯産、備前窯産)、沓茶碗、花生、建水、瓦質風炉など多様な器種や瀬戸・美濃窯産陶器以外の製品が加わるといった状況を読み取ることができる。

清洲城下町遺跡は沖積地に立地する上に生活域としての改変の頻度が高く、削平を免れた遺構でも重複が著しい。出土遺物の一括性の精度は必ずしも高くはないという状況を踏まえた上で、ここでは黄瀬戸向付と共にやや幅をもつ時期の多様な器種の茶陶が廃棄されているという状況を確認しておきたい。

4. 茶陶の分布範囲から

黄瀬戸を含む茶陶の出土地点は、清須城下町のどのような場所なのだろうか。美濃窯産の黄瀬戸と京より運ばれた楽(系陶器)の茶碗・水滴について出土遺構のある調査区を単位として分布傾向の比較を行った(図124)。

黄瀬戸は遺跡の広い範囲に分布がみられる。城下町北側の地域では、神明地区西部(60F区)と神明地区東部(60A・B区)、そして本町西部地区と本町東部地区へと続く範囲(10A・B区、11B区)や本町西部地区のさらに西側の地区、そして南部地区でも南端付近にまで及び、城下でも周縁部にまで確認されている。対照的に本丸地区、五条橋地区、田中町(北部・南部)地区など清須城に近い中心域では確認がなく空白域となっている。

楽系陶器の分布範囲は黄瀬戸に比べて狭く、部分的には重なりつつも大きく異なる様相を示している。集中域が五条橋地区、田中町南部地区にあり、そこから広がるように本町西部地区から南部地区の北側の一部が分布範囲となっている。また、城下町の北部地域では神明地区に加えて御園地区で確認されている。

以上の分布範囲を、これまでの研究成果として想定されている清須城下町（後期）復元案^(註3)等を参考に置き換えてみると、楽（系陶器）のみが分布する五条橋地区は63C,89E区SD6001が比定されている清須城中堀より内側にあたり、調査で明確な遺構が確認されない範囲として広場のような空間が想定されている。田中町南部地区も中堀の内側と考えられる範囲で、ここでは城下町期Ⅱ期に存在した大型の方形区画がⅢ期に小型化していることなどから、下級家臣団の武家屋敷地と推定されている。

楽・黄瀬戸の両者の分布する範囲のうち、神明地区も同様に中堀の内側の空間と想定され、出土遺構の60A・B・C区SD52が北側中堀に比定されている。五条橋地区と本町西部地区との間の63C,89E区SD6001が南側中堀に比定されており（この遺構には黄瀬戸・楽ともに含まれていないが）、それより外側となる本町西部地区・本町東部地区との間（10A・B区、11A・B区）・南部地区、そして城下町北部の御園地区では、小型の溝と井戸の配列を基本とした遺構の検討から、街路に面して間口の狭い空間、いわゆる短冊形地割が並ぶ町屋の景観が復元されている。

なお瀬戸・美濃窯産の播鉢の時期別出土分布のデータ^(註4)によれば、中堀のすぐ南側に位置する本町西部地区は本丸地区、清須城の成立とともに早くから開発されており、南部地区は61D,89D,91C区などの一部の範囲以外では大窯第3段階、すなわち城下町期Ⅱ-2期以降に活動が本格的となっている。01区以南は城下町の拡張により新規に整備された範囲と考えられる。本町西部地区と本報告17,18区、00A区が含まれる南部地区は同じく町屋の空間が想定されているが、それぞれに異なる経緯を経て成立した場所であることをつけ加えておきたい。

5. まとめ

清須城下町（後期）における茶陶の分布に関連しては既に指摘がなされており、武家・寺社地と比較して、商・職人居住域と想定される町屋の方が圧倒的な出土量と器種の豊富さで勝ること、武家・寺社地では瓦質風炉、茶臼などが特徴的にみられることなど器種別の差異も示されている^(註5)。これらは黄瀬戸分布の様相と概

ね一致しているが、楽（系陶器）のあり方を重ねると少し別の表現が可能となろう。

ここで出土地点の様相からまず問題としたいのは、実際に茶陶を使用した空間についてである。武家・寺社地は、突出した規模の溝をもち、敷地内部の詳細は明らかでないものの単独でも周囲の軸線方向を推定できるような大型の方形区画の存在などから推定されている。町屋が想定される遺構は、遺存状況も不安定な規模や構造の境界が共有される形で並ぶ狭い長方形区画であり、内部の施設はどれも画一的な配置であったと推測される。少なくとも、数多くの多彩な茶陶を継続的に使用した空間を後者には求めづらい。また、今回の検討により黄瀬戸の分布と茶陶のバリエーション、とりわけ瀬戸・美濃窯産製品器種と量においては一定の相関関係が認められると考えている。多くの茶陶が町屋の空間に出土するとしても、それは茶の湯の席で使われたとは限らず、商品として存在したものが多く含まれている可能性を考える必要があろう。つまり、町屋の敷地内、あるいは近接した場所に保管（廃棄を含む管理）のための空間が想定できるのではないだろうか。

武家・寺社地から周辺町屋へ拡散するような分布がみられた楽（系陶器）は、基本的に出土地点の近辺で使用・廃棄されたものと推測される。楽（系陶器）の分布については、茶の湯文化の広がりに関わる時期差、階層による嗜好や流通経路の違いなどの影響が想定されるが、この点はさらに他の茶陶器種との関連も含めて考える必要があろう。

さて、京・大坂・堺に比較して清洲城下町遺跡では織部が「極めて少ない」と評される^(註6)。洛中の織部製品の流通については、三条「せと物屋町」の問屋、消費地（公家・武家・豪商など）などそれぞれに異なる出土状況が明らかにされてきているが、清須城下において茶の湯文化の受容層の実態は考古学的にはどのような形で把握できるのだろうか。また、茶陶の流通に関してはどのような都市と位置付けられるのだろうか。瀬戸・美濃窯で生産された茶陶類のうち、黄瀬戸と志野が盛行し量産化された段階の消費地遺跡として、改めて清洲城下町遺跡の重要性が認識されるところである。

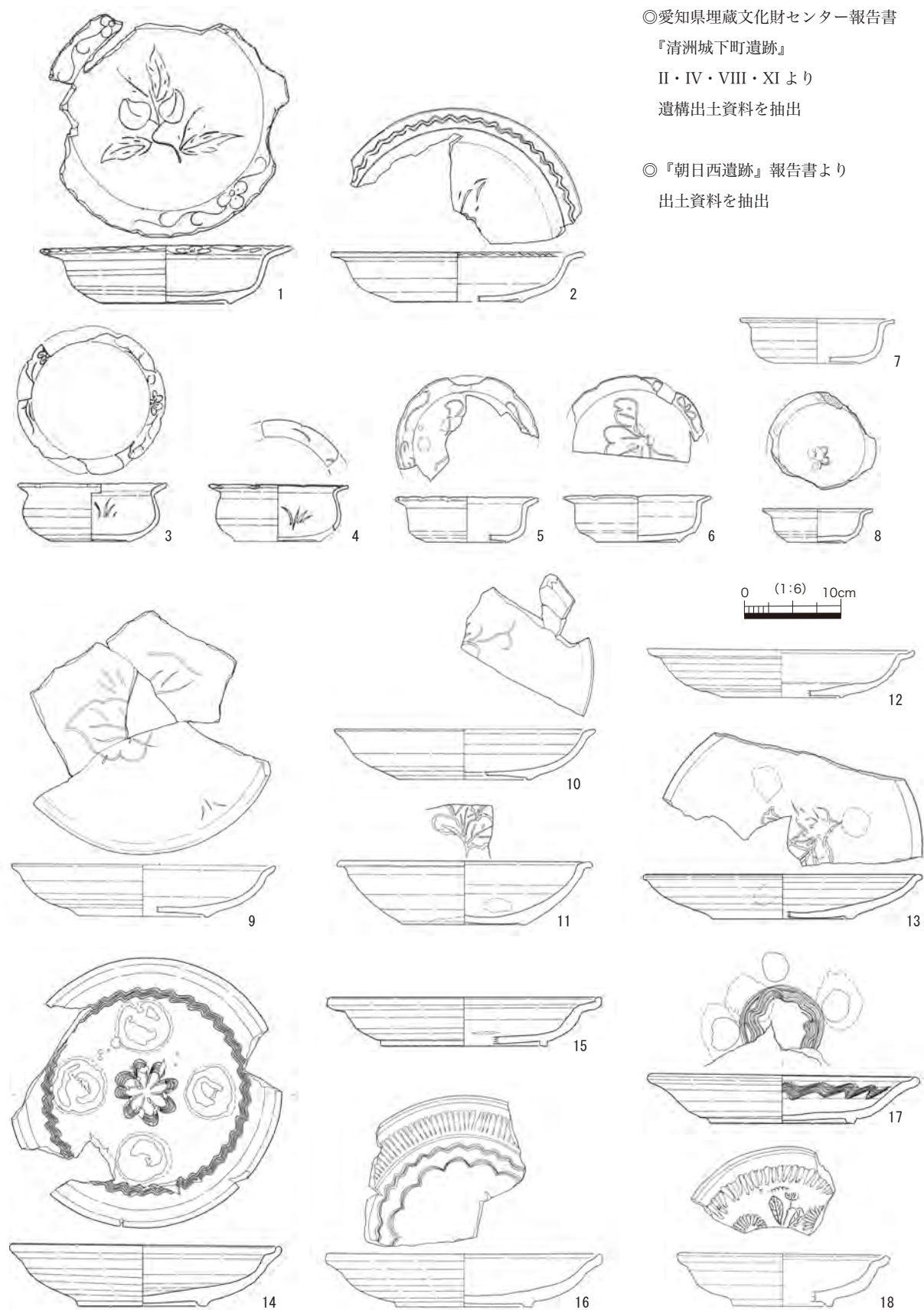
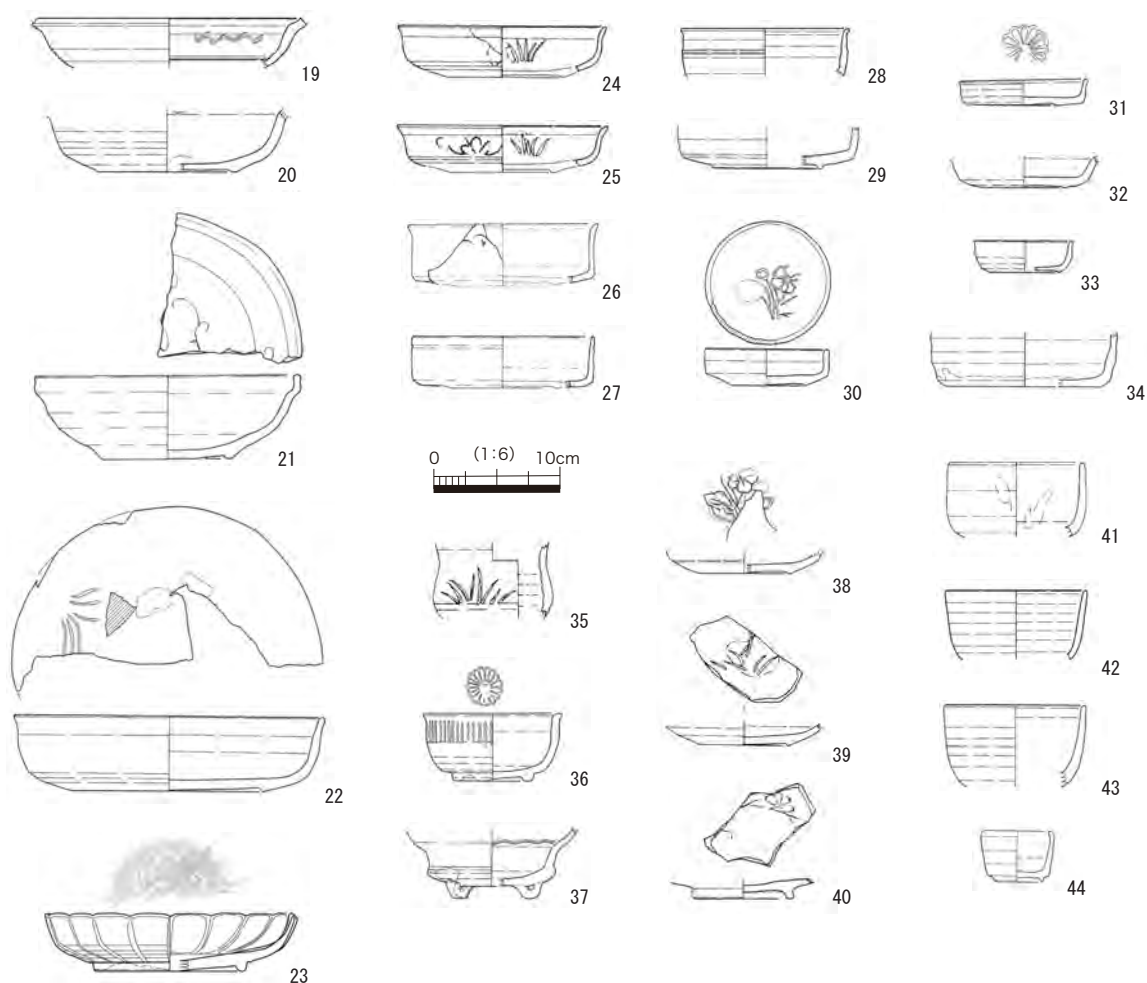


図 122 清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸類 (1) 縮尺 1/6



() 内は報告書と図版番号

- | | | |
|------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 (IV-819) 63S 区 SD7023 | 16 (朝日西 -532) 59F 区 SK133 | 31 (VIII-955) 99A 区 SK89 |
| 2 (II-1172) 60F1 区 SK40 | 17 (XI-380) 11B 区 0528SE | 32 (VIII-956) 99A 区 SK71 |
| 3 (IV-983) 61D 区 SK7029 | 18 (朝日西 -531) | 33 (VIII-1762) 99B 区 SK173 |
| 4 (IV-982) 61D 区 SK7029 | 19 (XI-501) 11B 区 0655SK | 34 (VIII-1063) 99A 区検出 |
| 5 (VIII-951) 99A 区 SK31 | 20 (VIII-1179) 99B 区 SX02 | 35 (II-729) SD52-60A, 60B, 60C 区 |
| 6 (VIII-952) 99A 区 SK31・SK33 | 21 (IV-815) 89D 区 SD7023 | 36 (VIII-959) 99A 区 SD11・SD03 |
| 7 (朝日西 -530) 検出 | 22 (VIII-958) 99A 区 SK31・SK33 | 37 (VIII-957) 99A 区 SK71 |
| 8 (VIII-1738) 99B 区トレンチ | 23 (XI-564) 11B 区 0732SK | 38 (VIII-1741) 99B 区 SK194 |
| 9 (IV-573) 91A 区 SK6151 | 24 (IV-974) 61D 区 SK7029 | 39 (II-566) SD16-59C, 59D 区 |
| 10 (IV-574) 91A 区 SK6151 | 25 (IV-975) 61D 区 SK7029 | 40 (IV-801) 89D 区 SD7023 |
| 11 (VIII-44) 95B 区 SD102 | 26 (IV-685) 89D 区 SX7005 | 41 (II-542) SD16-59C, 59D 区 |
| 12 (朝日西 -533) 検出 | 27 (IV-684) 89D 区 SX7005 | 42 (XI-409) 11B 区 0530SK |
| 13 (XI-946) 10B 区 418SD | 28 (XI-639) 11B 区 0815SD | 43 (VIII-802) 99A 区 SK68 |
| 14 (XI-972) 10B 区 443SD | 29 (VIII-1742) 99B 区 SX01 | 44 (朝日西 -529) 検出 |
| 15 (XI-929) 10A 区 301SE | 30 (VIII-1739) 99B 区 SX02 | |

図 123 清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸類 (2) 縮尺 1/6

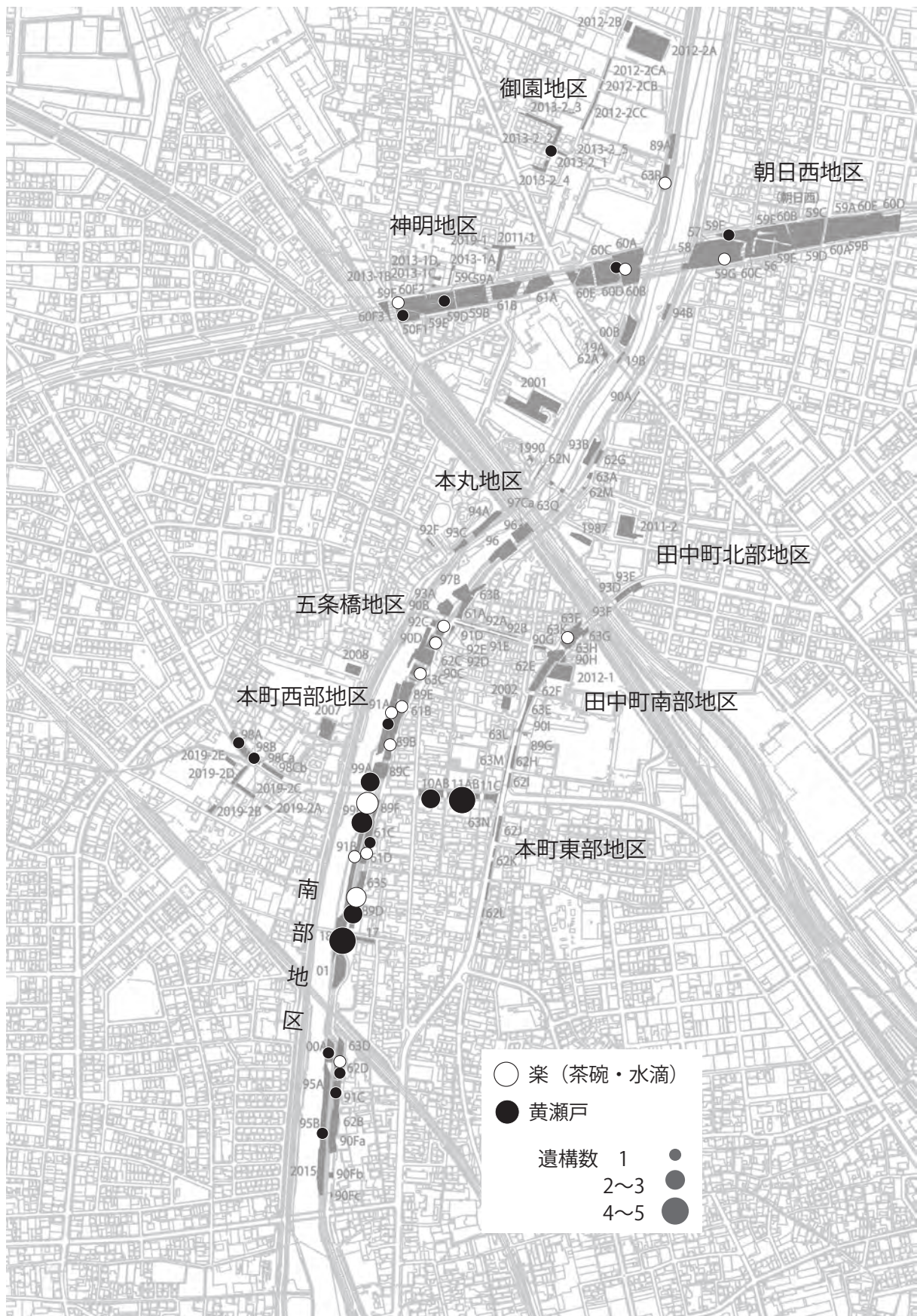


図 124 清洲城下町遺跡の黄瀬戸・楽系陶器の分布 縮尺 1/10,000

表 10 清洲城下町遺跡出土の茶陶類(1)

調査区	遺構番号	黄瀬戸					向付		大皿・鉢					茶入	碗					皿					備 考	文献
		向付	鉢	大皿	皿	碗	志野 (長石鉄絵)	織部 その他	志野 (長石鉄絵)	焼締	鉄釉・錆釉	灰釉	青花	その他	(瀬戸・美濃窯)	楽茶碗	沓茶碗	青花	青磁	朝鮮	唐津	青花	白磁	青磁		
91A区	SK6151			◎			●	灰釉, 唐津	●	●				●	●	●	●			●	●	●	●		瀬戸黒茶碗, 花瓶	5
89D区	SD7023	◎	◎	◎			●	●	●	●		●	織部平鉢, 朝鮮白磁, 備前	●	●	●	●			天目 / ●	●	●	●		瓦質風炉, 水滴 (瀬)	5
61CD区	SK7029	◎	◎				●	●	唐津	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●	●	●	●	瀬戸黒茶碗, 花生 (朝鮮・瀬)	5
99A区	SK31, 33, 71, SD11, 03など	◎	◎			半筒◎	●	美濃唐津, 鳴海織部, 鼠志野	●	●	●			●		志野 / ●									掛花生 (瀬), 水指 (瀬)	6
95B区	SD102			◎																	●					6
99B	SX02	◎		◎				灰釉					菊皿 (楽)													6
99B	SD20	◎					●	灰釉		●				●	●											6
99B	SX01	◎								●				●	●										黒織部碗	6
89D区	SX7005	◎					●			●	●	●	唐津		●					●	●	●			花生・建水 (瀬), 水滴 (楽・瀬)	5
91C区		◎																								5
59C, 59D区	SD16	◎				◎				●	●	●		●					●		●	●	●		建水 (瀬)	2
60A~C区	SD52	◎					●	灰釉, 唐津	●			●	備前	●	●	●				●		●	●			2
60F1区	SK40			◎																						2
98A区	NR01					天目 / ◎	●										志野									7
98B区	SD02			◎			●			●																7
10A区	301SE			◎				灰釉																		8
10B区	442SK			◎									華南三彩盤													8
10B区	443SD			◎																		●			肥前磁器碗	8
11B区	0528SE			◎						●															德利 (朝鮮), 瓦質風炉	8
11B区	0530SK					◎				●												●			瓦質風炉, 建水	8
11B区	0655SK			◎																						8
11B区	0732SK			菊皿◎						●						志野	●					●				8
11B区	0815SD	◎																								8
朝日西59F	SK133			◎									緑釉盤										●			4
朝日西	検出	◎	◎	◎			灰志野●					●			黒赤●	織部黒●		肥前●	●		●	●	●		小壺 (備前), 鷹口壺 (丹波), 雑釉德利, 水滴4点	3
62L区	SD164					半筒◎																				1
	450SK			◎			●																			12
00A区	SX8001 (検1)			◎	◎		●	長石鉄絵蓋	●	●			長石鉄絵鉢									●				本報告 P. 48
00A区	SX8001 (検2)	◎	◎	◎			●		●				美濃唐津鉄絵大皿	●			●	●		●	●	●			水指 (信楽), 水滴 (瀬)	本報告 P. 49~51
62D区	SX8001			◎			●		鼠志野●				長石鉄絵大皿									●				本報告 P. 57
18区	002SD	◎		◎																						本報告 P. 68
18区	017SD					輪壳◎														●						本報告 P. 69
18区	031SE					端反◎																	●			本報告 P. 73
18区	040SD	◎				中皿◎																				本報告 P. 73, 74

表 11 清洲城下町遺跡出土の茶陶類 (2)

調査区	遺構番号	黄瀬戸				向付		大皿・鉢					茶入	碗					皿				備考	文献		
		向付	鉢	大皿	皿	碗	志野 (長石鉄絵)	その他	志野 (長石鉄絵)	焼締	鉄釉・ 錆釉	灰釉	青花	その他	(瀬戸・ 美濃窯)	楽茶碗	沓茶碗	青花	青磁	朝鮮	唐津	青花			白磁	青磁
18区	052SX		◎																							本報告 P. 74
62E区	SD118					●								●												1
62H, 63L区	SD137					●								●												1
62J区	SD142						瓶	●															●			瓦質風炉, 織部 瓶, 灰釉建水
62K区	SK142																					●				1
62L区	SE133					●				●	●															1
62L区	SK148																									瓦質風炉
63F区	SD104					●							備前													1
63F区	SD101													●												1
63F区	SD105									●																1
63K区	SD110													●			●	●				●		●		1
63K区	SD111									●					●			●				●	●	●		1
59A, 59B区	SD19					●																●	●	●		水滴 (瀬)
59A, 59B区	NR03																						●			2
59C, 59D区	SD66																●					●	●			青白磁水注, 青 磁壺, 青磁鉢
59C, 59D, 60F2 区	SD13													●								●	●			水滴 (瀬)
59F区	SK05					●									●								●	●		2
60F1区	SD08									●																鉄釉灯篭? 瓦質 風炉
61A, 61B区	SD39					●				●																呂宋壺, 備前壺
朝日西 57, 58, 59G区	SD027					●		灰釉		●			焼締中皿				●									3
朝日西59G区	SD063					●							長石釉折縁 稜花皿		●	●										志野茶碗
朝日西 59C, 59D区	SD177					●				●	●			●		●						●				茶壺
朝日西 59A, 59B, 60E 区	SD200					●			●					●			小杯	●								3
朝日西59C区	SE062													●												3
朝日西58区	SK026										●															3
朝日西58区	SK046					●			●	●																3
朝日西58区	SK065																●									3
朝日西58区	SK096					●																				3
朝日西59F区	SK124																									鳥形水注 (大型)
朝日西59F区	SK139										●															青花徳利?
朝日西59E区	SK282					●			●				長石釉折縁 稜花皿			●										3
朝日西59E区	SK293								●				長石釉折縁 稜花皿													3
朝日西60E区	SK541													●												3
91E区	SK109																					●				瓦器火鉢 (飾)
92B区	SK250																									瓶 (朝鮮)
89G区	SD605																					●				4
63C, 89E区	SD6001					●		鉄釉	●	●	●			●			●					●	●	●		茶臼, 匣鉢
89D区						●		鼠志野																		花生 (朝鮮)
61B区	SD6031														赤 ●											5
62C区															赤 ●											5
62D区															白 ●											5
63C区	SE4073														黒 ●											5

表 12 清洲城下町遺跡出土の茶陶類 (3)

調査区	遺構番号	黄瀬戸				向付		大皿・鉢					茶入	碗					皿				備考	文献					
		向付	鉢	大皿	皿	碗	志野 (長石鉄絵)	その他	志野 (長石鉄絵)	焼締	鉄釉・ 錆	灰釉	青花	その他	瀬戸・ 美濃窯	楽茶碗	沓茶碗	青花碗	青磁	朝鮮	唐津碗	青花			白磁	青磁	唐津		
89B区													備前		白●											花生(朝鮮)	5		
90B区	SK4463														白●													5	
91B区															黒白●												水滴(瀬)	5	
91A区	SD6068													●			●							●			花生(瀬)	5	
91A区													備前, 朝鮮														花生(朝鮮)	5	
92C, 62C, 90CD 区	NR4001													●									●					5	
89E区													朝鮮						●									5	
61D区	SD7008																										建水(備前)	5	
61D区																				●								5	
91A区	SK6570																						●				焼締建水(瀬)	5	
62C区	SK4604																										花生(朝鮮)	5	
95A区	SX01					●	長石釉銅 緑釉																						6
99B	SD01															●													6
99B	SK191						灰釉						菊皿(楽)																6
98A区	SD09					●		●	●									●											7
98A区	SU01						●																				香炉(志戸呂)	7	
98B区	SD07					●																							7
98B区	SD03																							●					7
98Cb区	SK20・21					●											●	●					●						7
10A区	010SK																										銅緑釉流し掛け 徳利	8	
10A区	012SX																						●				短頸壺(志戸呂)	8	
10A区	108SK								●	●			●										●		●				8
10A区	177SE						●		●	●													●				織部香合蓋	8	
10A区	検出																						●				呂宋壺	8	
10B区	418SD								●				華南三彩盤																8
10B区	検出																						●				天目茶碗(志戸呂)	8	
11B区	0513SD																			●							雑釉平碗	8	
11B区	0631SE					●			●														●						8
62D区	SK8032					●	鼠志野																					本報告 P. 56	
62D区	検出 1																							●			祖母懷壺	本報告 P. 57, 58	
63D区	SD8005					●								●									●						本報告 P. 58
63D区	西壁 トレンチ						●																						本報告 P. 58
01区	03SD													灰 ●										●	●				本報告 P. 66
18区	041SD																	●						●				鉄釉六角杯	本報告 P. 74
	SD01					●																							9
	SK03					●																					匣鉢		9
	SK12					●																							9
	SK16					●																					水滴(瀬)		9
	018SK					●																							11
A区	001NR					●					●																		11
A区	005SX						●																						11
C区	包含層					●		●					鼠志野					●					●						11

表 13 清洲城下町遺跡出土の茶陶類 (4)

調査区	遺構番号	黄瀬戸					向付		大皿・鉢					茶入		碗					皿				備考	文献
		向付	鉢	大皿	皿	碗	志野 (長石鉄絵)	織部 その他	志野 (長石鉄絵)	鉄釉・ 焼締	鉄釉・ 錆釉	灰釉	青花 その他	瀬戸・ 美濃窯	楽茶碗	沓茶碗	青花碗	青磁	朝鮮	唐津碗	青花	白磁	青磁	唐津		
C区	002SD						●																			11
C区	072SD						●			●				●											水滴 (瀬)	11
	214SD						●																			12
	169SK						●																			12
	包含層											●														9
	SK07									●				●												9
	001NR																							●		10

- 文献番号1. 1990, 『清洲城下町遺跡I』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集
 2. 1992, 『清洲城下町遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集
 3. 1992, 『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集
 4. 1994, 『清洲城下町遺跡III』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第50集
 5. 1994, 『清洲城下町遺跡IV』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
 6. 2002, 『清洲城下町遺跡VIII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
 7. 2005, 『清洲城下町遺跡IX』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集
 8. 2013, 『清洲城下町遺跡XI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第183集
 9. 清須市教育委員会, 2007, 『清洲城下町遺跡I-清洲小学校プール建設に係る発掘調査報告』
 10. 清須市教育委員会, 2009, 『清洲城下町遺跡II-清洲小学校校体育館建設に係る発掘調査報告』
 11. 清須市教育委員会, 2013, 『清洲城下町遺跡V-清洲内堀地区店舗開発に伴う発掘調査報告-』
 12. 清須市教育委員会, 2015, 『清洲城下町遺跡VIII-一場御園地区宅地造成に伴う発掘調査報告書-』

註1) 鈴木正貴編, 1995, 『清洲城下町遺跡 V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集

註2) 黄瀬戸の定義と年代観についての代表的な見解を記しておく。

・「黄瀬戸は黄釉が掛けられていることが必要条件ではあるが、通常黄釉地に緑彩 (胆礬) および褐彩 (鉄) が施されたものを主体とし、特に安土桃山時代の茶碗・花入・鉢・向付類を限定して呼んでいる。」

「黄瀬戸の製作年代は大窯 IV 期の 1580 年 (天正 8 年) 頃を上限として始まり、最盛期となる大窯 V 期の天正末から文禄年間を経て慶長 10 年を下限とする約 25 年間で推定される。」

「志野の出現は天正 13 年 (1585) 説を提唱してきているところであるが、大坂城跡の発掘調査による編年観によれば、大坂城三の丸の造営時の慶長 3 年 (1598) 以降に盛行するとされている。」 (井上喜久男, 2009, 「桃山陶の変革と創造」愛知万博記念特別企画展図録『桃山陶の華麗な世界』愛知県陶磁資料館)

・「大窯第 4 段階前半に登場する桃山陶器は筒形碗 (瀬戸黒)・楽茶碗、黄瀬戸製品の向付・鉢類があり、大窯第 4 段階後半には長石釉単味の志野製品が多様な器種で盛行する。またこれに先行して灰志野が成立する。そして大窯第 4 段階末期には織部黒・鼠志野・美濃唐津が成立する。黄瀬戸が焼成された年代については、紀年銘の文禄 2 年 (1593) まで遡る可能性があり、大窯第 4 段階後半は 1590 年代の終わり頃と考えられている。」 (『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』)

註3) 鈴木正貴作成図 清須城下町 (後期) の復元想定案 (名古屋市博物館他, 2019, 地域展『尾張の城と城下町 三英傑の城づくり・町づくり』ガイドブック)

註4) 第 142 図瀬戸・美濃窯産播鉢の時期別出土分布 (鈴木正貴編, 1994, 『清洲城下町遺跡 IV』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集)

註5) 鈴木正貴, 2006, 「清須城と名古屋城における茶の湯について」『関西近世考古学研究 14』

註6) 林順一, 1998, 「美濃窯の生産と消費地清須と名古屋」『城下町のやきもの 清須城・名古屋城』土岐市美濃陶磁歴史館

【引用・参考文献】

- 土岐市美濃陶磁歴史館, 2001, 『三条界限のやきもの屋』
 土岐市美濃陶磁歴史館, 2000, 『大坂城出土の桃山陶磁 豊臣期のやきもの』
 東洋陶磁学会, 2002, 『東洋陶磁史—その研究の現在—』
 愛知県陶磁資料館, 2009, 『桃山陶の華麗な世界』愛知万博記念特別企画展図録
 (公財) 瀬戸市文化振興財団, 2016, 『織豊期の瀬戸窯と美濃窯』
 瀬戸市, 1993, 『瀬戸市史 陶磁史篇』四
 愛知県, 2007, 『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』



00A 区全景（南東より）



00A 区全景（北より）



00A区SD01・SK01・SK02（南より）



00A区SX8001 完掘状況（南より）



00A区SX8001 下駄・獣骨など出土状況（北より）



00A区SX8001 漆椀・天目茶碗など出土状況（南より）



00A区SX8001 黄瀬戸向付（E00A059）出土状況



00A区SX8001 土師器皿・内耳鍋出土状況（北より）



00A区SX8001 鉄釉茶入（E00A067）出土状況



00A区SX8001 鉄釉肩付茶入（E00A068）出土状況



00A 区 SX8001 鉄釉水注 (E00A058) 出土状況



00A 区 SX8001 鉄釉水滴 (E00A056) 出土状況



00A 区 SX8001 (E00A003) 出土状況



00A 区 SX8001 天目茶碗 (E00A040) 出土状況



00A 区 SX8001 灰釉丸皿 (E00A078) 出土状況



00A 区 SX8001 加工円盤出土状況 (E00A096)



00A 区 SX8001 長石釉鉄絵丸皿 (E00A087) 出土状況



00A 区 SX8001 長石釉鉄絵丸皿 (E00A088) 出土状況



00A区 SX8001 長石釉鉄絵大皿 (E00A105) 出土状況



00A区 SX8001 鉄釉片口向付 (E00A065) 出土状況



00A区 SX8001 鉄釉片口鉢 (E00A099) 出土状況



00A区 SX8001 軒丸瓦 (E00A222) 出土状況



00A区 SX8001 鉄鏝 (M011) 出土状況



00A区 SX8001 刀子 (M012) 出土状況



00A区 SX8001 宝篋印塔 (S042) 出土状況



00A区 SX8001 桶のタガ出土状況 (北より)



00A区 SX8001 曲物側板 (W071) 出土状況



00A区 SX8001 下駄 (W057)・角棒 (W089) 出土状況



00A区 SX8001 漆碗 (W045) 出土状況



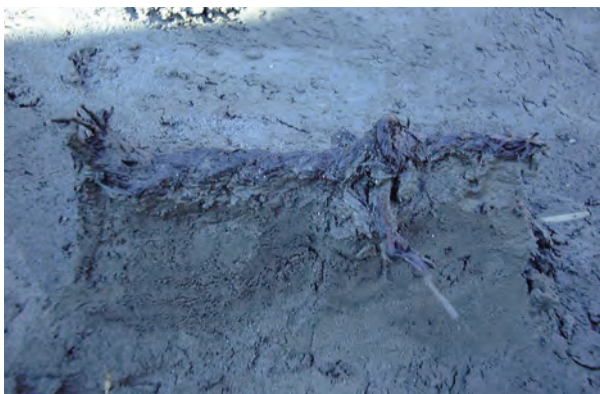
00A区 SX8001 漆碗 (W032) 出土状況



62D区 SX8001 漆碗 (W083) 出土状況



00A区 SX8001 獣骨出土状況



00A区 SX8001 縄出土状況



00A区 SX8001 縄出土状況



00B 区全景（北より）



00B 区全景（西より）



00B 区 SX04・SW01（南より）



00B 区南側下層 NR01（北より）



00B区 SW01 東側石列（南より）



00B区 SW01 南側石列（東より）



00B区 SK51（南東より）



00B区 SX02・SD01・SD02（北より）



00B区 SX02 遺物出土状況（北より）



00B区 SX02 検出状況（南東より）



00B区 SX02・SD06（南東より）



00B区 SD06・SD07・SD08（北西より）



00B区 SK30 有頭棒 (W194) 出土状況



00B区 SK30 柱材 (W193) 出土状況 (南西より)



00B区 SK30 出土石材にある墨書 (S051)



00B区 SD02・SD12・SK52・SK53 (北より)



00B区 SD01・SD02 (北東より)



00B区 SD01 箸などの木製品出土状況 (北より)



00B区 SD02 下駄 (W139)・鉄袖双耳徳利 (E00B010) 出土状況



00B区 SD01 獣骨出土状況



00B区 SD01 東壁断面 (西より)



00B区 SD02 漆椀出土状況 (W132)



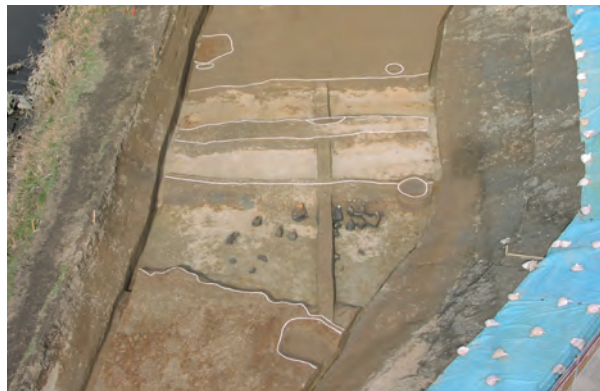
00B区 SK04 漆椀 (W186) 出土状況



00B区 SD03 青磁皿 (E00B016) 出土状況



01区全景 (北より)



01区 SD01 ~ SD03 (南より)



01区 SD01 断面 (西より)



01区 SD03 遺物出土状況 (東より)



17区遠景（東より）



17A区全景（上より）



17A区東側全景（北東より）



17A区西側 034SK～036SK（南より）



17A区 033SD（西より）



17B区全景（上より）



17B区全景（南西より）



17B 区東側（北より）



17B 区西側（北より）



17B 区 060SE 遺物出土状況（東より）



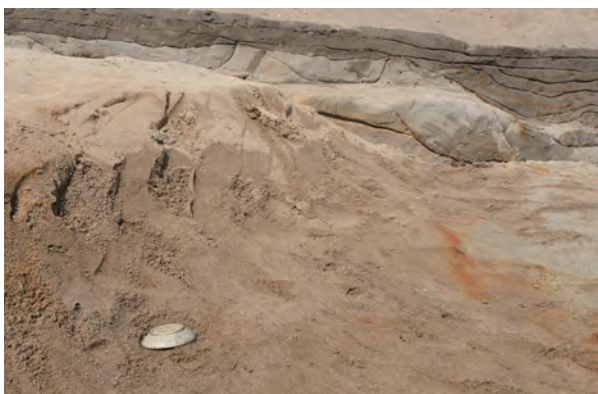
17B 区 060SE 断面（北東より）



17B 区 029SK・030SD（東より）



17B 区 063NR（南東より）



17B 区 063NR 灰釉丸皿（E17023）出土状況



17B 区 063NR 土師器（E17027～E17029）出土状況



18区遠景（南より）



18A区全景（北より）



18A区全景（北東より）



18A区北側（東より）



18A区 001SD・006SD 断面（東より）



18A区 035SE、桶の一部が残る（北より）



18A区 031SE 断面（南より）



18B区全景（西より）



18B区 015SD (北より)



18B区 021SD 遺物出土状況 (北より)



18B区 022SE (北より)



18C区全景 (北より)



18C区 040SD・041SD (北東より)



18C区 041SD 曲物 (W246) 出土状況 (南より)



18C区 041SD 漆碗 (W244) 出土状況 (西より)



18C区 041SD 土師器皿 (E18194) 出土状況 (西より)



18D 区全景（北より）



18D 区全景（東より）



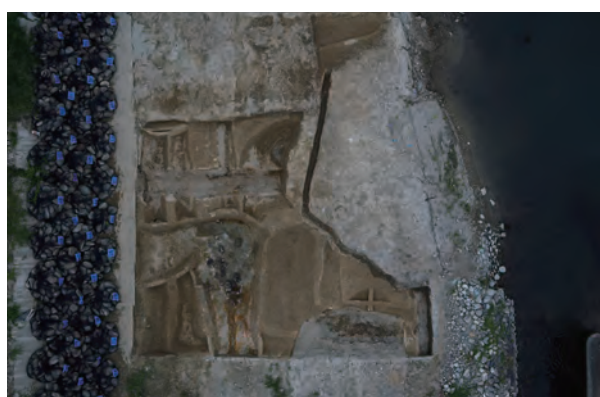
18D 区 017SD（東より）



18D 区 017SD 獣骨出土状況（北より）



18D 区 052SX 断面（南より）



18E 区全景（北から）



18E 区全景（東より）



18E 区 032SD・064SD（南より）



18E 区 060SD 遺物出土状況（南西より）



18E 区 061SK・063SD（東より）



18F 区全景（北より）



18F 区全景（東より）



18F 区 073SK 断面（北より）



18F 区 083SE（北西より）



18F 区 084SE 硯（S005）出土状況（北より）



18F 区 077SD・078SD・092SK・095SP～097SP（西より）



00A 区 8001SX 出土遺物 (62D 区・63D 区出土遺物も含む)



00B 区 SX02・SK30 出土遺物



00A 区 SD01 出土木簡、左：三斗付口上清須外、右：ほしの新右衛門 (W111)



00A 区 SX8001 出土鉄鏃 (M011)



18E 区 060SD 出土飾り板 (W252)



00A 区 SX8001 出土宝篋印塔 (S042)



00A 区 SX8001 出土長石釉鉄絵大皿、左：内面の鳥の絵、右：底面に墨書「屋かん」(E00A105)



00A 区 SX8001 出土長石釉鉄絵端反皿 (E00A077)



00A 区 SX8001 出土長石釉鉄絵角向付 (E00A062)



62D 区 SX8001 出土黄瀬戸折縁大皿 (E00A038)



00A 区 SX8001 出土黄瀬戸向付 (E00A059)



00B 区 SX02 出土軒丸瓦 (E00B130・131)



00B 区 SX02 出土軒丸瓦 (E00B132・134・135)

報告書抄録

ふりがな	きよすじょうかまちいせき あさひいせき							
書 名	清洲城下町遺跡				朝日遺跡			
副 書 名								
巻 次	X							
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第148集							
編著者名	蔭山誠一、鬼頭 剛、堀木真美子、杵名貴彦、武部真木、樋上 昇							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2021年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きよすじょうかまちいせき 清洲城下町遺跡	あいちけん きよす し 愛知県清須市 きよす ほか 清洲他	23233	210002	35度 12分 36秒	136度 50分 19秒	2000.12.11～ 2001.3.30 2002.1.7～ 2002.2.27 2017.7.18～ 2017.9.1 2018.6.12～ 2018.10.12	4,400㎡	総合治水対策特定河川事業に伴う発掘調査
あさ ひ い せき 朝 日 遺 跡	あいちけん きよす し 愛知県清須市 にし たなかながほり 西田中長堀	23233	210001	35度 13分 04秒	136度 51分 03秒	2019.12.2～ 2019.12.13	21㎡	新川西部流域下水道事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
清洲城下町遺跡	城館 集落	鎌倉時代・ 室町時代・ 戦国時代・ 江戸時代	石垣・柱穴列・井戸・ 土坑・溝・自然流路		土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・小皿・常滑産蓼・施釉陶器・漆碗・柱材・木簡・柿経・卒塔婆・曲物・桶・下駄・箸・茶臼・白・砥石・五輪塔・鉄鏝・刀子・釘・トリベ・鉄滓		「一斗付口上清須外」・ 「ほしの新右衛門」 墨書木簡出土	
朝 日 遺 跡	集落	弥生時代 前期 中期	土坑 環壕・溝・土坑		弥生土器		貝殻山貝塚をめぐる 弥生時代中期の内環 濠を確認	
文書番号		清洲城下町遺跡：発掘届出(12埋セ第129号・2000.9.8) 通知(12教生第216-28号・2000.9.29) 終了届・発見届・保管証(12埋セ第222号・2001.3.30) 鑑定結果通知(12教生第216-28号・2001.5.28)、発掘届出(13埋セ第126号・2001.11.6) 通知(13教生第36-22号・2001.11.26) 終了届・発見届・保管証(13埋セ第170号・2002.2.28) 鑑定結果通知(13教生第36-22号・2002.3.27)、発掘届出(29埋セ第25号・2017.6.9) 通知(29教生第1063号・2017.6.19) 終了届・発見届・保管証(29埋セ第65号・2017.9.6) 鑑定結果通知(29教生第2037号・2017.9.25)、発掘届出(30埋セ第9号・2018.4.20) 通知(30教生第483号・2018.5.9) 終了届・発見届・保管証(30埋セ第74号・2018.10.19) 鑑定結果通知(30教生第2788号・2018.11.22) 朝日遺跡：発掘届出(31埋セ第86号) 通知(31教生第2551号) 終了届・発見届・保管証(31埋セ第100号) 鑑定結果通知(31教生第3521号)						
要約	清洲城下町遺跡：清須城中堀の東からの五条川に隣接する櫓跡と船着場跡、中堀と外堀の間にある武家屋敷跡・寺院跡と町屋跡と推定される遺構と出土遺物を確認した。今後の清須城とその城下町を考える上で貴重な資料になるものと思われる。 朝日遺跡：弥生時代前期の土坑1基と中期中葉の大溝ほかを確認した。このうち中期中葉の大溝は、史跡貝殻山貝塚を中心とする居住域をめぐる二重の環濠のうち、内側の環濠にあたる。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集

清洲城下町遺跡X 朝日遺跡X

発行年月 2021年3月31日

編集・発行 (公財)愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社